兵庫県文化財調査報告　第467冊

淡路市

横入遺跡

－(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会

淡路市

横入遺跡

－(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会

空中写真

遺跡遠景（東上空から）

遺跡遠景（西上空から）

空中写真

遺跡遠景（南西上空から）

遺跡遠景（南上空から）

空中写真

空中写真（国土地理院撮影）

2 区

2 区全景（北上空から）

2 区全景（東から）

2 区

2 区下層旧河道（東から）

2 区下層旧河道（西から）

2 区

下層旧河道杭列（西から）

杭列　杭⑥断面

杭列　杭⑦断面

旧河道断面

深掘トレンチ断面

3 区

南上空から（後方志筑廃寺）

環濠全景（南東から）

出土遺物

土坑出土遺物（集合）

瓦（集合）

墨書土器

例　言

1　本書は、淡路市志筑に所在する横入遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本調査は、（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴うもので、兵庫県淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館を調査機関として実施した。

3　試掘調査は平成20年度に確認調査は平成21年度に、本発掘調査は平成22・23年度に行った。兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県立考古博物館が調査担当した。

試掘調査　平成20年２月25日～２月29日
実施機関：兵庫県立考古博物館
担当者　篠宮　正・長濱誠司

確認調査　平成20年11月25日～12月15日
実施機関：兵庫県立考古博物館
担当者　山本　誠

本発掘調査　平成22年６月30日～平成22年９月29日
実施機関：兵庫県立考古博物館
担当者　渡辺　昇・久保弘幸・山田清朝
工事請負：㈱山形組

平成23年10月26日～平成24年３月19日
実施機関：兵庫県立考古博物館
担当者　渡辺　昇・久保弘幸
工事請負：㈱北淡路産業

4　調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系である。座標は世界測地系に基づくものである。水準は兵庫県設定の２級基準点を使用した。

5　個別遺構図・遺物出土状態・土層断面図などの遺構図は、調査員・調査補助員が実測した。全体の図化は委託して実施した。平成22年度は㈱日建技術コンサルタントが、平成23年度は㈱河南測量が実施した。

6　土層断面や地質的な専門的分野については立命館大学青木哲哉氏に現地調査をお願いし、多くの教示を得、さらに玉稿を戴いた。

7　遺構写真は調査担当者が撮影した。図版１の空中写真は国土地理院撮影のものを使用し、その他の空中写真については空中写真測量委託として上記２社が行った。

8　出土品整理作業は平成23～25年度の４ヵ年にわたって兵庫県立考古博物館で行った。

平成23年４月１日～平成24年３月31日
実施機関：兵庫県立考古博物館
平成24年４月１日～平成25年３月31日
平成25年４月１日～平成26年３月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

9　遺物写真撮影は、平成24年度は株式会社タニグチフォト、平成25年度は株式会社クレアチオに委託した。

10　本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部渡辺昇が担当した。自然科学分析については青木氏からは玉稿を戴き、その他は委託した。

11　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館―加古郡播磨町大中１-１-１、兵庫県立考古博物館魚住分館―明石市魚住町清水立合池ノ下630-１）で保管している。

12　発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地元関係者・工事関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご教示を得ました。感謝いたします。（敬称略）

青木哲哉・伊藤宏幸・大石雅一・浦上雅史・定松佳重・的崎　薫・淡路市教育委員会

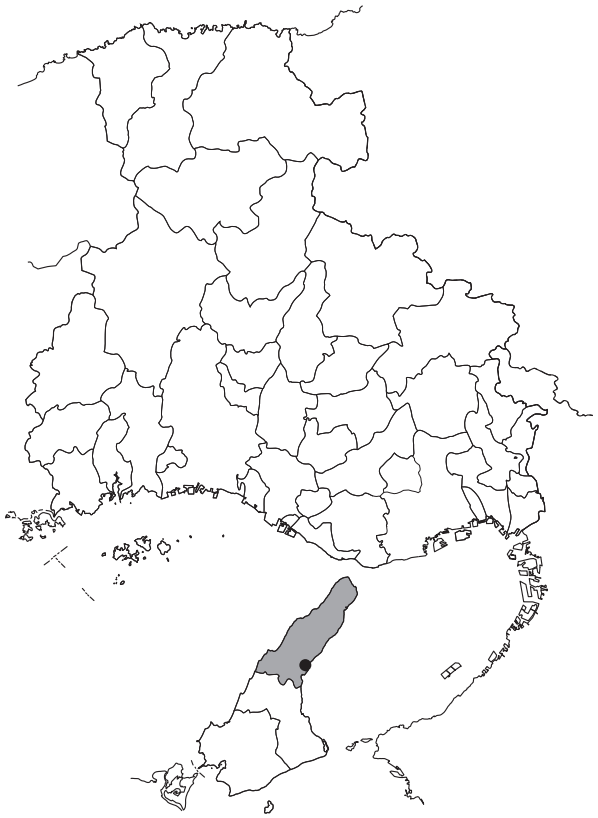


図１　淡路市の位置

本 文 目 次

例言
第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　確認調査の経過…… 1
　第３節　本発掘調査の経過…… 2
　第４節　整理作業の経過…… 4
第２章　位置と環境…… 6
第３章　遺構
　第１節　概要…… 16
　第２節　１区…… 16
　第３節　２区…… 16
　第４節　３区…… 18
　第５節　４区…… 19
第４章　出土遺物
　第１節　遺構出土遺物…… 21
　第２節　包含層出土土器…… 22
　第３節　金属器…… 30
　第４節　木製品…… 30
　第５節　石器…… 30
　第６節　瓦…… 31
第５章　自然科学分析
　第１節　横入遺跡の地形環境　青木哲哉…… 47
　第２節　横入遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）㈱加速器分析研究所 …… 50
　第３節　横入遺跡のプラント・オパール分析　森　将志（パレオ・ラボ）…… 54
　第４節　横入遺跡の花粉分析　パリノ・サーヴェイ㈱…… 56
　第５節　横入遺跡出土木製品の樹種　パリノ・サーヴェイ㈱…… 59
　第６節　横入遺跡の種実同定　パリノ・サーヴェイ㈱…… 61
　第７節　横入遺跡の大型植物遺体同定　パリノ・サーヴェイ㈱…… 69
第６章　おわりに…… 73

挿 図 目 次

図１　淡路市の位置…… ii
図２　横入遺跡遠景…… 2
図３　調査風景…… 3
図４　整理作業風景…… 4
図５　佃遺跡縄文土器…… 7
図６　横入遺跡の位置と周辺の遺跡…… 8
図７　横入遺跡周辺の弥生時代遺跡……10
図８　貴船神社遺跡製塩炉……11
図９　横入遺跡周辺の奈良時代遺跡……15
図10　暦年較正年代グラフ（参考）……53
図11　横入遺跡における植物珪酸体分布図……54
図12　花粉化石群集……57
図13　種実遺体（１）……66
図14　種実遺体（２）……67
図15　種実遺体（３）……68
図16　大型植物遺体……72
図17　環濠の推移……75
図18　旧海岸線と横入遺跡……76

表　目　次

表１　横入遺跡周辺の遺跡…… 9
表２　横入遺跡出土土器観察表……33～46
表３　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）……52
表４　放射性炭素年代測定結果
（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）……53
表５　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数……54
表６　花粉分析結果……56
表７　横入遺跡の樹種同定結果……60
表８　種実同定結果……62
表９　大型植物遺体同定結果……70

図 版 目 次

図版１　横入遺跡全体図
図版２　１区実測図
図版３　１区断ち割り断面図
図版４　２区上層平面図・土層図
図版５　２区土坑実測図（１）
図版６　２区土坑実測図（２）
図版７　２区溝実測図
図版８　２区下層旧河道実測図
図版９　２区下層旧河道内杭列実測図
図版10　２区断ち割り断面図（１）
図版11　２区断ち割り断面図（２）・３区断ち割り断面図
図版12　３区上層実測図
図版13　３区土坑実測図
図版14　３区波板状遺構（SX17）実測図
図版15　３区溝実測図（１）
図版16　３区溝実測図（２）
図版17　３区溝実測図（３）
図版18　３区下層実測図
図版19　４区実測図
図版20　横入遺跡出土土器実測図（１）
図版21　横入遺跡出土土器実測図（２）
図版22　横入遺跡出土土器実測図（３）
図版23　横入遺跡出土土器実測図（４）
図版24　横入遺跡出土土器実測図（５）
図版25　横入遺跡出土土器実測図（６）
図版26　横入遺跡出土土器実測図（７）
図版27　横入遺跡出土土器実測図（８）
図版28　横入遺跡出土土器実測図（９）
図版29　横入遺跡出土土製品実測図
図版30　横入遺跡出土金属器実測図
図版31　横入遺跡出土木器実測図
図版32　横入遺跡出土石器実測図（１）
図版33　横入遺跡出土石器実測図（２）
図版34　横入遺跡出土瓦実測図（１）
図版35　横入遺跡出土瓦実測図（２）
図版36　横入遺跡出土瓦実測図（３）

図版37　横入遺跡出土瓦実測図（４）
図版38　横入遺跡出土瓦実測図（５）
図版39　横入遺跡出土瓦実測図（６）
図版40　横入遺跡出土瓦実測図（７）
図版41　横入遺跡出土瓦実測図（８）
図版42　横入遺跡出土瓦実測図（９）
図版43　横入遺跡出土瓦実測図（10）
図版44　横入遺跡出土瓦実測図（11）
図版45　横入遺跡出土瓦実測図（12）
図版46　横入遺跡出土瓦実測図（13）

写真図版目次

巻頭図版１上　空中写真　遺跡遠景（東上空から）
　　下　空中写真　遺跡遠景（西上空から）
巻頭図版２上　空中写真　遺跡遠景（南西上空から）
　　下　空中写真　遺跡遠景（南上空から）
巻頭図版３　　空中写真（国土地理院撮影）
巻頭図版４上　２区　全景（北上空から）
　　下　２区　全景（東から）
巻頭図版５上　２区　下層旧河道（東から）
　　下　２区　下層旧河道（西から）
巻頭図版６上　２区　下層旧河道杭列（西から）
　　中左　２区　下層杭列杭⑥断面
　　中右　２区　下層杭列杭⑦断面
　　下左　２区　下層旧河道断面
　　下右　２区　下層深掘トレンチ断面
巻頭図版７上　３区　南上空から（後方志筑廃寺）
　　下　３区　環濠全景（南東から）
巻頭図版８上　出土遺物　土坑出土遺物（集合）
　　中　出土遺物　瓦（集合）
　　下　出土遺物　墨書土器
写真図版１　上　空中写真　南東上空から
　　下　空中写真　西上空から
写真図版２　上　空中写真　東上空から
　　下　空中写真　西上空から
写真図版３　上　空中写真　南西上空から
　　下　遺跡遠景（志筑金比羅社から）

写真図版４　上　１区　全景（南から）
中　１・２区　空中写真（南上空から）
下左　１区　SD101北壁断面
下右　１区　SD101断面（南から）
写真図版５　上　１区　北壁
下左上　１区　SD101土器出土状況
下左下　１区　調査風景
下右　　１区　断ち割り断面（南から）
写真図版６　上　２区　全景（北上空から）
下　２区　環濠全景（東から）
写真図版７　上　２区　全景（西から）
下　２区　全景（東から）
写真図版８　上　２区　SK204・205・206全景（東から）
中左　２区　SK205堆積状況
中右　２区　SK205土器出土状態
下左　２区　SK205土器出土状態
下右　２区　SK205下面
写真図版９　上　２区　SK204・205・206全景（北から）
中左　２区　SK204土器出土状況
中右　２区　SK204堆積状況
下左　２区　SK206土器出土状態
下右　２区　SK206土器出土状態
写真図版10　上１左　２区　SK204完掘
上１右　２区　SK205完掘
上２左　２区　SK207断面
上２右　２区　SK207完掘
上３左　２区　SK209断面
上３右　２区　SK210断面
上４左　２区　SK221断面
上４右　２区　SK224断面
上５左　２区　SK225断面
上５右　２区　SK230断面
写真図版11　上　２区　交差する溝群（SD201とSD212など）
中左　２区　SD201アゼ（東から）
中右　２区　SD219アゼ（東から）
下左　２区　SD220アゼ（東から）
下右　２区　SD226アゼ（東から）
写真図版12　上　２区　下層全景（東から）

下左　２区　下層全景（西から）
下右上　２区　堰（南から）
下右下　２区　堰（西から）
写真図版13　上　２区　下層杭列断面
中左　２区　下層杭（棒状）出土状況
中右　２区　下層木製品出土状況
下左　２区　下層調査風景
下右　２区　下層調査風景
写真図版14　上　３区　全景（北上空から）
下　３区　全景（南上空から）
写真図版15　上　３区　全景（東上空から）
下　３区　全景（西上空から）
写真図版16　上　３区　第１面全景（東から）
下　３区　第１面全景（西から）
写真図版17　上　３区　第１面西半全景（西から）
下　３区　第１面西半全景（南から）
写真図版18　上　３区　環濠全景（南東から）
下　３区　環濠断面
写真図版19　上左上　３区　SX17検出状況（西から）
上左下　３区　SX17断面（南から）
上右　３区　SX17全景（西から）
下　３区　SX17断面（南から）
写真図版20　上左　３区　SK07断面（南から）
上右　３区　SK26断面（南から）
中左　３区　SK34（西から）
中右上　３区　SK27（南から）
中右下　３区　SK58断面（南から）
下　３区　東壁断面
写真図版21　上　３区　下層第２面全景（東から）
下　３区　下層第２面全景（西から）
写真図版22　上　３区　上層水田（南上空から）
下　３区　第２面水田空中写真（南上空から）
写真図版23　上　３区　下層水田（南から）
下左上　３区　畦畔
下左下　３区　畦畔断面
下右　３区　畦畔断面
写真図版24　上１左　３区　下層北東隅大畦畔断面
上１右　３区　下層畦畔断面

上２　　３区　下層東西断ち割りトレンチ
上３　３区　下層調査風景
上４　３区　下層南北断ち割りトレンチ
写真図版25　上　４区　第１面（北上空から）
下　４区　第１面全景（東から）
写真図版26　上　４区　第１面全景（西から）
中　４区　北壁断面
下　４区　東壁断面
写真図版27　上　４区　第２面（東から）
中　４区　第２面（西から）
下　４区　深掘トレンチ（南から）
写真図版28　出土遺物（１）
写真図版29　出土遺物（２）
写真図版30　出土遺物（３）
写真図版31　出土遺物（４）
写真図版32　出土遺物（５）
写真図版33　出土遺物（６）
写真図版34　出土遺物（７）
写真図版35　出土遺物（８）
写真図版36　出土遺物（９）
写真図版37　出土遺物（10）
写真図版38　出土遺物（11）
写真図版39　出土遺物（12）
写真図版40　出土遺物（13）
写真図版41　出土遺物（14）
写真図版42　出土遺物（15）
写真図版43　出土遺物（16）
写真図版44　出土遺物（17）
写真図版45　出土遺物（18）
写真図版46　出土遺物（19）
写真図版47　出土遺物（20）
写真図版48　出土遺物（21）
写真図版49　出土遺物（22）
写真図版50　出土遺物（23）
写真図版51　出土遺物（24）
写真図版52　出土遺物（25）
写真図版53　出土遺物（26）
写真図版54　出土遺物（27）

写真図版55　横入遺跡の木材（１）
写真図版56　横入遺跡の木材（２）
写真図版57　横入遺跡から産出した植物珪酸体
写真図版58　花粉化石

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

平成16年10月20日大型で強い台風23号の接近に伴い、大雨洪水暴風雨警報が発令された。志筑川支流の宝珠川では年間平均降雨量が1500㎜であるが、当日の雨量351㎜を記録している。雨量の多さから志筑川も氾濫し、志筑の広い範囲で水位が上がり床上浸水などの大きな被害を蒙った。それを解決するため志筑川水系の河川改良工事が計画された。

志筑川は志筑市街地を通り民家が密集していることから拡幅工事そのものが困難と思われた。そのことから、改良工事計画は県道志筑郡家線付近から放水路を新たに建設し、宝珠川へ流すものが立案された。幅約17ｍで長さ780ｍの規模で管理道も兼ねた市道が併設予定である。それに合わせて宝珠川の下流部も河口から拡幅工事が計画され、順次実施施工されている。

工事計画予定地周辺の分布調査を平成18年度に実施し、広範囲で遺物が採集された。予定地北東部には周知の埋蔵文化財包蔵地である田井A遺跡が存在し、周辺に遺跡が広がることが予想された。同様に南西部には横入遺跡が予定地内に広がっている。横入遺跡の北側には淡路島最古の寺院である志筑廃寺が存在し、津名町教育委員会によって寺域確認調査が実施され、寺域が想定されている。土地改良工事が大規模に行われていないこともあって、条里地割が良好に残っている地域でもある。

第２節　確認調査の経過

平成19年度に兵庫県淡路県民局から確認調査の依頼（平成20年１月30日付け淡路（洲土）第1990号）があり、それに基づき確認調査（調査番号2007131）を実施した。都市計画道路志筑中央線から県道志筑郡家線との間について延長550ｍについて確認調査を行った。確認調査は平成20年２月25日から29日までの実働４日間実施した。兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部調査第２班篠宮　正・長濱誠司が担当した。事業用地は未買収のため地権者から発掘調査同意書を戴き実施した。調査位置の制約もあって十分な確認調査は行えなかった。確認調査であることで埋戻し作業も行った。機械掘削によって掘り下げ、壁面・平面および包含層について人力掘削を行った。事業用地北東部を１Ｇと呼称し、南西に向かって18カ所のグリッド（２×２ｍ）を設定して確認調査を行った。周囲の状況から調査しなくても判断可能となったので、６Ｇ・16Gについては調査を行わなかった。そのことから最終的に16カ所84㎡の調査を行った。調査の結果、中央部分を除いてほぼ全域で遺物包含層を確認した。北東部（田井A遺跡）、南西部（横入遺跡）では遺構も検出されている。調査を行わなかった16G予定地の水田は津名町教育委員会（現淡路市教育委員会）の確認調査で溝が検出され、多量の遺物が出土している。

調査深度を明確にし、調査範囲を絞り込むために２次確認調査を平成20年度に実施した。調査は平成20年11月25日から12月15日の実働９日間を費やして行った。兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部企画調整班山本　誠が担当した（調査番号2008199）。今回はトレンチ掘りとし、

トレンチごとに面積が変化している。トレンチは10カ所設定し、調査面積は87㎡である。中央部分で遺物が上層から出土していることが明らかになった。田井A遺跡・横入遺跡が拡大される結果となった。

第３節　本発掘調査の経過

２ケ年にわたって本発掘調査を実施している。

平成22年度　　調査番号2011040

調査面積は2,645㎡で、平成22年６月30日から９月29日まで実働61日間を費やして調査を行った。当初１面の調査の計画であったが、複数の遺構面が存在することが明らかになったので、大きく上下２面の調査を行った。横入遺跡の調査はこれが全てでなく、調査計画や用地買収の都合から次年度にも本発掘調査を継続した。整理の都合上西側から１区・２区としたので、平成22年度調査区は本報告では３区と呼んでいる。

調査は６月23日に現地立会を行い、それから調査準備をはじめ６月30日に調査区を設定し調査に着手する。調査は兵庫県淡路県民局長から兵庫県教育委員会教育長への依頼（平成22年４月23日付け淡路（洲土）第1049号）により調査を実施した。

調査事務

兵庫県立考古博物館

館　長　　石野博信

埋蔵文化財調査部長　　若生晃彦

総務課　　前川浩子・橋本弘行・川原聡介

企画調整課　小川弦太

調査第１課　大平　茂

調査担当

調査第１課　渡辺　昇・久保弘幸

調査第２課　山田清朝

調査参加者　井上知花・三澤朋未

　　向井信江・森脇京子

作業委託　　株式会社山形組

図２　横入遺跡遠景

平成24年度　調査番号2011184

昨年度同様兵庫県淡路県民局長から兵庫県教育委員会教育長への依頼（平成23年４月26日付け淡路（洲土）第1089号）により調査を実施した。昨年度、用地買収が出来なかった地区と調査不能だった地区を対象とした。調査面積は2,550㎡で、10月11日（火）現地立会を行い調査準備に入る。平成23年10月24日から平成24年１月17日まで実働48日間を費やして調査を行った。この年度は同事業の田井A遺跡も同じ１本の委託契約に入っており、１月から平行して調査を

行い３月19日に監督員詰所撤去し、平成23年度の横入遺跡・田井A遺跡の調査を終了する。横入遺跡については今年度で調査を終えている。工事進捗に合わせて２回の中間検査を行い、３月23日に終了立会を行った。

調査区は３区に分かれ､西から１・２・３区（報告段階で３区は４区に改称）と呼称した。１・２区間には個人住宅に入る道があり、その左右で大きな高低差が生じている。１区の地目は工場から店舗に変わっており、その際の基礎で損壊されている箇所が多くあり、水田部分と異なり全体に盛土がなされている。２・４区の地目は水田である。調査は２区から着手し10月24日（月）に調査区設定し、工事用道路を敷設してから機械掘削をはじめた。11月７日（月）から人力掘削を開始し、壁面精査・遺構検出を順次行う。11月16日（水）から４区調査区設定し機械掘削に入り、２区同様に機械・人力掘削などを行う。１区も同日から調査準備にかかり、11月28日から機械掘削に入る。３地区とも12月12日（月）に１回目空中写真撮影を行う。天候悪化で当初８日に予定していたものが延期したもので、12月10日（土）に予定通り現地説明会を実施する。14日（水）に１回目の中間検査を受け、１区終了する。翌日から４区下層の調査に入り機械掘削など順次行い翌年１月17日に全景写真を撮影し、横入遺跡の調査一応終了する。田井A遺跡と平行して調査を行っていたことから、２月９日（木）に横入遺跡４区と田井A遺跡上面の空中写真撮影を行う。10日に４区断ち割り作業と中間検査を終え、横入遺跡の現地調査を終える。田井A遺跡を中心とした現地説明会を２月25日に実施したが、一部横入遺跡の説明・展示も行い皆様に見ていただいた。３月19日に器財搬出し、23日に終了立会し調査終了する。

調査事務

兵庫県立考古博物館

館　長　　石野博信

埋蔵文化財調査部長　　高尾尚登

主　幹　　吉田　昇

総務課　　前川浩子・橋本弘行・川原聡介

企画調整課　小川弦太

調査第１課　大平　茂

調査担当

兵庫県立考古博物館

調査第１課　渡辺　昇・久保弘幸

調査参加者　三澤朋未・向井信江

片岡素子

作業委託　　株式会社北淡路産業

図３　調査風景

第４節　整理作業の経過

整理作業は平成22～25年度の４ケ年に渡って実施した。平成22年度は水洗いから実測作業までを、平成23年度は実測・拓本・復元作業と金属器の保存処理を、平成24年度は復元・トレース・写真撮影・写真整理・図面補正と分析鑑定を、平成25年度はレイアウト作業から報告書刊行と木製品の保存処理を行った。兵庫県教育委員会が調査主体となり、平成22・23年度は兵庫県立考古博物館が担当した。平成24年度に兵庫県教育委員会の組織改編があり、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に変更された。そのことによって平成24・25年度は考古博物館内公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部で整理作業を実施した。

調査主体　兵庫県教育委員会
平成22・23年度　兵庫県立考古博物館
館　長　　石野博信
総務課　　前川浩子・橋本弘行・川原聡介
整理保存課　村上泰樹・岡田章一・篠宮　正・山本　誠・深江英憲

図４　整理作業風景

平成24・25年度　兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

埋蔵文化財調査部長　高尾尚登

総務課	大西晃彦・山本　学・川原聡介
整理保存課	村上賢治・篠宮　正・長濱誠司・深江英憲
調査担当	渡辺　昇・久保弘幸・山田清朝
調査参加者	友久伸子・柏原美音・佐伯純子・八木和子・宮田麻子・榎真菜美・島田留里 柏木明子・栗原美穂・高瀬敬子・荻野麻衣・佐々木愛・上田沙耶香・久保夏美 古谷章子・有田遥香・坂東知奈・守田奈津子・遠藤貴子・柴垣良樹・河合たみ 前谷幸次
保存処理担当	岡本一秀
調査参加者	今村直子・岡田美穂・桂　昭子・浜脇多規子・前田恵梨子

第２章　位置と環境

横入遺跡は淡路市志筑に所在する複合遺跡である。合併前は津名郡津名町志筑で、淡路島北部津名郡に位置している。志筑には旧津名町役場が置かれ、現在の淡路市役所が位置している津名郡（北淡路・淡路市）の中心集落である。淡路島は国生み神話の島で、周囲約174㎞、南北54㎞、東西28㎞、面積597㎢を測る瀬戸内海最大の島である。瀬戸内特融の温暖な気候と思われがちであるが、それは大阪湾側（東浦）だけで、播磨灘側（西浦）は冬季の風は強く体感気温が低い印象を現場体験から痛感する。年間降水量は全島を通して少ない。

地質的には淡路島南側を中央構造線が走っており、北側は領家帯に属している。淡路島北西端から六甲山地を通る位置に阪神淡路大震災の震源となった野島断層が存在する。中央構造線の南側に沼島があり、紀伊川沿いと同じ地質構造をしており、結晶片岩などが採取される。淡路島の北側には常隆寺山・先山、南側には諭鶴羽山が聳え、比較的急峻な地形が展開している。特に北淡路は平地部が少なく、丘陵部の占める割合が高い。しかし、北淡路では丘陵尾根部が比較的平坦なことから、早い段階から尾根頂上部の開発が進んでいる。淡路島は瀬戸内海最大の島で、おのごろ伝説をはじめとする国生み神話が知られている。北は明石海峡で播磨南東部に向かい合い、東は大阪湾、西は播磨灘、南東は太平洋に面している。南東は紀淡海峡を隔てて和歌山県加太、南西は鳴門海峡を隔てて徳島県鳴門市と向い合っている。

淡路島は津名郡と三原郡から成るが、三原郡は平野が広がり、可耕地も多く二毛作・三毛作が行われている。淡路島北側の明石海峡は海流が早く難所であることから、官道としては紀淡海峡が利用された。地質構造からも南北に変化がある。津名郡には中央に六甲山地から延びる山地があり、東西は急斜面となって播磨灘・大阪湾まで裾野を広げている。山麓部の平地は三原郡に比べて極端に狭くなっている。産地頂上部は緩やかな斜面が広がっており、畑地・牧草地となっている。三原郡は先山・諭鶴羽山が聳え、山麓には平野が広がり、大日川・三原川・倭文川などが平野を潤している。津名山地西側には阪神淡路大震災の震源となった野島断層が走り、平行して数本の断層が知られている。それに直交する断層が志筑断層で津名山地を南北に２分している。段丘崖沿いに断層は通っており、そこに志筑廃寺、段丘崖下に横入遺跡は立地している。志筑断層沿いは地溝帯を形成したことから低くなっており、淡路島の東西方向の交通ルートとなっている。津名郡の中では志筑周辺が最も広い平地となっており、志筑川・宝珠川が最も大きな河川である。

古代南海道は紀伊国加太から紀淡海峡を渡って由良に至り、大野から淡路国府（位置未確定）を経て福良に行き、鳴門海峡を越えて阿波国につながる。終始淡路島南部を通り、津名郡南部以外はルートに入っていない。

旧石器の遺跡は淡路では少ない。南あわじ市浦壁池遺跡など単独出土が大半で火山灰確認や層的な調査例は少ない。南あわじ市長原遺跡でわずかに調査例があるにすぎない。国府型ナイフと翼状剥片が出土している。南あわじ市筒井遺跡・曽根遺跡でもサヌカイト製の国府型ナイ

図５　佃遺跡縄文土器

フが出土している。淡路市まるやま遺跡でもナイフ形石器が出土しているが、遺跡の主体は縄文時代で、特に草創期の尖頭器文化が特筆される。抉状耳飾を転用した垂飾は兵庫県初出である。遺物は少ないながら縄文晩期まで継続する集落である。遺構は２基の集石遺構で石器製作を行っている。有舌尖頭器は淡路では比較的多く出土例があり13遺跡が確認されている。早期の押型文土器を出土する遺跡は淡路市育波堂の前遺跡・釜口船頭ケ内遺跡があり、早期になると淡路を代表する淡路市佃遺跡が生活をはじめる。消長はあるものの晩期まで継続する。骨出土や貯蔵穴が調査され当時の食生活の一端が明らかになった。淡路市舟木遺跡でも尖頭器・石鏃が出土しており、丘陵上の活動も確認されている。淡路市ではそれ以外に早期から晩期の遺跡が点在している。早期の楠本下林遺跡・船頭ケ内遺跡、後期の塩壺西遺跡・岡山遺跡・砂連尾遺跡、晩期の給田遺跡・老ノ内遺跡・外ケ鼻遺跡である。隣接する洲本市安乎間所遺跡でも後期から晩期の土器が出土している。平安浦一帯は生活に適していたのか、安乎石井遺跡・安乎エイガ原遺跡・安乎田井遺跡・安乎浦塩入遺跡と集中している。

弥生時代は古い時期から遺跡は確認されている。洲本市武山遺跡は、遺構は検出されていないものの縄文前期～中期の土器が出土しており、前代から生活痕跡を残している。遺構は前期古段階からはじまる遺跡で、前期の竪穴状遺構と中期の周溝墓が検出されている。周溝墓は兵庫県検出の中で最も早い段階に調査され、古い時期（中期前半）の方形周溝墓である。南あわじ市雨流遺跡・志知川沖田南遺跡・井手田遺跡・九蔵遺跡、洲本市下加茂遺跡・波毛遺跡・馬木遺跡・安乎間所遺跡で前期の遺構が検出されている。淡路市でも天神遺跡・佃遺跡があり、横入遺跡でも前期の堰を調査した。遺物は洲本市安乎田井遺跡・安乎石井遺跡・・空の谷遺跡

図６　横入遺跡の位置と周辺の遺跡

表１　横入遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種類	No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種類
1	880129	横入遺跡	淡路市志筑・中田	奈良	散布地	42	880122	磯ノ後遺跡	淡路市王子	弥生・中世	散布地
2	880016	志筑廃寺	淡路市志筑・中田	奈良～近世	寺院	43	880120	太田遺跡	淡路市池ノ内	中世	散布地
3	880015	臨池庵池遺跡	淡路市志筑	奈良～中世	散布地	44	880007	油留手遺跡	淡路市王子	弥生・中世	散布地
4	880127	田井A遺跡	淡路市志筑	中世	散布地	45	880006	かじゃくぼ遺跡	淡路市王子	弥生	散布地
5	880128	池尻遺跡	淡路市志筑	古墳	散布地	46	880121	矢坪遺跡	淡路市王子	弥生・中世	散布地
6	880130	老谷遺跡	淡路市中田	縄文・中世	散布地	47	880005	江原遺跡	淡路市王子	弥生・中世	散布地
7	880131	大円道向遺跡	淡路市中田	縄文～中世	散布地	48	880050	百田遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
8	880132	古城江B遺跡	淡路市中田	弥生・中世	散布地	49	880118	丸塚遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
9	880133	古城江A遺跡	淡路市中田	弥生	散布地	50	880026	久保ケ内遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
10	880134	高場遺跡	淡路市中田	奈良～中世	散布地	51	880027	雨谷遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
11	880135	佐古遺跡	淡路市中田	弥生・中世	散布地	52	880119	椒ノ木遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
12	880136	休場遺跡	淡路市中田	弥生	集落跡	53	880117	杭ノ谷遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
13	880146	権太夫原遺跡	淡路市中田	弥生・中世	集落跡	54	880028	池ノ内城	淡路市池ノ内	中世・近世	城跡
14	880030	妙安寺城跡	淡路市中田	中世・近世	城跡	55	880051	宮ノ原遺跡	淡路市池ノ内	弥生・平安	散布地
15	880116	殿下遺跡	淡路市志筑	中世	集落跡	56	880052	遠松遺跡	淡路市池ノ内	弥生	散布地
16	880036	盆丁遺跡	淡路市野田尾	弥生	散布地	57	910104	堂ノ下遺跡	淡路市遠田	弥生・中世	集落跡
17	880115	高松遺跡	淡路市志筑	奈良～中世	集落跡	58	910103	瀧ノ向遺跡	淡路市遠田	弥生・中世	集落跡
18	880114	船橋遺跡	淡路市志筑	弥生	集落跡	59	910071	瀧遺跡	淡路市遠田	中世	散布地
19	880112	柳原遺跡	淡路市志筑	古墳・中世	集落跡	60	910102	中尾遺跡	淡路市遠田	中世	散布地
20	880103	志筑傍示遺跡	淡路市志筑	中世	散布地	61	910070	眞ノ内遺跡	淡路市遠田	中世	散布地
21	880104	脇遺跡	淡路市志筑	奈良～中世	集落跡	62	910069	山本遺跡	淡路市遠田	中世	散布地
22	880113	黒田東遺跡	淡路市志筑	奈良～中世	散布地	63	910063	廣畑遺跡	淡路市遠田	弥生・中世	散布地
23	880017	黒田西遺跡	淡路市志筑	奈良～中世	散布地	64	910062	本光寺址	淡路市遠田	弥生～中世	寺跡
24	880126	田井B遺跡	淡路市志筑	古墳	散布地	65	910068	中原遺跡	淡路市遠田	中世・近世	集落跡
25	880125	天神遺跡	淡路市志筑	弥生～中世	集落跡	66	910067	正本遺跡	淡路市遠田	弥生・中世	散布地
26	880029	中田古城跡	淡路市中田	中世・近世	城跡	67	910066	正本北遺跡	淡路市遠田	中世	散布地
27	880031	天神北遺跡	淡路市志筑	平安・中世	集落跡	68	880047	長谷B遺跡	淡路市大谷	弥生	散布地
28	880039	石畑遺跡	淡路市志筑	平安・中世	集落跡	69	880046	長谷A遺跡	淡路市生穂	弥生	散布地
29	880101	傍示谷遺跡	淡路市大谷	中世	散布地	70	880045	長谷川原大池遺跡	淡路市生穂	弥生	散布地
30	880100	大谷傍示遺跡	淡路市大谷	中世	散布地	71	880044	黒谷遺跡	淡路市生穂	弥生	散布地
31	880097	大谷五反田遺跡	淡路市大谷	古墳・中世	集落跡	72	880043	樫岡遺跡	淡路市野田尾	弥生・中世	散布地
32	880098	神川遺跡	淡路市大谷	中世	散布地	73	880042	延命寺遺跡	淡路市野田尾	弥生	散布地
33	880095	八幡遺跡	淡路市大谷	縄文・中世	散布地	74	880080	中屋ノ下遺跡	淡路市野田尾	弥生・中世	散布地
34	880145	生穂原遺跡	淡路市生穂	中世	散布地	75	880082	井手ノ平遺跡	淡路市生穂	中世	散布地
35	880004	品ケ谷遺跡	淡路市大谷	弥生	集落跡	76	880083	高滝寺跡遺跡	淡路市生穂	中世	寺跡
36	880102	西山前遺跡	淡路市大谷	弥生	散布地	77	880084	大日遺跡	淡路市生穂	中世	散布地
37	880048	西山遺跡	淡路市大谷	弥生	散布地	78	880023	土井遺跡	淡路市生穂	弥生・中世	散布地
38	880049	寒風遺跡	淡路市大谷	弥生	散布地	79	880081	八畑遺跡	淡路市生穂	中世	散布地
39	880008	王子遺跡	淡路市王子	弥生・古墳	散布地	80	880092	上高寺遺跡	淡路市生穂	中世	散布地
40	880124	砂川遺跡	淡路市王子	中世	散布地	81	880088	水原遺跡	淡路市生穂	縄文・中世	散布地
41	880123	王子東遺跡	淡路市王子	弥生・中世	散布地	82	880091	下高寺遺跡	淡路市生穂	中世	散布地

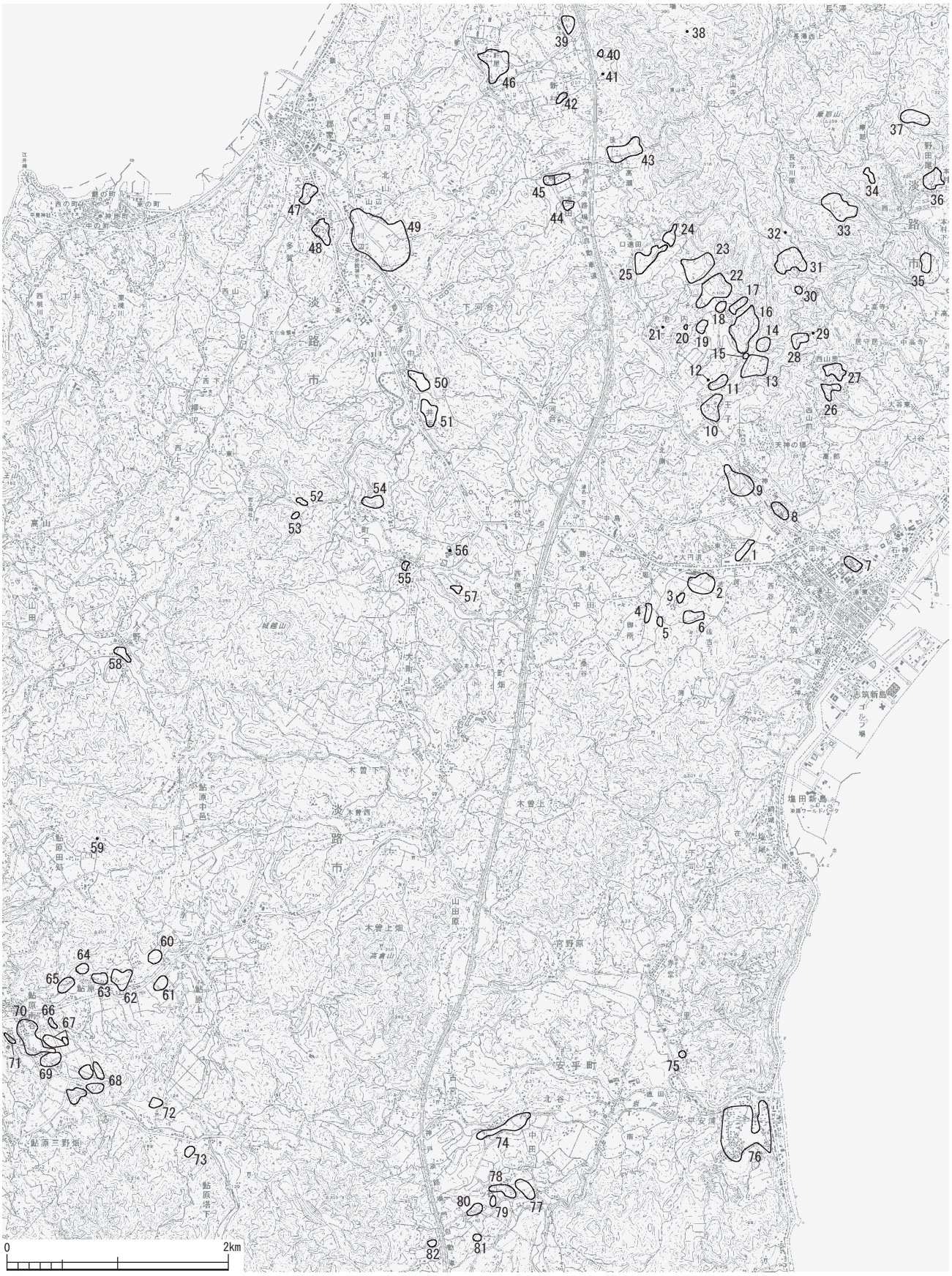


図７　横入遺跡周辺の弥生時代遺跡

図８　貴船神社遺跡製塩炉

横入遺跡周辺の弥生時代遺跡地名表

（淡路市）

１．横入遺跡　２．大円道向遺跡　３．古城江A遺跡　４．権太夫原遺跡　５．佐古遺跡
６．休場遺跡　７．杭ノ谷遺跡　８．黒田西遺跡　９．天神遺跡　10．王子遺跡
11．王子東遺跡　12．磯ノ後遺跡　13．油留手遺跡　14．矢坪遺跡　15．がしゃくぼ遺跡
16．江原遺跡　17．百田遺跡　18．丸塚遺跡　19．久保ヶ内遺跡　20．雨谷遺跡
21．椒ノ木遺跡　22．宮ノ原遺跡　23．当松遺跡　24．瀧ノ向遺跡　25．堂ノ下遺跡
26．品ケ谷遺跡　27．西山前遺跡　28．寒風遺跡　29．西山遺跡　30．長谷B遺跡
31．長谷A遺跡　32．長谷川源太夫池遺跡　33．黒谷遺跡　34．樫岡遺跡　35．土井遺跡
36．延命寺遺跡　37．高山遺跡　38．なしの木谷遺跡　39．新村遺跡　40．文蔵北遺跡
41．文蔵遺跡　42．原遺跡　43．正本遺跡　44．廣畑遺跡　45．本光寺址　46．中尾遺跡
47．慶徳遺跡　48．老ノ内遺跡　49．郡家長谷遺跡　50．平田遺跡　51．向田遺跡
52．大町湯ノ谷A遺跡　53．大町湯ノ谷B遺跡　54．岡ノ内遺跡　55．馬場遺跡
56．奈良原遺跡　57．火打角遺跡　58．見子遺跡

（洲本市）

59．堀田遺跡　60．治郎ノゾリ遺跡　61．西裏遺跡　62．高田遺跡　63．新遠田遺跡
64．岡ノ坂遺跡　65．深田遺跡　66．長町遺跡　67．南谷的場遺跡　68．四反田遺跡
69．大明神遺跡　70．垣添遺跡　71．追手遺跡　72．岡ノ飼手遺跡　73．下條遺跡
74．古屋開手遺跡　75．直田遺跡　76．平安浦遺跡　77．上人ケ市遺跡　78．大寺ケ市遺跡
79．鈩屋遺跡　80．戎ノ前遺跡　81．中川原遺跡　82．五十田遺跡

でも出土している。空の谷遺跡は丘陵上の遺跡として早くに開発された遺跡である。前期の水田跡も調査されている。南あわじ市志知川沖田南遺跡では古墳時代にわたる長期間の水田跡を広範囲で調査されており、兵庫県の水田跡調査の草分けである。雨流遺跡・波毛遺跡・横入遺跡でも水田跡の調査が行われている。

中期になると遺跡数は増加する。前期の遺跡はほとんど継続し、丘陵上に中期になって広がりはじめ、北淡路の丘陵上にも中期後半には広く居住区を展開するようになる。北淡路での弥生時代集落立地の大きな特徴である。丘陵上の遺跡は後期に盛行する特徴を持ち、高地性集落と呼ばれている。淡路市舟木遺跡を代表とし大集落となる遺跡が、尾根上の風を防ぐ日当たりの良い場所である津名山地上に立地している。標高100m周辺に築かれ、淡路市に限れば中期から10倍以上遺跡数が増えている。大阪湾に向かうよりも圧倒的に播磨灘を望む立地を採ることが注目される。禿山遺跡・塩壺西遺跡・楠本下林遺跡・尼ケ岡遺跡・白山真土遺跡・千本遺跡・大坂遺跡・行免形遺跡・おぎわら遺跡・久野々遺跡など多くの遺跡が知られている。それに反して南淡路では平野部が広がっていることもあって、平野部にも遺跡が多く見られる。洲本平野では波毛遺跡で中期後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・工房跡・水田跡が調査され、洲本市下内膳遺跡では後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・水田跡が調査されている。下内膳遺跡の上方となる先山から延びる丘陵上に北淡路同様に集落が展開される。中期末から後期にかけての丘陵上の集落跡で洲本市下加茂岡遺跡・大森谷遺跡・寺中遺跡・森遺跡などである。寺中遺跡では同時期の墓域も調査されている。横入遺跡では中期（前期末の可能性残る）に環濠集落を営んでいるが、後期には続かない。北東の天神遺跡も前中期を通しての中心集落であるが、後期になると生活を止めている。丘陵部に限らず海岸線にも畑田遺跡・貴船神社遺跡・富島遺跡・育波堂の前遺跡などが存在する。洲本市飛谷遺跡では絵画土器が出土しており注目される。また、丘陵上の二ツ石戎ノ前遺跡では竪穴住居跡から朱ベンガラの付着した水滴状石杵と朱の付着したL字状石杵が出土しており、水銀朱とベンガラの両方を扱った遺跡として特筆される。隣接する最古段階の銅鐸である中川原銅鐸との関連性が考えられている。すなわち、中川原銅鐸を用いた集落が二ツ石戎ノ前遺跡で、銅鐸祭祀終焉後に中川原に銅鐸を埋納したものと考えられている。洲本平野・三原平野では中後期にかけて大きな変化はない。弥生時代の淡路を代表するものとして青銅器がある。南淡路を中心に銅鐸・銅剣・銅戈が知られており、淡路市では江井から銅鐸が出土している。今までに13遺跡20鐸の銅鐸が出土している。最近注目されているのが淡路市五十長垣内遺跡で、播磨灘を望む丘陵上の遺跡で鉄生産を行っている。

淡路では前中期の明らかな古墳は確認されていない。不明な点が残るが、洲本市コヤダニ古墳から三角縁神獣鏡が、洲本市宇山牧場古墳（１号墳）から素文鏡・五銖銭が出土している。後期古墳の数も少なく、前方後円墳も明らかではない。前方後円墳の可能性が残る古墳が１基存在するが明確でなく古墳数は三原郡が多く、しかも鳴門海峡に面した海岸部・沖ノ島に集中している。埋没古墳も最近の調査で幾つか確認されている。南あわじ市湊での調査が代表例である。津名郡でも最近の調査で畑田遺跡・貴船神社遺跡・富島遺跡から箱式石棺が続けて確認

されており、北淡路も海岸部に小型の古墳が多く築かれた可能性がある。大型の古墳は淡路市石の寝屋古墳、洲本市曲田山古墳・築穴山古墳、南あわじ市西山北古墳で、島内に点在している。初期石室は洲本市明田丸山古墳で方形プランに近い形状を呈しており、閉塞状況が確認される稀有の例である。群衆墳は沖の島や淡路島南西部に位置する崖部に立地する阿那賀・鎧古墳群が知られている。古墳の規模は小さく海人の墓と考えられている。通常の古墳群としては６基で構成される洲本市下加茂岡古墳群が代表例であろう。数的には洲本市厚浜台古墳群が12基から成り、最大である。洲本市岡ノ谷古墳は竜山石製の家形石棺を保有している。淡路市福満寺にも竜山石製石棺があり、複数の搬入が確認されている。

古墳時代の集落は初頭までは尾根部の遺跡が継続するが、そこで生活を終えている。弥生時代中期の中心集落である天神遺跡は後期になって遺跡を再開しており、海岸部の貴船神社遺跡・富島遺跡で後期の竪穴住居跡が検出されている。洲本市では弥生時代からの遺跡である波毛遺跡で前期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出され、森遺跡では中期～後期の竪穴住居跡が調査されている。

淡路の古墳時代を代表する遺跡として製塩遺跡がある。奈良時代御食国となるが、その素地は古墳時代に作られている。最初は洲本市名子の浜遺跡・旧城内遺跡で生産をはじめ、脚台Ⅱ式の段階に全島に広がる。調査が行われた貴船神社遺跡では丸底Ⅱ式に最盛期となり、淡路島で最初に製塩炉が確認された。22基の製塩炉や採鹹遺構などが検出された。引野遺跡でも地床炉が調査されている。今出川遺跡・井上遺跡・楠本塩入遺跡・萱の遺跡・平松遺跡・野島遺跡・富島遺跡・浜田遺跡など多数の製塩遺跡が確認されている。平安浦にも製塩遺跡は広がっていたようで、安乎間所遺跡・安乎大浜遺跡が知られている。野島海人と三原海人の記載があり、平城京からは両者の木簡が出土している。奈良時代でも後半になると三原郡の方に中心が移っていく。その代表が九蔵遺跡であろう。製塩炉と採鹹土坑が確認され、和同開珎銀銭・墨書土器が出土している。

律令期になると淡路国は南海道に属し、官道も大半は三原郡を通っている。そのこともあって遺跡数は三原郡の方が多くなっている。そういう背景の中で最古の寺院が志筑に建立されるのは特筆される。横入遺跡の背後に志筑廃寺は存在しており、横入遺跡からも多量の瓦が出土している。瓦の中には藤原京に供給された土生寺瓦窯跡と同じ胎土の瓦も見られる。洲本市大野周辺からも志筑廃寺に瓦が運ばれたことが明らかである。横入遺跡から奈良時代の遺物は出土しているが、志筑廃寺削平によって水田開発を行った結果による堆積である。志筑廃寺は藤原京と同笵の瓦を葺いている。最古の寺院が津名郡に建立されたが、それ以外は三原郡に認められる。淡路国分寺は確認調査から伽藍配置はほぼ確定し、瓦窯など検出されている。国分寺は明確になっているが、国分尼寺・国府や由良・神本・福良の驛家の推定地はあるが確定していない。郡衙も明らかでないが、津名郡衙は旧一宮町所在の郡家長谷遺跡が候補になっている。津名郡の奈良時代の遺跡は志筑周辺と郡家と洲本平野にかけての３地域に集中している。洲本平野は賀茂里であるが、三原郡と接しており、位置的には郡衙には成り得ないと思われる。郡

家は郡衙推定地の郡家長谷遺跡や老の内遺跡・淡路一宮である伊弉諾神社が存在する。志筑には最古の寺院である志筑廃寺や最古段階の条里型地割の水田を確認した田井A遺跡などが広がっている。田井A遺跡は池尻遺跡とともに入江に面した港湾遺跡の可能性が考えられる。横入遺跡と同時に実施された調査で人形などの律令期木製祭祀具と木簡・墨書土器が出土している。特筆される遺物に製塩遺跡である貴船神社遺跡から新羅陶器が出土している。猿の顔を刻んだ把手を付けた樽形を呈しており、大宰府など出土例が希少な舶来品である。

中世になると、佐々木氏・細川氏が守護となり淡路支配が行われる。淡路全域に遺跡は広がっているはずであるが、調査例は他地域に比べると少ない。ただ、発掘調査が行われた各遺跡では遺構が確認されているので、検出例が少ないだけと思われる。大森谷遺跡・寺中遺跡・下内膳遺跡で掘立柱建物跡が調査されている。淡路市では筒井遺跡・白生遺跡・宇和田遺跡・大歳遺跡・五反田遺跡で掘立柱建物が検出されている。三好氏によって守護細川氏は滅ぼされ、淡路国内の国人層の動きは活発になり、各地に城跡が築かれるようになる。近世になると阿波蜂須賀藩所領となり、洲本城に家老が配置され治めていた。

1． 横入遺跡　2．志筑廃寺　3．池尻遺跡　4．田井A遺跡　5．臨地庵池遺跡
6．黒田西遺跡　7．黒田東遺跡　8．脇遺跡　9．高松遺跡　10．下原田遺跡
11．近江ケ原遺跡　12．坂田遺跡　13．尼ケ内遺跡　14．大円道向遺跡　15．高場遺跡
16．本光寺址　17．城中山遺跡　18．老ノ内遺跡　19．郡家長谷遺跡　20．高嶋遺跡
21．妙暁寺址遺跡　22．平川遺跡　23．入管池遺跡　24．竹谷廃寺遺跡　25．原遺跡
26．岩見遺跡　27．とみのはら遺跡　28．石出遺跡　29．宗原田遺跡　30．白池遺跡
31．角床窯址群　32．奥ノ池古窯址　33．安住寺跡　34．次郎谷遺跡　35．赤金遺跡
36．鴨根原遺跡　37．波毛遺跡　38．向上遺跡　39．大森谷遺跡　40．野神遺跡
41．下内膳遺跡　42．曇華池遺跡　43．里池遺跡　44．馬木遺跡　45．山下町居屋敷遺跡
46．安乎大浜遺跡　47．平安浦遺跡　48．中山遺跡

図９　横入遺跡周辺の奈良時代遺跡

第３章　遺構

第１節　概要

本発掘調査は２ヵ年に亘って実施した。端から順に調査したものではなく、調査可能な部分を初年度に調査を行った。今回、報告にあたって上流の南西部分から調査区名を通し番号で与えた。そのことから、現地説明会・調査年報の資料と地区名が変わっている。変更したものとご理解ください。

平成22年度調査区（調査番号2010157）を３区とし、平成23年度調査区（調査番号2011184）は３区を４区に変更し、１・２区は変更せず同じ地区名である。３区東半と４区については上下２面の調査を行った。

弥生時代中期から奈良時代はじめまで生活空間として利用されていたが、それ以外の時期は水田として利用されていた。

第２節　１区

西端に位置する調査区で、平面136㎡の三角形に近い狭小な調査区である。盛土が1.5m前後あり掘削深度があったことから法面を設けている。そのことから、下面での調査面積はさらに狭小で40㎡に満たない。

検出した遺構は土坑１基・溝１条とピット２基だけである。土坑（SK102）は北側で検出しており、径80×72㎝の歪な円形プランを呈している。北西―南東方向に長く、深さは25㎝と浅く、断面形状は皿形である。出土遺物は土師器小片だけである。溝（SD101）は調査区を東西に延びており、調査区内で６ｍを測る。幅は0.8～1.4mと変化があり、深さは0.4m前後で断面形状は逆台形である。出土遺物は弥生土器・土師器である。埋没時期は土師器甕（１）が示す古墳時代中期である。ただ、底の堆積土は２区の溝との比較で古相を示し、弥生時代中期に遡るものと思われる。ピットは２基確認しているが、明瞭ではない。

第３節　２区

３区に隣接した1,513㎡と比較的広い調査区である。２面で調査を実施したが下面は南側の一部に限られており、調査面積は150㎡と狭小である。

上層遺構面

３区ほどではないが、包含層が同じように厚く存在する。包含層部分は奈良時代以降の堆積層で水田として土地利用がなされていた。志筑廃寺の瓦を中心に須恵器・土師器・瓦器が出土している。遺物は３区より磨滅している印象を受ける。調査した遺構面では弥生時代中期から奈良時代の遺構を検出している。溝・土坑・ピットを確認した。溝は１区から延びてくるものや、３区に続くものがある。SD201は環濠と考えている新段階の溝で、東側は３区に延び３区SD208に続いている。東西方向は大きくは直線的で、東壁から14mのところで南側に約２ｍ張

り出すように屈曲している。細かくは直線でなく微妙に緩やかな弧を描いて蛇行している。東西27.5mを測り調査区北壁近くで直角に曲がり、3.5mで調査区外へ続いている。断面は逆台形で深さ0.25mを測る。東側だけ1回り外側に古段階のSD202が平行して北側にあるが、東壁から8mのところでSD01に切られている。SD02の西側は同一平面に位置していたものであろう。SD201は南北方向の溝4条（SD211・212・208・213）を切っている。すべて北側調査区外に延びている。3条は北から長さ20m前後で消失している。SD208だけが、北から23mのところで90°西へ方向を変えている。27.5m調査しており、SD219に切られている。SD201より古い環濠と考えられる遺構であるが、SD201と比べて大きく遡らないと思われる。SD219は調査区西側に延びており、25mのところで消失している。SD219の南側に約2m離れて平行にSD220が走っている。平行していることから、一体の遺構と思われる。他に5条の溝を調査しているが、不定形で短い溝である。出土遺物は全体に僅少である。磨滅しているものや小片が多く断定は出来ないが、弥生土器に限られているものと思われる。溝の時期はその中でも中期前半に集中する可能性が高い。

土坑は11基確認した。溝が埋没してから築かれている土坑が大半である。遺物が少なくすべての時期を確定できないが古墳時代のものが多数を占めるものと思われる。SK204～207の4基は古墳時代中期で概ね1列に並んでいる。SK204はSD208の上（埋没した後）に築かれており、他の3基とは僅かにずれている。SK204は径65cmのやや歪な円形プランで、底面は径20cmと小さめで丸みを有しており、断面逆台形を呈している。底から30cmのところで土師器甕（2）が出土している。土坑の深さは72cmである。SK205～207は3mの間に等間隔で直線に築かれている。SK205は最大上径80cm、短径70cmで深さ55cmを測る。底面はやや丸みを残す逆台形である。底面に黒褐シルトが堆積し、その段階で土師器群が埋められ（置かれ）ている。6個体で壺2点、甕1点、高杯3点である。小形壺は高杯の上に乗せられており、3セットともそのような祭祀形態を採ったものと思われる。SK206は中央にあり、やや小さめである。上径で最大58cmの歪な円形で深さ64cmを測る。底は平坦で断面逆台形を呈する。やはり底面でなく、黒褐シルトが堆積した上に土器が置かれている。土師器5個体で甕1点、壺2点、高杯2点である。高杯は壺・甕の上に乗せられていた。壺は精製の壺と思われる。SK207は北端にある土坑で最も大きい。最大径84cmで東西にやや長い楕円形を呈している。深さは42cmと他より浅く、底面は平坦で東側は直立し西半は緩やかな断面形状をしている。土師器片を出土しているが、完形に近いものはなかった。それ以外の土坑はすべて性格不明である。SK203は大形の落ち込みで東西3.5m、南北2.8mの長半円形をしている。深さ0.15mと浅く断面形状はレンズ状である。SK210は溝状を呈し、深さ0.4mとやや深い。その他の土坑は不定形で浅いものが多数を占める。

ピットも数基検出しているが、柱痕跡を確認したものはない。杭かと思われるが、杭列にはならない。

下層遺構面

旧河道1条と、その内部に敷設された杭列（しがらみ跡）を検出した。旧河道は上層の溝と

同じく主軸方向は概ね南西から北東方向に持っており、自然地形に即して蛇行している。幅は2.8～4.2mで深さは全体的には0.9～1.2mを測る。底面が部分的に深くなったところがあることや、緩やかな弧を描く外側は幅を広げていること、埋土がラミナ状を呈する点も旧河道の特徴を示している。

杭列は河道に直交するように打設されている。みかん割りした材を杭に利用している。しがらみとして面が広いように考えたもので、杭間にいた材も置かれている。杭は直に打つものと60°前後の角度を持って打たれたものがセットになっている。

第４節　３区

横入遺跡で最も広い調査区である。２面で調査を実施したが下面は主に東半分に限られている。しかも地層が脆弱で調査段階で崩落したこともあって、ステップを作ったりより緩やかな安全勾配を採ったため、調査面積はさらに減少している。環濠内から僅かな弥生土器が出土しているが、それだけが生活臭のある遺物である。それ以外は水田開削に伴って切り開かれた際に引っ張り出された遺物である。

上層遺構面

包含層が厚く存在する。特に志筑廃寺に近い北側は瓦を主体とする濃密な包含層である。遺物は磨滅しているが、２区・４区に比べると保存状態がまだ多少良好で破片の大きさも大きかった。検出した遺構には時期幅があり、弥生中期から奈良時代の遺構面である。遺構から出土した遺物は僅少である。検出した遺構は溝・土坑・ピットと耕作痕跡である。

溝は16条確認しており、そのうちの一部は２区から延びている。SD08は環濠と思われる溝で新旧２時期の切り合いがある。３区では検出長35mであるが、２区と合わせると60.5mになる。新（８b）古（８a）があるが、大きな時期差はない。古段階埋没後、比較的速やかに改めて開削されたと思われる。東側は同一であるが、南東から南側は新段階が狭くなっている。断面形状は逆台形で、深さはSD08aが0.6m、SD08bが0.8mを測る。地形に即して築かれており、南東部分は狭くなっている。狭い部分から南西に分流しているのがSD12である。12m検出しており、消滅している。幅は最大で1.1mで平均0.8m深さ0.4mを測る。断面形状は広いU字形で0.2mの深さである。主軸方向は南北から約45°振っている。SD12の東側にほぼ平行して断続的な溝群がある。６m前後の空間をおいている。南西からSD18・SD19・SD20・SD22で本来は１条の溝の可能性が高いが意図的に凹凸を持って掘削したものかもしれない。幅は一律でなく徐々に広く（狭く）なるものでもない。幅が１mに満たないSD19が深さもなく0.2mと浅い。他の溝は0.25m前後と似た深さである。出土遺物が小片で確実ではないが、古墳時代中期～後期の遺構と思われる。道状遺構や大畦畔のように思われるが明確でない。それ以外の溝は短く延びるものが多いが、大半は水田に関係する溝であろう。

土坑は８基あるが、平面形は不整形か楕円形のものが大半で、性格のわかるものはなく、出土遺物も少ない。SK27は大形で最大長4.5mを測る。ただ深さは0.15mと浅く、底は平坦であ

る。SK33は弧を描き溝状を呈している。深さは0.1m前後と浅い。その他の土坑も0.2m未満の深さで浅く、遺物は保有しない。

ピットは38基検出しているが、柱痕跡がわかるものはない。杭が大半で、一部木の根も含まれている可能性が高い。

耕作痕跡としては畦畔・鋤溝と波板状遺構を検出している。環濠外側は概ね水田として利用されていたようで、全体に耕作痕跡が見られる。畦畔は大畦畔と小畦畔を検出している。検出した遺構はほぼ不定形水田に伴うもので、環濠埋没後の弥生中期から古墳時代の時期幅があり、明確に時期区分することは困難であった。SX17が波板状遺構で、不整形な小土坑が連続している。SD12とSD18～SD22に挟まれた中央に築かれている。主軸方向も同様で時期も同じと考えている。９基の土坑が並んでいる。形状は不定形で中央部分が凹んだものが主流である。横方向の断面は３列の段になり、縦方向はレンズ状か浅いU字形である。円形や隅円方形もあるが、やはり中央部は深くなっている。これらをセットで見ると東和幸氏の唱える牛耕痕跡が最も頷ける状況である。

時期は近世になるかもしれないが、杭列も認められる。杭列は調査区南側を南西から北東方向に42m以上確認しており、それに直交するような主軸（N44°W）方向を持って調査区東側で北西から南東方向に調査区を30m貫いて延びている杭列も確認している。この杭列は現況の水田境とも概ね合致している。水田畦畔に伴った可能性が高い杭列であるが、すべてが現在の杭列とは考えられない。同じ位置を長期間踏襲したものと思われる。

下層遺構面

東半で下層遺構の存在が確認されたので、1,160㎡について下層の調査を行った。検出した遺構は水田面で４条の大畦畔である。大畦畔の規模は大きく、最大で幅3.0m、高さ0.5mを測る。調査区外へ延びており、１筆全体を出した水田はない。５筆の不定形水田で１筆の大きさは現況で300㎡あり、それ以上の大きさである。現状で検出した規模は水田１が南北14.4m、東西4.0mの28.8㎡、水田２が北側幅19.5m、南辺12.5m、南北15.5mの248㎡、水田３は北辺20.0m、南側幅22.5m、南北6.5mの138㎡、水田４は南北23m、東西15.5mの349㎡、水田５は東西10m、南北2.5mの14㎡を測る。水口も３か所で確認している。水田隅が開いているものと、畦畔中央を開けているものがある。水田２の南東隅（水田３北東隅）が隅にある水口である。水田１と２の間の南北畦畔と水田４・５の間の東西畦畔に畦畔中央に水口が認められる。時期は細かく特定できない。出土遺物は前期の小片だけで、環濠前の可能性が高く弥生前期に遡る可能性もあるが、環濠前の中期前半から前期の時期幅を想定しておく。

第５節　４区

遺跡東端の調査区で901㎡の面積を調査した。上下２面で調査しているが、検出した遺構はすべて水田面に関連するものである。ピット・土坑など生活関連の遺構や水田関連以外の性格を想像させる遺構はなかった。出土遺物は僅少である。

上層遺構面

不定形の大畦畔と杭列を検出している。調査した横入遺跡の中では最も新しい時期と思われる。大畦畔は４本検出している。１本は調査区内を東西に走っている。幅２ｍ前後で高さは0.2～0.4mを測り断面形状は半円形である。この大畦畔から南北方向に１本ずつ大畦畔が延びている。直線に交差せず、少し離れて南北に延びている。直交せず、南側は50°前後の鋭角で交差している。大畦畔の規模はほぼ同じである。約18m南東に延びた部分で分岐している。この部分は鋭角でなくほぼ直角に南西方向の調査区外にのびている。この大畦畔は幅0.8mと他より細くなっている。最初の東西方向の畦畔から北に延びる畦畔も幅0.8mと細く90°に近い角度で北の調査区外に続いている。

下層遺構面

水田土壌を確認し水田面であることは確実であるが、明確に遺構は検出されなかった。南西部で大畦畔と思われる土壌変化部分を6.5m検出したにとどまる。幅1.5mを測る変化部分である。北東部でピットを１基確認したが明確でない。

第４章　出土遺物

第１節　遺構出土遺物

遺構出土遺物の量は余り多くない。ある程度まとまって出土しているのは２区土坑群だけである。出土状況は祭祀形態を表しているものと思われ興味深い一群である。

１区SD101出土土器（１）

溝内から弥生土器・土師器が出土している。図化した土器は１点である。（１）は土師器甕で丸底である。浅黄橙を呈し、長石･石英などの砂粒含む。やや平ための丸底で球形の体部から外反する口縁部になる。ユビ成形から内外面ともにやや粗めのハケで整形する。

２区SK204出土土器（２）

土師器数点が出土しているが､図化したのは１点である。（２）は重心の低い丸底の甕である。頸部の稜線は甘く広口である。内湾する体部から外反する口縁部で端部丸い。黒斑あり、内面は浅黄橙、外面は灰白～灰を呈する。表面磨滅しているが全面ハケ整形と思われる。砂粒は多めである。

２区SK205出土土器（３～８）

（３）は小形丸底壺で口縁部を欠いている。ユビ成形からナデ仕上げである。余り丁寧な仕上げではない。にぶい黄橙を呈し砂粒含む。（４）は丸底で球形の体部で口縁部を欠く小形壺である。粘土紐残し丁寧な仕上げではない。ユビ成形からナデ仕上げで灰黄～灰白である。（５）は甕で底部を欠くが丸底である。球形の体部から外反する口縁部で端部丸い。内面は２本単位のハケ状の痕跡あり､その後ナデ仕上げ。外面は縦方向のハケ整形で､浅黄～灰白を呈する。（６～８）は高杯である。（６）は内湾する半円形の杯部で端部丸い。色調は橙で砂粒少量含む。磨滅しているが、内外面ともヘラミガキで仕上げていると思われる。端部周辺はヨコナデで、円板充填法である。（７）は段を有する杯部で円板充填法である。灰白を呈し、丁寧な仕上げである。（８）は椀形の杯部から緩やかに外反する裾部に続く。両端部とも丸く納める。表面磨滅・剥離しているが、ミガキ・ナデの丁寧な仕上げである。筒部との接合部の杯部にヘラ先で刺突が施されている。内面は橙～灰白、外面はにぶい黄橙を呈する。３方透孔を持つ裾部である。

２区SK206出土土器（９～13）

（９）は甕で内湾する体部内面はユビ成形からヘラケズリを施し、ナデか板ナデ整形を行う。外面はハケ整形である。外反する口縁部は二重口縁で擬口縁は突帯状になり、ヨコナデである。にぶい橙～浅黄・灰白を示し、砂粒多く含む。(10) は頸部が長めの壺口縁部である。外反し端部丸い。ハケ整形からヨコナデ仕上げで、にぶい黄橙を呈する。(11) は丸底の扁平な球形体部を持つ直口壺である。内面は灰白～灰、外面は橙を示し、長石・石英・赤色粒の砂粒含む。口縁部は外傾し、外面は器壁に変化があり、端部は丸く納める。表面磨滅顕著。(12) は内湾する杯部で端部は反りぎみに丸い。筒部は直線的に広がり、絞り目が残る。橙を呈し、２次焼

成を受けている。(13) は内湾する高杯杯部で端部は短く内傾している。磨滅しているが、ハケ整形からナデ調整であろう。

２区SK224出土土器（14）

大形甕の口縁部と思われるが確実ではない。縄文土器の可能性もある。外傾し端部肥厚し角張る。浅黄を呈し、砂粒多く含む。

２区SD201出土土器（15～17）

(15) は外反し端部丸い壺口縁部である。黒斑が認められ、浅黄橙～灰白を呈する。(16) は弥生後期壺底部である。平底から外反ぎみに延びる。内面は黒褐で有機質付着している。外面は褐灰でナデ仕上げである。(17) は溝埋没時かそれ以降の遺物で中世末期の土師器鍋口縁部である。内傾し端部角張り、外面に突帯を有する。浅黄橙～黄橙を呈する。

２区SD208出土土器（18）

弥生前期土器で壺底部である。平底から外反する。橙で砂粒多く含む。

２区SD219出土土器（19）

土師器甕口縁部で外反し端部丸く納める。浅黄橙～黄橙で砂粒少量含む。古墳時代初頭と思われる。

２区下層旧河道出土土器（20～26）

すべて弥生前期の土器である。(24) (25) は甕で、それ以外は壺である。(20) は内湾する肩部で２ヶ所の段を有し突帯状にしている。この段は古段階のものではなく新しい段と思われる。(21) も段によって突帯を表現する外反する胴部上半である。にぶい赤褐～褐を呈し、石英・長石などの砂粒多く含む。(22) は最大腹径部の内湾する体部である。沈線１条が最大腹径部にあり、その上にヘラ描きの木葉文が施される。外面はヘラミガキで仕上げられ、内面は板ナデ調整。灰黄～黄灰を呈し砂粒は多くはない。(23) は外反する頸部で貼付突帯が付加される。内面は黒褐、外面は暗灰黄で内外面ともヘラミガキである。(24) (25) は平底から内湾する底部である。(26) は平底から外傾する体部でナデ調整している。内面は灰、外面は浅黄橙～明橙で砂粒多く含む。

３区SD08出土土器（27・28）

(27) は外反する壺口縁部で端部は角張りぎみ。外面と体部内面はハケ整形、口縁部内面はヘラミガキで仕上げている。にぶい黄橙～橙をする。煤付着している。(28) は平底から外反する体部で壺かと思われる。ユビ成形からナデ整形する。

第２節　包含層出土土器

縄文土器

縄文土器と思われる小片は他にも見られるが、図化したのは (29) １点である。外傾し端部角張り器壁厚い。沈線１条見られるが磨滅しており、文様構成は不明である。赤橙～赤灰を呈する。

弥生土器（31～40）

全体的に磨滅顕著で、色調はにぶい橙～黄灰が多い。（32）（33）は前期甕口縁部である。如意形口縁で丸い端部に刻み目を施している。頸部下に沈線が見られ、(33)は３本ある。(31)(34)～（37）は中期壺口縁部で、（36）だけ端面に凹線が２条あり新しくなる。（38）は上げ底ぎみの平底から外反する体部になる中期壺底部である。ハケ整形からナデ調整である。（39）（40）は後期である。（39）は底部再成形の壺底部で、（40）は高杯筒部である。絞り目が残る。

古墳時代土師器（30）

（30）はイイダコ壺体部である。内湾し外面に弧を描いた半円形のヘラ記号が見られる。把手は残存していないが、釣鐘形になるものと思われ、富島遺跡に類例がある。

古墳時代須恵器（41～50）

ほとんど灰白を呈しており、僅かに砂粒を含んでいる。（41）は古式杯身である。自然釉が付いている。淡路では雨流遺跡で類例がある。（42）は末期の杯身で短い受部と低い立ち上がりである。端部は丸く体部は外傾する。（43）は壺体部で上下２条の沈線があり、その間に刺突文が施されている。（44）は瓿口縁部で外反し波状文が施される。（45～49）は甕口縁部で外反し端部肥厚する。（47・48）は刺突文で、他は波状文で装飾している。（50）は高杯筒部で外反する。中空で杯部底は平坦で、ロクロナデ仕上げである。裾中央に浅い沈線が１条ある。

古代須恵器（51～159）

（51～72）は杯蓋である。反りが残るものはない。（51・52）は宝珠つまみで口径が小さいことから、飛鳥期に近いものと思われる。天井部が平坦なものと丸いものがある。つまみ部は扁平な宝珠形とボタン状のものがある。端部は丸く納めるものが多いが、垂下するように大きくつまみ出すものや僅かにつまみ出すもの、角張るものもある。（72）は天井部に墨書が見られる。「十」で文字でなく記号であろう。

（76・78～83）は杯Aである。底部が残っていない口縁部・体部は判断できないが杯Aに入れている。色調は灰～灰白のものが多く、砂粒を含んでいる。体部は当然すべて開くが、外反するもの（73～75）と外傾するもの（76・77）がある。端部は丸く納めるものが大半であるが、尖りぎみのものもある。ロクロナデで整形しているが、（74）は回転が強く器壁に凹凸がみられる。底部は回転ヘラ切りかヘラ切りによって平坦にし、その後ナデ仕上げをすることもある。形態などから時期差があることは明らかで、古相を示す（76）（82）と椀に近い（80）（83）とは大きく異なっている。同じように回転の強いものは新しい要素と思われる。（78）は底面に置台に置いたかと思われる縦に痕跡が残されている。（83）はヘラ切りの湾曲する底部にヘラ記号が施されている。２本の線で「人」状に記されている。

（84～113）は杯Bである。色調は灰～灰白が多く、暗灰のものもある。胎土も砂粒を含むものが多いが、微砂をわずかに含む良好な土器もある。重ね焼きの痕跡が残るものも多い。（92）は突帯椀に近い。口縁部は外傾するものと外反するものがある。体部は回転ナデで、火襷状になっているもの（85）（102）もある。底径には幅があり、（108）が5.7㎝と小さく、（96）が

14.2cmと大きい。高台の形状も逆台形や外側に尖り出すもの、方形のもの、外側に開くもの、方形で端部が肥厚するもの、丸みを持つもの、三角形に近い形など変化がある。底部は平坦なものと外湾するものがある。底面は回転ヘラ切りが多く、ヘラ切りのものはナデ仕上げをしない未調整が多い。高台部周辺には貼り付けのナデが施されている。(88) は底面に爪形の圧痕が巡っており、高台貼り付け時の痕跡かと思われる。(97)は底面にヘラ記号がみられる。(110)は端部であれば杯であるが、内傾する壺の可能性もある。

(114～116・118・119) は皿である。(114) は平底から外傾する体部になり口縁部は肥厚ぎみで上方につまみ上げ、端部丸い。回転ナデは強く器表に凹凸がある。(115) は皿Aで底面はやや湾曲している。回転ナデで底面はナデで仕上げる。(116) は皿Bで底径13.1cm、口径14.8cmを測り、回転ナデで端部尖りぎみである。(119) は底面残存していないが、(118) と類似しており同タイプと思われる。体部外傾し口縁部は水平に外反し端部丸く納める。

(117) は稜椀蓋である。回転ナデで外面が火襷状になっている。天井部は平坦で体部は短く外傾し、端部は外反気味に尖る。つまみ部周辺は貼り付けナデがみられる。

(120) は大型の盤底部である。底径30.0cmと大きい。高台は高さ1.5cmあり、端部が肥厚する長方形の断面になっている。底部は緩やかに内湾するが、ほぼ平坦である。残存部端の外側に剥がれた跡があり、把手か何かが付いていたようである。回転ナデののちナデ仕上げを行っている。灰色を呈し、石英・長石などの砂粒を含む。

(121) は壺蓋であるが、径14.2cmと大き目である。平坦な天井部からほぼ垂直に垂下する体部になる。天井部には自然釉が付着している。

(122～130) は壺で、ほとんど回転ナデである。(122) (123) は口縁部の短い直口壺で、(122)は外傾する体部からわずかに外傾する口縁部で端部は角張る。(123) は内湾する体部から直立する口縁部になり端部丸い。重ね焼き痕が残っている。(124) は小型壺口縁部で内湾する体部から外反する口縁部で端部肥厚して丸い。肩部に沈線が1条見られ、外面には自然釉が付着している。(125) は外反する口縁部で小型である。外反し端部内外に肥厚する。(126) は外反し端部外側につまみ出す口縁部である。(127) は内傾する体部から外傾し端部近くでやや外反する口縁部で端部わずかに内外に肥厚するが角張る。口縁部は体部と接合する際に下側に突出している。外面に自然釉付着している。(128)(129)は耳壺の耳である。肩部は内湾している。(130)は壺肩部で明瞭な稜線を有して体部下半に続く。変化点上に1条の沈線が施されている。

(131～141) は甕である。(131) は短く外反する口縁部で端部直立ぎみに角張る。(132) は内湾する口縁部で端部大きく肥厚し、端面に2条の凹線を有する。胎土や断面の印象は東播磨産のものと思われる。(133) は内傾する体部からくの字の頸部で外傾する口縁部は端部近くで屈曲し内傾する。余り見ないプロポーションをしている。(134) は内湾する肩部で外面には格子タタキが見られ、内面には当て具の痕跡が残る。(135) は二重口縁になっており、頸部から突帯状に突出して外傾する。大きく水平に屈曲して延び端部は上方につまみ上げる。器形的には壺であろうか。(136) は頸部丸く外反し端部近くで内湾し端部丸い。残存端にタタキが見ら

れ、肩部から体部にかけてタタキが施されていたと思われる。（137）は外傾する口縁部で端部肥厚する。（138）は外反し端部近くは器壁が薄く仕上げられている。（139）は外反し端部角張るが肥厚ぎみ。（140）は直立する口縁部の端部近くで変化し、短く外に開き端部は下方に尖らす。外面はタタキ成形からナデ調整で、内面はハケ整形である。内外面とも灰が被っている。（141）は口縁端部の小片で外反し端部肥厚している。（143）（144）も外反する口縁部である。

（145）は細頸壺口縁部で直立する長い頸部である。端部近くで水平になり端部肥厚し、特に上方には大きくつまみ上げている。自然釉が付着している。内面には粘土紐の継ぎ目明瞭に残る。（146）は鉄鉢形で内湾している。

（147～153・156・157）は底部である。壺底部であろうと思われるが（148）（153）は鉢の可能性もある。（147）は平底から外傾する体部に続く。体部は回転ナデ、底面はヘラ切りで共にナデ仕上げを行っている。底部内面はユビ成形で未調整である。（149）は外側に開く高台で、端部肥厚している。（150）は逆台形の高台で内面に自然釉が付着している。（151）は短く外側に開き端部肥厚する高台で、底面に高台貼付時の工具痕が巡っている。内面に自然釉かかっている。（152）は短く外傾し外側にややつまみ出す高台である。器壁厚めである。（153）は逆に器壁が薄いもので、内湾する底部から体部で高台は長方形である。高台貼付時のナデがみられる。（156）は大形の上げ底で、底部内面に自然釉が付いている。外面には別の須恵器片が付着している。（157）は長胴の体部で緩やかに内湾する。底部内面に自然釉付着し、高台は外に開く。

（154）（155）は脚台である。ともに外反する裾部から端部内外に肥厚する。（158）は外傾する裾部で端部上方につまみ上げる。（159）は甕体部の破片で内湾し外面はタタキで成形している。

古代土師器（160～195）

（160）は杯蓋でつまみ部周辺だけが残存している。つまみは平坦で天井部も平たい。

（161・163～165）は杯Aである。（161）は平底から外傾する体部になる。（163）も平底であるが墨書が見られる。ウ冠は確実であるが下は明確でない。「宮」かもしれない。焼成は良好で灰を呈する。底面はヘラ切りで体部との間に稜線が残る。（164）は口縁部で内湾ぎみで端部近くで僅かに反って尖る。（165）は平底から外傾する体部となり端部近くで反りぎみになり丸く納める。

（162）はベタ高台の底部である。杯より椀が妥当であろうか

（166・167）は杯Bである。磨滅しており、にぶい黄橙～灰白を呈している。高台は丸みを持っている。磨滅しているので技法など明確でない。

（168）は皿であろう。内湾し端部近くでやや変化し端部丸い。ユビ成形からナデ仕上げし、端部周辺はヨコナデを施す。黒斑見られる。（169）は鉢で不安定な平底から内湾する体部になる。端部下が器壁厚くなり端部は尖る。器壁の厚い部分が最大径で口径は僅かに小さくなる。強く被熱している。（171）は大形の土器の脚台部である。外反し端部尖りぎみである。底部は

平たく、黒斑がある。（172）は耳皿である。器高2.7㎝と高めである。底は平たく糸切りである。

（173・174）は高杯である。（173）の外形はハケ整形で、筒部内側に大きな窪みがある。成形時の痕跡であろうか。筒部短く裾部は外傾する。杯部は丸みを持つ。（174）は多面形の筒部で８面であろうか。大形で磨滅著しい。残存面が粘土接合面で、杯部が剥がれたものかとも思われる。中央に穿孔が認められることから、破片を土錘に転用した可能性が高いものと思われる。

（175～189）は甕である。（175・176・178）は外反する口縁部で端部丸い。（177）はくの字となり口縁部は外傾し端部角張る。口縁部はユビ成形で作り出し、ナデ整形を加える。内面はハケ整形からナデ。（179）は内湾する体部から頸部の稜線を持たずに外傾する口縁部になり端部丸い。にぶい褐を呈し、色調・胎土が異なっており搬入品と思われる。（180）は内湾するが全体的には屈曲のない体部から外反する口縁部になり端部尖る。内外面ともハケ整形で端部周辺はヨコナデ仕上げ。（181）は器表大きく剥離している。外反する口縁部で端部尖る。器壁は端部近くが極端に薄くなっている。（182）は内湾する体部から外反する口縁部になり端部は上方につまみ上げる。外面はハケ整形で口縁部はヨコナデ。頸部は強いヨコナデで肩部に段が出来ている。（183）は大形品で直立ぎみの体部からL字形となるように外傾する口縁部に続く。端部角張り、ヨコナデ仕上げ。（184）は内傾する体部で内外面ともハケ整形である。口縁部は僅かに内湾ぎみで端部角張る。口縁部と体部との接合面で粘土継ぎ目が段になっている。（185）は内傾する体部から大きく外反する口縁部で端部角張る。外面はハケ整形で有機質付着している。小石粒多く含み、口縁部ヨコナデである。（186）は内傾する体部から短く外反する口縁部になり端部丸い。体部内面にはハケ整形である。（187）は直立する体部から外反する口縁部で端部丸い。口径が体部より大きく堝の方が良いかもしれない。（188）は内湾ぎみに直立する体部から頸部はくびれずに外反する口縁部に続く。端部丸く、強く焼けている。内面はヘラケズリからハケ整形である。（189）は内傾する体部から外反する口縁部で端部丸い。

（190）は堝である。緩やかに内湾する体部から外反する口縁部で端部角張りぎみである・ユビ成形から外面はハケ整形し、内外面ともナデ仕上げで煤付着している。口縁部ヨコナデ。

（191～195）は甑である。（191～193）は把手で（191）は断面半円形で尖っている。ユビ成形からナデ仕上げである。（192）は上方に反るタイプで比較的扁平である。先端だけ赤変しており強く焼けている。胎土から中河内からの搬入品と思われる。（193）は1.3㎝と短い把手である。水平に延び不定楕円形で、断面形状は宝珠形をしている。体部との接点が薄くなっている。（194）は直立し端部角張って肥厚する裾部である。（195）は平底の底部で内湾する体部となる。内面ヘラケズリである。

黒色土器（170）

（170）は垂下する高めの高台で端部丸い。高台周辺には貼付時のナデが見られる。底部は僅かに内湾する。内面だけ黒色で外面はにぶい黄橙を呈する。

製塩土器（196・197）

（196）は外傾し端部角張る。ユビ成形からナデ仕上げである。他にも器壁の厚い破片が出土しており、製塩土器と思われる。キャリパー形に内湾する破片はなく、砲弾形のもので、布目は認められない。（197）は脚台Ⅲ式と思われる。手捏ねで脚台を作り出しており、器壁厚く外傾し端部尖っている。内面はナデ調整を加えているようである。

中世土師器（198～212）

（198～202）は皿である。（198）は口径5.9㎝と小さく浅いもので内湾し端部尖る。（199）は平底から短く外傾する浅い皿で端部丸い。手捏ねで成形している。（200）も浅い器形で平底から外傾する口縁部で端部丸い。（201）は上げ底ぎみで口縁部外傾し端部丸い。（202）は突出平底になり糸切りで切り離す。口縁部は内湾し端部外側に尖りぎみになる。回転ナデである。

（203）は平底から体部に続くが内傾してから外反する。托であろうか。磨滅著しい。

（204～212）は堝である。（204～207）は口縁部の破片で小さな突帯を有する。（204）は右上がりのタタキ成形で端部角張り上方に向かって面となる。（205）は内湾し端部角張りヨコナデ仕上げ。（206）は内傾し端部肥厚ぎみでヨコナデ仕上げ。（207）は内傾し端部角張る。外面は平行タタキで端部周辺はヨコナデである。（208）は内湾する体部に直立する口縁部が付き端部内外に肥厚する。平行タタキで成形し口縁部はヨコナデ仕上げ。（209）は僅かに内湾する体部から短く外傾する口縁部で端部肥厚ぎみに角張る。（210）は内湾し頸部を有さずに角張った端部に続く。突帯は三角形で高めである。右上がりのタタキで内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整である。（211）は内湾する口縁部で端部肥厚ぎみ。（212）は三足器の脚部である。内湾する体部に付加しており、断面円形である。

瓦器（213～233）

（213）は皿である。丸底ぎみの底部から浅く内湾して丸く納める端部になる。手捏ね成形で、ナデ調整を加える。

（214～231）は椀である。（214）は平底から内湾ぎみの体部で小さい断面三角形の高台が付く。（215）は外傾する底部から体部で低い高台は２段になり外側は断面三角形になっている。（216）は内湾する底部から体部で高台は不定形で低く幅広めである。（217）も内湾する底部で口径の大きい高台の断面は三角形で比較的シャープである。（218）は平底から内湾する体部で低い高台が付く色調灰白で完全に燐化していない。（219）は内湾する体部で断面三角の高台が付く。高台周辺には貼付時のナデがみられる。（220）は平底から内湾ぎみの体部で体部中央外面に変化点がみられる。端部は丸く反りぎみである。高台は付かないもので、体部下半（変化点より下）はユビ成形で上半はヨコナデで仕上げている。内面はミガキが施されているようだが、磨滅のため明瞭ではない。（221）は内湾し端部丸い。下半はユビ成形で上半はヨコナデである。（222）は内湾する体部で端部尖っている。下半は２段になりユビ成形で部分的にナデ調整を加える。端部周辺はヨコナデ仕上げ。（223）は内湾する体部で端部丸く反りぎみである。内面は横方向のミガキで仕上げている。（224）は内湾する体部で口縁部は反っており端部丸い。底径は3.6㎝と小さく、器高は高めである。底部は丸みを有し変化部に断面三角形の高台を付ける。

外面はユビ成形から上半はヨコナデ、内面はミガキが施されている。(225) は僅かに内湾する体部で端部丸い。内面は横方向のミガキで仕上げる。(226) は内湾する体部で端部尖っている。外面はユビ成形からヨコナデで、内面は不定方向のミガキである。(227) は内湾し端部肥厚ぎみ。(228) は外傾する口縁部で端部尖りぎみで器壁薄い。内面は放射状のミガキと思われる。(229) は外傾する体部で端部近くで反り端部丸く納める。(230) は内湾する体部で端部丸い。内外面とも横方向のミガキで調整している。(231) は大形で平底から内湾する体部に続く。断面U字形の高台が付き、内面は横方向のミガキで仕上げている。

(232・233) は羽釜（堝）である。(232) は直立する体部から口縁部で端部角張る。ヨコナデ仕上げである。(233) は内湾する体部でやや下方に下がる鍔部を持つ。ナデ仕上げである。

緑釉陶器 (234)

(234) は蛇の目高台になり、平底から内湾する体部に続く。削り出して高台分を形成しており、体部外面は回転ケズリによるもので弱い段が見られる。内面はナデ調整で見込み部にヘラ記号が見られる。「×」で長さが異なる。

磁器 (235～245)

(239) (240) は皿で、それ以外は碗である。(239～241) は白磁で、それ以外は青磁である。高台部は削り出しており、底面は露胎となっている。(235) は連弁文で内湾し内外面とも施釉されている。(241) は玉縁となる端部で内湾している。皿は高台が付かない平底で、(239) は刺突文と直線で文様を描いている。(240) は平底から外反する口縁部になり端部尖りぎみでシャープである。(244) は高台外面に成形時の工具痕が巡っている。

中世須恵器 (142・245～256)

(245～255) は捏鉢で、すべて東播系である。回転ナデで仕上げられ、重ね焼き痕が残るものが多い。(245) は外傾し端部上方につまみ上げる。大きく肥厚しないタイプで古相を示している。(246) は外傾する体部で端部近くでやや反り端部上方につまみ上げるように肥厚している。(247) は端部内外に肥厚する。(248) も端部肥厚し口縁部外傾する。(249) は外反ぎみの口縁部で端部上方につまみ上げるように肥厚している。(250) は内湾する体部で端部大きく内外に肥厚する。生焼けである。(251) は外傾する体部で端部特に上方に大きく内外に肥厚する。(252) は外傾し端部内外に肥厚するが、中央部分が凹んで面になっている。(253) は器壁非常に薄い製品で、内湾する体部から内外に肥厚する。内側の方がより大きく肥厚する。(254) (255) は口縁部破片である。

(142・256) は甕である。(142) は内傾する体部から大きく外反し端部内外に肥厚する。色調は暗灰を呈する還元状態になっており、自然釉付着している。形状などからは備前焼と考えた方が妥当かもしれない。(256) は短く外反する口縁部で端部やや肥厚して角張る。外面はハケ整形からナデである。生焼けである。

無釉陶器 (257～263)

すべて備前焼かと思われる。(257) は甕で、直立する口縁部で折り曲げて玉縁にしている。

自然釉付着している。(258～263) は擂鉢である。(258) は外傾し端部肥厚ぎみに断面三角形になる。端部稜線は鋭い。(259) は外傾し端部肥厚して内傾する。端面となり内外端部は丸い。(260) は器壁薄く外反する体部から直立ぎみに肥厚した端部になる。断面形は長方形で外側にやや尖らす。(261) は僅かに内湾ぎみに延び端部断面三角になり、外側に尖らせている。

施釉陶器 (264)

近世の所産で急須注ぎ口と思われる。ウサギを表現しているが、両耳を欠いている。器肉はにぶい橙で釉薬は黒・白が使われている。

土製品 (265～267)

(265) は不明土製品である。2辺は生きているが、他の2辺は割れている。縦方向は断面長方形であるが、横断面は不定形で丸みを持っている。(266) は土馬の脚部と考えられる破片である。ユビ成形からナデで仕上げている。断面はやや歪な円形で脚付け根部分であろうか。(267) は平瓦の転用品で、中央に0.8cmの円孔を穿っている。片側から穿孔しており、明確な用途はわからない。断面は上が厚く、下が薄くなっている。土錘と考えた方が妥当であろうか。

土錘 (268～277)

すべて管状土錘で太めのものが多い。(269) は球形に近く、他も総じて短く太く棗玉風である。手捏ねで成形するもので、ナデ仕上げである。(268) は橙を呈する破片である。3分の1残存しており、長さ4.15cm、最大幅3.45cmで、径1.6cmと大きめの円孔がある。(269) は下半を欠いており、残存長4.4cm、幅4.4cm、重さ21.2gを測る。径1.4cmの円孔が穿たれている。にぶい橙で器肉は黒で、砂粒含む。(270) は長さ4.7cm、最大幅3.95cmで上端が2.5cmで下端が尖った平面水滴状になっている。重さ23.8gで、黒斑が認められる。円孔は径1.6cmで直線である。(271) も半分弱残存している破片で、長さ4.2cm、幅3.6cm、重さ15.4gを測る。焼成やや悪く断面黒になっている。(272) は平面歪で長さ4.2cm、幅4.05cmと近似している。重さ44.6gと球形に近いことから長さの割りには重たくなっている。にぶい橙で小石粒多く含む。(273) は半裁状態の破片で、長さ4.65cm、幅4.3cm、重さ28.2gを測る。(274) は長さ5.3cm、最大幅4.35cmの　断面円形で、重さ69.0gを測る。径1.8cmの直線的な円形の孔が穿たれている。にぶい橙を呈している。(275) は長さ4.75cm、最大幅4.15cmと縦横の差が小さい。厚さ3.6cmと球形ではなく扁平である。重さ53.5gで径1.8cmの円孔が直線にみられる。(276) は長さ6.0cm、幅4.7cm、重さ110gと今回出土した中で最も大きい土錘である。径1.8cmの円孔である。にぶい褐で砂粒多く含む。(277) はやや太めではあるが通常の形態をしており、長さ5.4cm、最大幅はほぼ中央で3.2cm、重さ43.8gである。両端部は2.0cm前後で、径1.5cmの孔を穿っている。灰白で胎土緻密である。

フイゴ羽口 (278～281)

(278) は残存長4.05cmを測り29.2gである。不定円形をしており、外面にはガラス滓が付いている。(279) は残存長4.0cm、18.8gで外面にはガラス滓が付着している。(280) は内湾しており径の5分の1くらいの破片である。内面は赤変している。外面には鉄滓が付いている。

残存長3.6cmで23.4ｇの重さである。(281）は残存長4.85cmで歪な形状をしている。重さ32.8ｇで黄灰を呈している。

第３節　金属器（Ｍ１～Ｍ７）

Ｍ１は釘の茎部と思われる。長さ2.3cmを測り、1.06ｇである。Ｍ２は煙管の吸い口部分であるが、端部を欠いている。残存長3.95cmで最大幅0.95cm、重さ2.44ｇである。Ｍ３は有頭の製品で釘の可能性が高い。残存長６cm、最大幅0.95cmで重さ7.33ｇを測る。Ｍ４は銭貨で寛永通寶である。

Ｍ５～Ｍ７は鉄滓である。Ｍ５の断面は不定三角形で最大長7.3cm、重さ89.25ｇを測る。Ｍ６は断面弧を描いており、椀形滓であろう。断面は２色になっており、内側はガラス滓で外側は緑色を呈する錆が見られる。重さ150.84ｇで最大長7.3cmである。Ｍ７の断面形状は不定形ながら椀形滓であろう。多孔質でガラス滓が見られる。最大幅7.2cm、厚さ3.95cmで重さ88.0ｇである。

第４節　木製品（Ｗ１～Ｗ４）

４点図化しているが、すべて２区旧河道しがらみの杭である。丸太材の枝を払って杭にしたもので樹皮も残っている。樹木の根元側を上にしている。Ｗ１は残存長107.3cmで径4.0cmを測り、先はほぼ片側から削って尖らせている。マキ属である。Ｗ２は残存長84.2cmを測り、太い部分で7.5cm、先端の加工されていない部分で5.8cmを測る。先端は両側から削っており、枝の根元は残っている。やや反っている。コナラ属クヌギ節である。Ｗ３は残存長87.6cmで径6.3～7.5cmを測る。不定方向から削っている。マキ属である。Ｗ４は残存長65.5cm、径6.3cm前後で直線でなくやや反っている。クヌギ節である。図化した杭はすべて枝を払った芯持ち材であるが、他にみかん割りした材も使われている。

第５節　石器（Ｓ１～S15）

Ｓ１～Ｓ５は石鏃で、サヌカイトである。Ｓ１は凹基で丁寧に加工しており、Ｓ２とともに古相を示す。長さ2.05cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重さ0.8ｇを測る。Ｓ２も凹基で抉りが深い。長さ2.25cm、幅1.65cm、厚さ0.25cm、重さ0.5ｇを測る。Ｓ３は平基で両面とも大割をして刃部を調整している。長さ2.25cm、幅1.55cm、厚さ0.2cm、重さ0.9ｇを測る。Ｓ４も平基で先端を欠いている。やはり端部のみ調整している。残存長1.55cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.7ｇを測る。Ｓ５は大形の平基と思われるが幅が広く石鏃以外かもしれない。片側は粗割りのままで調整を加えていない。長さ3.55cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm、重さ7.6ｇを測る。

Ｓ６は有茎尖頭器で茎部を僅かに欠いている。先端は丸みを持っている。長さ4.75cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、重さ5.5ｇを測る。断面レンズ状で丁寧に調整している。Ｓ７は大形の剥片である。弧状部分に加工を加え刃部にしているようである。長さ9.85cm、幅8.5cm、厚さ

1.45㎝、重さ120.2ｇを測る。ともにサヌカイト製である。

Ｓ８は敲き石である。上面と側面に敲き痕が認められる。長さ6.0㎝、幅9.9㎝、厚さ6.15㎝、重さ498.0ｇを測る。Ｓ９は太型蛤刃石斧である。基部と刃部を欠いている。側面も磨いている。長さ7.8㎝、幅7.0㎝、厚さ4.3㎝、重さ381.0ｇを測る。S10は軽石である。打痕･擦痕はあるが、明瞭な加工痕は認められない。長さ6.15㎝、幅7.75㎝、厚さ3.7㎝、重さ34.2ｇを測る。S15も軽石の破片である。長さ2.4㎝、幅3.25㎝、厚さ1.6㎝、重さ3.4ｇを測る。

S11～S14は砥石である。S11は４面割れており､上面のみ磨り面が認められる。残存長11.5㎝、残存幅4.65㎝、厚さ9.7㎝、重さ55.5ｇを測る。S12は不定形になっている。上面だけ使用している。長さ13.35㎝、幅5.1㎝、厚さ4.25㎝、重さ335.0ｇを測る。S13も４面を欠いている。上面だけに磨り面が見られる。残存長7.02㎝、残存幅2.7㎝、厚さ5.08㎝、重さ89.0ｇを測る。S14は細いもので上下を欠いている。３面利用されている。残存長3.2㎝､幅2.55㎝､厚さ1.6㎝、重さ16.4ｇを測る。

第６節　瓦

出土遺物の中の点数では瓦の占める割合は高い。すべて包含層からのもので、隣接する志筑廃寺の瓦である。遺構の章で記したように、志筑廃寺廃絶後の水田拡大の際に開削されたものである。今回の調査では志筑廃寺の調査で確認報告されている種類と同じで、新しいタイプはなく新しい確認もない。そのことからも志筑廃寺調査報告書（津名町埋蔵文化財調査報告書第２集『志筑廃寺発掘調査報告書Ⅰ―国庫補助事業志筑廃寺範囲確認調査報告書―』2004　津名町教育委員会）に依拠することとする。

Ｋ１～K25は軒丸瓦である。軒丸瓦は６種類に分類されているが、そのうちの５種類が出土している。Ⅰ類は藤原京式の複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。中房に１＋６の蓮子を配する。中房の文様構成は同じであるが、外区の珠文・鋸歯文の数で細分されている。珠文・鋸歯文の数が28個のものをⅠ-A類、29個のものをⅠ-B類とされている。瓦当の径はA類が大きく、B類が小さい。今回出土資料は破片が多く、全体像は判然としない。面径に差があることから、A・B類の両者が出土していると思われる。

Ⅱ類は重圏文軒丸瓦である。６点（K17～K22）出土している。中央に珠点を置き周縁との間に２条の圏線を有するもので、三重圏文に見えるものである。須恵質のものと焼成の悪い土師質のものがある。

Ⅳ類は16弁蓮華文軒丸瓦である。内区と外区との比高差がないことと中房が平坦であることを特徴とする。K23は磨滅が激しく明確でないが、平坦なことからⅣ類かと推測している。

Ⅴ類は連弁を細い凸線で表現するタイプである。志筑廃寺でも１点しか出土しておらず、弁数など詳細はわからない。今回１点出土しているK24は凸線が細く、周縁との間に装飾がない点は類似している。ただ、外側に珠文がある点は異なっており、確実に同一かは言い難い。

K26は軒平瓦である。報告書の軒平瓦Ⅰ類に分類されている右偏行唐草文軒平瓦である。右

側端部がかろうじて残存しており、脇区に珠文が２個見られる。その内側に圏線を有し、唐草文が表現されている。今回の調査では軒平瓦が１点しか出土していないが、淡路市（津名町）の調査でも３点しか出土しておらず、軒平瓦が少ないのが志筑廃寺の特徴のようである。

K27～K41は丸瓦である。全体像がわかる資料はない。細片が多く磨滅したものが大半である。焼成は良好な高温度で焼かれたものと、悪いものがある。玉縁の有無でⅠ類とⅡ類に分けられているが、玉縁が残っているのはK40だけである。凸面はナデ・ヘラケズリ・縄目の３種あり、後の２種はそのままで未調整のものとナデ調整を加えたものがある。凹面は布目であるが、布目に精粗がある。志筑廃寺の各分類があったと思われ、破片であるがⅠ類が多いと思われる。ただ、K41は凸面に縄目でないタタキも認められ、歪になった平瓦かもしれないが、形状から丸瓦とすれば別タイプになる。K27はⅠ－Ａ４類、K28はⅠ－Ｂ２類、K30はⅠ－Ｆ３類に分類される。

平瓦は最も多く出土している。他の瓦同様に磨滅顕著である。須恵質の焼成良好なものも少なからず含まれる。Ⅰ類は凸面に綾杉状のタタキを施すもので最も量が多い（K42～K87）。タタキの中央に縦軸を有するもので、今回出土品も同様である。タタキの精粗や先が尖っているものなどの変化がある。パターンから６種（A～F）に分類され、今回も出土している。Ⅱ類は凸面ナデもしくは板ナデ調整のもの、Ⅲ類は凸面縄目タタキ、Ⅳ類は凸面格子タタキ、Ⅴ類は凸面平行タタキ、Ⅵ類はタタキをナデ調整ならびに無彫刻板タタキでさらに叩きしめるもの、Ⅶ類は無彫刻板タタキ板によって板ナデを行うもの、Ⅷ類は凸面ケズリにより成形するものである。

表２　横入遺跡出土土器観察表

計測値の（　）は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
1	１区　SD101	土師器 甕	(13.9) 21.9 腹径(19.2)	ヨコナデ、ハケ、ユビ成形のちナデ	長胴の球形で丸底。外反する口縁部で端部丸い	二次焼成
2	２区　SK204	土師器 甕	17.0 15.9 腹径　16.8	ナデ、ハケ、横方向のハケのちナデ	平坦な丸底から内湾する体部で端部丸い	黒斑あり
3	２区　SK205 土器①	土師器 壺	— (5.7) 腹径　8.3	ユビ成形のちナデ、粗い仕上げ	不安定な平底から内湾する	
4	２区　SK205 下底	土師器 壺	— (8.0) 腹径　10.5	ユビ成形のちナデ、粘土紐の継ぎ目見られる	丸底で体部内湾する	余り丁寧な仕上げは施していない
5	２区　SK205 土器②	土師器 高杯	(13.9) (5.4) —	表面内面一部を除いて剥離、残存部はヘラミガキ	内湾する杯部で端部丸い、円板充填で細い筒部になる	円板充填
6	２区　SK205 土器⑤	土師器 甕	11.8 (14.9) 腹径　14.9	ハケ、ナデ	球形の内湾する体部に僅かに外反する口縁部で端部丸い	外面煤付着、内面一部黒斑あり
7	２区　SK205 土器④	土師器 高杯	— (3.5) —	表面剥離、丁寧に仕上げていたか？	平坦な杯部底から外反ぎみの口縁部になる	円板充填
8	２区　SK205 土器③	土師器 高杯	(12.2) (12.2) 10.2	ヘラミガキのちヨコナデ、円形透孔３ヶ所	内湾する杯部で端部丸く尖る、筒部は中実で外反し端部丸い裾部	
9	２区　SK206 土器④	土師器 甕	13.1 (6.7) —	ヨコナデ、ハケ、内面ユビ成形のちヘラケズリのちナデ	内湾する肩部から外反し突帯を作る二重口縁部で端部肥厚	口縁、頸部ともに楕円形
10	２区　SK206 土器①	土師器 壺	(9.8) (6.1) —	ハケ整形のちヨコナデ	外側に直線的に開く口縁部で端部丸い	外面煤付着
11	２区　SK206	土師器 壺	9.5 13.7 腹径　14.7	表面磨滅	扁平な球形で口縁部内湾ぎみで端部外側に尖る	外面一部黒斑
12	２区　SK206 土器③	土師器 高杯	15.4 (9.1) —	表面磨滅、内面絞り目	内湾する口縁部で端部丸く外側に開く、中空の筒部は直線的に開く	二次焼成
13	２区　SK206 土器⑥	土師器 高杯	16.5 (5.2) —	ハケ整形のちナデ	内湾する杯部で端部内側に傾く	
14	２区　SK224	土師器 甕	— (4.5) —	表面磨滅	外側に直線的に開く口縁部で端部肥厚し角張る	縄文土器の可能性あり
15	２区　SD201-2	弥生土器 壺	(23.5) (4.9) —	表面磨滅	外反する口縁部で端部丸い	外面黒斑あり
16	２区　SD201-2	弥生土器 壺	— (3.4) (8.0)	ナデ？	不安定な平底から外傾する体部	
17	２区　SD201-2	土師器 堝	(15.6) 3.0 —	ヨコナデ	内傾する口縁部で端部角張る、外面に突帯	
18	２区　SD208-5	弥生土器 底部	— (3.4) (8.6)	表面磨滅	平底から外反する体部	
19	２区　SD219-1・2	土師器 甕	(15.6) (2.8) —	表面磨滅	外反する口縁部で端部丸く肥厚する	
20	２区　下層 弥生前期旧河道	弥生土器 壺	— (2.7) 腹径(25.6)	段、ハケ	内湾する	二次焼成

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
21	２区　下層 旧河道杭列⑧	弥生土器 広口壺	— (6.6) 腹径(22.6)	段	緩やかに外反する肩部	
22	２区　下層 弥生前期旧河道	弥生土器 壺	— (6.5) 腹径(26.0)	沈線、ヘラ描き木葉文、ミガキか？、板ナデ	内湾する体部	
23	２区　下層 旧河道	弥生土器 広口壺	— (3.6) —	ヨコナデorミガキ、貼付凸帯	外反する頸部	丁寧な仕上げ内面磨いている
24	２区　砂層 旧河道	弥生土器 甕(底部)	— (4.3) (4.9)	タテナデ、ナデ	平底から外傾する体部	底部再成形
25	２区　下層 旧河道	弥生土器 甕(底部)	— (5.1) (6.3)	ハケか？、ナデ	平底から外傾する体部	外面一部黒斑
26	２区　下層 旧河道	弥生土器 壺(底部)	— (8.1) (10.4)	横方向のヘラナデor板ナデ	平底から外傾する体部	二次焼成
27	３区　ＳＤ８-１・２　埋土上部	弥生土器 壺	(13.9) (6.5) —	タテハケのち一部ナデ、ヨコミガキ、ハケ	外反する口縁部で端部角張る	外面一部煤付着
28	３区　SD８-３ 埋土上部	弥生土器 底部	— (4.9) (10.1)	指オサエのち板なでか？、ケズリ？、ナデ	平底から外反ぎみに広がる体部	強く焼けている
29	３区　№２ライン　サブトレ	縄文 口縁	— (2.7) —	沈線	外傾し器肉厚く、端部角張る	二次焼成
30	３区　№３＋７ライン サブトレ	土師器 イイダコ壺	— (6.6) —	ナデ	内湾する	ヘラ記号
31	２区　№４＋３～終点南半　包含層	弥生土器 壺	(27.7) (3.9) —	表面磨滅	外傾し端部上方につまみ上げる	
32	３区　№０～№２北部　精査時	土師器 甕(口縁)	— (2.6) —	刻み目、沈線(２条)、ナデ	緩やかに外反する口縁部で端部丸い	
33	３区　№４＋７ 包含層	弥生土器 甕	— (5.4) —	刻み目、沈線(３条)、タテハケのちヨコナデ、板ナデ？	僅かに内湾する体部から短く外傾する口縁部で端部丸い	外面煤付着
34	２区　№３＋３～４＋３南半　包含層	弥生土器 壺	— (2.1) —	ヨコナデ	外反する頸部から上方につまみ上げる口縁部で端部丸い	
35	２区　№２＋３～３＋３南半　包含層	弥生土器 壺	— (3.1) —	ナデ	外傾する口縁部で端部内外に肥厚する	二次焼成
36	３区　№０～２北部　黄灰色砂質シルト	弥生土器 壺(口縁)	(20.6) (1.7) —	凹線(２条)	水平に開く口縁端部で下方に延びる	
37	２区　№２＋３～３＋３北半　包含層	土師器 壺	— (2.3) —	ヨコナデ	外反する頸部から上方につまみ上げる口縁部で端部丸い	
38	２区　№３＋８付近　11･C層	弥生土器 壺(底部)	— (3.3) (8.9)	ハケ整形のちユビのちナデ、内面ハケ整形	平底から僅かに外反する体部	底部再成形
39	２区　№２＋３～３＋３北半　包含層	土師器 底部	— (1.9) 4.6	表面磨滅	平底から内湾ぎみに広がる	
40	２区　№３＋３～４＋３南半　包含層	土師器 高杯	— (7.0) —	表面剥離、絞り目	緩やかに広がる	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
41	3区　№4＋7～5＋7　褐灰色～黒褐色砂質シルト	須恵器 杯身	(11.1) (3.0) (9.9)	ロクロナデ、仕上ナデ	平底から外傾し端部内側に薄くつまみ上げる	自然釉
42	3区　№3＋7～5＋7北部 黒褐色砂質シルト	須恵器 杯身	(10.8) (2.1) —	ロクロナデ	外傾する体部から内側に短く立ち上がる端部、受部も短く外反する	
43	2区　№0～1南半　包含層	須恵器 壺	— (5.6) 腹径(18.0)	沈線(2条)、刺突文、ロクロナデ	内湾する	
44	2区　№2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 瓶(頸部)	— (3.4) —	波状文、突帯、ヨコナデ	僅かに外反する	
45	2区　№2付近精査面	須恵器 壺(口縁)	(33.8) (4.8) —	沈線(2条)、波状文(6条)2帯、ロクロナデ	外反ぎみで端部肥厚ぎみに角張る	
46	3区　№2～3＋7　黄褐色～黒褐色砂質シルト上部	須恵器 口縁	— (4.2) —	波状文(4条)、波状文(6条)、ロクロナデ	外傾する口縁部で端部上方に角張る	
47	3区　№3～4＋7調査区北壁側溝	須恵器 壺(口縁)	— (4.7) —	沈線(2条)、刺突文、ロクロナデ	外傾し端部肥厚し上端とがる	内外面自然釉
48	3区　№5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	須恵器 口縁	— (6.5) —	沈線(2条)、ロクロナデ	外反ぎみで端部上方と外側に肥厚する	
49	2区　№2～3間北半　包含層	須恵器 甕(口縁)	— (4.7) —	沈線(1条)、波状文(6条)、ロクロナデ	外反し端部肥厚し角張る	
50	3区　№2～4＋7　黄灰色砂質シルト	須恵器 高杯	— (6.0) —	沈線(1条)、ナデ	緩やかな杯底部、筒部は外反ぎみに広がる	
51	2区　№3＋3～4＋3南半　包含層	須恵器 蓋	— (2.5) —	ロクロケズリ、ロクロナデ	内湾する天井部に宝珠つまみ付く	
52	3区　№3～4＋7　機械掘削	須恵器 蓋	(12.6) 2.0 —	ヘラケズリ、ロクロナデ	平坦な天井部から屈曲して端部肥厚する、小さめの宝珠つまみ	
53	3区　№5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器 蓋	(15.6) 3.4 —	ロクロケズリ、ロクロナデ	平坦から内湾し端部下方に肥厚する、扁平な宝珠つまみ	転用硯？
54	2区　№1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 蓋	(15.4) (1.7) —	ロクロケズリのちナデ、ロクロナデ	外に開き端部近くで屈曲し端部丸い	
55	2区　№1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 蓋	(12.8) (1.6) —	回転ヘラ切り、ヘラナデ、ロクロナデ	天井部平坦、外に開き端部近くで屈曲し端部丸い	
56	2区　№0～1北半　包含層	須恵器 蓋	(14.9) (2.6) —	回転ヘラ切り、ロクロナデ、仕上ナデ	内湾する天井部に短く外反し端部内側につまみ出す	
57	2区　№1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 蓋	(15.7) (3.2) —	回転ヘラ切り、ロクロケズリ、仕上ナデ	内湾する天井部に短く外反し端部下方につまみ出す	
58	2区　№2＋3～3＋3南半　包含層	須恵器 蓋	(16.4) (2.1) —	ロクロナデ	僅かに屈曲しながら広がり端部丸くなる	歪んでいる為高くなっている可能性あり
59	3区　№4＋7～5＋7　褐灰色～黒褐色砂質シルト	須恵器 蓋	(12.8) (1.7) —	ヘラケズリ、ロクロナデ	天井部平坦で外傾ぎみに延び端部下方に大きくつまみ出す	自然釉
60	2区　№2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 蓋	(13.8) (2.3) —	ケズリ、ロクロナデ	屈曲する体部から内外に肥厚する端部	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
61	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器蓋	— (1.6) —	ロクロケズリ、ロクロナデのちナデ	内湾する天井部にボタン状のつまみ付く	
62	3区　機械掘削	須恵器蓋	— (2.0) —	ヘラケズリ？	内湾する天井部にボタン状のつまみ付く	
63	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器蓋	(13.2) (2.2) —	ヘラケズリ、ロクロナデ	浅く内湾する天井部から下方に尖る端部、ボタン状の扁平なつまみ	自然釉
64	2区　No.2～3南半　包含層	須恵器蓋	(13.3) (1.9) —	ロクロナデ	内湾する天井部から屈曲し下方に端部つまみ出す	
65	2区　No.0～3	須恵器蓋	(14.8) (0.9) —	回転ヘラ切りのちナデ、ロクロナデ	器高の低い扁平な器形、平坦な天井部から屈曲して丸い端部になる	
66	3区　No.3＋7～5＋7南部　褐灰色砂質シルト	須恵器蓋	(16.4) (1.3) —	ヘラケズリ、ロクロナデ	平坦な天井部から緩やかに外反して下方につまみ出す端部	
67	2区　北壁	須恵器蓋	(13.9) (2.1) —	回転ヘラ切り、ロクロナデ	内湾する天井部から屈曲し下方に端部つまみ出す	
68	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器蓋	(14.0) (1.8) —	ロクロケズリ、ロクロナデ	内湾する天井部から短く屈曲し下方に端部つまみ出す	
69	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器蓋	— (1.5) —	ロクロナデ	内湾する天井部に丸い扁平なつまみ	
70	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器蓋	(16.7) (2.5) —	ヘラケズリ、ロクロナデ、仕上ナデ	平坦な天井部から外傾する口縁部になり端部角張る、扁平なつまみ	
71	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器蓋	(15.5) (1.3) —	ヘラケズリ、ロクロナデ	平坦な天井部から緩やかに外傾し端部肥厚する	
72	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器蓋	— (0.8) —	ヘラケズリ、ロクロナデのち仕上ナデ	内湾する	墨書「十」
73	2区　No.3～3＋8　側溝掘削	須恵器杯	(14.7) (3.0) —	ロクロナデ	緩やかに屈曲し外反する、端部尖りぎみ	
74	3区　機械掘削	須恵器杯	(13.6) (2.4) —	ロクロナデ	外傾し端部近くで反る	
75	3区　No.2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器杯	(11.7) (3.4) —	ロクロナデ	外傾しやや屈曲し端部反る	
76	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器杯	(9.7) (2.9) (7.1)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平底から外傾し端部丸い	
77	2区　No.2～3間北半　面精査	須恵器杯	(18.8) (3.4) —	ロクロナデ	外傾し端部尖りぎみ	
78	3区　No.3＋7～5＋7北部　黒褐色砂質シルト	須恵器杯	— (1.7) 7.8	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	平底から内湾する体部	底部置き台痕？
79	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器底部	— (1.8) (8.2)	ロクロナデ、ヘラ切り	不安定な平底から内湾する体部	
80	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器底部	— (2.8) (7.2)	ロクロナデ	不安定な平底から内湾する体部	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
81	2区　№3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 底部	— (1.4) (8.6)	ロクロナデ	突出した平底から外傾する体部	
82	2区　№0～1南半　包含層	須恵器 杯	— (2.5) (9.6)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平底から内湾する体部	ほぼ端部か
83	3区　№5＋7～7＋7南部　暗褐色砂質シルト	須恵器 杯	— (2.0) 6.3	ロクロナデ、ヘラケズリ、回転ヘラ切り	不安定な平底から内湾する体部	ヘラ記号
84	2区　№3～3＋8　機械掘削	須恵器 杯	— (3.1) (11.6)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平坦な底部から内湾する体部、外側に僅かに開く高台	
85	2区　№3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 杯	— (2.2) (7.8)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平坦な底部から外傾する体部、断面台形の高台	火襷あり
86	3区　№2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (2.0) 7.2	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	内湾ぎみの底部から内湾する体部、断面台形の高台が付く	
87	3区　№2ライン　サブトレ	須恵器 杯	— (4.0) (9.9)	ロクロナデ、ナデ	平坦な底部から内湾する体部、内側に僅かに傾く高台	
88	2区　№3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 杯	— (2.6) (9.3)	ロクロナデ、仕上ナデ、回転ヘラ切り	平坦な底部から外傾する体部、断面台形の高台	爪形圧痕？
89	3区　№2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (3.1) (7.0)	ロクロナデ、ナデ	平坦な底部から内湾する体部、断面三角形の細長い高台	
90	3区　№3～4＋7　調査区北壁側溝	須恵器 杯B	(13.8) 4.0 (9.9)	ロクロナデ	平坦な底部から外傾する体部、断面方形の高台で端部肥厚	
91	3区　№2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 杯	(12.8) 3.7 (10.0)	ロクロナデ	内湾ぎみの底部から内湾する体部で端部近くで外反、断面台形の高台	
92	3区　№2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト(下部)	須恵器 椀	(13.8) (5.3) —	ロクロナデ	内湾ぎみの底部から内湾し外側に甘い稜線を有して外反する、高台端部欠	
93	3区　№3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器 杯	— (1.8) (11.6)	ロクロナデ、ヘラケズリ	平坦な底部から内湾する体部、断面台形の高台	
94	3区　№6＋7～8　機械掘削	須恵器 杯	— (2.0) (9.1)	ロクロナデ、ナデ	内湾ぎみの底部から内湾する体部、外側に開く高台	断面(割れ面)に有機質付く
95	3区　№0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (3.2) (7.8)	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	平坦な底部から外傾する体部、断面台形の高台	
96	2区　№4＋3～終点北半　包含層	須恵器 杯	— (2.8) (14.2)	ロクロナデ、仕上ナデ、回転ヘラ切り	内湾ぎみの底部から内湾する体部、外側に開く高台	
97	3区　№0～2黄灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (2.6) (13.1)	ロクロナデ、ヘラケズリ	平坦な底部から内湾する体部、僅かに開く断面台形の高台	ヘラ記号の可能性あり
98	2区　№1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 杯	— (2.8) (9.8)	ロクロナデ、ナデ	内湾する底部から外傾する体部、高台外側に開き尖らす	
99	3区　№2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (2.7) (6.4)	ロクロナデ、ヘラ切り未調整	平坦な底部から内湾する体部、高台外側に開き尖らす	底部置き台痕？
100	3区　№3＋7ライン　サブトレ	須恵器 杯	— (1.5) 6.6	高台貼り付けナデ	内湾する底部で高台外側に開く逆台形	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
101	2区　№0～1 北半	須恵器 杯	— (2.9) (8.2)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	内湾する底部から内湾する体部に、外側に開く高台	
102	2区　№4＋3～ 終点北半　包含層	須恵器 杯	— (3.8) (7.5)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平底から内湾する体部、高台幅細く長く端部丸い	重ね焼き痕跡別個体破片付着、火襷
103	2区　№3＋3～ 4＋3北半　包含層	須恵器 杯	(16.3) 3.8 (11.4)	ロクロナデ	平底から外傾する体部、端部反って丸い、高台外側に開く	
104	3区　№5＋7～ 6＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器 杯	(14.6) 4.2 (11.0)	ロクロナデ	内湾する底部から外傾する体部で端部丸い、高台低く外側に開き尖らす	
105	3区　№2～3＋ 7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (3.7) (9.0)	ロクロナデ	平底から内湾ぎみの体部で端部尖る、高台踏ん張りぎみに開く	ほとんど端部か
106	2区　№4＋3～ 終点北半　包含層	須恵器 杯B	— (2.6) (8.8)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平坦な底部から外傾する体部、高台外側につまみ出す逆台形	
107	2区　№3＋3～ 4＋3北半　包含層	須恵器 杯	— (2.0) 7.2	ロクロナデ	平底から外傾する体部、高台外側に開く	自然釉付着
108	3区　№0～2 黄灰色砂質シルト	須恵器 杯	— (2.4) (5.7)	ロクロナデ	平底から内湾する体部で高台細長く外側に開き端部内外に肥厚	全体的に(特に高台)紫がかる被熱？
109	2区　№2＋3～ 3＋3北半　包含層	須恵器 杯	— (2.3) (5.2)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	内湾する底部から体部で高台断面逆台形	
110	2区　№0～1北 半　包含層	須恵器 壺　底部	— (3.4) (7.6)	ロクロナデ、ナデ	器壁の厚い平底から内湾する体部、高台は外側に開く	平瓶の可能性あり
111	2区　№2～3間 包含層	須恵器 杯	— (2.6) (7.8)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	内湾する底部から体部、高台細く長い方形で外に開く	
112	2区　№4＋3～ 終点北半　包含層	須恵器 杯	— (2.2) (9.3)	ロクロナデ、回転ヘラ切り、高台貼り付けナデ	平底から内湾する体部で高台外側に開き端部角張る	
113	2区　№3＋3～ 4＋3北半　包含層	須恵器 杯	— (2.6) (9.4)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	内湾する底部から体部、高台端部丸く細長い	
114	3区　№0～2 北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 皿	(13.8) (2.6) (8.0)	ロクロナデ、ヘラケズリ	平底から外傾する体部で口縁部は面を持ち端部丸い	
115	2区　№2～3南 半　包含層	須恵器 皿	(16.2) (2.1)	ロクロナデ、ナデ	不安定な平底から短く外傾する体部で端部丸い	
116	3区　№2～3＋ 7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 皿	(14.8) 2.7 (13.1)	表面磨滅	平坦な底部から外傾する口縁部で端部尖る、高台断面逆台形だが端部丸い	
117	3区　№3＋7～ 5＋7北部　褐灰色～黒褐色シルト	須恵器 皿	(12.9) 1.7 (6.3)	ロクロナデ	浅く内湾する底部から口縁部で端部外側につまみ出す、高台断面方形	外面に火襷
118	2区　№1＋3～ 2＋3北半　包含層	須恵器 皿	(12.9) 2.9 (7.2)	ロクロナデ、回転ヘラ切り	平底から外傾する体部で端部外側に反る、高台外側につまむ方形	
119	2区　№3＋3～ 4＋3北半　包含層	須恵器 皿？	(13.3) (1.8) —	ロクロナデ	内湾する体部で屈曲して大きく外反する口縁部になり端部丸い	
120	2区　北壁	須恵器 盤	— (3.5) (30.0)	ロクロナデ、ナデ、ユビオサエ	平坦な底部、内外に踏ん張る方形の高台	外面剥離痕あり何か付くか

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
121	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 蓋	(14.2) (2.3) —	ロクロケズリ、ロクロナデ	平坦な天井部から直線的に垂下する口縁部で端部尖る	
122	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 壺	(8.6) (2.1) —	ロクロナデ	内傾する肩部から短く外傾する口縁部で端部角張る	
123	2区　No.3＋8～機械掘削	須恵器 壺	(9.4) (3.6) —	ロクロナデ	内湾する肩部から短く直立し外反ぎみに丸い端部	自然釉、重ね焼き痕
124	2区　No.3～3＋8　側溝掘削	須恵器 壺	(5.8) (3.5) —	ロクロナデ、沈線(1条)	内湾する肩部から外反する丸い端部	自然釉
125	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	須恵器 壺	(9.9) (2.5) —	ロクロナデ	外反する口縁部で端部上方につまみ上げる	
126	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 壺	(15.4) (3.3) —	ロクロナデ	外反する口縁部で端部外側につまみ上げる	
127	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 壺	(11.2) (7.8) —	ロクロナデ、ナデ	内傾する肩部からやや反りぎみに外傾する口縁部で端部角張る	自然釉
128	3区　No.0～2　黄灰色砂質シルト	須恵器 壺	— (2.4) —	ナデ	角のある半月状の耳部分、穿孔あり	
129	3区　No.2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 壺	— (4.1) —	ロクロナデ	角のある半月状の耳部分、穿孔あり	
130	2区　No.0～1＋3北半　包含層	須恵器 長頸壺	— (4.4) 腹径(16.6)	ロクロナデ、沈線(1条)	内径する肩部で体部への稜線明瞭	
131	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 甕(口縁)	(26.0) (2.6) —	ロクロナデ	外反し端部付近で直立ぎみになり端部角張る	
132	4区　北側側溝	須恵器 甕(口縁)	(27.6) (2.5) —	ロクロナデ、浅い凹線(2条)	内湾し端部大きく肥厚する	
133	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 甕(口縁)	(24.4) (4.1) —		内傾する体部から外傾する口縁部で端部内側に大きく延ばす	磨滅
134	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 壺	— (8.2) —	格子タタキ、ロクロナデ	内湾する	
135	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 壺	(20.9) (3.1) —	ロクロナデ	内湾する二重口縁で外傾から水平に延び端部上方につまみ上げる	
136	3区　No.3～4＋7　機械掘削	須恵器 甕(口縁)	— (5.8) —	ロクロナデ、凹線(1条)	外反する口縁部で端部付近で内傾し丸く納める	ほぼ端部
137	2区　No.2＋3～3＋3南半　包含層	須恵器 甕(口縁)	(28.6) (4.6) —	ロクロナデ	外傾する口縁部で端部角張り内外に肥厚	
138	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 甕(口縁)	(27.6) (4.6) —	ロクロナデ	外反し口縁端部外側につまみ出す	
139	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 甕(口縁)	(19.0) (3.0) —	ロクロナデ、ナデ	外反し端部角張る	
140	3区　No.4＋7～5＋7北部　褐灰色～黒褐色シルト	須恵器 甕(口縁)	(18.1) (5.0) —	ロクロナデ、タタキのちナデ、ハケ	外反する口縁部で端部付近で外傾し外側につまみ出す	自然釉

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
141	3区　No.3＋7～5＋7南部　褐灰色砂質シルト	須恵器 甕(口縁)	— (1.9) —	ロクロナデ	外反し端部角張る	
142	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	無釉陶器 甕(口縁)	— (8.4) —	ロクロナデ、指頭圧痕、ナデ	外反ぎみの体部から短く外反し端部内外に肥厚する	自然釉　丹波？
143	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 壺(口縁)	— (3.9) —	ロクロナデ	外反し端部付近立ち上がり肥厚ぎみに角張る	
144	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 甕(口縁)	— (5.2) —	ロクロナデ	外反し端部外側につまみ出す	
145	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 長頸壺	(4.5) (8.2) —	ロクロナデ	直立する細長い頸部で口縁部外側に開く	自然釉
146	3区　No.3＋7～5＋7北部　褐灰色～黒褐色シルト	須恵器 鉄鉢	(19.9) (4.8) —	ロクロナデ	内湾する口縁部で端部角張る	
147	3区　No.2～3＋7北部　黄灰色～黒褐色シルト	須恵器 底部	— (7.2) (11.3)	ロクロナデのちナデ、ヘラ切りのちナデ	平底から外傾する体部	
148	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 底部	— (3.6) (10.8)	ロクロナデ、ヘラ切り	平底から内湾ぎみの体部	
149	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	須恵器 壺(底部)	— (5.5) (10.4)	ロクロナデ	内湾する底部から体部、高台は端部が内外に肥厚する断面方形で開く	
150	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 壺(底部)	— (4.3) (10.0)	ロクロナデ、ナデ	断面逆台形の高台、内湾する底部から外傾する体部	
151	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器 壺(底部)	— (5.1) (11.2)	ロクロナデ、高台整形の痕跡	平底から内湾ぎみの体部で外側に開く高台で端部は肥厚	自然釉
152	4区　北側側溝	須恵器 壺(底部)	— (3.4) (10.2)	ロクロナデ、ロクロケズリ、高台貼り付けナデ	平底から外傾する体部、高台は方形で外につまむ	
153	3区　No.2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 底部	— (2.4) (12.1)	ロクロナデ、ヘラケズリ	内湾する底部から体部、高台は細長い方形で外に開く	
154	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	須恵器 脚部	— (3.9) (8.9)	ロクロナデ	外反する裾部で端部大きく垂下し尖る	自然釉
155	3区　No.2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	須恵器 脚部	— (3.6) (8.0)	ロクロナデ	外反する裾部で端部内外に肥厚する	壺口縁部の可能性あり
156	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	須恵器 甕(底部)	— (11.9) (16.0)	ロクロナデのちナデ、ヘラケズリ	上げ底から内湾する体部	自然釉
157	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	須恵器 壺(底部)	— (11.9) (10.0)	ロクロナデ	平底から内湾する体部、外側に開く断面方形の高台	自然釉
158	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 底部	— (2.7) (16.0)	ロクロナデ、ナデ	外傾する裾部で端部上方につまみあげる	
159	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 甕	— (4.3) —	タタキ	内湾する	
160	2区　No.1～3機械掘削	土師器 蓋	— (1.3) —	表面磨滅	平坦な天井部、ボタン状のつまみ付く	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
161	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	土師器 小皿	— (2.0) (6.9)	ナデ	上げ底ぎみから内湾する体部	ほとんど端部？
162	3区　No.3～4＋7　調査区北壁側溝	土師器 底部	— (1.3) 5.1	表面磨滅	平底のベタ高台	
163	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	土師器 杯(底部)	— (0.8) (6.8)	ヨコナデ、ヘラ切り	平底から外傾する体部になる	墨書
164	2区　No.1～3 機械掘削	土師器 杯	(15.8) (2.1) —	表面磨滅	外傾する口縁部で端部尖る	
165	2区　北壁	土師器 杯	(13.8) 2.6 (9.7)	ロクロナデ	平底から外傾する体部で端部反りぎみに丸い	回転台土師器
166	3区　No.0～2 黄灰色砂質シルト	土師器 底部	— (1.5) (7.4)	表面磨滅	平底にU字形の高台	
167	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	土師器 底部	— (2.0) 9.1	ナデ、高台貼り付けナデ	平底から外傾する体部、内傾する高台	
168	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 皿	(15.6) (2.0) —	ヨコナデ、ユビオサエ	内湾し端部丸い	黒斑あり
169	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 鉢	(10.4) (4.4) —	表面磨滅	内湾する体部から口縁部で端部尖る	強く焼ける
170	3区　No.3～4＋7　機械掘削	黒色土器 底部	— (2.6) (9.4)	表面磨滅	内湾する底部、端部丸く高い高台	
171	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト	弥生土器 脚台部	— (3.7) 10.8	表面磨滅	平底に外反する脚台付く、端部丸く反る	黒斑
172	3区　No.3～4＋7　調査区北壁側溝	土師器 耳皿	(4.3) 2.7 4.9	回転ナデ、仕上ナデ、糸切り	平底で内湾する体部から口縁部になり端部丸い	
173	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	土師器 高杯	— (3.7) —	ハケ	外反する筒部、杯部底は内湾	二次焼成
174	2区　No.2＋3～3＋3南半　包含層	土師器 高杯	(7.2) (3.1) —	面取り	緩やかに延びる	
175	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	土師器 甕	(17.6) (2.0) —	表面磨滅	外反し端部丸い	煤付着
176	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 甕	(20.8) (2.7) —	表面磨滅	外反し端部丸い	
177	2区　No.2-3間南半　包含層	土師器 甕	(17.5) (3.9) —	ナデ、ユビオサエ、ハケ	内湾する体部から甘い頸部となった外傾する口縁部	
178	3区　No.0～2北部　精査時	土師器 甕	(20.7) (2.6) —	表面磨滅	外反し端部丸い	煤付着
179	3区　No.3＋7～5＋7南部　褐灰色砂質シルト	土師器 甕	(19.7) (5.5) —	表面磨滅	内湾する体部から外傾する口縁部に端部丸い	搬入土器
180	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	土師器 甕	(16.5) (7.4) —	ヨコナデ、ハケ	内湾する体部、頸部甘く短く外反する口縁部	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
181	3区　No.3～4＋7　調査区北壁側溝	土師器 甕	(16.8) (5.1) —	ナデ、板ナデ？	外反する口縁部で端部薄く尖る	器表大きく剥離、製塩土器？
182	3区　No.3～4＋7　機械掘削	土師器 甕	(17.0) (6.2) —	ヨコナデ、ハケ、ユビオサエ	内傾する体部から外傾する口縁部、端部上につまみ上げる	
183	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	土師器 甕	(29.5) (3.3) —	ヨコナデ、ハケか？	直立ぎみの体部から外傾する口縁部、端部角張る	
184	3区　No.3＋7～5＋7　褐灰色～黒褐色シルト	土師器 甕	(28.6) (7.3) —	ヨコナデ、ハケ	内傾する体部から緩やかに外傾する口縁部、端部角張り内側に肥厚	煤付着
185	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 甕	(32.4) (6.8) —	ヨコナデ、ハケ？	内傾する体部から外反する口縁部、端部角張る	外面有機質付着
186	3区　No.2～3＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 甕	(25.8) (8.4) —	ハケ	内傾する体部から外反する口縁部、端部丸い	強く被熱、製塩土器
187	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 甕	(29.2) (8.1) —	表面磨滅	直立ぎみの体部から外傾する口縁部、端部丸い	二次焼成
188	3区　No.3＋7～5＋7南部　黒褐色～褐灰色シルト	土師器 甕	(21.4) (12.9) —	内面ハケの可能性あり、痕跡残る	内湾ぎみの体部から外反する口縁部で端部丸い	強く被熱、煤付着
189	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	土師器 甕	— (5.4) —	表面磨滅	内傾する体部から外反する口縁部、端部丸い	二次焼成
190	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト(下部)	土師器 鉢	(45.2) (6.5) —	ユビオサエのちハケ、ヨコナデ	内湾する体部から緩やかに外反する口縁部、端部角張る	内外面煤付着
191	2区　No.2-3間南半　包含層	土師器 把手	長　(4.1) 巾　(5.2) 厚　(2.1)	ユビオサエ、ナデ	手捏ねで外反する	
192	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	土師器 把手	長　(4.8) 巾　(5.3) 厚　(6.2)	ユビオサエ、ナデ	上方に外反する	先端だけ赤変している、河内搬入品
193	3区　No.5＋7～6＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 把手	長　(7.1) 巾　(7.0) 厚　(2.9)	ユビオサエ、ナデ	短い把手	
194	3区　No.2～3＋7北部　黄褐色～黒褐色シルト	土師器 甑(底部)	— (4.0) —	表面磨滅	外傾する	
195	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色～褐灰色砂質シルト	土師器 甑(底部)	— (4.0) (14.8)	ヘラケズリ	内湾する	
196	3区　No.2～4＋7　黄灰色砂質シルト	土師器 製塩土器	— (6.1) —	表面磨滅	外傾し端部角張る	
197	3区　No.0～2北部　黒褐砂～砂質シルト	土師器 製塩土器	— (1.4) (6.9)	表面磨滅、内面ナデ？	外傾し端部尖る	
198	3区　No.2～3＋7北部　黄灰色～黒褐色砂質シルト	土師器 小皿	(5.9) (1.1) —	表面磨滅	内湾し端部丸い	
199	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	土師器 小皿	(8.8) 1.5 —	手捏ね	平底から短く外傾する口縁部で端部丸い	
200	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	土師器 小皿	(9.3) 1.1 (6.8)	表面磨滅	平底から外傾する口縁部で端部丸い	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
201	3区　No.0～2南部　黄灰色砂質シルト	土師器 小皿	(7.8) (1.2) (6.7)	表面磨滅	上げ底ぎみの底部から外傾する口縁部、端部丸い	
202	2区　No.4＋3～終点南半　包含層	土師器 小皿	(9.3) 2.0 (6.2)	ヨコナデ、回転糸切り	突出平底から内湾する口縁部、端部丸い	
203	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	土師器 托？	— (3.5) (6.7)	表面磨滅	平底で外反ぎみに延びる	
204	3区　No.0～2南部　黄灰色砂質シルト	土師器 鍋	— (4.2) —	ヨコナデ、ナデ、タタキ	外傾する体部から外面に突帯をもって内傾し端部外側に肥厚する	煤付着
205	3区　No.3＋7～5＋7　黒褐色砂質シルト	土師器 羽釜	— (3.1) —	ヨコナデ、ハケ	内湾する口縁部で端部角張りぎみ、突帯を有する	煤付着
206	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	土師器 鍋	— (3.6) —	ヨコナデ	内傾し端部肥厚ぎみ、突帯	煤付着
207	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	土師器 鍋	— (3.8) —	ヨコナデ、平行タタキ、突帯貼付け	内傾し端部肥厚ぎみ、突帯	煤付着
208	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	土師器 鍋	(19.0) (5.5) —	ヨコナデ、タタキ、ナデ	内湾する肩部から直立する口縁部、端部内外に肥厚	煤付着
209	2区　No.0～1北半　包含層	土師器 鍋	(22.0) (5.3) —	ヨコナデ、タタキ、ユビオサエ、ナデ	内湾する体部から短く外反する口縁部で端部肥厚	
210	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	土師器 鍋	(21.8) (5.2) —	ヨコナデ、平行タタキ、突帯貼付け、ナデ	内湾する口縁部で端部角張る、突帯を有する	煤付着
211	2区　No.2＋3～3＋3南半　包含層	土師器 鍋	(27.7) 3.4 —	ヨコナデ	緩やかに内湾する口縁部で端部肥厚する、突帯有する	黒変
212	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	土師器 鍋(三足器)	— (7.9) —	ナデ、ハケ	断面円形で垂下する	二次焼成
213	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	瓦器 小皿	(7.7) 1.1 —	手捏ね、ナデ	内湾し端部丸い	
214	3区　No.0～2北壁側溝	瓦器 椀(底部)	— (0.8) 4.5	表面磨滅	内湾する底部で断面三角形の低い高台付く	
215	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	瓦器 椀(底部)	— (1.1) (4.8)	ヨコナデ	内湾する底部で断面三角形の低い高台付く	
216	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	瓦器 椀(底部)	— (1.3) (5.2)	表面磨滅	内湾する底部で断面不定形の低い高台付く	
217	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	瓦器 椀(底部)	— (5.9)	ヨコナデ、ナデ	内湾する底部で断面三角形の低い高台付く	
218	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	瓦器 椀(底部)	— (2.2) (5.0)	ナデ？	平底から内湾する体部で低い高台付く	白っぽい、燐化していない
219	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	瓦器 椀(底部)	— (1.7) (5.8)	ナデ	内湾する底部で断面三角形の低い高台付く	
220	2区　No.0～1包含層	瓦器 皿	(13.7) 3.0 (7.4)	ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ、ミガキ？	不安定な平底から外面屈曲しながら外傾し端部丸い	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
221	2区　No.0～1 包含層	瓦器 皿	(11.8) (2.3) —	ヨコナデ、ユビオサエ	外面屈曲しながら外傾し端部丸い	
222	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	瓦器 椀	(13.9) (3.8) —	ヨコナデ、ユビオサエ	内湾し端部尖る	内外面煤付着
223	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	瓦器 椀	(12.8) (3.9) —	ユビオサエのちナデ、ヘラミガキ	内湾し端部丸い	
224	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	瓦器 椀	(10.4) 6.8 (3.6)	ヨコナデ、ユビオサエ	平底から内湾する体部で端部反りぎみ、低い断面三角形の高台付く	
225	3区　No.2～3＋7　黄灰色～褐灰色シルト	瓦器 椀	(12.0) (3.7) —	ユビオサエのちナデ、ヨコミガキ、ヨコナデ	内湾ぎみで端部丸い	
226	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	瓦器 椀	(12.8) (4.6) —	ナデ、ユビオサエ、ミガキ	内湾し端部尖る	
227	3区　No.5＋7～機械掘削	瓦器 椀	(14.8) (3.4) —	表面磨滅	内湾する口縁部で端部丸く反りぎみ	
228	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	瓦器 椀	(15.8) (2.7) —	ユビオサエのちナデ、ミガキ？、ヨコナデ	外傾し端部丸い	内面放射状ミガキあるかも？
229	2区　No.3＋3～4＋3南半　包含層	瓦器 椀	(15.6) (2.6) —	ユビオサエのちナデ、ヨコナデ	内湾ぎみで端部丸い	内外面一部に煤付着
230	2区　No.2＋3～3＋3北半	瓦器 椀	(16.0) (3.6) —	ナデ、ミガキ	内湾し端部丸い	
231	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	瓦器 椀？	— (4.3) (9.0)	ユビオサエのちナデ、ヘラミガキ、ナデ	平底から内湾する体部に端部丸い高台付く	
232	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	瓦器 羽釜	(24.7) (3.9) —	ヨコナデ、ユビオサエ	直立する口縁部で端部角張る、断面方形の鍔が付く	煤付着
233	3区　No.0～2 黄灰色砂質シルト	瓦器 羽釜	— (4.0) —	ナデ	内湾する体部に脚・鍔付く	
234	3区　No.2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	緑釉陶器 底部	— (2.5) (6.9)	ヘラケズリ、ナデ	平底から内湾する体部	削り出し高台、内面にヘラ記号
235	3区　No.0～2南部　黄灰色砂質シルト	青磁 碗	— (4.0) —	蓮弁文	内湾する	
236	2区　No.0～1南半　包含層	青磁 碗	— (2.2) (5.0)	ケズリ、露胎	削る出しの低い逆台形の輪高台から外傾する体部	
237	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	青磁 碗	— (2.0) (5.6)	露胎	平坦な底部、削り出しの断面方形輪高台	
238	1区　包含層	青磁 碗	— (2.6) 5.4	ケズリ、露胎	平坦な底部、削り出しの断面内側に尖らす輪高台	
239	3区　機械掘削	青磁 皿	— (1.2) (5.0)	露胎	平底から内湾する体部	
240	2区　No.2～3南半　包含層	白磁 皿	(10.7) 2.5 (5.8)	回転ナデ、ケズリ、露胎	平底から外反する口縁部で端部丸い	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
241	2区　No.4＋3～終点北半　包含層	白磁 碗	(16.4) (4.0) —	施釉	内湾ぎみの体部で端部肥厚	
242	3区　No.0～2 黄灰色砂質シルト	青磁 碗	— (2.1) (7.4)	露胎	削り出しの低い輪高台で上げ底風になり体部内湾	
243	2区　No.2～3南半　包含層	白磁 碗	— (3.1) (7.0)	ケズリ、露胎	削り出しの低い輪高台で上げ底風になり体部内湾	
244	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	白磁 碗	— (2.5) (7.2)	ケズリ、露胎	削り出し蛇の目高台で外に開く、体部内湾	
245	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 捏鉢	(24.4) (2.9) —	ロクロナデ	外傾し端部肥厚ぎみに角張る	重ね焼きの痕跡
246	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 捏鉢	(26.7) (4.9) —	ロクロナデ	外傾する体部で僅かに開き端部断面三角形に肥厚する	重ね焼きの痕跡
247	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 捏鉢	(26.3) (2.7) —	ロクロナデ	外反ぎみの口縁部で端部内外に肥厚する	重ね焼きの痕跡
248	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 捏鉢	(15.7) (4.0) —	ロクロナデ	外傾し端部内外に肥厚	重ね焼きの痕跡
249	2区　No.1＋3～2＋3北半　包含層	須恵器 捏鉢	(26.0) (4.1) —	ロクロナデ	外反ぎみの口縁部で端部内側につまみ上げ肥厚する	
250	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 捏鉢	(24.5) (3.8) —	ロクロナデ	内湾する口縁部で端部内外に肥厚する	生焼け
251	2区　No.2＋3～北半　包含層	須恵器 捏鉢	(27.2) (4.2) —	ロクロナデ	外傾し端部内外に肥厚する、特に上方に大きく肥厚	重ね焼きの痕跡
252	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 捏鉢	(31.0) (4.7) —	ロクロナデ	外傾し端部内外に肥厚	重ね焼きの痕跡
253	2区　No.1＋3～2＋3南半　包含層	須恵器 捏鉢	(18.6) (3.6) —	ロクロナデ	器壁薄く内湾ぎみで端部上方につまみあげて肥厚する	重ね焼きの痕跡
254	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	須恵器 捏鉢	— (3.2) —	ロクロナデ	外傾し端部上方につまみ上げる	重ね焼きの痕跡
255	2区　No.2～3＋7　機械掘削	須恵器 捏鉢	— (2.8) —	ロクロナデ	外傾し端部上下に肥厚する	
256	2区　No.2＋3～3＋3北半　包含層	須恵器 甕	(18.7) (3.0) —	ロクロナデ、タタキ	短く外反する口縁部で端部内外に肥厚	生焼け
257	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	備前焼 甕	— (5.1) —	ロクロナデ、ナデ	直立ぎみで口縁部折り曲げて成形	自然釉
258	2区　No.2～3南半　包含層	備前焼 擂鉢	(30.0) (4.8) —	ロクロナデ、擂目	僅かに内湾し端部内外に肥厚する	
259	3区　No.0～2北部　黄灰色砂質シルト	備前焼 擂鉢	— (5.9) —	ロクロナデ、沈線？	外傾し端部上方に大きくつまみ上げる	
260	2区　No.3＋3～4＋3北半　包含層	備前焼 擂鉢	— (7.8) —	ロクロナデ、擂目	外傾し端部上方に大きくつまみ上げる	

計測値の(　)は復元径・残存高を表す

番号	出土地・土層	種別・器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	技法　他	形態の特徴	備考
261	3区　№2～3＋7　黄灰色～褐灰色砂質シルト	備前焼 擂鉢	— (6.4) —	ロクロナデ、擂目	内湾ぎみで端部断面三角形に肥厚する	
262	2区　№3～3＋8　機械掘削	備前焼 擂鉢	— (6.1) (14.1)	ナデ、ケズリ、擂目、指頭痕	平底から内湾する体部	
263	3区　機械掘削	無釉陶器 擂鉢	— (4.4) (12.3)	ユビオサエのちナデ、擂目	平底から内湾する体部	
264	3区　№0～2北部　黄灰色砂質シルト	施釉陶器 急須？	長　(5.4) 巾　(4.8) 厚　(5.2)	施釉	ウサギを表現	

第５章　自然科学分析

第１節　横入遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

（１）３区の調査報告１

１．本遺跡の調査区は志筑川によって形成された沖積低地に位置する。これは調査区付近で南西から北東へ延び、調査区が位置するのはその北西端にあたる。調査区の北西には大阪層群からなる丘陵が分布し、それはシルトを挟む砂礫（マサ土）からなる。

２．志筑川沖積低地の周囲には、少なくとも２面の更新世段丘が丘陵の前面に断続的に認められる。調査区の西側にも、比高約３ｍの段丘崖を有する更新世段丘（段丘面には柿の木が植えられている）が小さい面積ながらみられる。調査区の西側に位置する廃寺（の一部）はこの更新世段丘上に立地する。

３．調査区の北および西には、丘陵を刻む谷が存在し、そこから支流性扇状地が発達する。調査区の北に分布する谷と支流性扇状地はともに小規模なもので、支流性扇状地は谷中から東南へ張り出す。調査区の西にみられる谷と支流性扇状地は比較的大規模で、ほぼ南北に延びる谷から南に向かつて支流性扇状地が形成されている。この谷中には、更新世段丘が認められ、それは調査区の西側に分布する更新世段丘に対比される。

４．沖積低地は完新世段丘と現氾濫原に分けられる。完新世段丘は、比高50～60㎝の段丘崖をもち、沖積低地の大部分を占める。段丘面には、条里型土地割（条里地割）が認められる。現氾濫原は志筑川やその支流に沿って細長く延びる。

５．調査区は完新世段丘に位置する。これは調査区で検出された遺物の年代と層位からみて12世紀以降に段丘化したと考えられる。調査区付近は12世紀以前、現氾濫原であり、人間は洪水の及ぶ環境下で活動していたことが知られる。

６．調査区付近の完新世段丘は志筑川沖積低地の自然堤防帯が段丘化したものである。そのため、自然堤防帯で認められる微地形のうち、調査区の北東部は後背湿地に、また中央部～南西部は埋没した微高地上に位置する。微高地は調査区の南西側から北東へ延びる自然堤防と推定され、調査区中央部～南西部はその北端（北西端）付近にみられる。

（２）３区の調査報告２

１．調査区における第１遺構面以浅には、現耕土と床土を除いて11の洪水堆積物が観察される。これらは下位から褐黒～灰黒色のシルト、暗灰褐～褐灰色の砂質シルト～シルト、および灰～黄灰色の砂質シルト～シルトに大きくまとめられる。褐黒～灰黒色のシルトには奈良時代後半の遺物、また暗灰褐～褐灰色の砂質シルト～シルトより上位の堆積物には12世紀以降の遺物が含まれる。

２．褐黒～灰黒色のシルトは、３つに細分される。いずれも、洪水によって微高地の末端およ

びその北東側にみられる後背湿地にもたらされ、その後低湿な環境下で土壌化した堆積物である。これらは、主に調査区中央部～北東部に分布し、奈良時代後半にはその付近が低湿であったと考えられる。

3．調査区南西部の微高地上では、上記の褐黒～灰黒色シルトと同じ層位に褐黒色の砂質シルトが認められる。これはやや高燥な環境下で土壌化したものである。調査区南西部では、褐黒色砂質シルトの下面から弥生時代中期後半の溝が検出されており、微高地はその時期以前に形成されたことが知られる。微高地の形成期以降奈良時代後半まで調査区南西部は比較的高燥であった。

4．暗灰褐～褐灰色の砂質シルト～シルトは、３つに分けられ、調査区のほぼ全域に連続して認められる。これらの堆積によって、調査区南西部の微高地は埋没し、後背湿地が拡大した。同時に調査区中央部～北東部は、わずかに高燥化し、奈良時代後半以前ほど低湿でなくなった。

5．灰～黄灰色の砂質シルト～シルトは、５つに細分され、調査区のほぼ全域にみられる。これらは後背湿地の堆積物で、その堆積によって後背湿地はさらに発達した。

（３）３区の調査報告３

1．本遺跡の調査区では、第２遺構面から第１遺構面までの間に、基本的に青灰～黄灰色を呈する砂、シルト質砂、および砂質シルトの互層と、その上にのる黄灰色のシルトが認められる。

2．互層は、微高地を構成する堆積物であり、調査区中央部～南西部に分布する。これは主に７つの堆積物からなり、とりわけ砂（１つ）とシルト質砂（２つ）が厚く認められる。互層の下部には青灰色のシルトが薄くはさまれ、それには弥生時代前期後半～中期前半の遺物が混入する。微高地はこのころ以降弥生時代中期後半までに形成されたと考えられる。

3．黄灰色のシルトは調査区北東部にみられる。これは、後背湿地堆積物に該当し、微高地の末端からその北東側に広がる後背湿地にかけて分布する。

4．第２遺構面より下位では、主に黒灰色と青灰色のシルトが互層をなし、その間に青灰色のシルト質砂や砂質シルトがはさまれる。こうした堆積物は調査区の全域で観察される。そのうち、最上位の黒灰色シルトは弥生時代前期～中期前半ころの水田土壌にあたる。このシルトは調査区北東部～中央部に認められる。

5．これらは十数度の洪水によってもたらされた後背湿地堆積物に該当する。調査区の全域では、これらの堆積によって後背湿地が発達し、それは縄文時代の後半から弥生時代前期にかけてのことと推定される。

6．黒灰色シルトの多くは、その下位に位置する青灰色シルトの上部が低湿な環境下で土壌化して生成されたものである。ただし、最上位のものを除く黒灰色のシルトには、水田土壌を示す積極的な根拠が認められなかった。

7．第２遺構面より下位では、幅１～２mの小規模な旧河道が２つの層位で２つずつみられる。ひとつは、弥生時代前期～中期前半ころの水田土壌下から切り込むもので、調査区中央部と南西部に分布する。南西部の旧河道は、志筑川の流路跡と考えられ、わずかに曲がって北東へ延びる。他の一つは、それより９つ下位に位置する黒灰色シルトの下面から切り込んでおり、２つとも調査区中央部に存在する。これらは、北西－南東方向へ延びると推定され、調査区北西側の丘陵から流下した流路跡の可能性が高い。

8．調査区中央部では、正断層が観察される。これは弥生時代前期～中期前半ころの水田土壌より９つ下位にみられる黒灰色シルト以深の堆積物を切る。断層の走向は北西－南東で、垂直に近い傾斜で北東側が落ちる。調査区付近では、縄文時代のある時期にこの断層が動き、地震が発生したと考えられる。

第２節　横入遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

１．測定対象試料

横入遺跡は、兵庫県淡路市志筑1060他（北緯34°26′14″、東経134°53′30″）に所在する。測定対象試料は、遺構面下の旧河道埋土と氾濫堆積土より採取された試料４点である（表３）。

２．測定の意義

試料が採取された旧河道や氾濫堆積土からは遺物が出土していないため、年代測定によって時期を明らかにする。

３．化学処理工程

（１）木片、炭化物の化学処理

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表３に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（２）土壌の化学処理

１）メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。

２）酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用い、表３に「HCl」と記載する。

以下、（１）３）以降と同じ。

４．測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5．算出方法

（1）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表3）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6．測定結果

測定結果を表3、4に示す。

試料の^{14}C年代は、4点のうちHY-06とHY-08の2点の値が誤差（±1σ）の範囲で若干重ならない程度のかなり近い値を示し、HY-09もこれらにおおむね近い。これら3点とHY-07の間には明瞭に年代差が認められる。

暦年較正年代（1σ）は、HY-06が縄文時代後期前葉頃、HY-07が古代頃、HY-08が縄文時代後期初頭頃、HY-09が縄文時代中期後葉頃に相当する（小林編2008、佐原2005）。

試料の炭素含有率は、木片HY-06と炭化物HY-07が50％を超える値、土壌HY-08が２％、HY-09が３％で、いずれも特に問題ない値となっている。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51（1）, 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55（4）, 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学　上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver, M. and Polach, H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19（3）, 355-363

表３　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-131130	HY-06	旧河道　埋土	木片	AAA	−25.94±0.39	3,790±30	62.35±0.21
IAAA-131131	HY-07	遺構面下堆積土	炭化物	AAA	−25.47±0.64	1,220±20	85.89±0.26
IAAA-131132	HY-08	遺構面下堆積土　層位：C	土壌	HCl	−24.97±0.63	3,870±30	61.75±0.21
IAAA-131133	HY-09	遺構面下堆積土　層位：G	土壌	HCl	−21.84±0.58	4,110±30	59.93±0.22

［#6000］

表４　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-131130	3,810±30	62.23±0.20	3,794±26	2286calBC - 2247calBC（31.5%） 2235calBC - 2198calBC（28.1%） 2165calBC - 2151calBC（ 8.7%）	2296calBC - 2140calBC（95.4%）
IAAA-131131	1,230±20	85.81±0.23	1,221±24	726calAD - 738calAD（ 8.3%） 768calAD - 779calAD（ 8.8%） 790calAD - 831calAD（29.3%） 837calAD - 867calAD（21.8%）	695calAD - 701calAD（ 1.0%） 710calAD - 745calAD（16.9%） 764calAD - 885calAD（77.6%）
IAAA-131132	3,870±20	61.76±0.19	3,872±26	2453calBC - 2419calBC（18.3%） 2406calBC - 2377calBC（17.0%） 2351calBC - 2295calBC（32.9%）	2464calBC - 2284calBC（93.3%） 2248calBC - 2235calBC（ 2.1%）
IAAA-131133	4,060±30	60.32±0.20	4,112±28	2851calBC - 2813calBC（20.3%） 2742calBC - 2729calBC（ 5.9%） 2695calBC - 2620calBC（40.9%） 2603calBC - 2601calBC（ 1.1%）	2865calBC - 2805calBC（24.6%） 2761calBC - 2576calBC（70.8%）

［参考値］

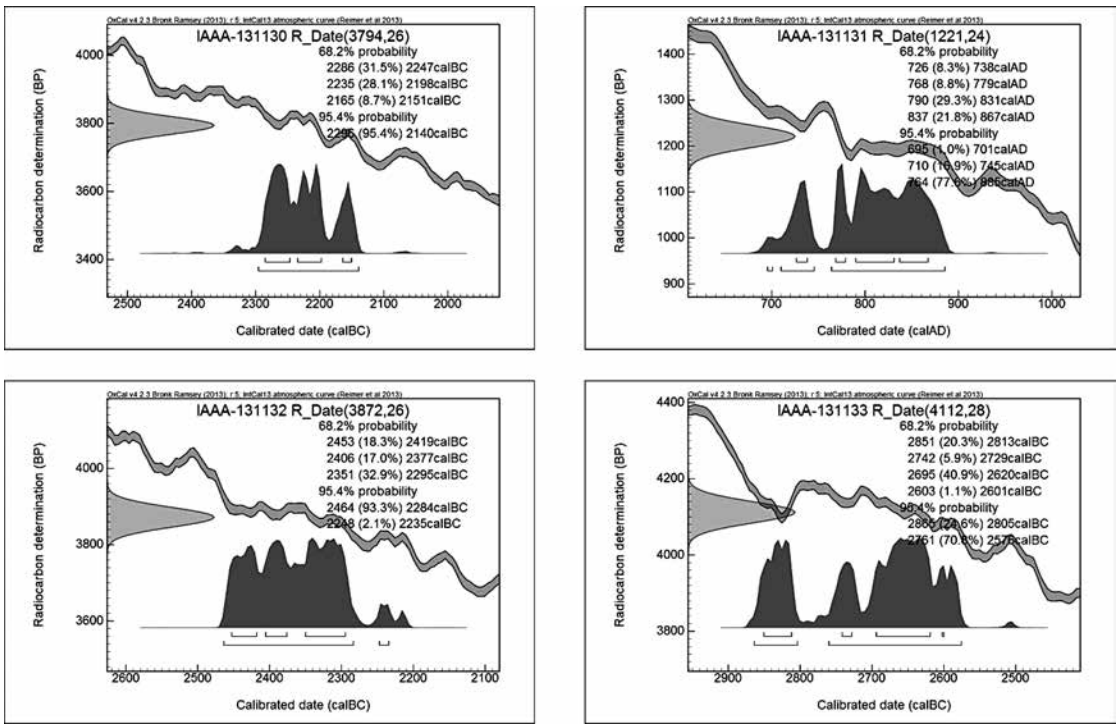


図10　暦年較正年代グラフ（参考）

第３節　横入遺跡のプラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

兵庫県淡路市の横入遺跡で、弥生時代前期～中期前半と考えられる水田跡が検出された。この遺構が水田跡であることを裏付けるため、プラント・オパール分析を行った。以下では、プラント・オパール分析の結果を示し、水田およびイネ科植生について述べた。

２．試料と方法

分析試料は、弥生時代前期～中期前半と考えられている水田跡の水田面(下層)から採取されたオリーブ黒色(５Ｙ２／２)粘土１点である。この試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、写真図版57に載せた。

３．結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（表５)、分布図に示した（図11)。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の５種類の機動細胞珪酸体が確認できた。各分類群の産出量は、イネ機動細胞珪酸体が12,500個、ネザサ節型機動細胞珪酸体が41,500個、ヨシ属機動細胞珪酸体が4,200個、キビ族機動細胞珪酸体が24,900個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が9,700個である。その他に、棒状植物珪酸体が8,300個産出している。

表５　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数

	イネ（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	棒状植物珪酸体（個/ｇ）
水田面(下層)	12,500	41,500	4,200	24,900	9,700	8,300

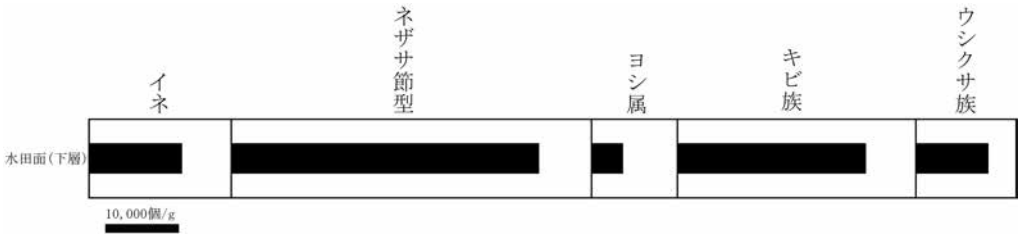


図11　横入遺跡における植物珪酸体分布図

４．考察

検鏡の結果、発掘調査により水田跡と認識された遺構の水田面（下層）から採取された試料で、イネ機動細胞珪酸体の産出が確認された。イネ機動細胞珪酸体については、試料１g当り5,000個以上検出された地点の分布範囲と、実際の発掘調査で検出された水田址の分布がよく対応する結果が得られており（藤原，1984)、試料１ｇ当り5,000個が水田土壌か否かを判断する目安とされている。今回の分析試料から産出するイネ機動細胞珪酸体の量は試料１g当り12,500個で、この目安と比べても十分に多い。よって、プラント・オパール分析からも、今回の横入遺跡の遺構は水田跡であると指摘できる。

その他の分類群では、ヨシ属機動細胞珪酸体の産出が見られる。試料採取地点が水田であれば当然周辺には湿地的環境が広がっていたと考えられ、そうした湿潤な場所にヨシ属が生育していたのであろう。また、ウシクサ族にはオギなどの湿地的環境に生育する種とススキやチガヤなどの乾燥的環境に生育する種の両方が含まれる。水田という湿潤な場所の存在が想定されるため、今回の試料から産出するウシクサ族には、オギなどの湿地的環境に生育する種由来の機動細胞珪酸体が多く含まれていると思われる。さらにキビ族であるが、キビ族にはアワやヒエ、キビといった栽培種やエノコログサやタイヌビエなどの野生種の両方が含まれる。水田跡からの産出であるため、今回の試料から産出したキビ族には稲作にともなう雑草類（タイヌビエなど）由来の機動細胞珪酸体が多く含まれている可能性がある。その他にはネザサ節型機動細胞珪酸体が多く産出しており、水田周辺の開けた場所にケネザサやゴキタケなどのササ類が生育していたと思われる。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．考古学ジャーナル，227，２-７．

第４節　横入遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横入遺跡（兵庫県淡路市志筑所在）は、弥生時代から中世の各時期にわたり、生活・生業・祭祀など土地利用の変遷をたどることができる複合遺跡である。今回の発掘調査では下層の弥生時代前期～中期前半の水田跡の土壌層について花粉分析を実施し、当時の調査区および周辺植生に関する情報を得る。

１．試料

試料は下層にあたる弥生時代前期～中期前半の水田跡の土壌層から採取された堆積物１点である。

２．分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

表６　花粉分析結果

種　　類	下層 水田 土壌
木本花粉	
マキ属	4
モミ属	63
ツガ属	10
トウヒ属	3
マツ属複維管束亜属	30
マツ属（不明）	9
コウヤマキ属	1
スギ属	1
コナラ属アカガシ亜属	1
草本花粉	
タンポポ亜科	4
不明花粉	
不明花粉	1
シダ類胞子	
イノモトソウ属	2
他のシダ類胞子	184
合　計	
木本花粉	122
草本花粉	4
不明花粉	1
シダ類胞子	186
合計（不明を除く）	312

３．結果

結果を表６、図12、写真図版58に示す。分析処理後の抽出残渣量は少なく、全ての残渣を用いてプレパラートを作成し、検鏡を行った。全体の約60％がシダ類胞子、40％が木本花粉で、

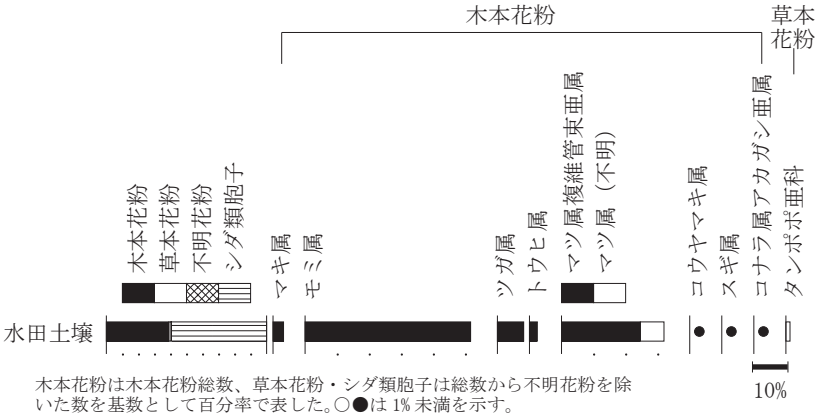


図12　花粉化石群集

草本花粉はほとんどみられない。木本花粉は、モミ属が多く、木本花粉全体の半数を占める。次いでマツ属が40％検出される。その他、ツガ属、マキ属などほとんどが針葉樹である。草本類はタンポポ亜科が少量検出される程度である。

4．考察

今回分析した堆積物試料は花粉化石の含有量が極めて少なかった。正確な容量を測定しているわけではないが、土壌１ccあたりに換算すると５個未満とみられる。これは、湖沼や泥炭地など花粉化石が良好に残存している堆積物の数千分の１程度である。一般に花粉化石は好気的環境下では花粉化石の分解が進むと考えられている（中村1967など）。本遺跡は志筑川と宝珠川に挟まれた低位の台地面に立地している（兵庫県, 1981）ことから、花粉化石の含有量が少ないのはこのような立地環境に起因するもので、好気的環境下での風化の影響と推定される。また、ほとんどがシダ類胞子と針葉樹花粉で占められたが、これは、シダ類胞子や針葉樹花粉が広葉樹花粉や草本花粉の多く種類に比較して、相対的に風化に対する耐性があるためである（徳永・山内, 1971）。

遺跡周辺の潜在自然植生をみると、シイやカシ類など常緑広葉樹を主とする植生景観であるが（宮脇　昭編著, 1984）、今回の花粉分析では、常緑広葉樹のアカガシ亜属が僅かに産出するものの、それ以外の広葉樹は検出されていない。これは、上記したように風化に弱い広葉樹花粉や草本花粉が消失したためとみられる。調査区の立地環境を踏まえると、マツやモミが当時周辺に生育していた可能性は十分考えられるが、消失している花粉化石も多いとみられることから、周辺植生でマツやモミが優勢であったとは考えにくく、他の植物も生育していたと考えられる。なお、イネ属の花粉化石は検出されておらず、稲作の動態を知ることはできなかったが、今後、このような好気的な堆積環境下でも残存しやすい植物珪酸体分析による検証が期待される。

引用文献

Erdtman G., 1952, Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). Almqvist & Wiksells, 539p.

Erdtman G., 1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II), 147p.

Feagri K. and Iversen Johs., 1989, Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.

兵庫県, 1981, 土地分類基本調査　須磨・明石・洲本　5万分の1.65p.

宮脇　昭編著, 1984, 日本植生誌　近畿,至文堂, 596p.

中村　純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.

中村　純, 1980, 日本産花粉の標徴ⅠⅡ(図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12, 13集, 91p.

島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集, 60p.

徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法,共立出版株式会社, 50-73

第５節　横入遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横入遺跡は、隣接する田井A遺跡と共に、志筑川と宝珠川に挟まれた沖積平野に位置し、発掘調査により弥生時代前期の堰跡、弥生時代中期の集落を囲む環濠と考えられる溝、古墳時代中期の祭祀に関する土坑などが検出されている。

本報告では、弥生時代前期の河道に認められ杭列を構成する杭や板材について、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

１．試料

試料は、旧河道の杭列を構成する杭４点（報告№Ｗ１～Ｗ４）と、旧河道から出土した板材１点（実測№Ｗ５）の合計５点である。

２．分析方法

資料の木取りを観察した後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地･伊東（1982)、Wheeler他（1998)、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

３．結果

杭材と板材は、針葉樹のマキ属と広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された（表７、写真図版55・56)。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マキ属（*Podocarpus*）　　マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管内壁にらせん肥厚は認められない。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～２個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

４．考察

弥生時代前期の杭列を構成する杭材は、いずれも芯持丸木が使われている。樹種は、杭列②と杭列④の資料がマキ属、杭列⑥と杭列⑨の資料がクヌギ節であり、２種類の木材が利用されたことが推定される。マキ属は、針葉樹としては重硬・緻密で強度・耐水性が高い。クヌギ節は、重硬で強度が高い。これらの材質から、比較的強度の高い木材を杭材として利用したことが推定される。今後、同定資料を増やし、杭列別の種類構成を比較することで、機能等によって樹種選択が分かれていたのか検討できる可能性がある。

２区下層旧河道から出土した板材は、大部分が樹皮と考えられる。可能な限り木部に近いと思われる部分を採取した結果、かろうじて木部が残っており、クヌギ節であることが明らかになった。状況から、加工の際に一部木部を残しつつ切除された樹皮（残材）等に由来する可能性がある。

表７　横入遺跡の樹種同定結果

通No.	報告No.	実測No.	遺構	器種	木取り	種　類
1	Ｗ３	Ｗ１	旧河道　杭列②	杭	芯持丸木	マキ属
2	Ｗ１	Ｗ２	旧河道　杭列④	杭	芯持丸木	マキ属
3	Ｗ２	Ｗ３	旧河道　杭列⑥	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	Ｗ４	Ｗ４	旧河道　杭列⑨	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
5	－	Ｗ５	２区　下層旧河道	板材	板目（樹皮）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

引用文献

林　昭三, 1991, 日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（編）, 2006, 針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社, 70p.［Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織.地球社, 176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P. E.（編）, 1998, 広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社, 122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

第６節　横入遺跡の種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横入遺跡（兵庫県淡路市志筑所在）は、弥生時代から中世の各時期にわたり、生活・生業・祭祀など土地利用の変遷をたどることができる複合遺跡である。今回の発掘調査では、上層の弥生時代中期後半～鎌倉時代の溝・波板状遺構・土坑・ピットと、下層の弥生時代前期～中期前半の水田跡の、２面の遺構面が検出されている。本分析調査では、下層の旧河道の堆積物を水洗して検出された種実遺体の抽出・同定を実施し、当時の植物利用や植生に関する資料を作成する。

１．試料

試料は、２区の下層旧河道の水洗済種実遺体３点（登録No.2011184-26（図13）、登録No.2011184-27（図14）、登録No.2011184-28（図15））である。各試料札の備考欄には、下層のシルトラミナと記載され、登録No.2011184-26、登録No.2011184-27の２点には、杭列西側とも記載されている。各試料は、水浸の状態でスチロール瓶に入っている。

２．分析方法

試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本および岡本（1973）、石川（1994）、中山ほか（2000）、伊藤（2001）、徳永（2004）等を参考に実施し、部位・状態別に個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで示す。

分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、約70％のエタノール溶液で液浸保存し、返却する。

３．結果

全３試料を通じて、被子植物39分類群（木本のヤマモモ、イヌシデ、イチイガシ、アカガシ－ツクバネガシ－ウラジロガシ、アラカシ、アラカシ－シラカシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブラジイ、シイ属、ムクノキ、ケヤキ、クスノキ、ニッケイ属（クスノキ？）、サカキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、サンショウ属、ムクロジ、クロガネモチ、ヤマブドウ近似種、サンカクヅル－アマヅル、ウドカズラ、イイギリ、クマノミズキ、エゴノキ、ミミズバイ、クサギ、草本のサジオモダカ属、ヒルムシロ属、イネ、ミクリ属、ホタルイ近似種、ホタルイ属、カナムグラ、ヤマアイ近似種、雑草メロン型、ヤブジラミ属、ヤエムグラ属）433個の種実遺体が抽出・同定された（表８）。３個は同定ができなかったが、同一分類群と考えられる２個を不明Aとし、残りの１個を不明Bとしている。

種実遺体の出土個数（不明を除く）は、登録No.2011184-26が15個、登録No.2011184-27が242

表８　種実同定結果

分類群	部位	状態	1段目:遺構名, 2段目:写真No., 3段目:登録No.			備考
			2区 下層旧河道杭列西側		2区 下層旧河道	
			図13	図14	図15	
			2011184－26	2011184－27	2011184－28	
大本						
ヤマモモ	核	完形	1	－	1	
		半分	1	－	－	
イヌシデ	果実	完形	－	1	－	
イチイガシ	幼果	完形	－	4	15	
	殻斗･果実	完形	－	－	1	未熟果
イチイガシ近似種	幼果	完形	－	－	11	
	殻斗･果実	完形	－	－	10	未熟果, １個食痕
	果実	完形	－	－	1	
	果実	破片	－	－	3	頂部
アカガシ－ツクバネガシ－ウラジロガシ	幼果	完形	－	1	－	
アラカシ	幼果	完形	－	1	1	
	果実	破片	－	－	1	頂部
アラカシ－シラカシ	幼果	完形	－	1	－	
アカガシ亜属	幼果	完形	－	17	32	
	殻斗	完形	－	－	21	
	殻斗	破片	－	－	9	
	果実	破片	－	－	2	
コナラ属	果実	破片	－	－	7	４個基部
ツブラジイ	幼果	完形	－	－	2	
	殻斗･果実	完形	－	－	2	
	果実	破片	－	－	3	
シイ属	殻斗	破片	－	－	1	
ムクノキ	核	完形	－	－	1	
	核	破片	－	－	1	
ケヤキ	果実	完形	－	2	－	
クスノキ	種子	完形	－	5	21	６個食痕
	種子	破片	6	2	5	
ニッケイ属(クスノキ？)	幼果	完形	－	2	－	
サカキ	種子	完形	－	8	－	
	種子	破片	－	－	3	
アカメガシワ	種子	完形	－	2	－	１個食痕
カラスザンショウ	種子	完形	－	1	－	
	種子	破片	－	2	－	
サンショウ属	種子	破片	－	1	－	
ムクロジ	幼果	完形	－	－	2	
クロガネモチ	核	完形	－	－	2	
ヤマブドウ近似種	種子	完形	－	1	－	長さ4.25㎜, 幅3.49㎜, 厚さ2.26㎜, 合点やや凹む
サンカクヅル－アマヅル	種子	完形	－	1	－	長さ3.69㎜, 幅3.18㎜, 厚さ2.23㎜, 合点欠損, 基部鋭尖形
ウドカズラ	種子	完形	6	14	－	
イイギリ	種子	完形	－	1	－	
クマノミズキ	核	完形	－	10	1	
	核	破片	1	－	－	
エゴノキ	種子	完形	－	－	1	
	種子	破片	－	－	1	
ミミズバイ	核	完形	－	－	1	頂部欠損
クサギ	核	完形	－	－	1	背面のみ, 腹面欠損
草本						
サジオモダカ属	果実	完形	－	－	1	
ヒルムシロ属	果実	完形	－	2	－	
イネ	胚乳	完形(炭化)	－	2	－	長さ4.46㎜, 幅2.73㎜, 厚さ1.91㎜
						長さ4.16㎜, 幅2.73㎜, 厚さ2.17㎜
ミクリ属	果実	完形	－	140	5	
ホタルイ近似種	果実	完形	－	3	1	
ホタルイ属	果実	完形	－	2	3	
カナムグラ	果実	完形	－	－	1	
	核	完形	－	2	2	
ヤマアイ近似種	種子	完形	－	1	－	
雑草メロン型	種子	完形	－	1	－	長さ4.68㎜, 幅2.25㎜, 厚さ0.99㎜
ヤブジラミ属		完形	－	5	－	
		破片	－	6	－	
ヤエムグラ属	核	完形	－	1	－	長さ3.04㎜, 幅2.38㎜, 厚さ2.02㎜, 孔径1.0㎜
不明A		完形	－	1	－	径3.1㎜
		破片	－	－	1	
不明B		完形	－	－	1	
合計						
木本種実			15	77	163	計255個
草本種実			－	165	13	計178個
不明			－	1	2	計３個
種実合計(不明を除く)			15	242	176	計433個

個、登録No.2011184-28が176個である。栽培種は、登録No.2011184-27より、イネの炭化した胚乳が２個と、雑草メロン型の種子が１個の、計３個が確認された。

栽培種を除いた種実遺体群は、木本29分類群255個、草本10分類群175個から成り、木本主体の種類構成を示す。木本は全て広葉樹で、常緑高木のヤマモモ、イチイガシ、アカガシ－ツクバネガシ－ウラジロガシ、アラカシ、アラカシ－シラカシ、コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイ、シイ属、クスノキ、ニッケイ属（クスノキ？）、サカキ、クロガネモチ、ミミズバイ、落葉高木のイヌシデ、ムクノキ、ケヤキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、ムクロジ、イイギリ、クマノミズキ、落葉小高木のエゴノキ、常緑または落葉低木のサンショウ属、落葉低木のクサギ、落葉籐本のヤマブドウ近似種、サンカクヅル－アマヅル、ウドカズラが確認された。常緑広葉樹が木本全体の80.4％を占め（205個）、イチイガシを主体とするカシ類（イチイガシ、アカガシ－ツクバネガシ－ウラジロガシ、アラカシ、アラカシ－シラカシ、コナラ属アカガシ亜属）が常緑広葉樹の67.3％（138個）を占める。

落葉広葉樹は、ムクノキ、ケヤキ、クマノミズキなどの河畔林要素や、河畔や林縁等の明るく開けた場所に生育する分類群が確認された。

草本は、浮葉植物（根が水底に固着し、水面に浮く葉（浮葉）を展開する植物）のヒルムシロ属、抽水植物（根が水底に固着し、植物体の一部が水面を突き抜けて空気中に出る植物）のミクリ属、ホタルイ近似種を含むホタルイ属、抽水～湿生植物のサジオモダカ属や、湿った場所にもやや乾いた場所にも生育可能な中生植物のカナムグラ、ヤマアイ近似種、ヤブジラミ属、ヤエムグラ属が確認された。ミクリ属が最多（145個）で草本全体の81.5％を占め、登録No.2011184-27では140個が確認された。

種実遺体の保存状態は良好で、栽培種のイネの胚乳は炭化している。各分類群の写真を図13～15に示して同定根拠とし、一部の種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測した結果を表８に示す。以下に、栽培種の種実遺体の形態的特徴等を述べる。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳は黒色で、やや偏平な長楕円体を呈す。出土胚乳２個の計測値は、長さ4.5㎜、幅2.7㎜、厚さ1.9㎜（図版15-33）と、長さ4.2㎜、幅2.7㎜、厚さ2.2㎜（図版15-34）を測る。基部一端に、胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、２～３本の縦隆条があり、果皮や種皮の一部が残る「玄米」の状態である。なお、炭化米の出土部位の厳密な区別は困難であるため、本分析では可食部を「胚乳」としている。

・メロン類（*Cucumis melo* L.）　ウリ科キュウリ属

種子は黄灰褐色、長さ4.7㎜、幅2.3㎜、厚さ1.0㎜の偏平な狭倒皮針形で、藤下（1984）の基準による小粒の「雑草メロン型（長さ6.10㎜未満）」に該当する。基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面には縦長の細胞が密に配列する（図版15-40）。

４．考察

弥生時代前期～中期前半とされる下層の旧河道から出土した種実遺体には、栽培種のイネの胚乳と雑草メロン型の種子が確認された。これらは当時の本遺跡周辺域で利用された植物質食料と示唆される。穀類のイネは、下層より検出された水田跡に由来する可能性がある。胚乳が炭化していることから、火を受け残存したと推定されるが、他の出土種実が炭化していないことを考え合わせると、別の場所で炭化した胚乳が河道内に廃棄砂されたなど何らかの過程を経て混入したと考えられる。

栽培種を除いた種実遺体群は、カシ類をはじめ、シイ類・クス類などの常緑広葉樹を主体とする。木本は全て広葉樹で、常緑のイチイガシが最も多く、果実や幼果、殻斗、葉が確認された。イチイガシ以外のカシ類は、アラカシが少量と、アラカシ－シラカシ、アカガシ－ツクバネガシ－ウラジロガシがわずかに確認された。カシ類以外では、ツブラジイを含むシイ属、クスノキを含むニッケイ属、ヤマモモサカキ、クロガネモチ、ミミズバイなどの常緑高木や、落葉高木で河畔林要素のムクノキ、ケヤキ、クマノミズキ、河畔や林縁等の明るく開けた場所に生育する落葉高木のイヌシデ、アカメガシワ、カラスザンショウ、ムクロジ、イイギリ、落葉小高木のエゴノキ、常緑または落葉低木のサンショウ属、落葉低木のクサギ、落葉籐本のヤマブドウ近似種、サンカクヅル－アマヅル、ウドカズラが確認された。これらは、イチイガシを除いて、現在の本地域にも分布する分類群である。当時の本遺跡周辺域の常緑広葉樹林（照葉樹林）内や、志筑川流域の河畔等に分布する落葉広葉樹林内、その林縁等に生育していたと考えられる。

最も多く確認されたイチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は紀伊半島、四国、九州の山麓地に分布する。イチイガシは現在の本遺跡周辺には分布していないが、淡路島北東部に位置する佃遺跡の縄文時代後期後半の貯蔵穴より、イチイガシを主とするアカガシ亜属が多産し、当時の照葉樹林（シイではなくカシ林）の分布が想定されている（宮路・南木,1998）。今回、本遺跡よりイチイガシの果実や幼果、殻斗、葉が出土したことから、少なくとも弥生時代前期～中期前半までは、本地域にイチイガシが分布していたと考えられる。また、当時の遺跡周辺域には、イチイガシをはじめ、アラカシなどのカシ類やツブラジイなどのシイ類、クス（ノキ）などの照葉樹林が存在したと考えられる。

これらの木本種実のうち、イチイガシは、ツブラジイを含むシイ属とともに、果実内の子葉が生食可能である。他のカシ類は、水にさらすなどのあく抜き工程により、子葉が食用可能となる。これらの食用可能な堅果類は、収量も多い有用植物であることから、遺跡出土例も多く（渡辺, 1975；岡本, 1979など）、弥生時代ではイネと共にイチイガシも重要な植物食であったと推定されている。堅果類以外では、ヤマモモ、ムクノキ、ヤマブドウ（近似種）、サンカクヅル－アマヅルの果実が食用可能である。

今回確認された堅果類を含む可食種実には、食利用の直接的な痕跡は確認されず、食用にな

らない幼果や殻斗、葉を多く伴うことから、自然堆積の要素が強いと判断される。しかしながら、当時の遺跡周辺域の照葉樹林より持ち込まれ、植物質食料として利用された可能性は充分に考えられる。

草本類は、池沼や小川などの浅水中に群生する抽水性多年草のミクリ属の多産をはじめ、サジオモダカ属、ヒルムシロ属、ミクリ属、ホタルイ近似種を含むホタルイ属などの水湿地生植物や、中生植物のカナムグラ、ヤマアイ近似種、ヤブジラミ属、ヤエムグラ属が確認された。当時の調査区周辺域は、水深約２m以内の浅い水湿地が存在する、明るく開けた草地環境であったと推定される。栽培種のイネを伴うことを考慮すると、水湿地生植物は水田雑草に由来する可能性がある。

引用文献

藤下典之, 1984，出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 古文化財の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 638-654.

石川茂雄, 1994，原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

伊藤ふくお, 2001，どんぐりの図鑑, 北川尚史監修, トンボ出版, 79p.

宮路淳子・南木睦彦, 1998，佃遺跡出土の大型植物遺体.佃遺跡－本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ－第２分冊　自然科学・総括編, 兵庫県文化財調査報告　第176冊, 兵庫県教育委員会, 39-51.

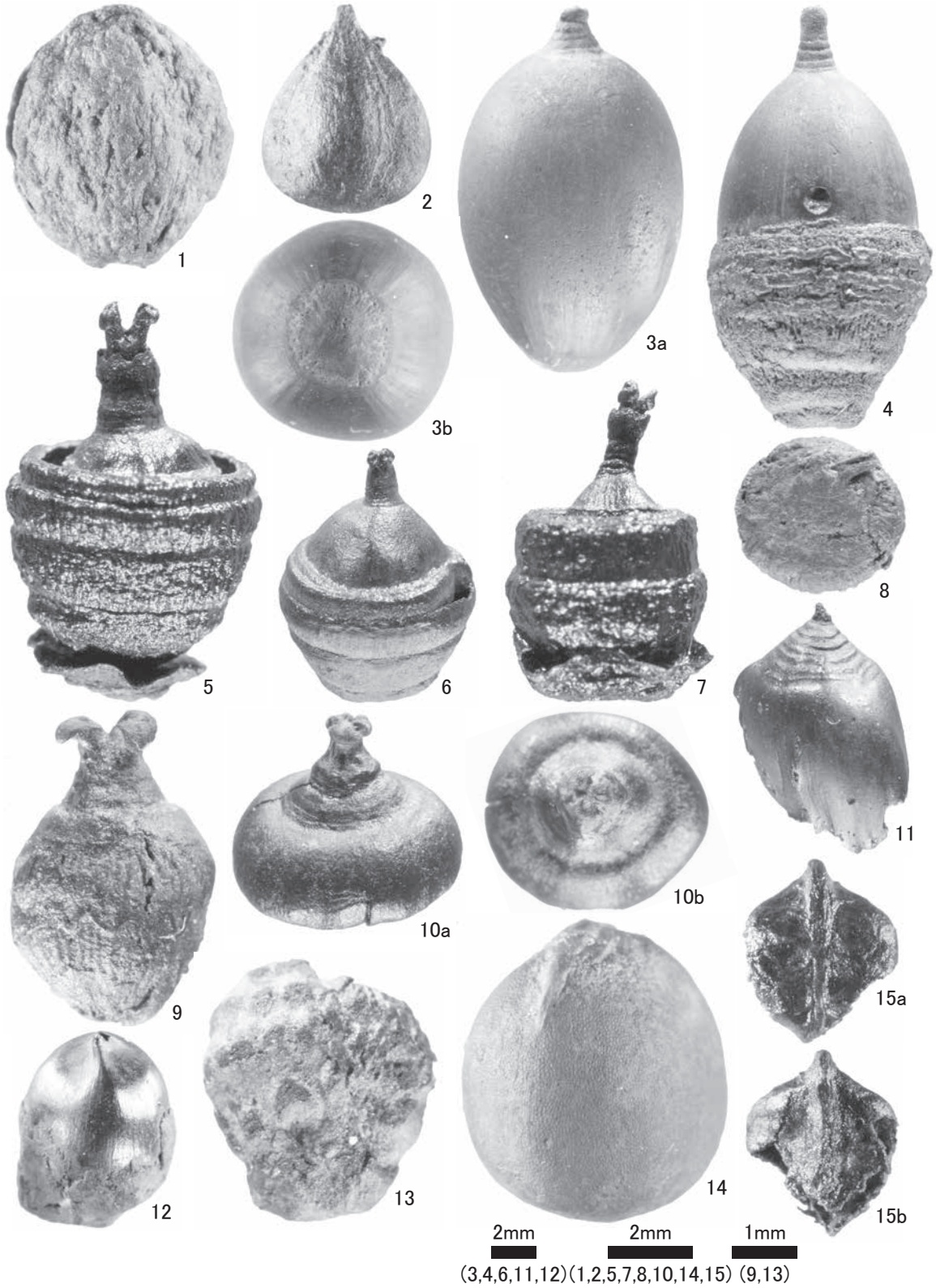
中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000，日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.

岡本素治, 1973，どんぐりのはなし（３）. Nature Study, 19巻８号, 大阪市立自然科学博物館編, 大阪自然科学研究会，７-10.

岡本素治, 1979，遺跡から出土するイチイガシ. 大阪市立自然史博物館業績, 第230号, 31-39.

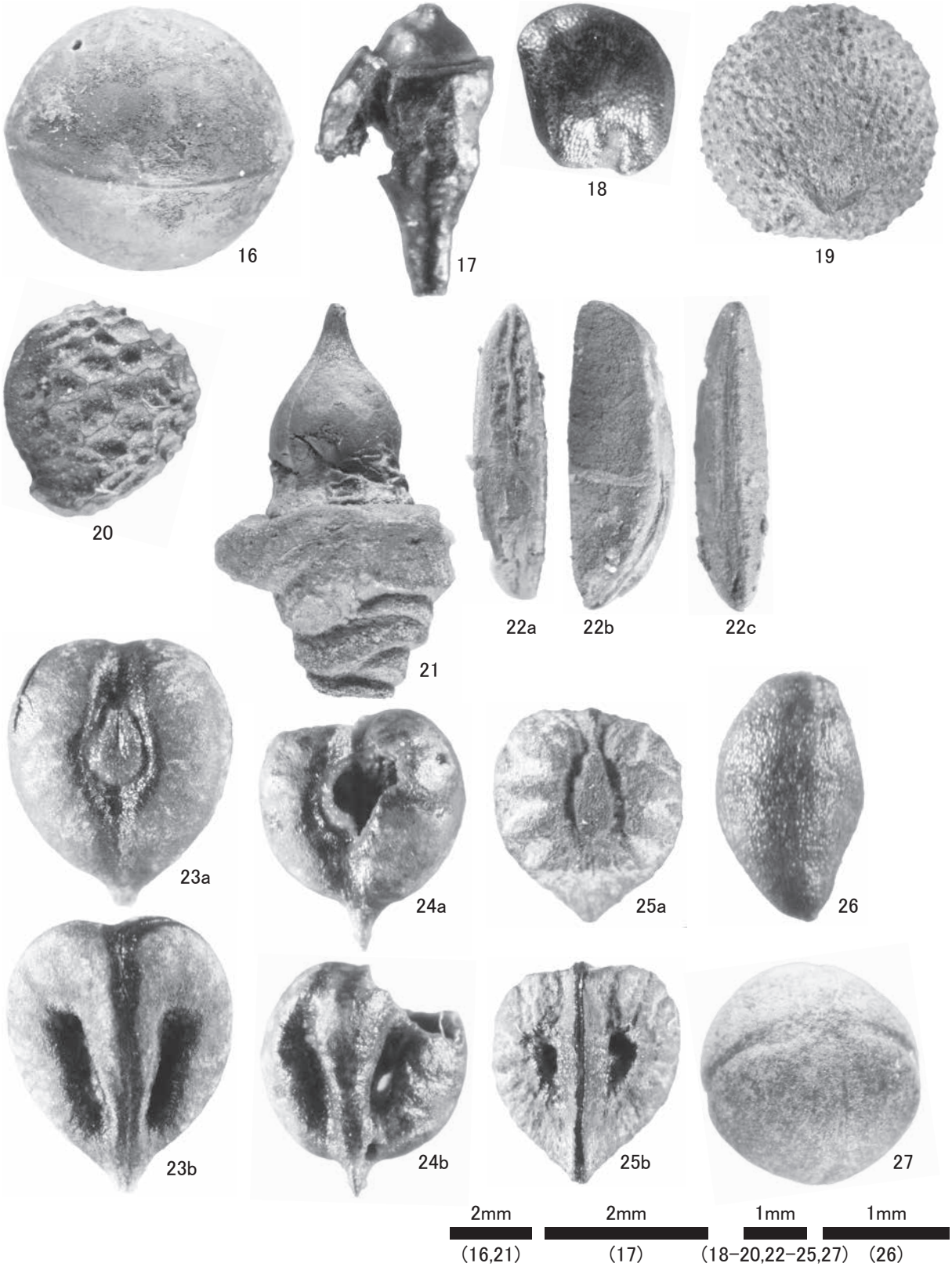
徳永桂子, 2004，日本どんぐり大図鑑.偕成社, 156p.

渡辺　誠, 1975，縄文時代の植物食.雄山閣出版, 187p.



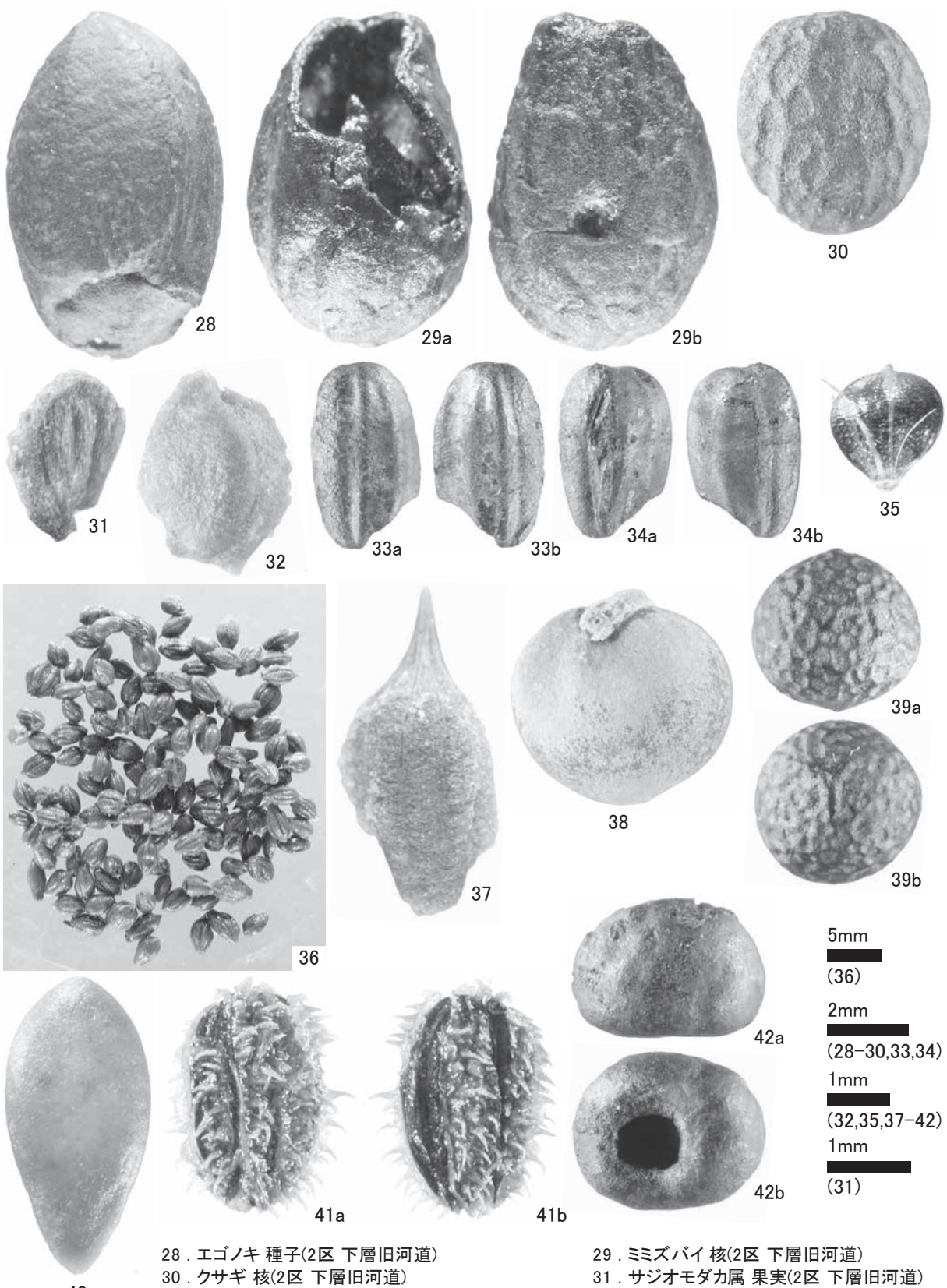
1．ヤマモモ 核(2区 下層旧河道)
2．イヌシデ 果実(2区 下層旧河道)
3．イチイガシ近似種 果実(2区 下層旧河道)
4．イチイガシ近似種 殻斗･果実(食痕)(2区 下層旧河道)
5．イチイガシ 幼果(2区 下層旧河道)
6．イチイガシ 殻斗･果実(2区 下層旧河道)
7．イチイガシ 幼果(2区 下層旧河道)
8．アカガシ-ツクバネガシ-ウラジロガシ 幼果(2区 下層旧河道)
9．アラカシ-シラカシ 幼果(2区 下層旧河道)
10．アラカシ 幼果(2区 下層旧河道)
11．アラカシ 果実(2区 下層旧河道)
12．ツブラジイ 殻斗･果実(2区 下層旧河道)
13．ツブラジイ 幼果(2区 下層旧河道)
14．ムクノキ 核(2区 下層旧河道)
15．ケヤキ 果実(2区 下層旧河道)

図13　種実遺体（1）



16．クスノキ 種子(食痕)(2区 下層旧河道)
17．ニッケイ属(クスノキ?) 幼果(2区 下層旧河道)
18．サカキ 種子(2区 下層旧河道)
19．アカメガシワ 種子(2区 下層旧河道)
20．カラスザンショウ 種子(2区 下層旧河道)
21．ムクロジ 幼果(2区 下層旧河道)
22．クロガネモチ 核(2区 下層旧河道)
23．ヤマブドウ近似種 種子(2区 下層旧河道)
24．サンカクヅル-アマヅル 種子(2区 下層旧河道)
25．ウドカズラ 種子(2区 下層旧河道)
26．イイギリ 種子(2区 下層旧河道)
27．クマノミズキ 核(2区 下層旧河道)

図14　種実遺体（2）



28．エゴノキ 種子(2区 下層旧河道)
29．ミミズバイ 核(2区 下層旧河道)
30．クサギ 核(2区 下層旧河道)
31．サジオモダカ属 果実(2区 下層旧河道)
32．ヒルムシロ属 果実(2区 下層旧河道)
33．イネ 胚乳(2区 下層旧河道)
34．イネ 胚乳(2区 下層旧河道)
35．ホタルイ近似種 果実(2区 下層旧河道)
36．ミクリ属 果実(2区 下層旧河道)
37．ミクリ属 果実(2区 下層旧河道)
38．カナムグラ 核(2区 下層旧河道)
39．ヤマアイ近似種 種子(2区 下層旧河道)
40．雑草メロン型 種子(2区 下層旧河道)
41．ヤブジラミ属 果実(2区 下層旧河道)
42．ヤエムグラ属 核(2区 下層旧河道)

図15　種実遺体（3）

第７節　横入遺跡の大型植物遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横入遺跡（兵庫県淡路市志筑所在）は、弥生時代から中世の各時期にわたり、生活・生業・祭祀など土地利用の変遷をたどることができる複合遺跡である。今回の発掘調査では、上層の弥生時代中期後半～鎌倉時代の溝・波板状遺構・土坑・ピットと、下層の弥生時代前期～中期前半の水田跡の、２面の遺構面が検出されている。本分析調査では、下層の旧河道の堆積物を水洗して検出された葉などの大型植物遺体の抽出・同定を実施し、当時の植生に関する資料を作成する。

１．試料

試料は、２区の下層旧河道の水洗済植物遺体１点（登録No.2011184-29（図16）である。試料札の備考欄には、下層のシルトラミナ、杭列西側と記載されている。試料は、水浸の状態でスチロール瓶に入っている。

２．分析方法

試料をシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、面相筆を用いて、同定が可能な葉（主に完形の葉や、頂部、基部が残存している葉）や種実などの大型植物遺体を抽出する。

大型植物遺体の同定は、現生標本および吉山･石川（1992)、石川（1994)、中山ほか（2000)、濱野（2005)、濱野･石井（2007）等の図鑑を参考に実施し、個数を数えて結果を一覧表で示す。葉の破片は、頂部と基部の個数を数えて併記する。分析後は、完形、先端部や基部が残存する葉遺体を0.1㎜厚のポリシートに挟み、他は分類群別に容器に入れ、約70％のエタノール溶液で液浸保存し、返却する。

３．結果

被子植物２分類群（常緑広葉樹のイチイガシ、アラカシ？）37個の葉と、被子植物１分類群（草本のヤブジラミ属）１個の種実の、計38個の大型植物遺体が抽出・同定された（表９）。８個はイチイガシ、アラカシなどのカシ類以外の広葉樹で同定ができなかったが、同一分類群と考えられる５個を不明A、２個を不明B、１個を不明Cとしている。

同定された葉遺体の写真を図16に示し、形態的特徴を以下に述べる。

・イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

葉は厚い革質。表面は灰黒褐色、裏面は灰黄褐色で星状毛が密生する。葉身は倒披針形または広倒披針形。先端部は鋭尖形、基部は広い楔形で葉柄がある。葉柄は残存長0.3㎜、葉の残存長は2.5～４㎝、葉幅は先端部に近い部分で最大となり、1.3～2.5㎝を測る。葉の下半部は全縁、上半部は２次脈が葉縁に到達する部分に鋭い鋸歯がある。２次脈は10～15対が１次脈に

対して鋭角に配列し、葉縁に到達する。各２次脈は直線的で平行に配列する。３次脈は２次脈にほぼ直行し、上下の２次脈に到達し、連結する。各３次脈も直線的で平行に配列する。葉裏面では２次脈、３次脈が明瞭。４次脈は３次脈に、５次脈は４次脈にほぼ直行し、４～５角形の微細な網目模様を形成する。

・アラカシ（*Quercus glauca* Thunberg）？　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

葉は革質でイチイガシよりもやや薄い。表面は茶～黒褐色、裏面は灰茶～灰黒褐色。葉身は倒卵状長楕円形または長楕円形。先端部は鋭尖形、基部は広い楔形で葉柄がある。葉柄は長さ1.2㎝、葉の残存長は1.7～3.2㎝、葉幅は先端部に近い部分で最大となり、1.8～3.6㎝を測る。葉縁は、上半部１/３の２次脈が葉縁に到達する部分にやや鋭く低い鋸歯があり、下半部は全縁。２次脈は８～11対が１次脈に対して鋭角に配列し、葉縁に到達する。各２次脈は直線的で平行に配列する。３次脈は２次脈にほぼ直行し、上下の２次脈に到達し、連結する。各３次脈も直線的で平行に配列する。４次脈は３次脈に、５次脈は４次脈にほぼ直行し、4-5角形の微細な網目模様を形成する。

本分析では、イチイガシよりも薄く、２次脈の間隔が広く、３次脈や４次脈がやや不明瞭な特徴をもつ葉片をアラカシ？としているが、種実と共に多産したイチイガシの可能性もある。

・広葉樹

Aは淡灰褐色、薄い草質。残存長、残存幅ともに１㎝程度。１個は基部が確認され、広いくさび形で全縁である。落葉広葉樹と考えられる。Bは革質、葉表は暗褐色、葉裏は暗灰褐色。残存長は1.9㎝、残存幅は1.2㎝を測る。残存する側脈は３本で葉縁に達さず隣の側脈に連絡する。葉縁は全縁である。Cは薄い革質、葉表は暗灰褐色、葉裏は灰白色。残存長1.7㎝、残存幅1.4㎝を測る。頂部で先端を欠損する。細長く尖る長楕円形～披針形と推定される。残存する側脈は３本で葉縁に達しない。葉縁は全縁である。クスノキ科タブノキ属アオガシ（ホソバタブ）（*Machilus japonica* Sieb. et Zucc.）に似るが、破片のため同定に至らなかった。

表９　大型植物遺体同定結果

分類群	部位	状態	２区 下層旧河道 杭列西側 図16 登録No.2011184-29	備考
木本				
イチイガシ	葉	破片	11	８個基部,１個頂部（先端欠損）
イチイガシ近似種	葉	破片	20	
アラカシ?	葉	破片	6	１個基部,１個頂部（先端欠損）
広葉樹A	葉	破片	5	１個基部
広葉樹B	葉	破片	2	
広葉樹C	葉	破片	1	頂部（先端欠損）
草本				
ヤブジラミ属	果実	完形	1	
合計				
葉合計（不明を除く）			37	
草本種実			1	

４．考察

弥生時代前期～中期前半とされる下層の旧河道から出土した植物遺体群は、イチイガシの葉を主体とする他に、アラカシと思われる葉や、イチイガシ・アラカシ以外の広葉樹の葉、ヤブジラミ属の果実が確認された。

イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する常緑高木で、現在は紀伊半島、四国、九州の山麓地に分布する。アラカシは、現在の近畿地域の山麓にもっともふつうに生育するカシ類で、スダジイやコジイとしばしば混生する。これらは、当時の遺跡周辺域のイチイガシを主体とする照葉樹林内に生育していたと考えられる。草本のヤブジラミ属は、野原や道ばたなどにふつうに生育することから、調査区周辺域の明るく開けた草地環境に生育していたと考えられる。

イチイガシは、現在の本遺跡周辺には分布していないが、淡路島北東部に位置する佃遺跡の縄文時代後期後半の貯蔵穴より、イチイガシを主とするアカガシ亜属が多産し、当時の照葉樹林（シイではなくカシ林）の分布が想定されている（宮路・南木, 1998）。今回、本遺跡よりイチイガシの葉が果実や幼果、殻斗とともに出土したことから、少なくとも弥生時代前期～中期前半までは、本地域にイチイガシが分布していたと考えられる。

なお、下層の旧河道充填堆積物からは、栽培種のイネ、雑草メロン型とともに、木本のヤマモモ、イヌシデ、イチイガシ、アカガシ－ツクバネガシ－ウラジロガシ、アラカシ、アラカシ－シラカシ、アカガシ亜属、コナラ属、ツブラジイ、シイ属、ムクノキ、ケヤキ、クスノキ、ニッケイ属（クスノキ？）、サカキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、サンショウ属、ムクロジ、クロガネモチ、ヤマブドウ近似種、サンカクヅル－アマヅル、ウドカズラ、イイギリ、クマノミズキ、エゴノキ、ミミズバイ、クサギ、草本のサジオモダカ属、ヒルムシロ属、ミクリ属、ホタルイ近似種、ホタルイ属、カナムグラ、ヤマアイ近似種、ヤブジラミ属、ヤエムグラ属などの種実遺体が出土している。今回の結果は、これら種実遺体群とも同調的な結果といえる。

引用文献

濱野周泰, 2005, 原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木. 柏書房, 334p.

濱野周泰･石井英美, 2007, 原寸図鑑葉っぱでおぼえる樹木2. 柏書房, 290p.

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

宮路淳子・南木睦彦, 1998, 佃遺跡出土の大型植物遺体. 佃遺跡－本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ－第２分冊　自然科学・総括編, 兵庫県文化財調査報告　第176冊, 兵庫県教育委員会, 39-51.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.

吉山　寛・石川美枝子, 1992, 原寸イラストによる落葉図鑑. 文一総合出版, 372p.

1．イチイガシ 葉(頂部；先端欠損)(2区 下層旧河道)
2．イチイガシ 葉(基部)(2区 下層旧河道)
3．イチイガシ 葉(基部)(2区 下層旧河道)
4．イチイガシ 葉(基部)(2区 下層旧河道)
5．イチイガシ 葉(基部)(2区 下層旧河道)
6．イチイガシ 葉(基部)(2区 下層旧河道)
7．イチイガシ 葉(基部)(2区 下層旧河道)
8．イチイガシ 葉(2区 下層旧河道)
9．アラカシ? 葉(頂部；先端欠損)(2区 下層旧河道)
10．アラカシ? 葉(基部)(2区 下層旧河道)
11．アラカシ? 葉(2区 下層旧河道)
12．アラカシ? 葉(2区 下層旧河道)

図16　大型植物遺体

第６章　おわりに

横入遺跡の本発掘調査は２ヵ年にわたって実施した。１年目は梅雨明け前から中秋まで暑い時期に実施した。猛暑の年で日陰の全くないところでの過酷な調査となった。翌年はほぼ１年後の調査開始となり、田井A遺跡と合わせての調査であった。横入遺跡の調査は中秋から厳寒期まで実施した。実働１年目61日間、２年目48日間の計109日間調査に費やした。調査面積は２年合わせて5195㎡の調査を行った。

調査の結果、出土した遺物の多くは奈良時代のものである。志筑廃寺に関連するもので、淡路島の律令期を考えるうえに重要である。しかし、遺物は多量に出土したものの奈良時代の遺構は水田跡以外明瞭な遺構は確認していない。横入遺跡は平安時代以降現代に至るまで水田として利用されていた。その過程で水田拡大のため、高い部分を削平し低い部分に運んだものと思われる。その際に志筑廃寺の遺構面や包含層が削られて横入遺跡に移動したようである。水田面積を拡大するためや、水害後の再整備などの理由で、瓦などの遺物が入ったものと思われる。奈良時代以降は水田変遷の歴史を表している。

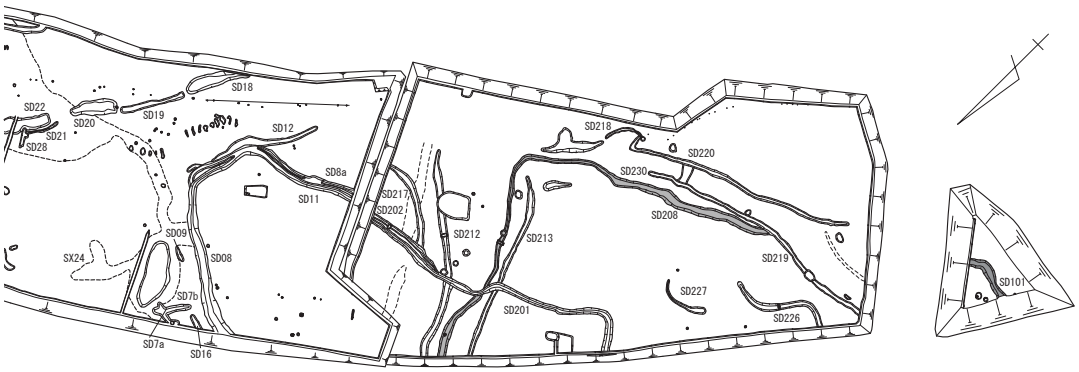
横入遺跡(志筑廃寺)の瓦は藤原京式の瓦が使用されている。淡路国が御食国となっていることからも関係の深さはうかがいしれる。瓦の胎土(砂粒)の検討から洲本市南部大野古窯跡群と同一であることが判明している。淡路島最古の寺院が志筑にあることは注目される。奈良時代の官道(南海道)は津名郡の南端を通るが多くは三原郡を通っている。国分寺や国府も三原郡にあり、奈良時代の津名郡と三原郡の位置付けが想像される。その中で最古の寺院が志筑に建立されたことは何か理由があるに違いない。政治的な理由なら、最古の寺院周辺に国府・国分寺などが構築されそうである。それらが存在しないことを考慮するなら、当然志筑廃寺は私寺の確率が高いものと思われる。藤原京へ瓦を供給するのに関与した氏族が有力であろう。御食国としての大きなものとして塩がある。この時期平城京へ貢納した国は淡路・若狭・志摩である。その１つの淡路国では全島で塩づくりが古墳時代から行われているが、古墳時代は津名郡の方が主体である。それが奈良時代のある時期(中頃か)から三原郡に中心が移行する。この事実と国分寺・国府の立地とは無縁とは思われない。志筑廃寺建立時の政治背景が継続していれば、周辺に国分寺など律令期の施設は構築されたと思われる。

横入遺跡と同時期に調査した田井A遺跡では奈良時代の遺構が検出され、旧河道から木簡・墨書土器・律令期木製祭祀具が出土している。志筑廃寺のまとめで伊藤氏が指摘されているが、遺跡は旧海岸線に存在し、郡津との関連を指摘されている。その事実を証明するような遺構・遺物を確認したことは、伊藤氏の論を補強する重要な資料と考えられる。

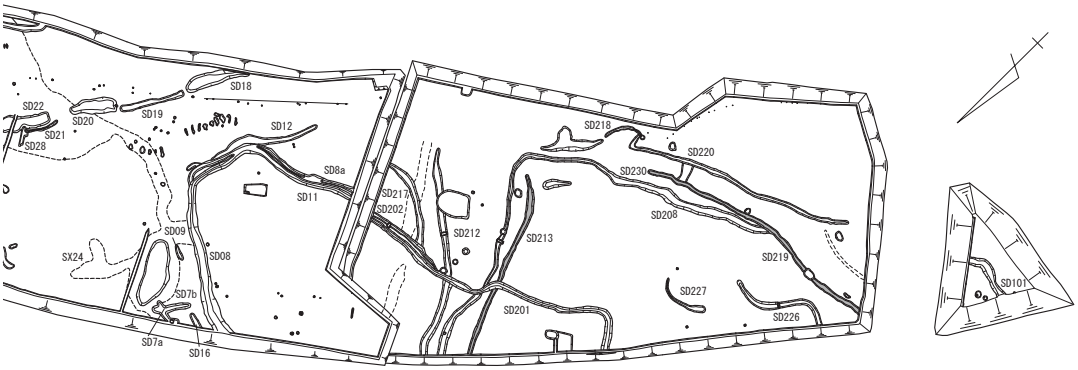
律令期の遺物が多数を占めるが、横入遺跡の成果として律令期以前の遺構も興味深い。弥生時代中期から奈良時代はじめまで生活空間として利用されていたが、それ以外の時期は水田として利用されていた。水田は全時代にわたるものである。なお起源は弥生時代前期まで遡る。兵庫県では前期の水田は調査されているが、淡路での検出例は多い。波毛遺跡・雨流遺跡・志

知川沖田南遺跡で、古墳時代にわたっての水田の調査例も淡路は多い。横入遺跡では前期に遡る時期と弥生中期後半環濠集落の時期を面的に調査し、それ以降も水田に利用されていることは断面観察から確実である。水田以外に旧河道にしがらみが設置されており、流路変更し用水を確保する機能である。供給先は明確に検出できなかったが水路変更した南側に存在したであろう。弥生前期の土器出土量は少ないものの、堰を構築していることから、ある程度の集落であったろうと思われる。環濠になる溝も中期に切られているものもあり、少なくとも中期前半には掘り込まれ、前期に遡る可能性も残されている。地理的に洪水に見舞われることが多かったのか、数度となく掘り直されている。

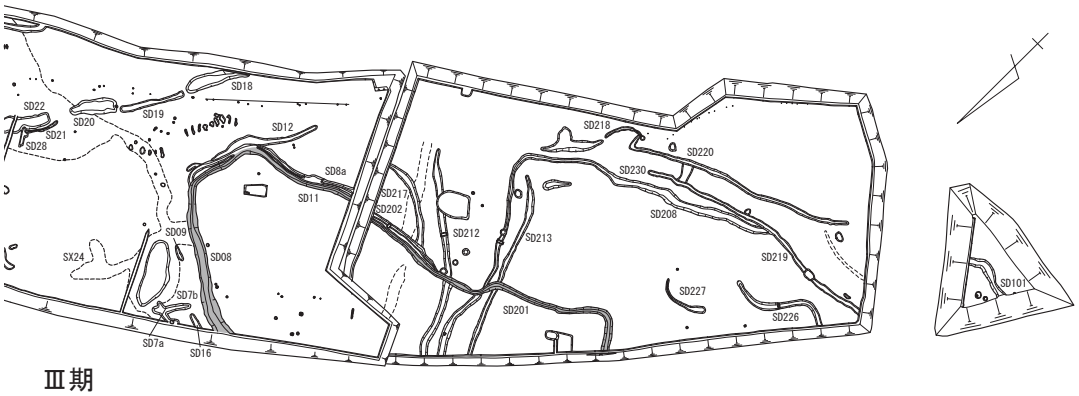
古墳時代中期に土器が埋納した土坑群を調査した。１列に並び祭祀遺構と考えられる。高杯の上に壺を乗せる祭祀形態である。遺構はこの土坑群だけで、水田経営に伴うものであろうかと思われる。



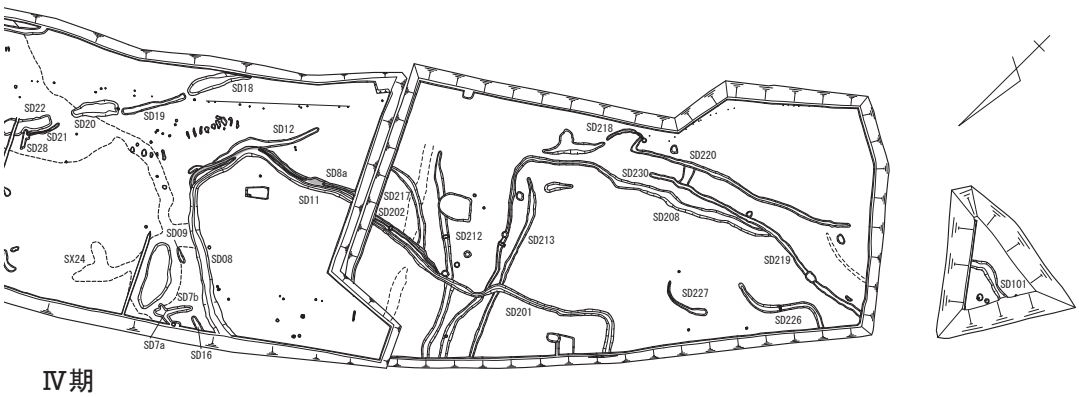
Ⅰ期



Ⅱ期



Ⅲ期



Ⅳ期

図17　環濠の推移

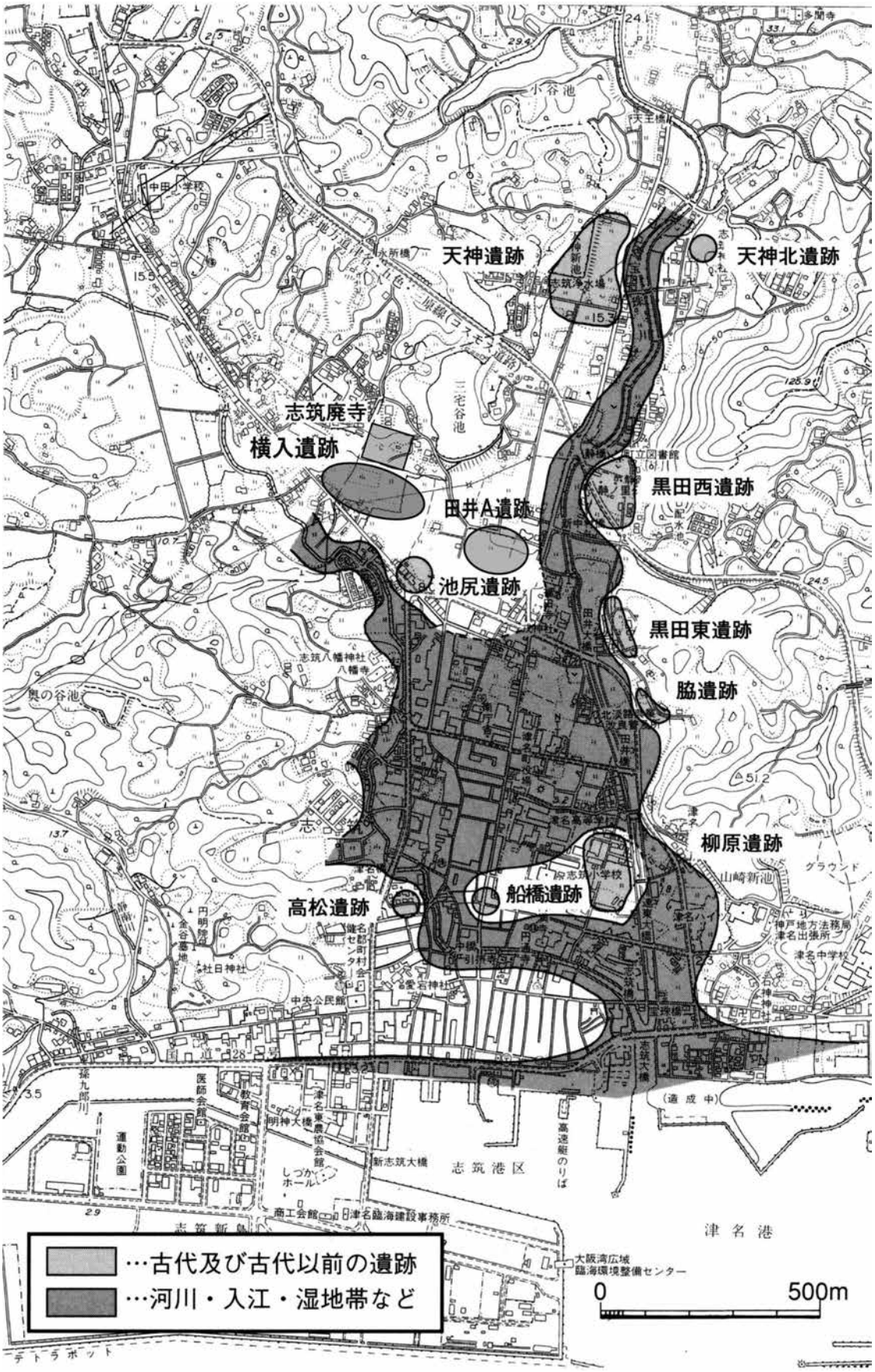
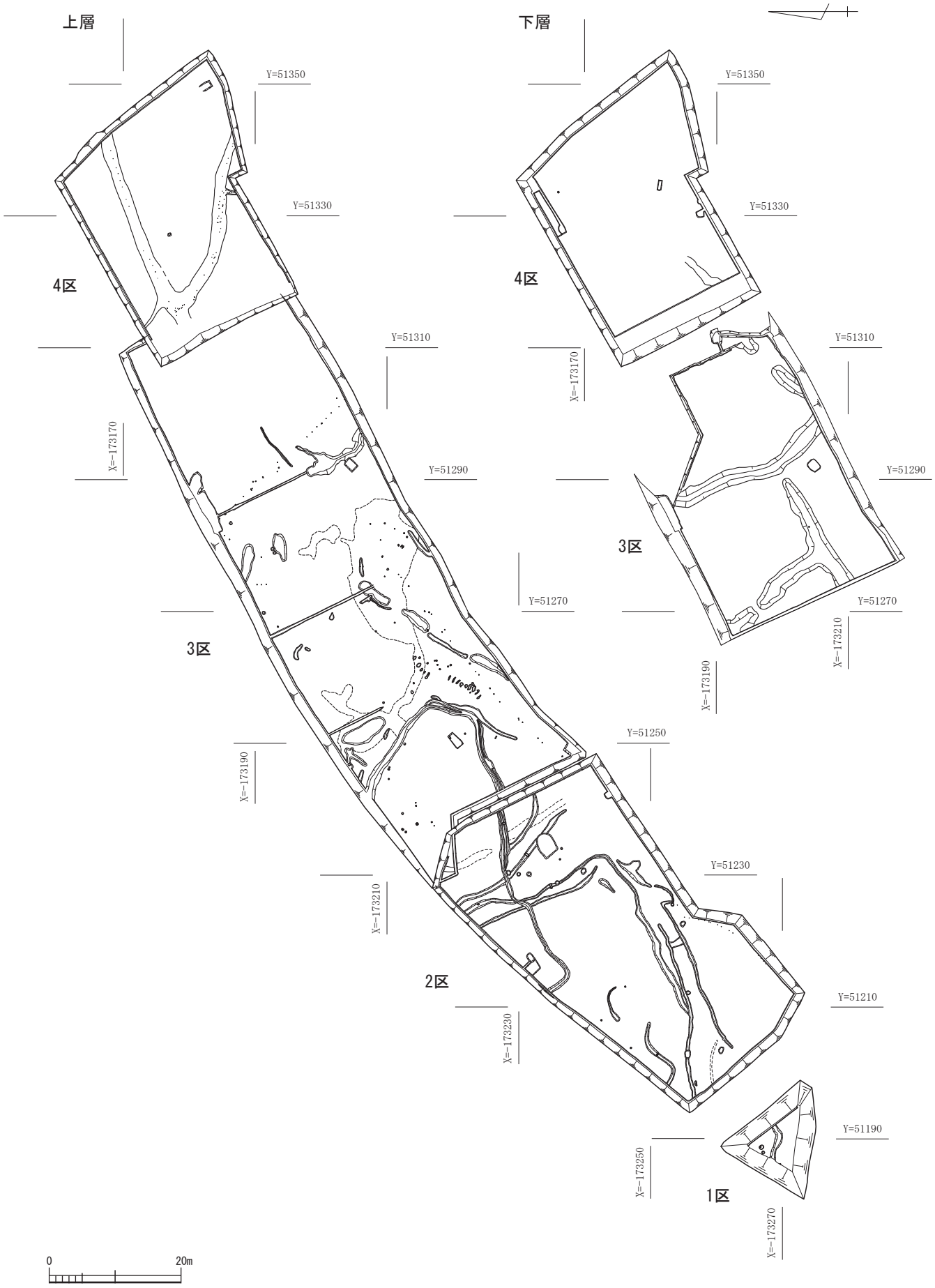


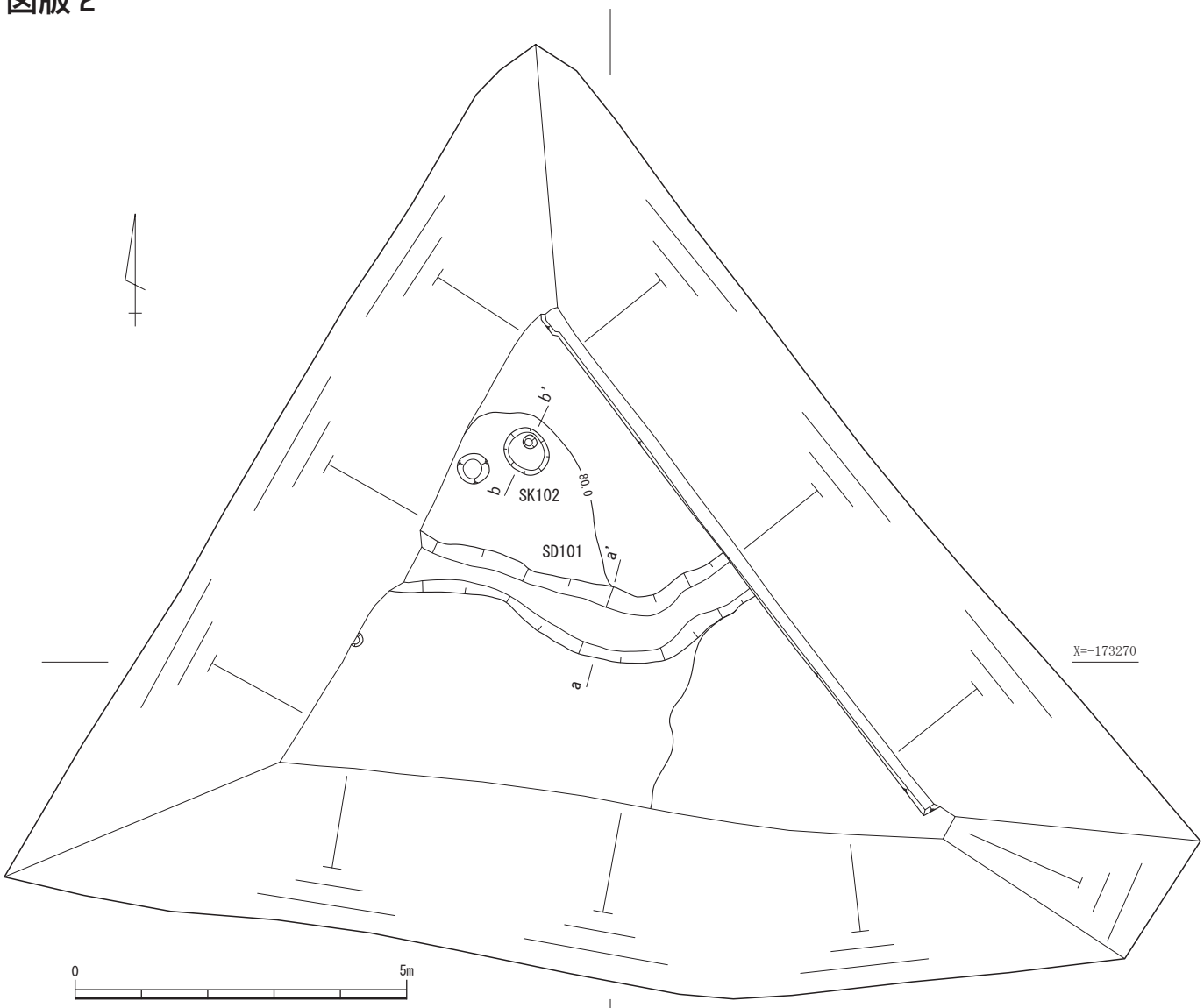
図18　旧海岸線と横入遺跡

図　　版

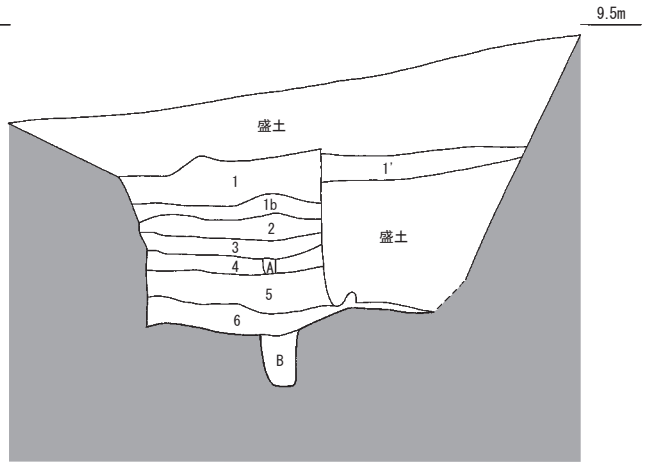

上層
下層
Y=51350
Y=51330
Y=51310
Y=51290
Y=51270
Y=51250
Y=51230
Y=51210
Y=51190
X=−173170
X=−173190
X=−173210
X=−173230
X=−173250
X=−173270
4区
3区
2区
1区
0
20m

横入遺跡全体図

図版 2

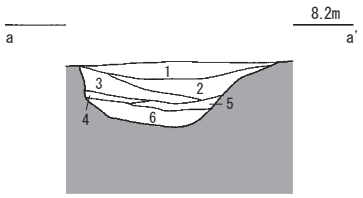


北東壁



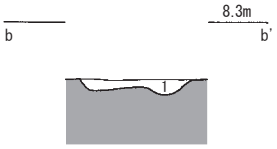
1．2.5Y 3/2　黒褐色シルト～極細砂　旧表土(現代)
1'．1と同じ　掘削・盛土後に敷き直された旧表土
1b．7.5Y 4/1　灰色極細砂　表土下部
2．2.5GY 4/1　暗オリーブ灰色シルト質極細砂～細砂
3．5GY 4/1　暗オリーブ灰色細砂混じりシルト
4．7.5Y 4/1　灰色シルト質極細砂～細砂
5．5Y 4/1　灰色シルト質極細砂～細砂
（2～5：全体に還元されている）
6．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質極細砂～細砂
A．4層とほぼ同じ色調　粗砂を多く含む
B．10YR 4/3　にぶい黄褐色砂　グレーディングが見られる
下部は細礫混の粗砂～極細砂
上部は細砂～粗砂

SD101



1．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質極細砂
2．10YR 4/1　褐灰色細砂～中砂
3．10YR 5/2　灰黄褐色細砂(同色のシルト質極細砂ラミナ状)
4．10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト質極細砂
5．10YR 5/1　褐灰色粗砂
6．10YR 5/1　褐灰色中砂

SK102



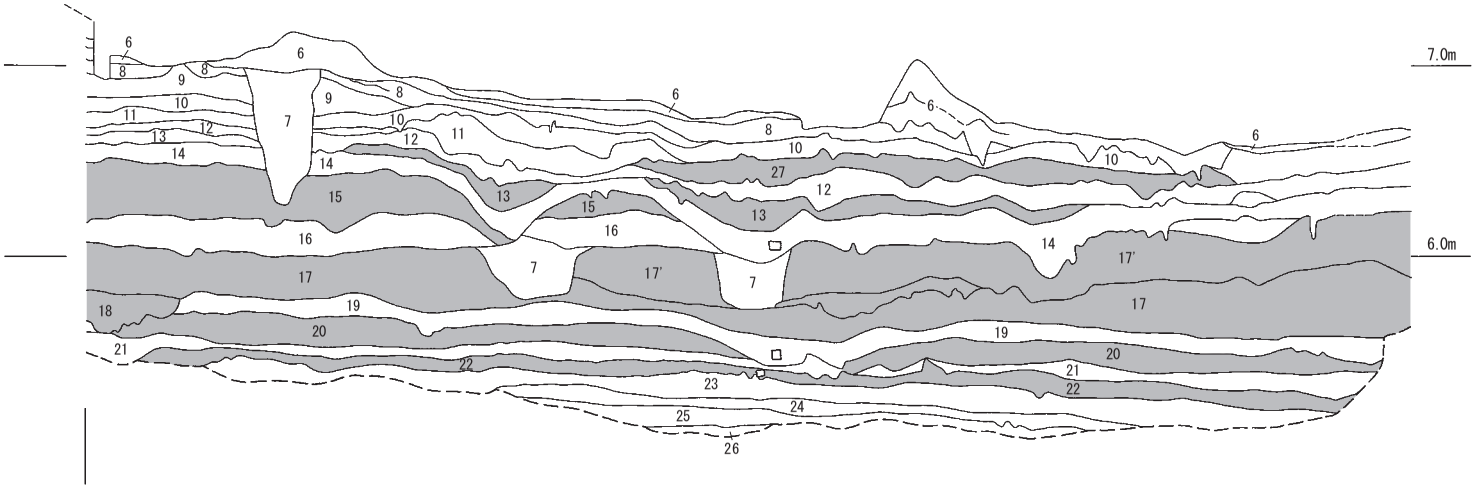
1．10YR 4/1　褐灰色細砂
(10YR 4/4　褐色細砂含む)

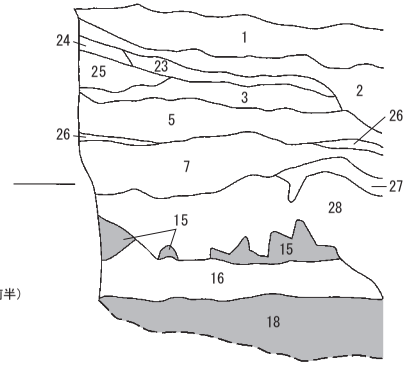
0　2m

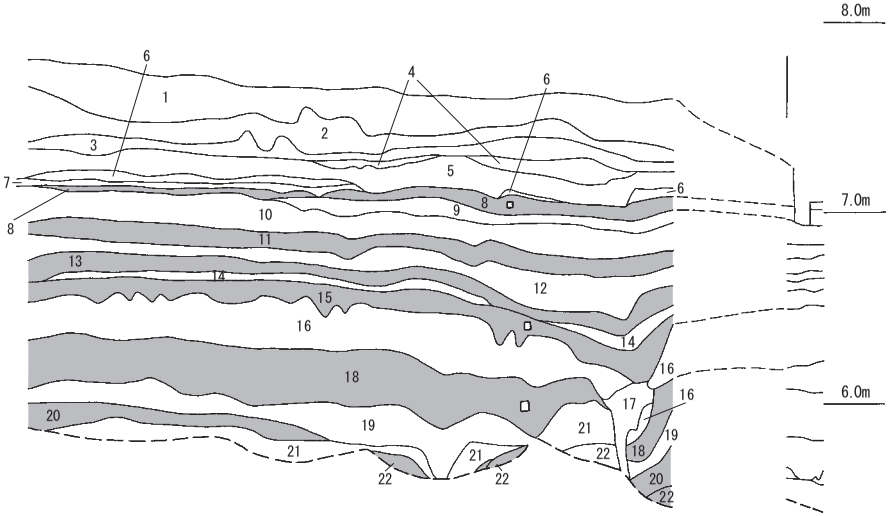
1区実測図

1区断ち割り断面図

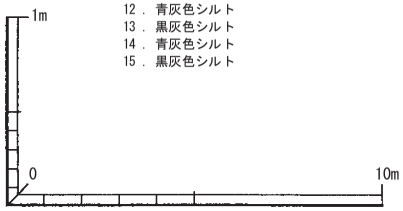
1．黄灰色砂
2．灰色シルト
3．暗灰シルト
4．灰色砂
5．青灰色シルト
6．黒灰色シルト　水田(弥生前期～中期後半)
7．暗灰色シルト質砂　シルトのレンズ多
8．青灰色砂質シルト
9．青灰色シルト
10．黒灰色シルト
11．青灰色シルト
12．黒灰色シルト
13．青灰色シルト
14．黒灰色シルト
15．青灰色シルト
16．黒灰色シルト
17．青灰色細砂質シルト
17'．青灰色シルト質砂　砂のレンズ多
18．暗灰色砂質シルト　砂のレンズ
19．黒灰色シルト
20．青灰色シルト
21．黒灰色シルト
22．灰黒色シルト
23．青灰色シルト
24．黒灰色シルト
25．青灰色シルト
26．黒灰色シルト
27．暗灰色シルト質砂







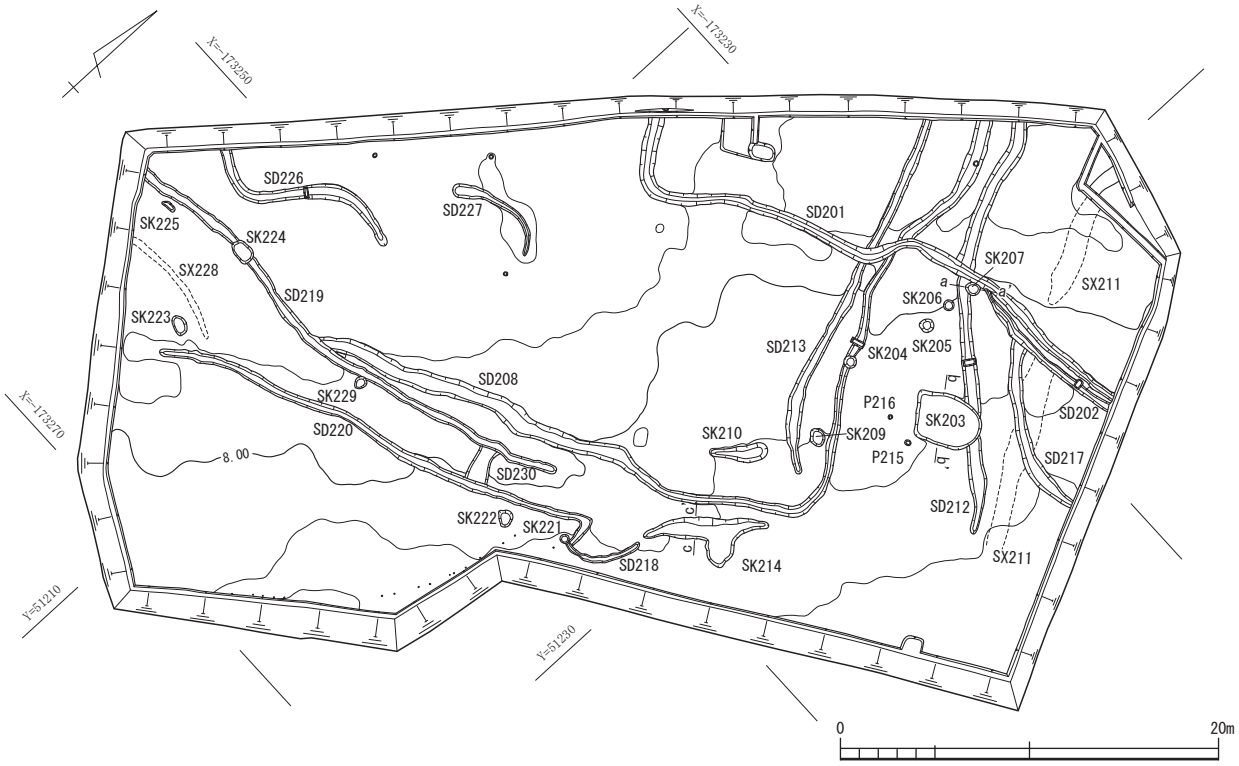
1．褐色シルト質粗砂
2．黄褐色砂質シルト
3．青灰色シルト
4．青灰色砂質シルト
5．青灰色砂
6．青灰色砂質シルト
7．青灰色シルト質砂
8．黒灰色シルト　水田土壌(弥生前期～中期前半)
9．青灰色砂質シルト
10．青灰色シルト
11．黒灰色シルト
12．青灰色シルト
13．黒灰色シルト
14．青灰色シルト
15．黒灰色シルト

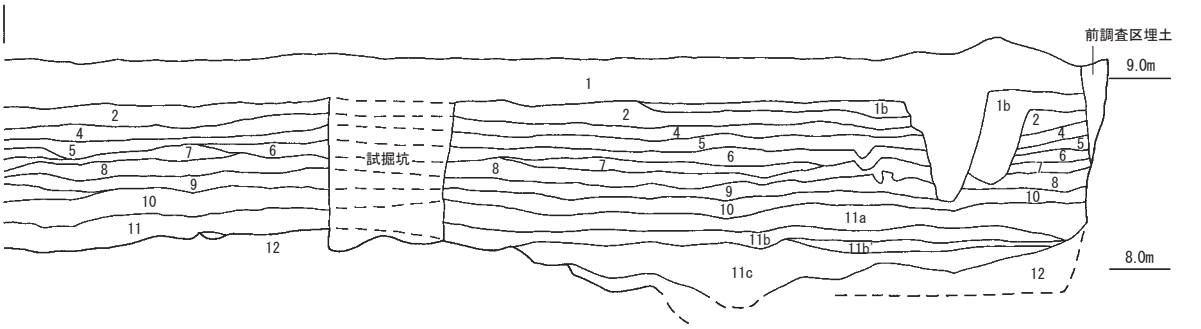


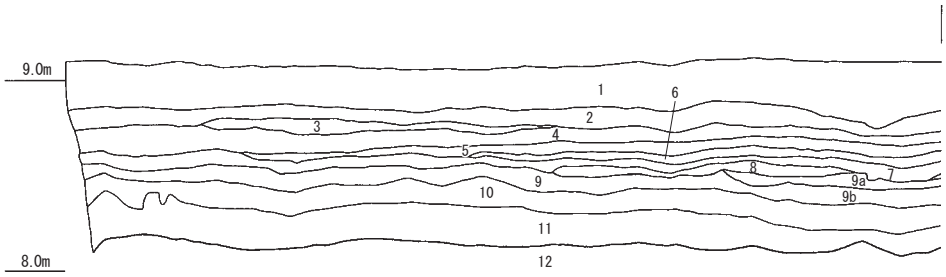
16．青灰色シルト
17．灰色砂
18．黒灰色シルト
19．青灰色シルト
20．黒灰色シルト
21．灰色シルト質砂
22．黒灰色シルト
23．暗灰色シルト
24．暗灰色シルト質砂
25．黄灰色シルト質砂
26．青灰色砂質シルト
27．青灰色砂質シルト
28．青灰色粗砂　旧河道堆積物
※　1・2、4～7、24～27　微高地堆積物

※　8、14、15、18、19、22内の□はサンプル採取箇所

図版3

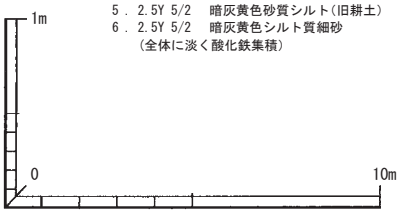




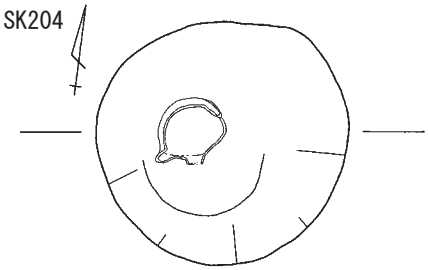


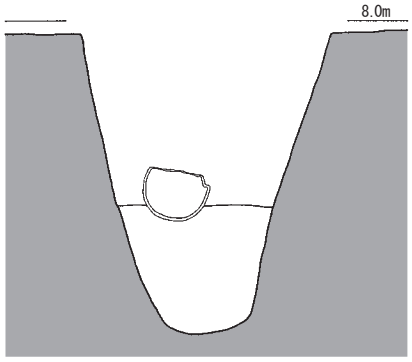
北壁

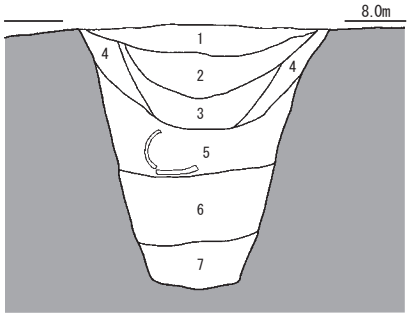
1．表土(耕土)　2.5Y 3/2　黒褐色シルト～極細砂
　(細分可能だが分層していない)
1b. 2.5Y 5/3　黄褐色シルト質細砂～中砂
2．2.5Y 5/3　黄褐色シルト質細砂～中砂
　(極粗砂粒を散漫に含む、上部に酸化鉄集積)　旧耕土
3．2.5Y 5/3　黄褐色砂質シルト
4．2.5Y 5/2　暗灰黄色砂質シルト～シルト質極細砂～細砂
　(全体に淡く酸化鉄集積)
5．2.5Y 5/2　暗灰黄色砂質シルト(旧耕土)
6．2.5Y 5/2　暗灰黄色シルト質細砂
　(全体に淡く酸化鉄集積)
7．2.5Y 5/1　黄灰色シルト質細砂～中砂
　(粗砂～極粗砂粒および小礫を含む)旧耕土
8．2.5Y 5/3　黄褐色砂質シルト(全体に淡く酸化鉄が集積)
9．2.5Y 5/2　暗灰黄色砂質シルト
9a. 2.5Y 5/2　暗灰黄色シルト
9b. 9層と同じ
10．2.5Y 5/1　黄灰色砂質シルト
11．2.5Y 4/1　黄灰色砂混じりシルト(主たる包含層)
11a. 11層とほぼ同じ
11b. 10YR 4/4　褐色シルト混細砂～粗砂
11b'. 10YR 4/1　褐灰色シルト質細砂～中砂
11c. 2.5Y 4/1　黄灰色シルト質細砂～黄灰色粗砂
　(シルトを多く含む部分とそうでない部分がある)
11d. 10YR 2/2　黒褐色シルト質細砂～粗砂　細礫混
12．2.5Y 4/4　オリーブ褐色シルト混粗砂
　(上面付近～3cm程は土壌化しており、10YR 4/2 灰黄褐色を呈する)



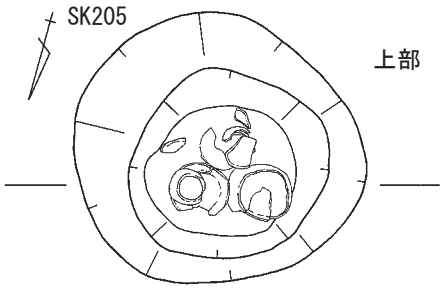
2区上層平面図・土層図

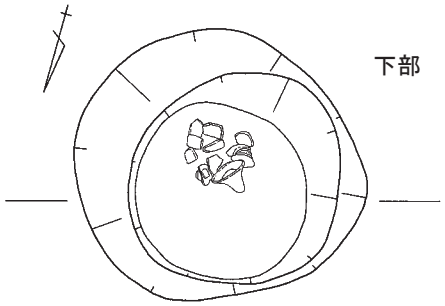


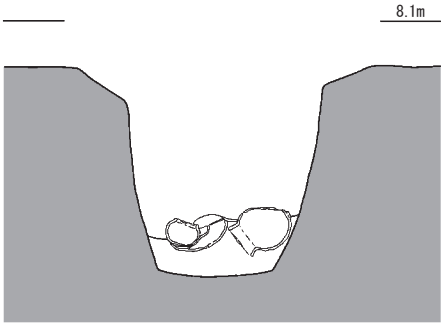


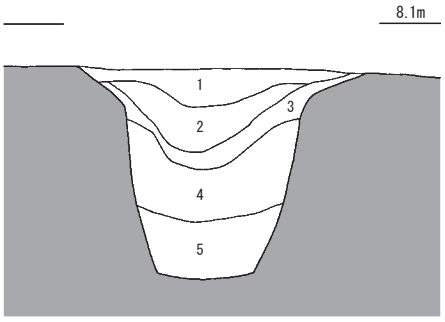


1．10YR 2/2　黒褐色シルト質細砂
　　（粗砂粒を多く含む）
2．10YR 3/1　黒褐色シルト
3．2.5Y 3/1　黒褐色シルト質中砂～粗砂
4．10YR 4/1　褐灰色シルト質中砂～粗砂
5．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂
　　10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト質細砂
　　のブロックを含む　人為的埋土と思われる
6．10YR 2/1　黒色粘土
7．10YR 3/1　黒褐色極細砂質シルト

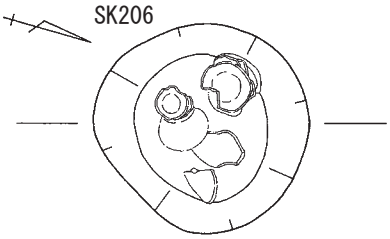


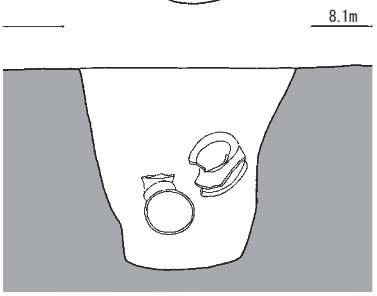


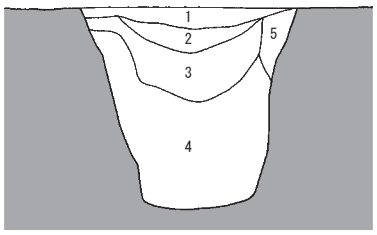




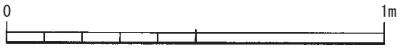
1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂（粗砂粒を多く含む）
2．10YR 3/1　黒褐色シルト
3．10YR 3/1　黒褐色中砂～粗砂
4．2.5Y 3/1　黒褐色シルト質極細砂～細砂
5．10YR 3/1　黒褐色粘土～シルト



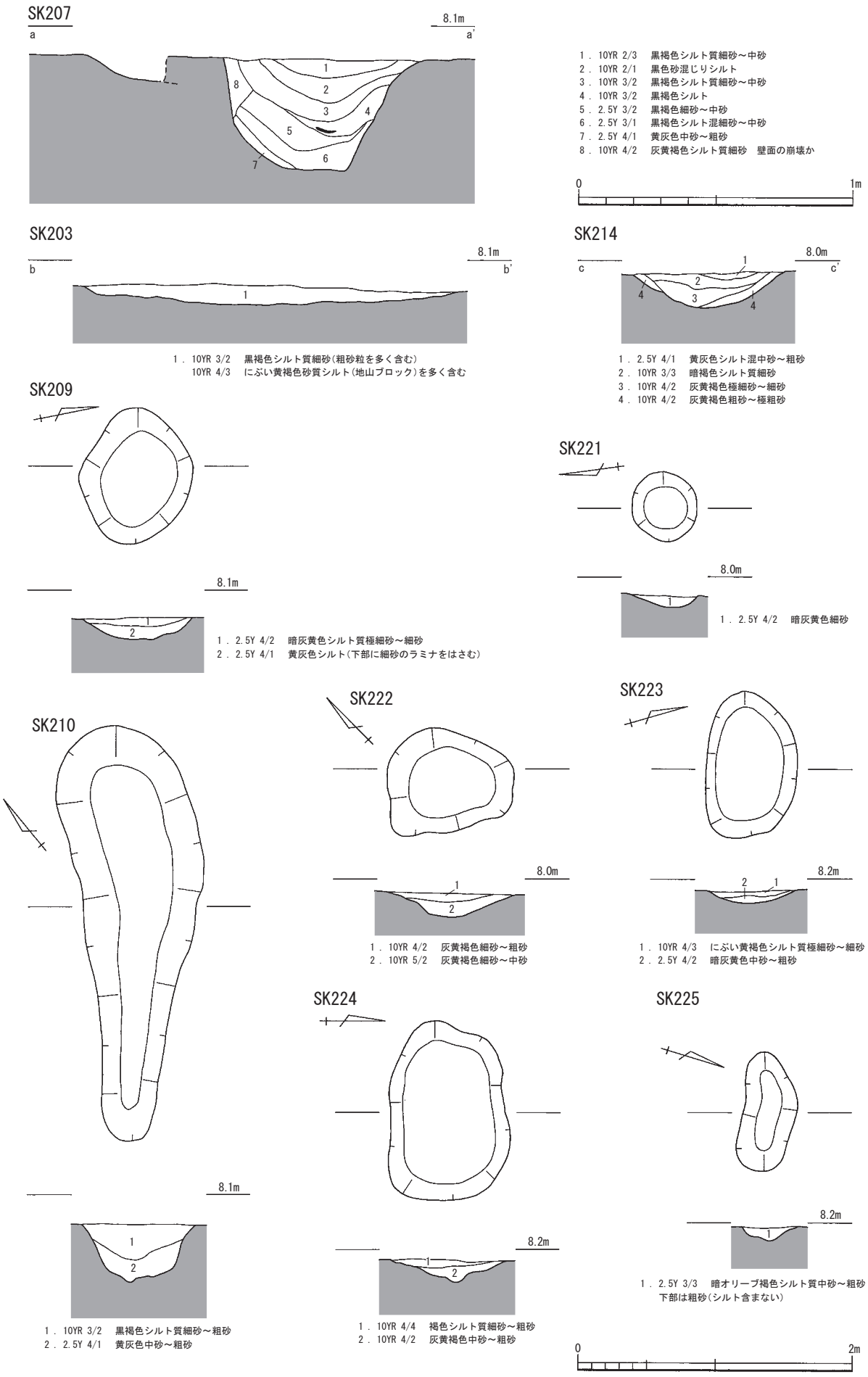




1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂（粗砂粒を多く含む）
2．10YR 3/1　黒褐色シルト
3．10YR 3/1　黒褐色中砂～粗砂
4．10YR 3/1　黒褐色シルト
5．2.5Y 4/3　オリーブ褐色シルト～砂混じりシルト（地山ブロック）

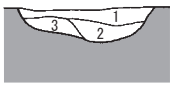


2 区土坑実測図（1）


SK207
a
8.1m
a'
1
2
3
4
5
6
7
8
1．10YR 2/3　黒褐色シルト質細砂～中砂
2．10YR 2/1　黒色砂混じりシルト
3．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂～中砂
4．10YR 3/2　黒褐色シルト
5．2.5Y 3/2　黒褐色細砂～中砂
6．2.5Y 3/1　黒褐色シルト混細砂～中砂
7．2.5Y 4/1　黄灰色中砂～粗砂
8．10YR 4/2　灰黄褐色シルト質細砂　壁面の崩壊か
0
1m
SK203
b
8.1m
b'
1
1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂(粗砂粒を多く含む)
10YR 4/3　にぶい黄褐色砂質シルト(地山ブロック)を多く含む
SK214
c
8.0m
c'
1
2
3
4
4
1．2.5Y 4/1　黄灰色シルト混中砂～粗砂
2．10YR 3/3　暗褐色シルト質細砂
3．10YR 4/2　灰黄褐色極細砂～細砂
4．10YR 4/2　灰黄褐色粗砂～極粗砂
SK209
8.1m
1
2
1．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質極細砂～細砂
2．2.5Y 4/1　黄灰色シルト(下部に細砂のラミナをはさむ)
SK221
8.0m
1
1．2.5Y 4/2　暗灰黄色細砂
SK210
8.1m
1
2
1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂～粗砂
2．2.5Y 4/1　黄灰色中砂～粗砂
SK222
8.0m
1
2
1．10YR 4/2　灰黄褐色細砂～粗砂
2．10YR 5/2　灰黄褐色細砂～中砂
SK223
8.2m
2
1
1．10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト質極細砂～細砂
2．2.5Y 4/2　暗灰黄色中砂～粗砂
SK224
8.2m
1
2
1．10YR 4/4　褐色シルト質細砂～粗砂
2．10YR 4/2　灰黄褐色中砂～粗砂
SK225
8.2m
1
1．2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト質中砂～粗砂
下部は粗砂(シルト含まない)
0
2m

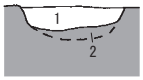
2 区土坑実測図（2）

SD201①

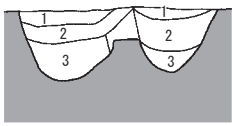


1．2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト質粗砂
2．2.5Y 3/2　黒褐色シルト質細砂～中砂
3．2.5Y 4/3　オリーブ褐色シルト質細砂～中砂

SD201②

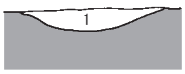


1．10YR 3/3　暗褐色シルト質細砂～粗砂
2．10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト質細砂～粗砂



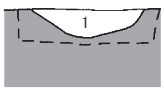
SD201
1．10YR 3/3　暗褐色シルト質細砂～中砂
2．10YR 4/2　灰黄褐色細砂～粗砂
3．2.5Y 4/3　オリーブ褐色シルト質細砂～粗砂
SD202
1．2.5Y 4/2　暗灰黄色細砂～粗砂
2．10YR 4/2　灰黄褐色細砂～中砂
3．10YR 5/2　灰黄褐色中砂～粗砂

SD208①



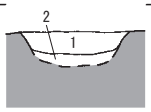
1．2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト質細砂～粗砂
（小礫を散漫に含む）

SD208②



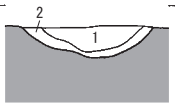
1．10YR 3/3　暗褐色シルト質細砂～粗砂

SD208③



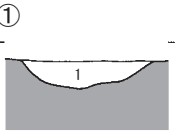
1．10YR 2/3　黒褐色シルト質砂
2．10YR 3/3　暗褐色細砂～中砂

SD208④



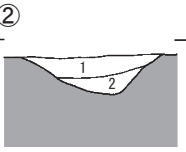
1．10YR 2/3　黒褐色シルト質粗砂
2．10YR 3/3　暗褐色細砂～中砂

SD212①



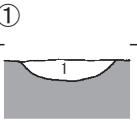
1．2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト質細砂～粗砂

SD212②



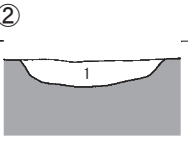
1．10YR 3/2　黒褐色砂質シルト
2．10YR 4/2　灰黄褐色シルト質細砂～中砂

SD213①



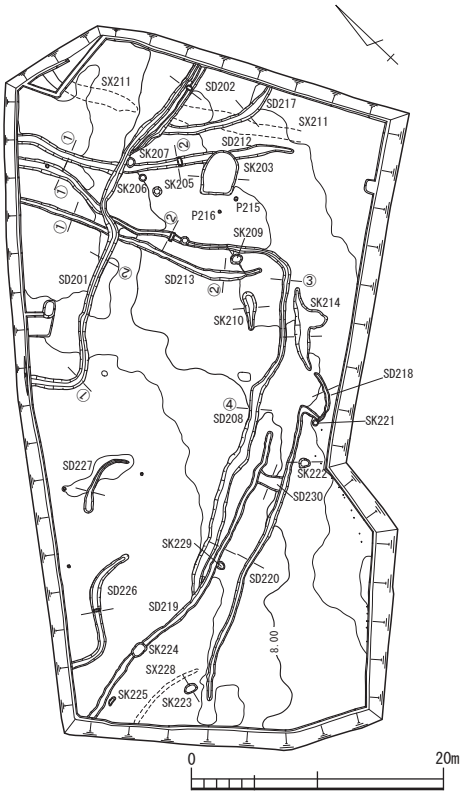
1．2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト質細砂～粗砂

SD213②



1．10YR 3/3　暗褐色シルト質細砂～粗砂

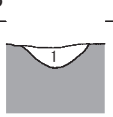
0　2m



SD217

1．10YR 4/1　褐灰色シルト質細砂～粗砂

SD218

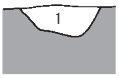


1．2.5Y 4/4　オリーブ褐色細砂～粗砂

SD219

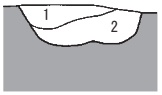
1．10YR 4/3　にぶい黄褐色細砂～粗砂

SD220



1．10YR 4/2　灰黄褐色極細砂～細砂

SD226

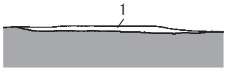


1．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質粗砂～極粗砂
2．2.5Y 5/2　暗灰黄色細砂～中砂

SD227

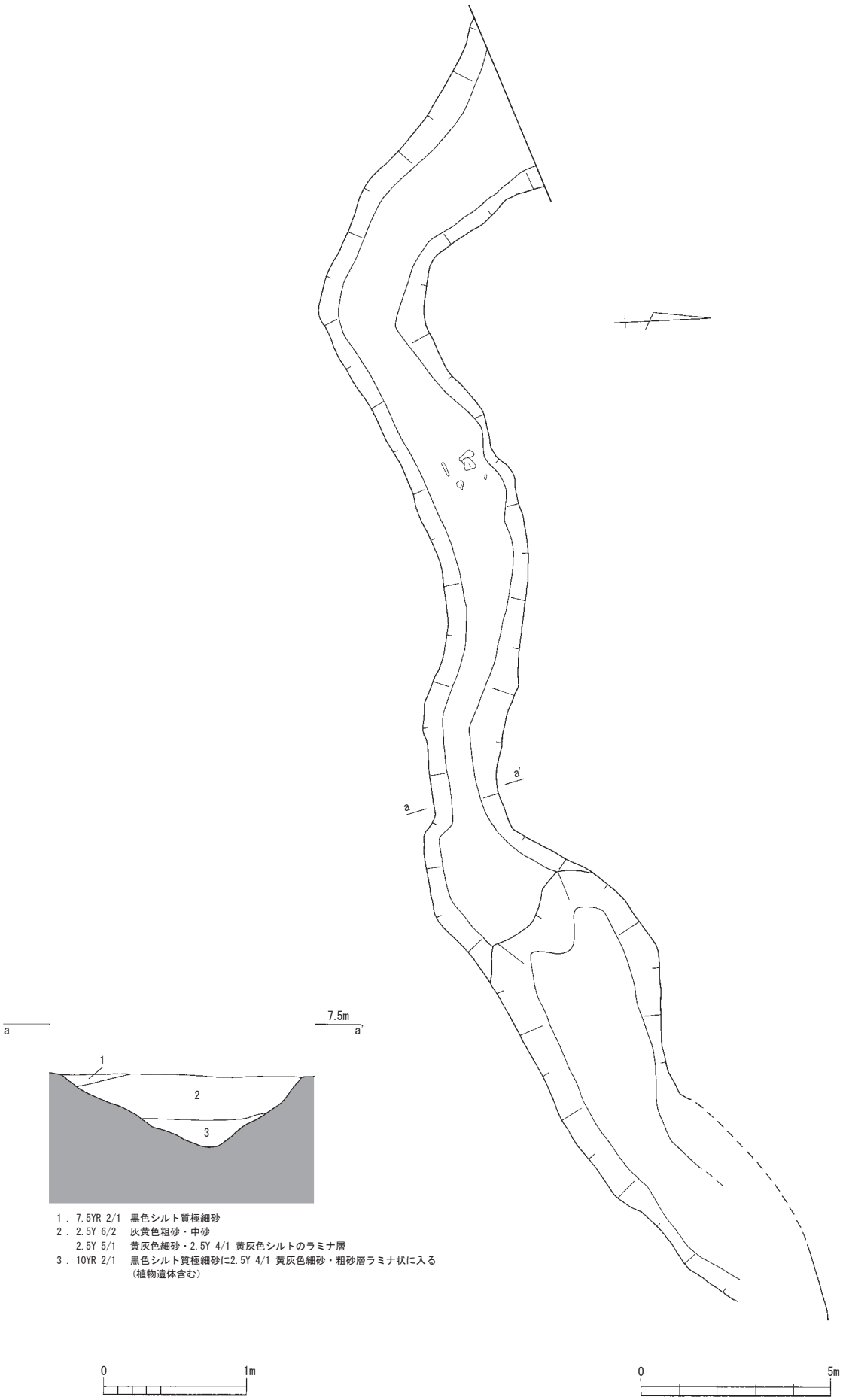
1．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質粗砂～極粗砂

SD230

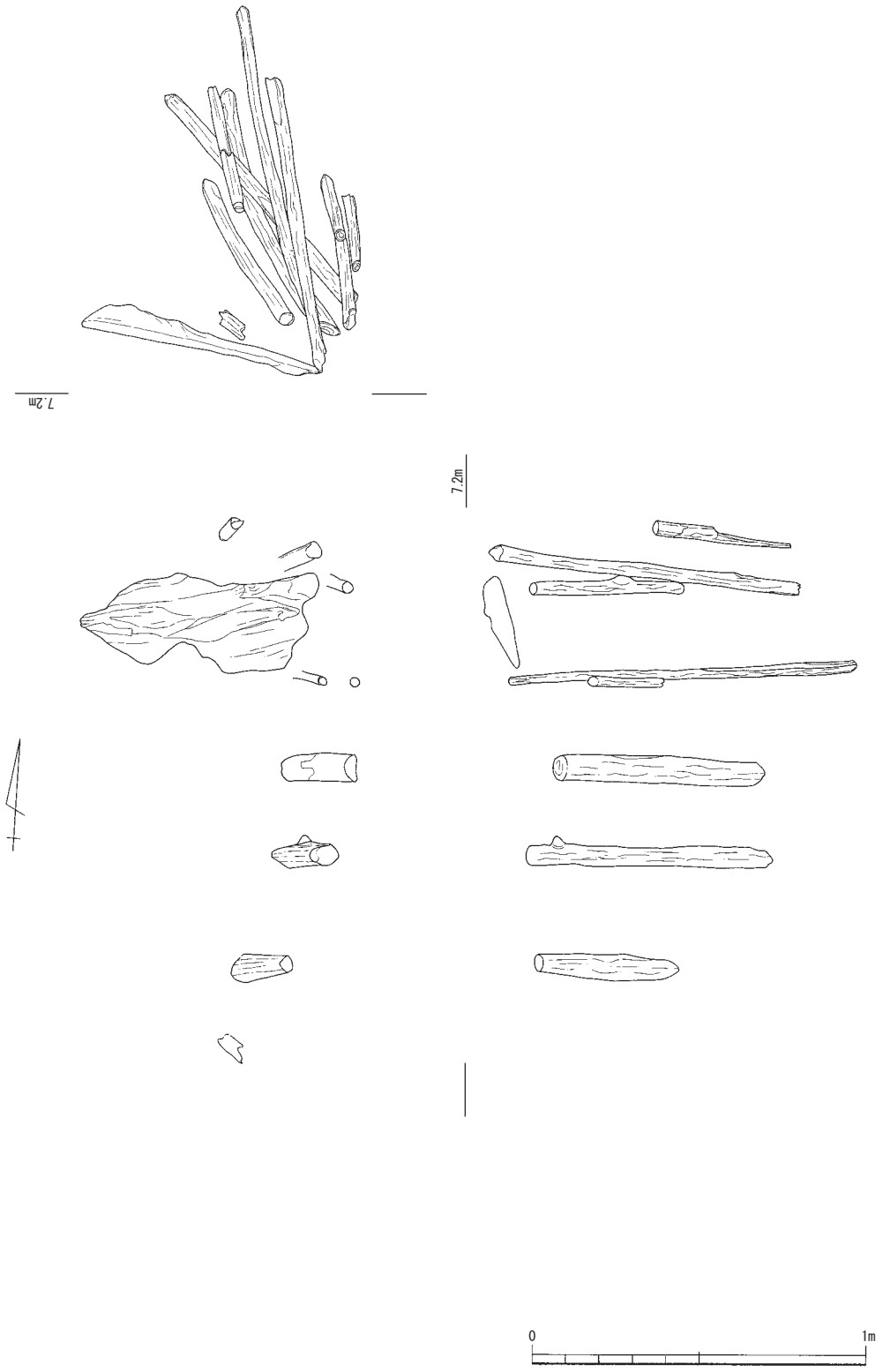


1．2.5Y 4/3　オリーブ褐色粗砂

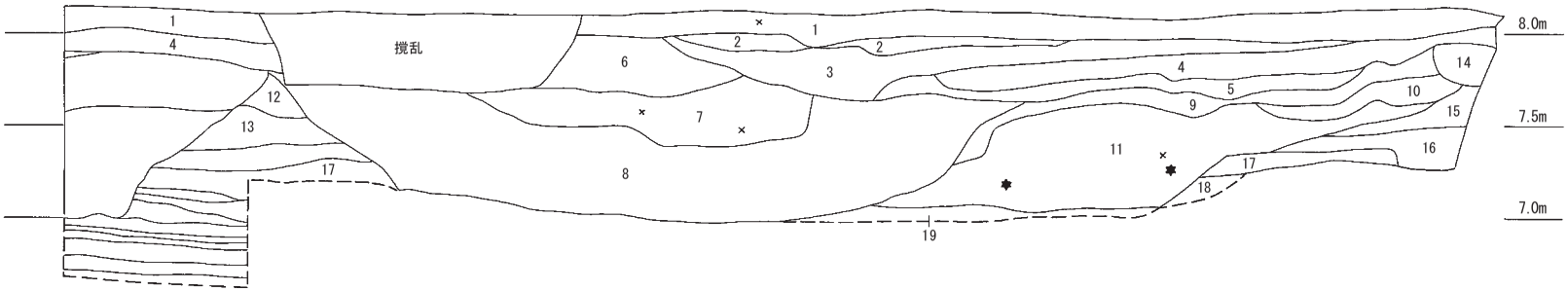
2 区溝実測図


a
a'
7.5m
a
a'
1
2
3
1．7.5YR 2/1　黒色シルト質極細砂
2．2.5Y 6/2　灰黄色粗砂・中砂
2.5Y 5/1　黄灰色細砂・2.5Y 4/1 黄灰色シルトのラミナ層
3．10YR 2/1　黒色シルト質極細砂に2.5Y 4/1 黄灰色細砂・粗砂層ラミナ状に入る
（植物遺体含む）
0
1m
0
5m

2 区下層旧河道実測図



2 区下層旧河道内杭列実測図

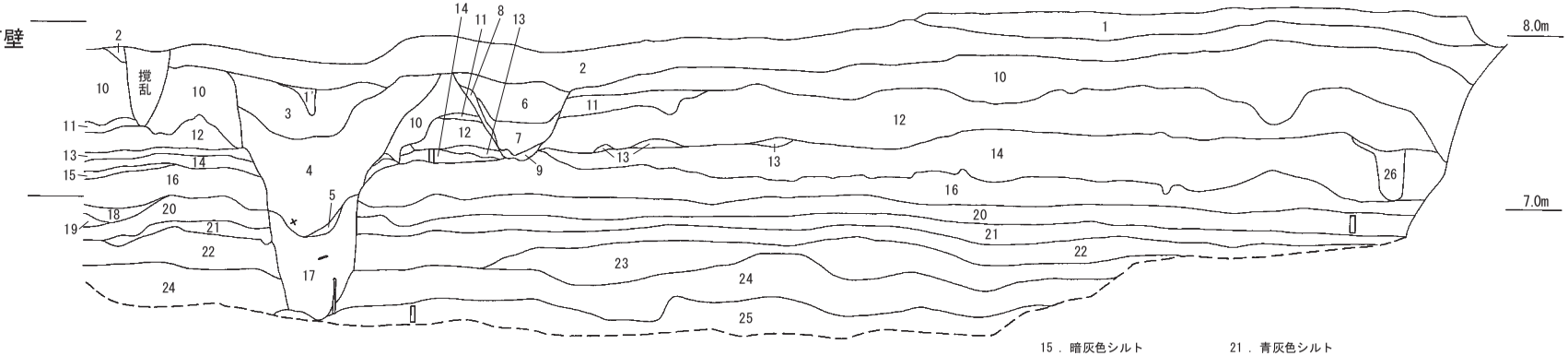


1．2.5Y 4/4　オリーブ褐色シルト混細砂～粗砂
極粗砂粒を多く含む　劣化の進んだ土器片をわずかに含む
2．2.5Y 4/6　オリーブ褐色シルト混極細砂～細砂
粗砂～極粗砂粒を多く含む部分が見られる
3．2.5Y 5/3　黄褐色極細砂～細砂　上半部でややシルト化する
4．10YR 4/2　灰黄褐色細砂　やや土壌化しているように見える
5．2.5Y 5/2　暗灰黄色極細砂～細砂　局部的に粗砂～極粗砂粒を多く含む
6．10YR 5/2　灰黄褐色砂　細砂～中砂に粗砂～極粗砂のラミナをはさむ
7．2.5Y 5/1　黄灰色砂　細砂～中砂とφ1～3cmの礫を含む　粗砂～極粗砂のラミナが発達する
8．2.5Y 5/1　黄灰色砂　細砂～中砂と粗砂～極粗砂および腐植質を含むシルト～極細砂のラミナが発達する
局部的に粗砂～極粗砂のブロックを含む　両肩部付近では細粒化する
9．5Y 4/1　灰色極細砂～細砂　酸化鉄の集積が著しい
10．2.5Y 5/2　暗灰黄色細砂～中砂
11．5Y 4/1　灰色砂　極細砂～細砂とφ2cm以下の礫を含む粗砂～極粗砂およびシルト～極細砂のラミナ状をなす
17の引きちぎられたようなブロック(✱)を含む
12．2.5Y 4/2　暗灰黄色砂～シルト質砂　下部では粗砂主体、上部はシルト質細砂主体(グレーディング)
13．2.5Y 5/1　黄灰色砂　下部よりシルト～極細砂、細砂～粗砂、シルト～極細砂のラミナ状をなす
14．10YR 4/2　灰黄褐色シルト混粗砂～極粗砂
15．10YR 5/2　灰黄褐色細砂～粗砂　酸化鉄の集積が著しい
16．2.5Y 5/2　暗灰黄色礫混砂　礫はφ2cm以下、細砂～粗砂
17．10YR 2/1　黒色シルト混細砂～粗砂　φ1cm以下の礫を少量含む
18．2.5Y 4/1　黄灰色粗砂～極粗砂
19．10Y 4/1　灰色粘土～シルト　上部2～3cmほどは極細砂
×．土器

2区断ち割り断面図（1）

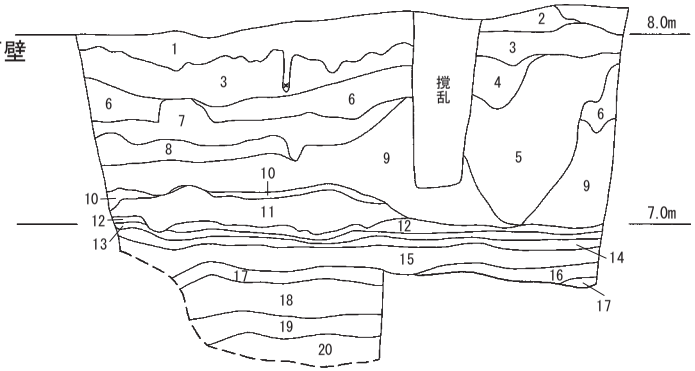
2区断ち割り断面図（2）・3区断ち割り断面図

南壁

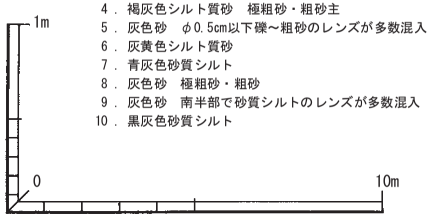


1．褐灰色シルト質粗砂　グラニウル混入
1'．褐灰色シルト質粗砂
2．暗黄灰色砂質シルト
3．黄灰色砂質シルト　砂のレンズ多数
4．灰色シルト質砂　土器片
5．黒灰色シルト
6．黄灰色　シルト質砂
7．灰色砂質シルト　細砂のレンズ多数
8．黄灰色シルト質粗砂
9．灰色砂
10．褐灰色シルト質粗砂
11．黄灰色砂質シルト
12．灰色シルト質砂
13．暗灰色シルト
14．灰黒色シルト質砂　粗砂多し　南西部にはφ0.5cm以下礫混入　下半部が青灰色
15．暗灰色シルト
16．青灰色シルト
17．灰色砂
18．暗灰色シルト
19．青灰色シルト
20．黒灰色シルト
21．青灰色シルト
22．灰黒色シルト
23．灰黒色シルト質砂　粗砂多し
24．青灰色シルト
25．灰黒色シルト
26．灰色砂
×．土器
※．20、25内の□はサンプル採取箇所

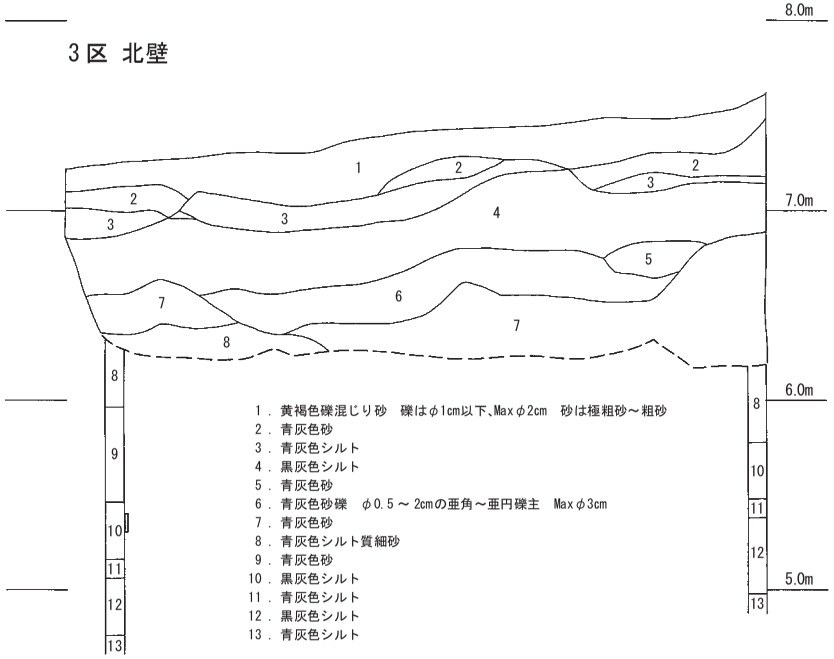
西壁



1．黄褐色シルト質砂　粗砂主　φ0.5cm以下礫混入
2．灰黄色シルト
3．黄褐色砂質シルト（トレンチ1の2層）
4．褐灰色シルト質砂　極粗砂・粗砂主
5．灰色砂　φ0.5cm以下礫～粗砂のレンズが多数混入
6．灰黄色シルト質砂
7．青灰色砂質シルト
8．灰色砂　極粗砂・粗砂
9．灰色砂　南半部で砂質シルトのレンズが多数混入
10．黒灰色砂質シルト
11．灰色シルト質砂　極粗砂・粗砂多し
12．緑灰色シルト
13．黒灰色シルト
14．緑灰色シルト
15．黒灰色シルト
16．暗緑灰色シルト
17．灰黒色シルト
18．緑灰色シルト
19．灰黒色シルト
20．灰黒色シルト質砂　極粗砂・粗砂主
×．土器

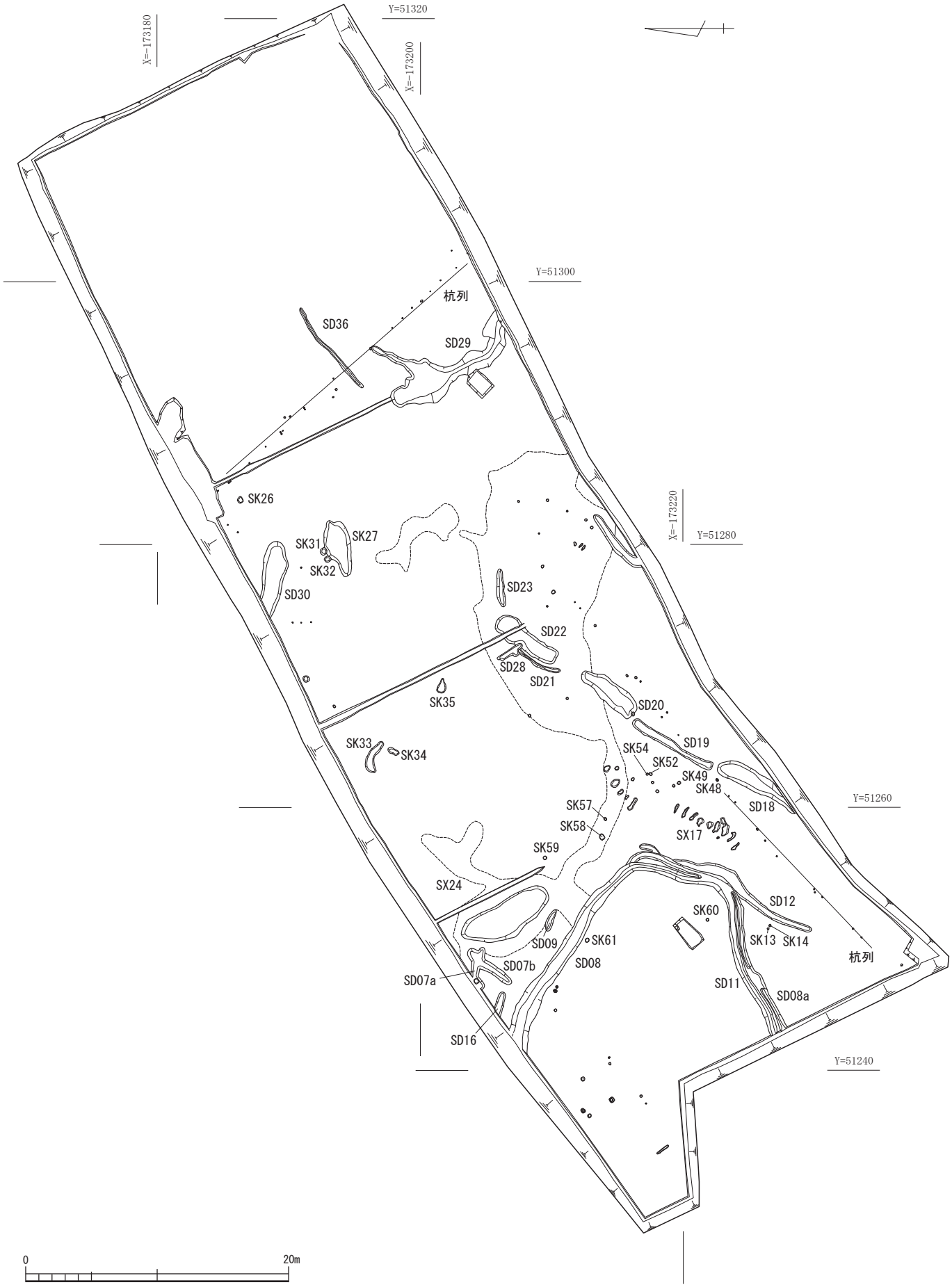


3区 北壁

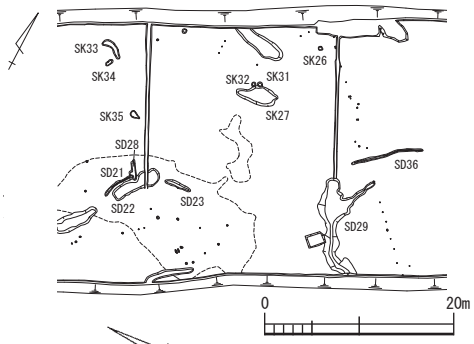


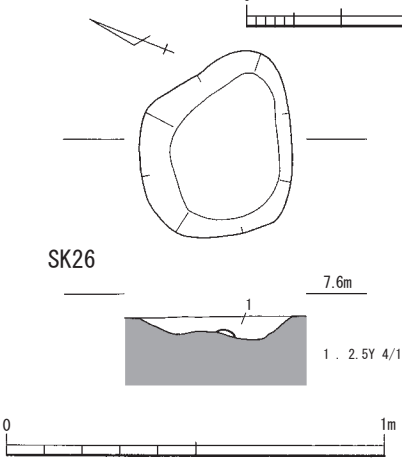
1．黄褐色礫混じり砂　礫はφ1cm以下、Maxφ2cm　砂は極粗砂～粗砂
2．青灰色砂
3．青灰色シルト
4．黒灰色シルト
5．青灰色砂
6．青灰色砂礫　φ0.5～2cmの亜角～亜円礫主　Maxφ3cm
7．青灰色砂
8．青灰色シルト質細砂
9．青灰色砂
10．黒灰色シルト
11．青灰色シルト
12．黒灰色シルト
13．青灰色シルト

図版11

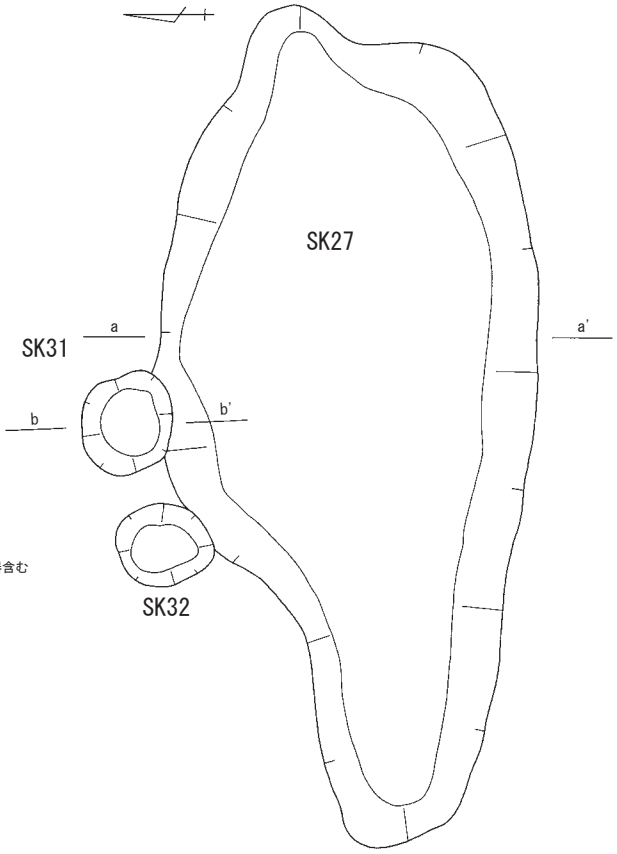

Y=51320
X=-173180
X=-173200
Y=51300
杭列
SD36
SD29
SK26
SK31
SK27
SK32
SD30
X=-173220
Y=51280
SD23
SD22
SD28
SD21
SK35
SD20
SK33
SK34
SD19
SK54
SK52
SK49
SK48
SD18
Y=51260
SK57
SK58
SX17
SK59
SX24
SD12
SK60
SK13
SK14
SD09
SK61
SD08
SD07b
SD07a
SD11
SD08a
杭列
SD16
Y=51240
0
20m

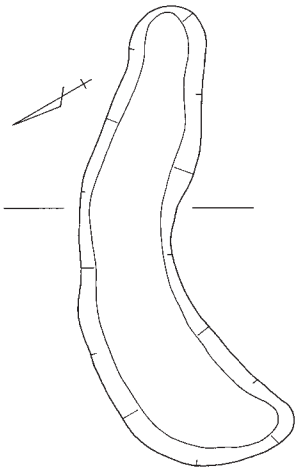
3区上層実測図



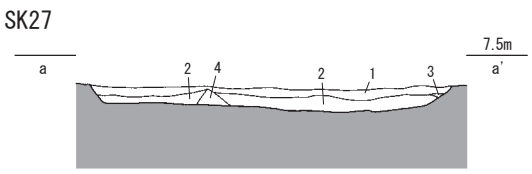


1．2.5Y 4/1　黄灰色砂質シルト　土器含む

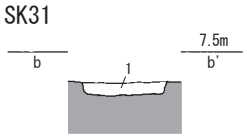




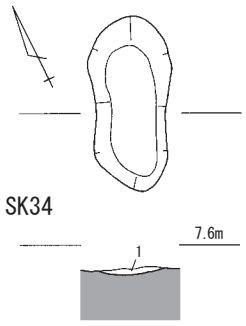
1．10YR 4/2　灰黄褐色砂質シルト
2.5Y 4/3　オリーブ褐色　シルトのブロック含む



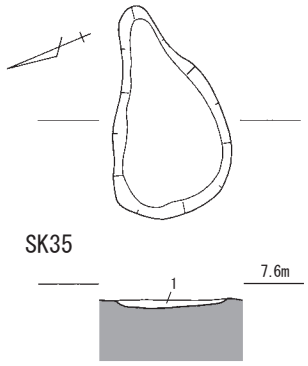
1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂～粗砂
点状の鉄分集積が散布
2．10YR 2/2　黒褐色砂質シルト
雨だれ状の鉄分集積が見られる
3．10YR 3/3　暗褐色シルト質粗砂
4．10YR 4/4　褐色シルト質粗砂



1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂～粗砂
点状の鉄分集積が散布



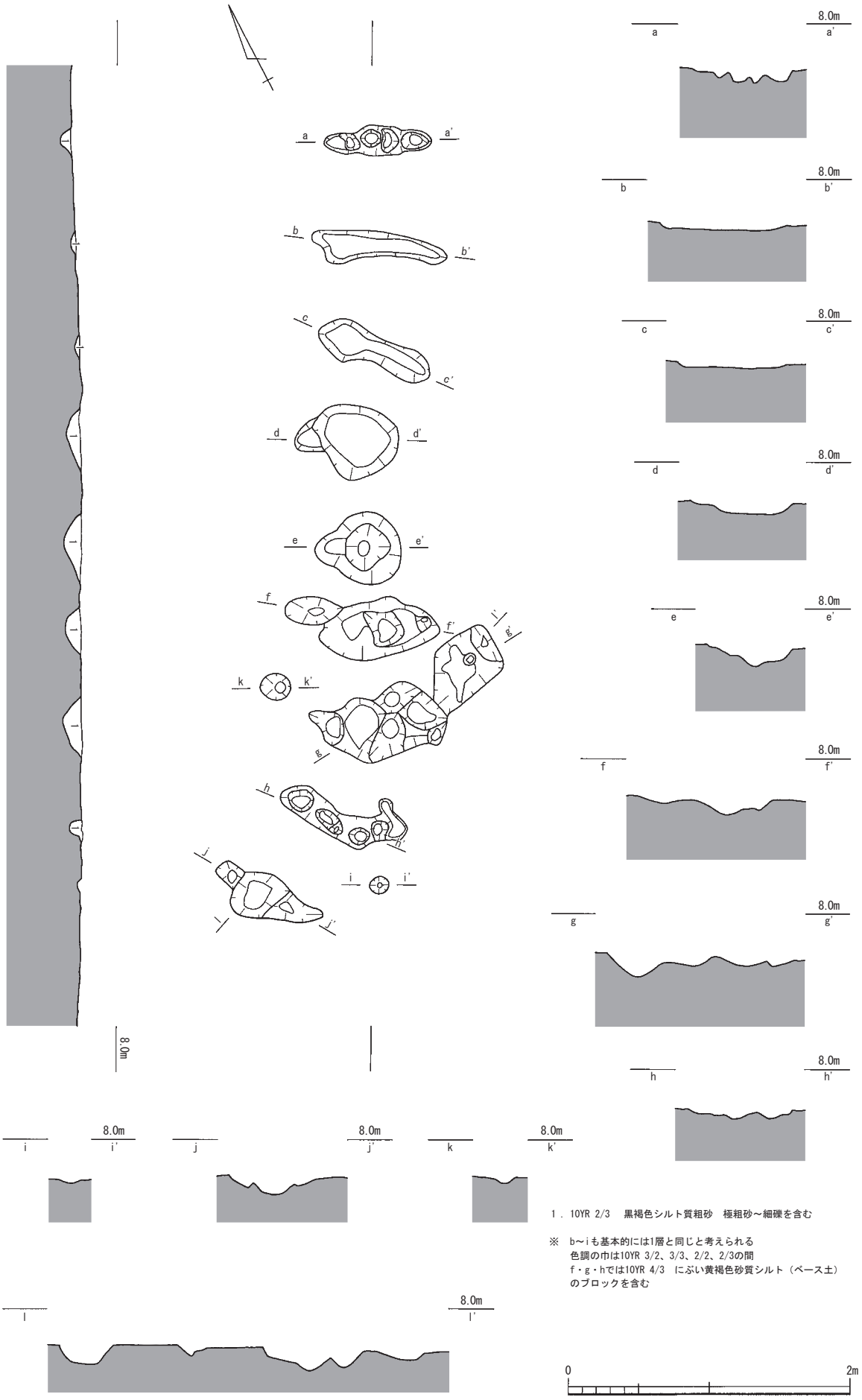
1．10YR 3/2　黒褐色砂質シルト
2.5Y 4/3　オリーブ褐色　シルトのブロックを含む



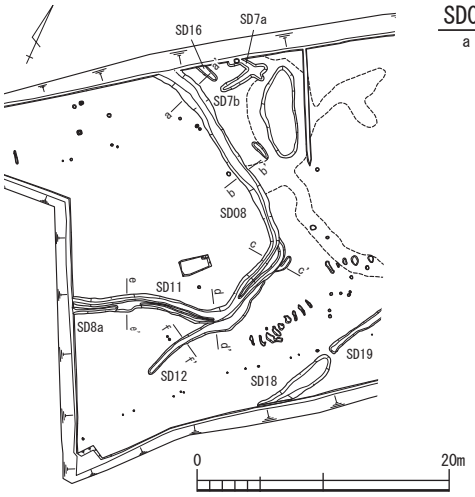
1．10YR 4/3　にぶい黄褐色砂質シルト
2.5Y 4/3　オリーブ褐色　シルト質のブロックを含む

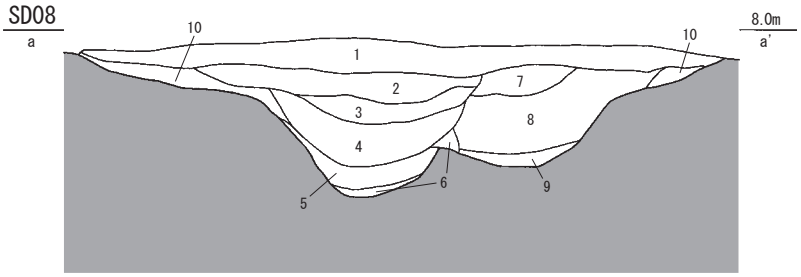
0　2m

3区土坑実測図

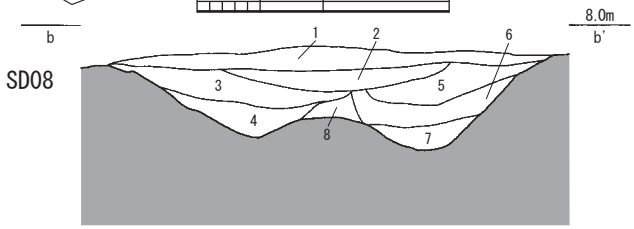


3区波板状遺構（SX17）実測図

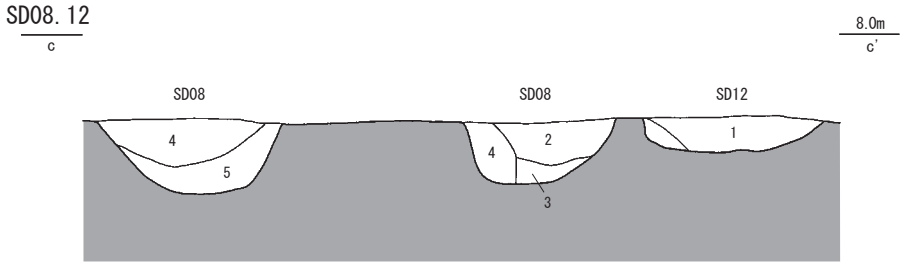




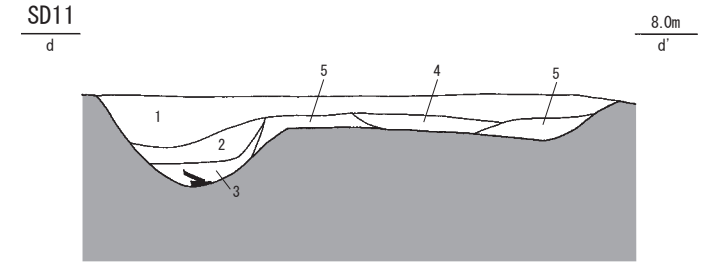
1．10YR 3/1　黒褐色砂質シルト　極粗砂多く含む
2．10YR 2/1　黒色砂質シルト　極粗砂少量含む
3．10YR 2/1　黒色砂質シルト(砂含まず、シルト質強い)
4．2.5Y 3/2　黒褐色砂質シルト(地山少量含む)
5．2.5Y 4/1　黄灰色細砂(地山含む)
6．地山
7．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト　粗砂少量含む
8．10YR 4/1　褐灰色砂質シルト　粗砂中ごろで地山
9．2.5Y 4/1　黄灰色細砂(地山含む)
10．2.5Y 4/2　暗灰色細砂



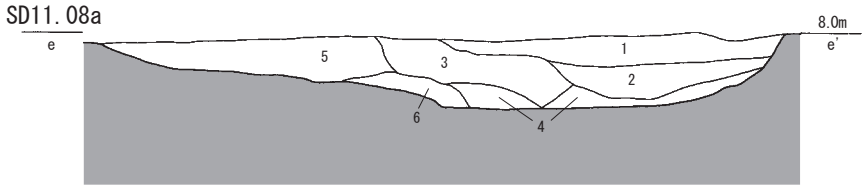
1．2.5Y 2/1　黒色砂質シルト　粗砂含む
2．10YR 2/1　黒色砂質シルト　粗砂含む
3．10YR 3/3　暗褐色砂質シルト
4．10YR 4/2　灰黄褐色砂質シルト
5．10YR 3/2　黒褐色砂質シルト
6．10YR 3/1　黒褐色極細砂
7．10YR 4/1　褐灰色細砂
8．地山



1．2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト混中砂～粗砂
2．10YR 3/1　黒褐色シルト混中砂～粗砂
3．2.5Y 3/1　黒褐色粗砂
4．2.5Y 3/1～3/2　黒褐色シルト質粗砂　上面付近極粗砂粒多し
5．10YR 3/1　黒褐色粗砂

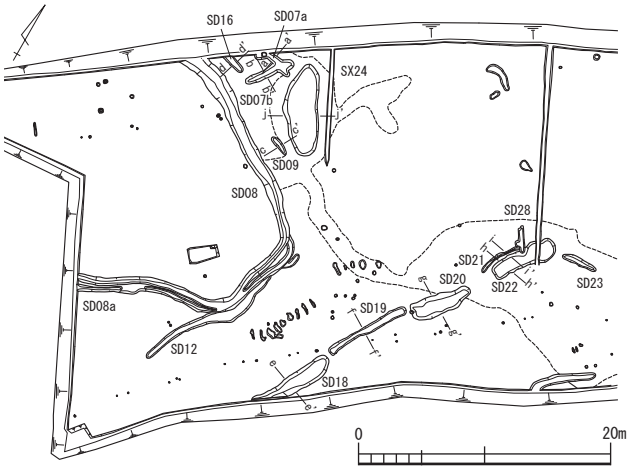


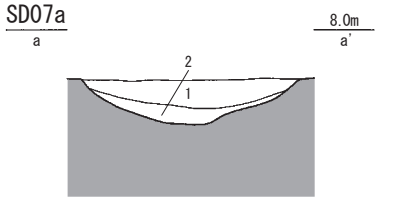
1．2.5Y 3/2　黒褐色砂質シルト　粗砂含む
2．10YR 2/1　黒色極細砂
3．2.5Y 4/1　黄灰色砂質シルト　弥生土器含む
4．2.5Y 2/1　黒色極細砂
5．2.5Y 4/2　暗灰黄色砂質シルト　粗砂含む



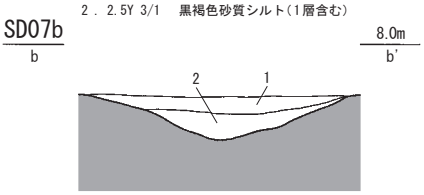
1．10YR 3/1　黒褐色砂質シルト　細砂含む
2．10YR 3/2　黒褐色砂質シルト　細砂含む
3．10YR 2/1　黒色砂質シルト
4．2.5Y 4/1　黄灰色細砂
5．2.5Y 4/2　褐灰黄色中砂　→　SD12
6．2.5Y 4/3　オリーブ褐色細砂～中砂

3区溝実測図（1）

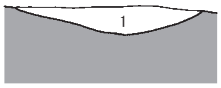




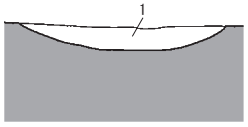
1．2.5Y 2/1　黒色砂質シルト　粗砂含む
2．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト(1層含む)



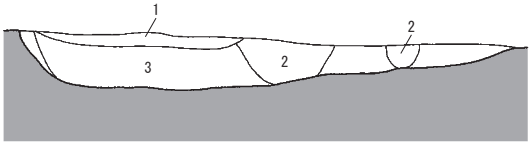
1．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト　極粗砂多く含む
2．10YR 3/1　黒褐色細砂～粗砂



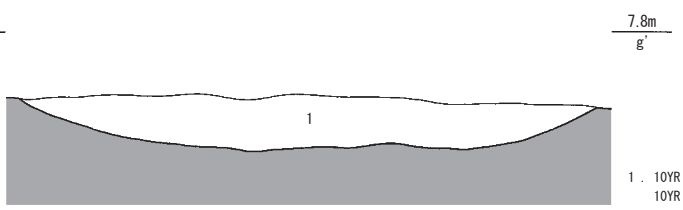
1．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト(地山多く含む)



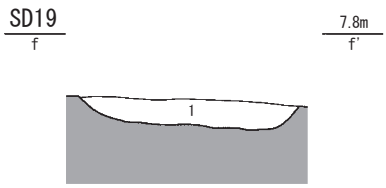
1．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト　粗砂含む



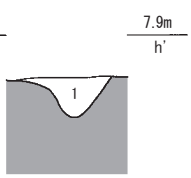
1．10YR 3/2　黒褐色中砂～粗砂
2．10YR 4/3　にぶい黄褐色砂質シルト(ベース土のブロック)
3．2.5Y 4/1　黄灰色粗砂



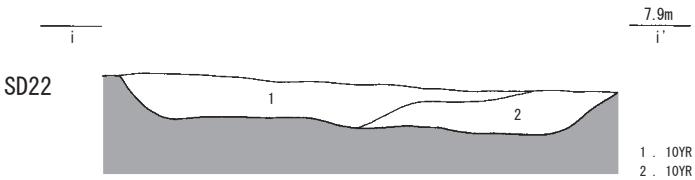
1．10YR 3/2　黒褐色粗砂
10YR 4/3　にぶい黄褐色砂質シルト(ベース)のブロックを含む



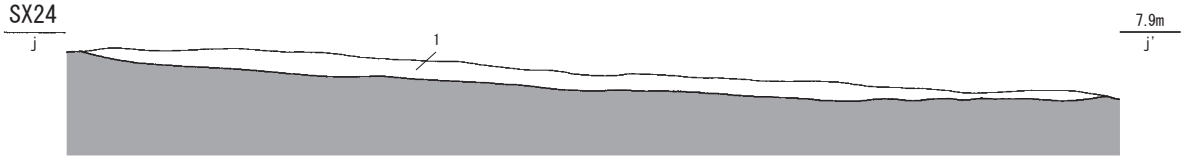
1．10YR 3/2　黒褐色粗砂　粗砂層が塊状にベースに貫入している(浸食？)ため
全体に粗大な斑状に見える　SD18・20・21でも類同の状況が見られる



1．10YR 3/2　黒褐色粗砂



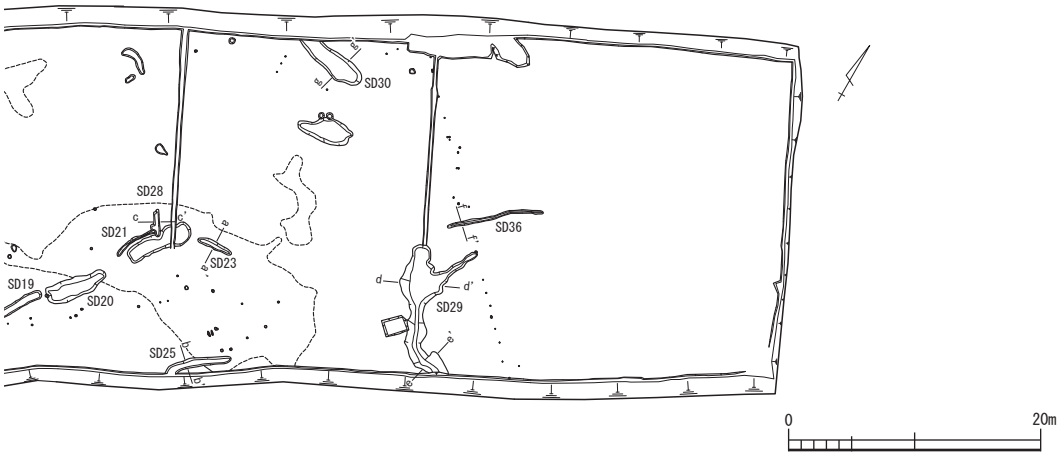
1．10YR 3/2　黒褐色シルト混中砂～粗砂
2．10YR 3/1　黒褐色粗砂

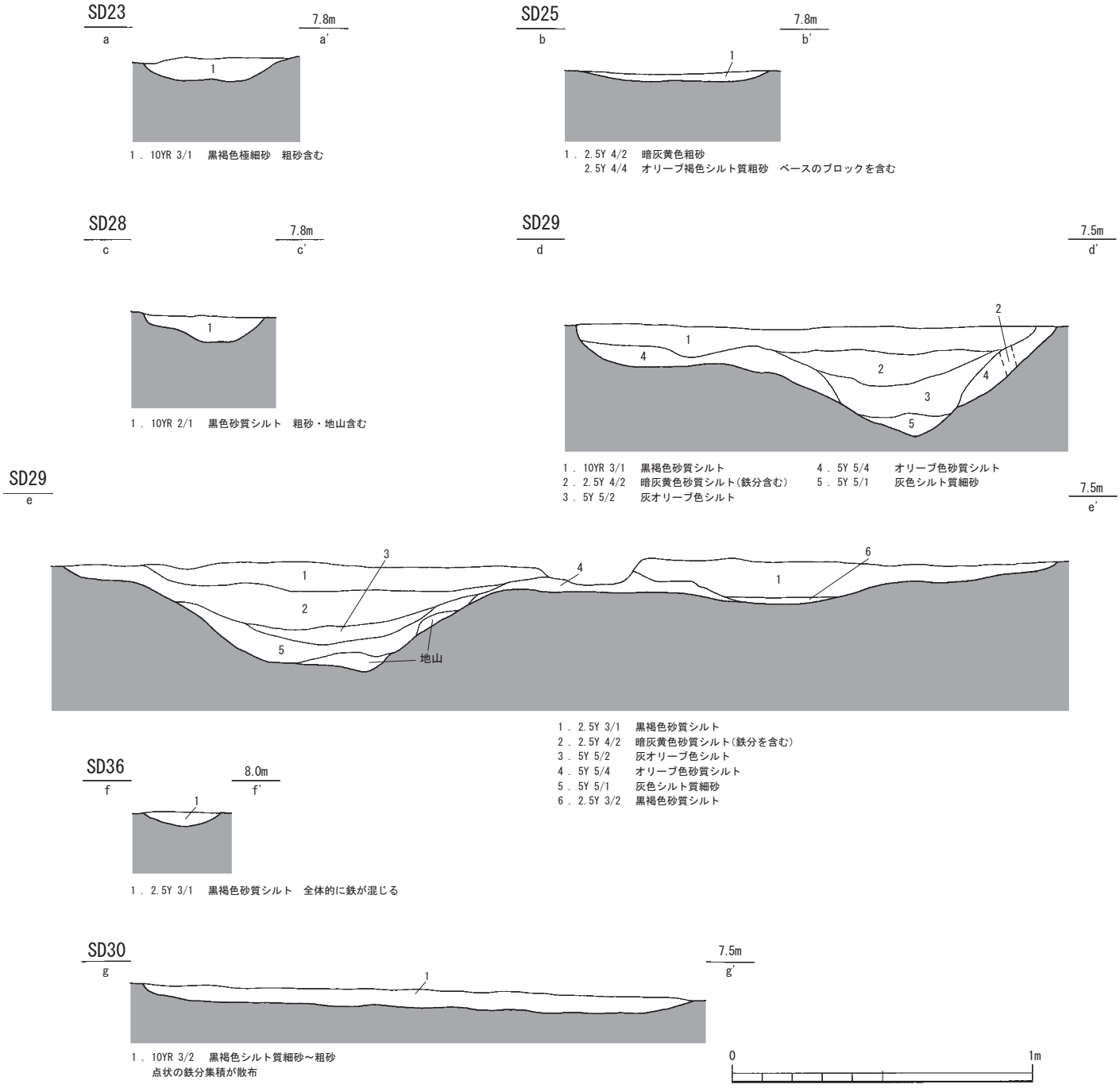


1．2.5Y 3/1　黒褐色粗砂
部分的に拳大～拳の2倍大程の塊状の砂質シルトを含む
色調は10YR 2/1

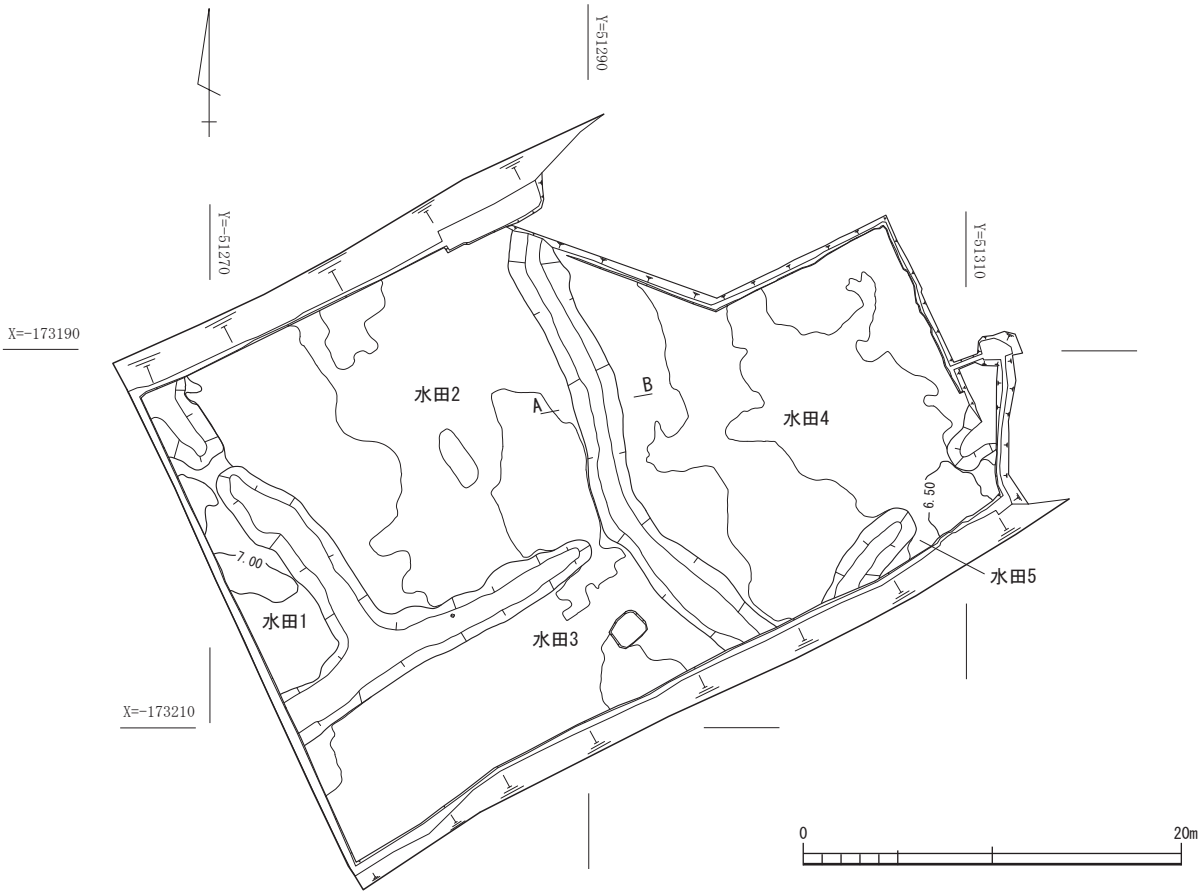
0　1m

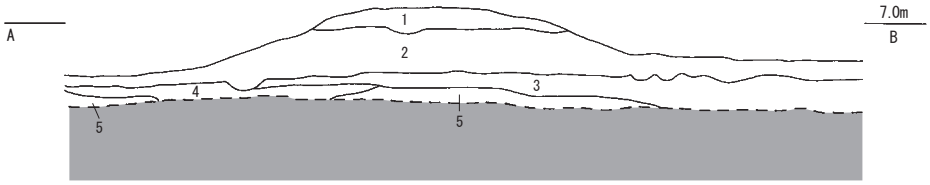
3区溝実測図（2）


SD30
SD28
SD21
SD23
SD19
SD20
SD25
SD36
SD29
0
20m

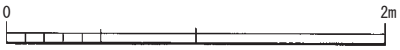

SD23
a
7.8m
a'
1
1．10YR 3/1　黒褐色極細砂　粗砂含む
SD25
b
7.8m
b'
1
1．2.5Y 4/2　暗灰黄色粗砂
2.5Y 4/4　オリーブ褐色シルト質粗砂　ベースのブロックを含む
SD28
c
7.8m
c'
1
1．10YR 2/1　黒色砂質シルト　粗砂・地山含む
SD29
d
7.5m
d'
1
2
3
4
5
1．10YR 3/1　黒褐色砂質シルト
2．2.5Y 4/2　暗灰黄色砂質シルト(鉄分含む)
3．5Y 5/2　灰オリーブ色シルト
4．5Y 5/4　オリーブ色砂質シルト
5．5Y 5/1　灰色シルト質細砂
SD29
e
7.5m
e'
1
2
3
4
5
6
地山
1．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト
2．2.5Y 4/2　暗灰黄色砂質シルト(鉄分を含む)
3．5Y 5/2　灰オリーブ色シルト
4．5Y 5/4　オリーブ色砂質シルト
5．5Y 5/1　灰色シルト質細砂
6．2.5Y 3/2　黒褐色砂質シルト
SD36
f
8.0m
f'
1
1．2.5Y 3/1　黒褐色砂質シルト　全体的に鉄が混じる
SD30
g
7.5m
g'
1
1．10YR 3/2　黒褐色シルト質細砂～粗砂
点状の鉄分集積が散布
0
1m

3区溝実測図（3）



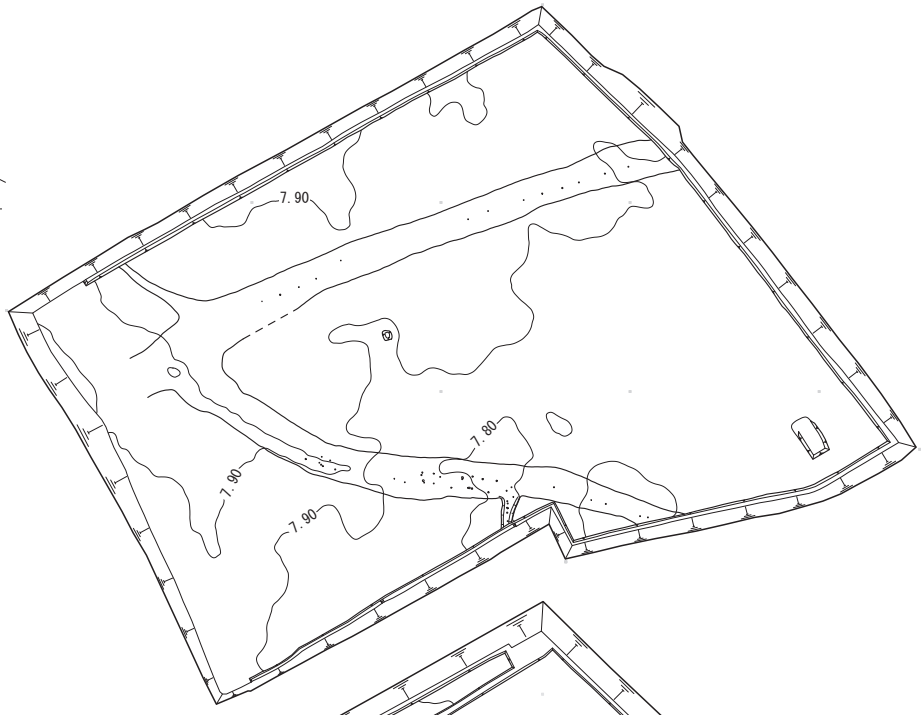


1．10YR 3/1　黒褐色砂混じりシルト　極細砂～細砂をブロック状にはさむ
2．7.5Y 2/1　黒色シルト～粘土　大畦畔部では、下位ほど暗色を呈する
3．5GY 3/1　暗オリーブ灰色シルト　筒状～ひも状に2層の貫入が見られる　生痕と思われる
4．2.5Y 4/2　暗灰黄色細砂～中砂　3層同様、2層の貫入が見られる
5．10Y 4/1　灰色シルト～粘土

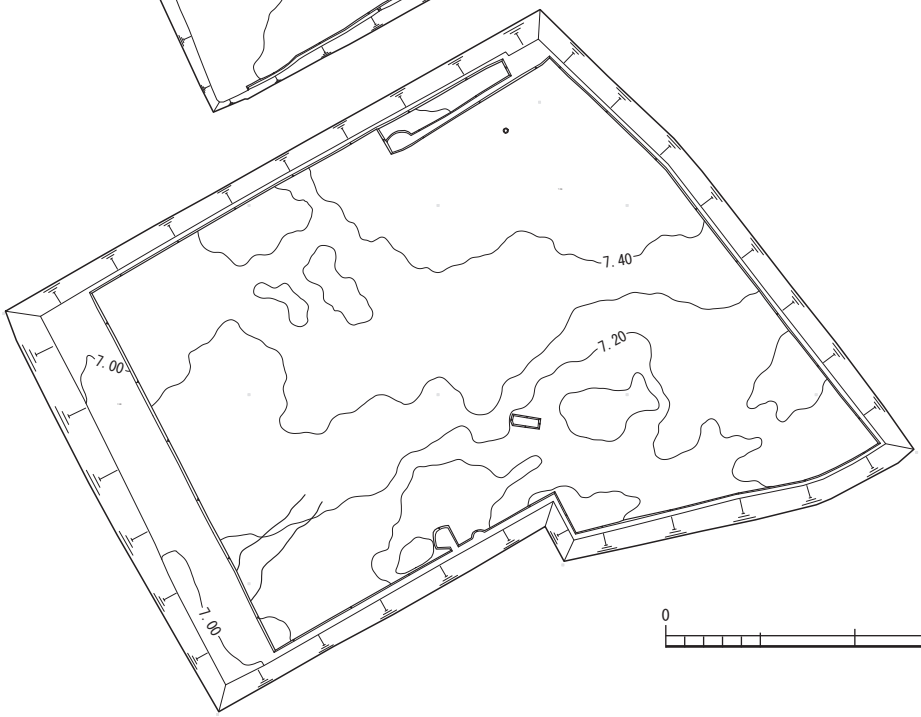


3区下層実測図

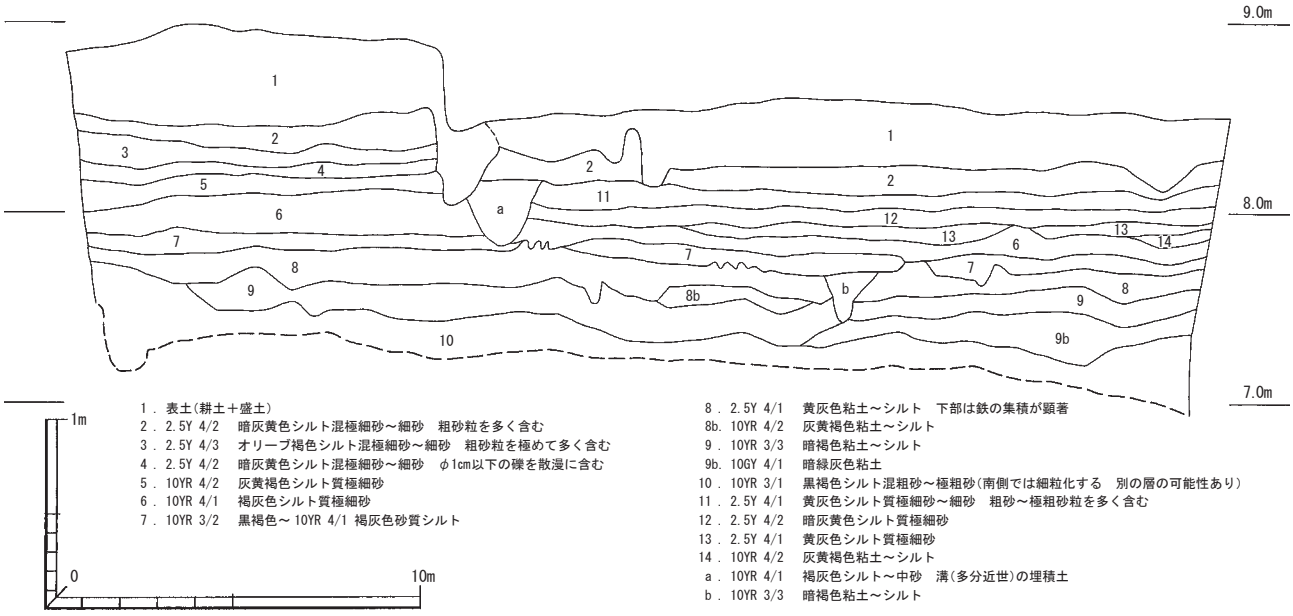
上層



下層

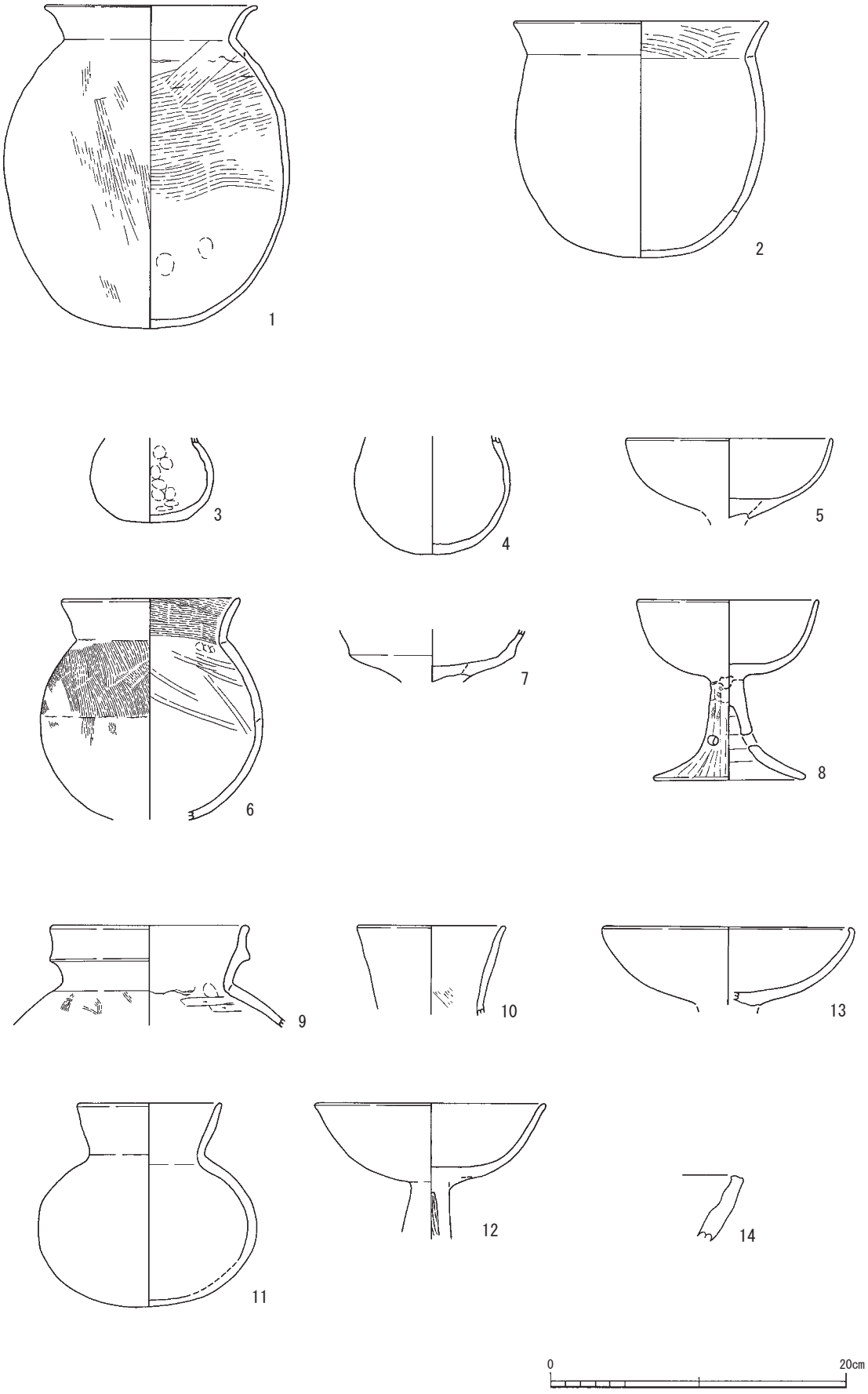


北東壁

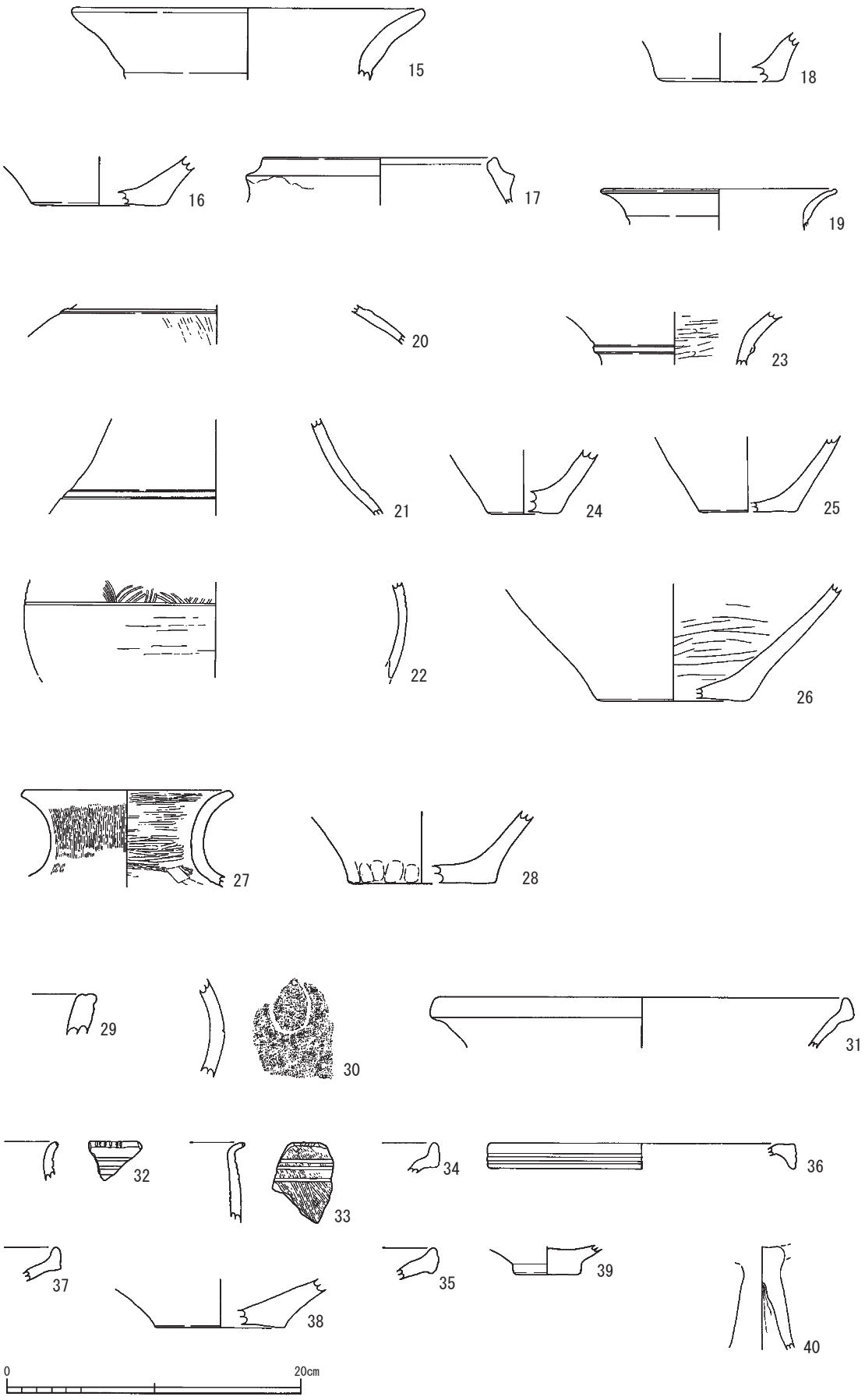


1．表土(耕土＋盛土)
2．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト混極細砂～細砂　粗砂粒を多く含む
3．2.5Y 4/3　オリーブ褐色シルト混極細砂～細砂　粗砂粒を極めて多く含む
4．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト混極細砂～細砂　φ1cm以下の礫を散漫に含む
5．10YR 4/2　灰黄褐色シルト質極細砂
6．10YR 4/1　褐灰色シルト質極細砂
7．10YR 3/2　黒褐色～ 10YR 4/1 褐灰色砂質シルト
8．2.5Y 4/1　黄灰色粘土～シルト　下部は鉄の集積が顕著
8b．10YR 4/2　灰黄褐色粘土～シルト
9．10YR 3/3　暗褐色粘土～シルト
9b．10GY 4/1　暗緑灰色粘土
10．10YR 3/1　黒褐色シルト混粗砂～極粗砂(南側では細粒化する　別の層の可能性あり)
11．2.5Y 4/1　黄灰色シルト質極細砂～細砂　粗砂～極粗砂粒を多く含む
12．2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質極細砂
13．2.5Y 4/1　黄灰色シルト質極細砂
14．10YR 4/2　灰黄褐色粘土～シルト
a．10YR 4/1　褐灰色シルト～中砂　溝(多分近世)の埋積土
b．10YR 3/3　暗褐色粘土～シルト

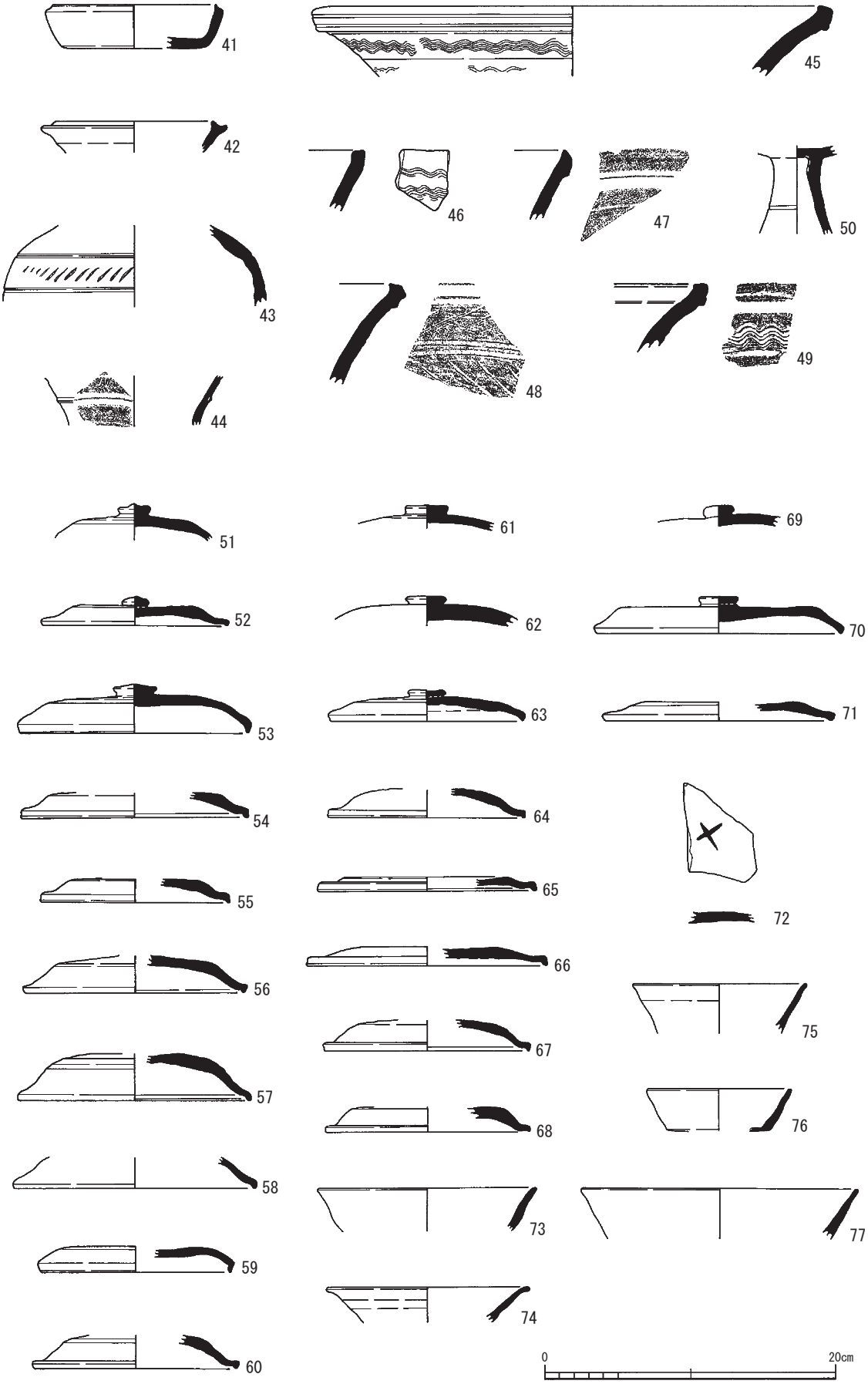
4区実測図



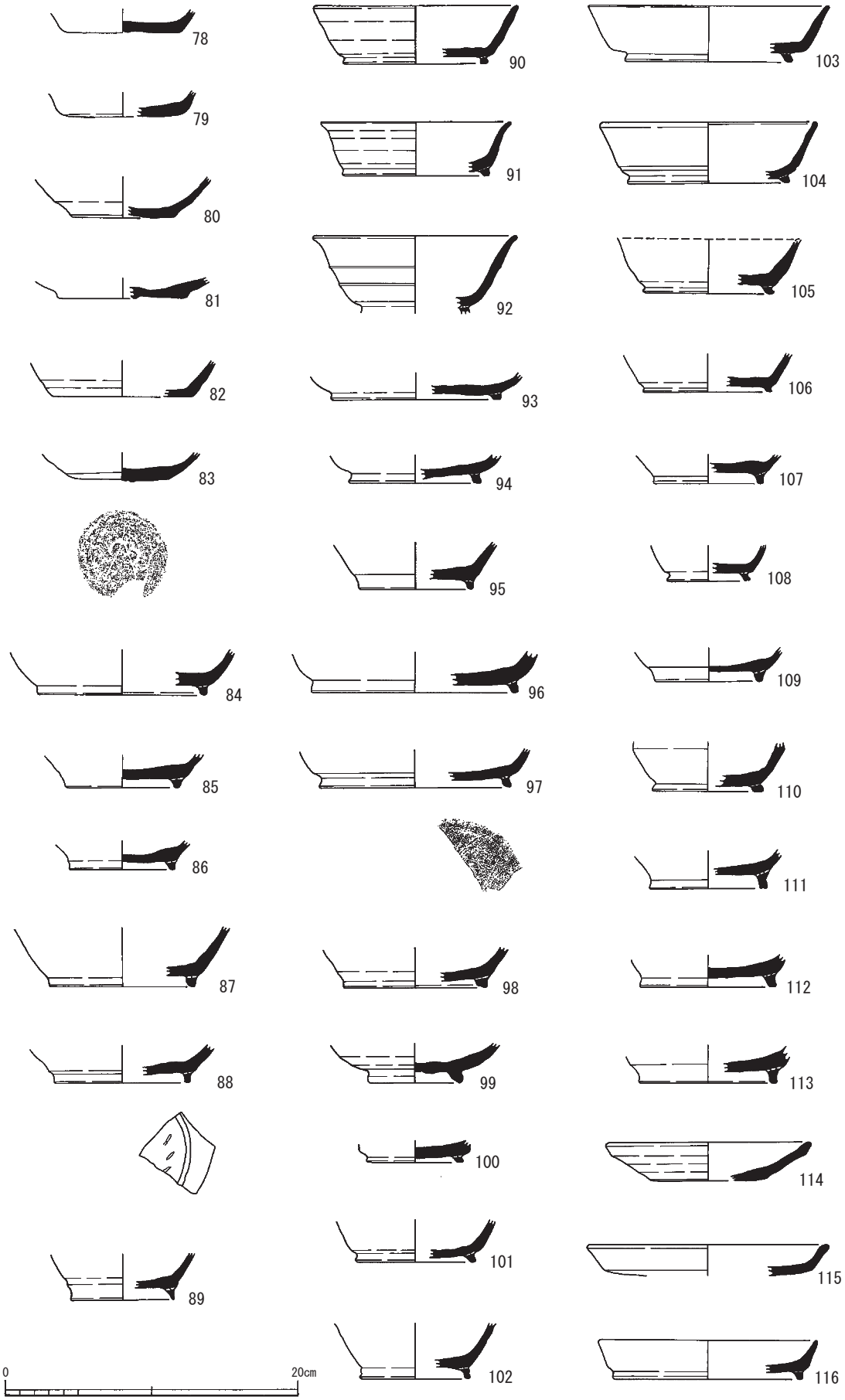
横入遺跡出土土器実測図（1）



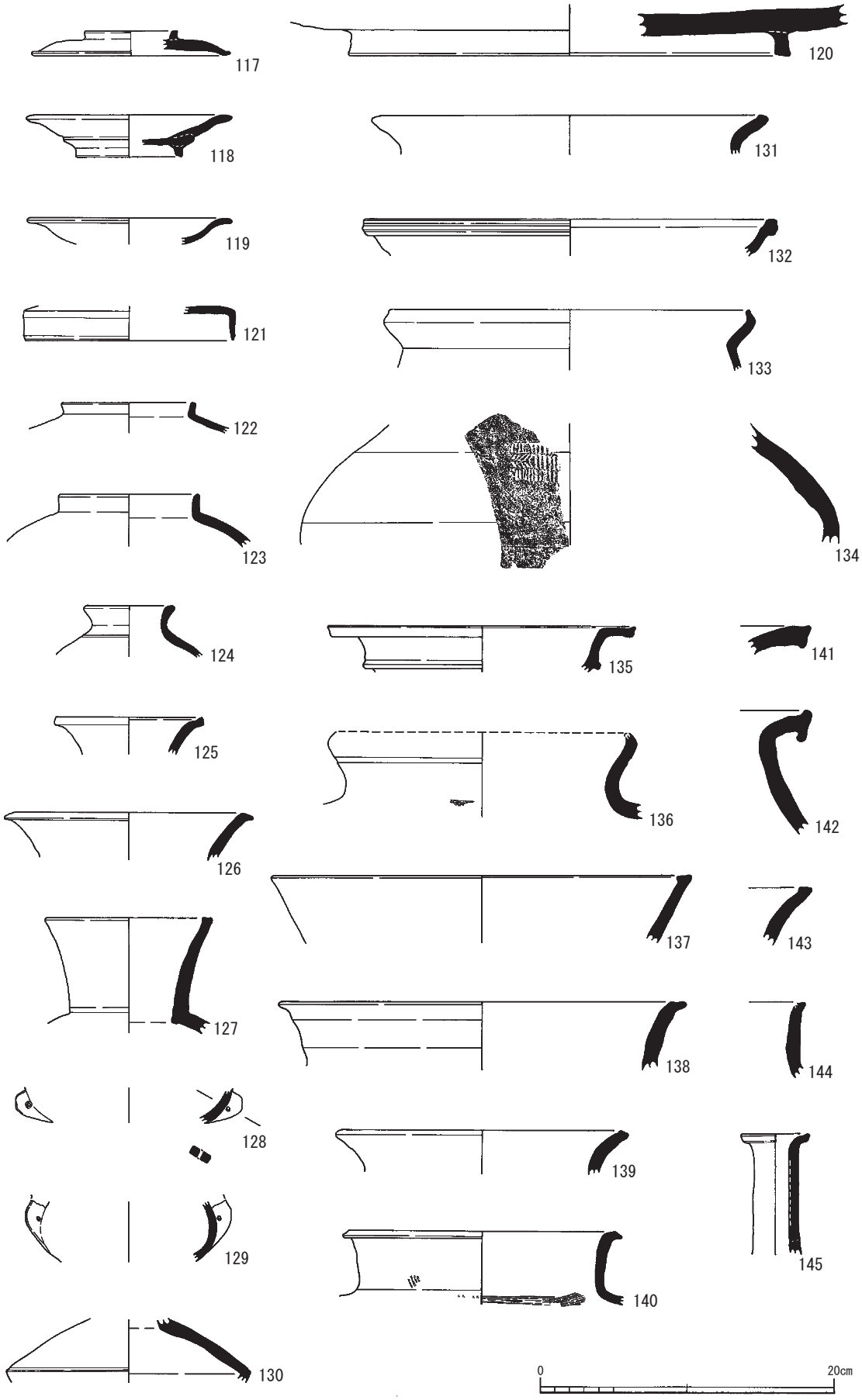
横入遺跡出土土器実測図（２）



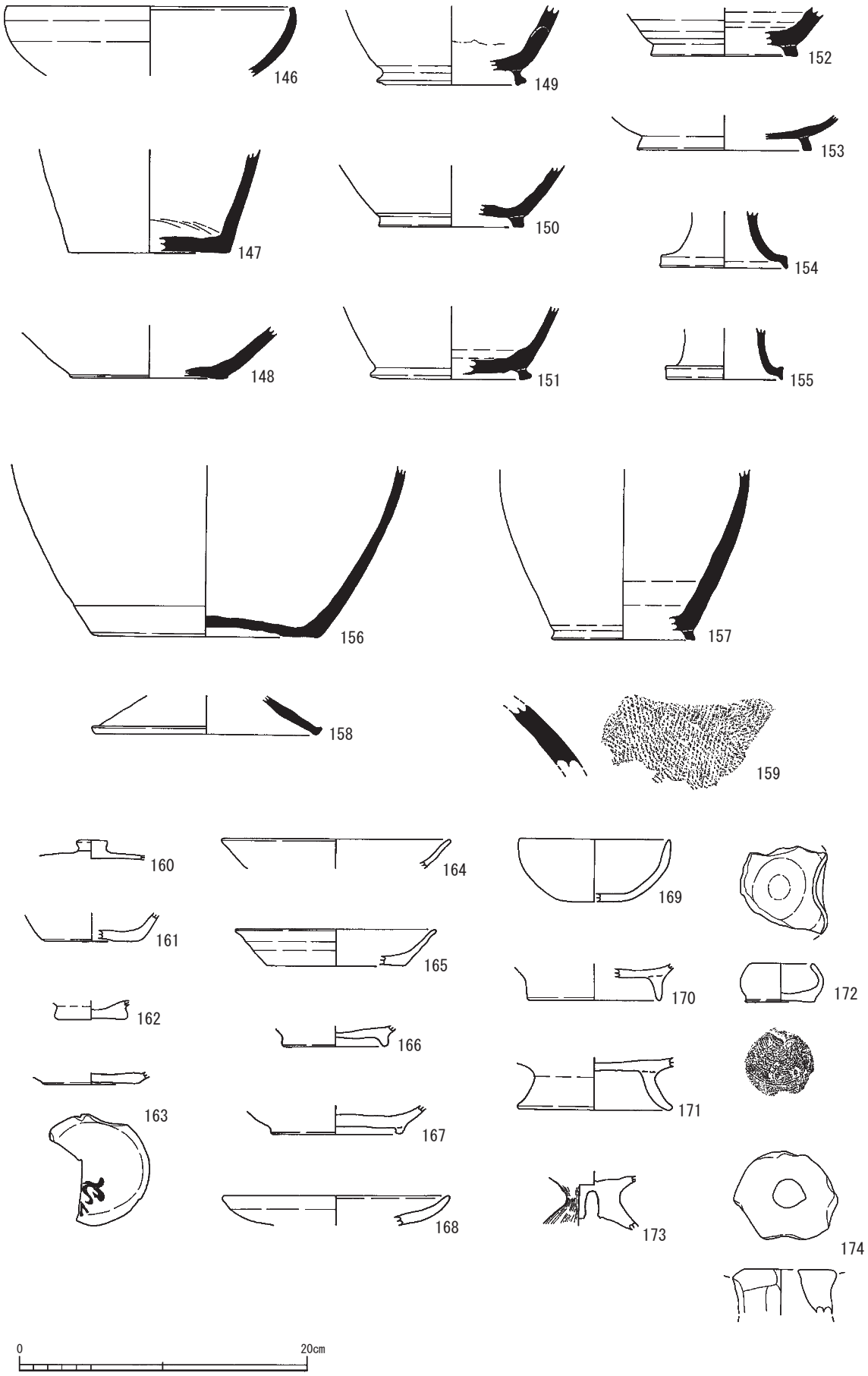
横入遺跡出土土器実測図（3）



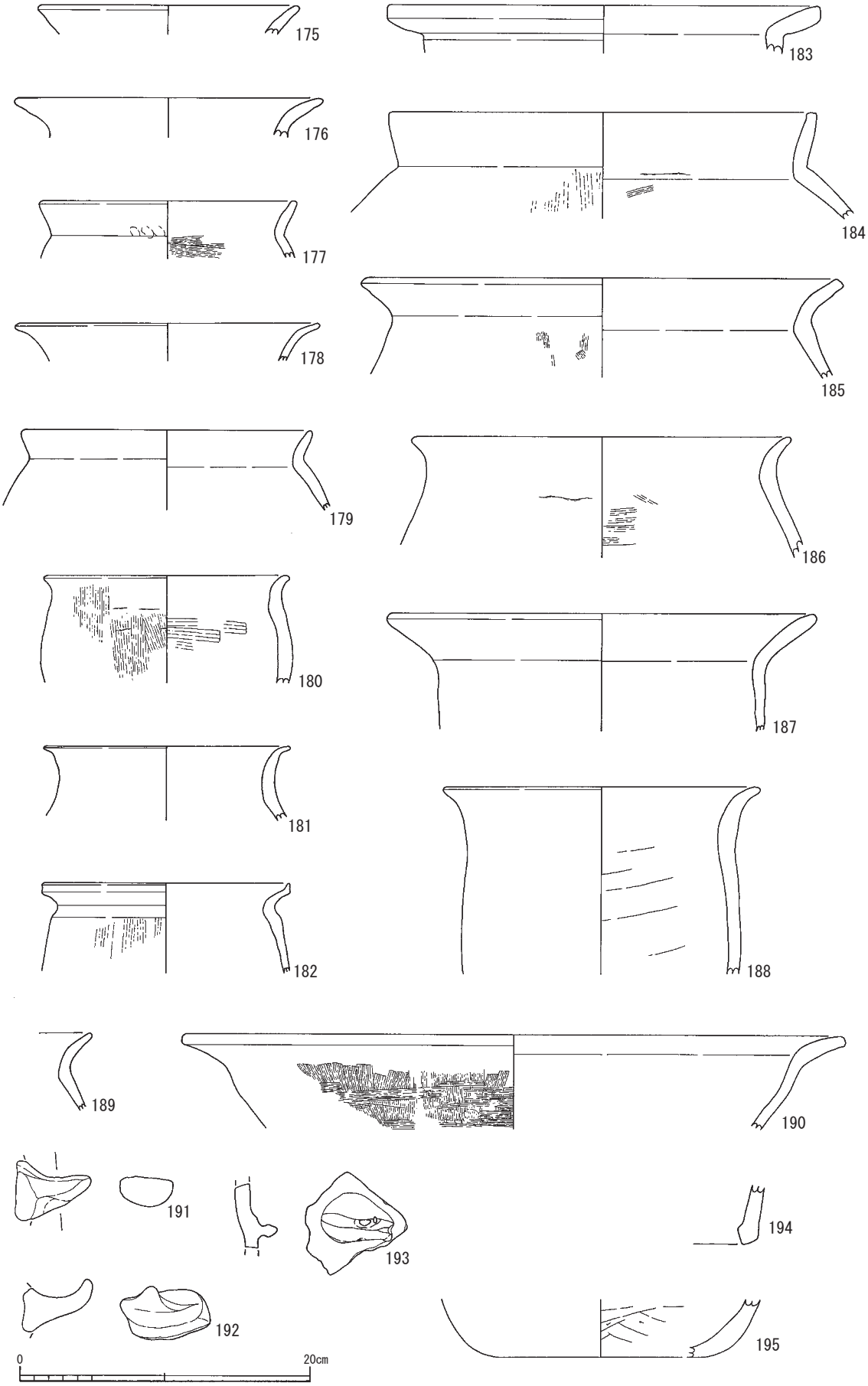
横入遺跡出土土器実測図（4）



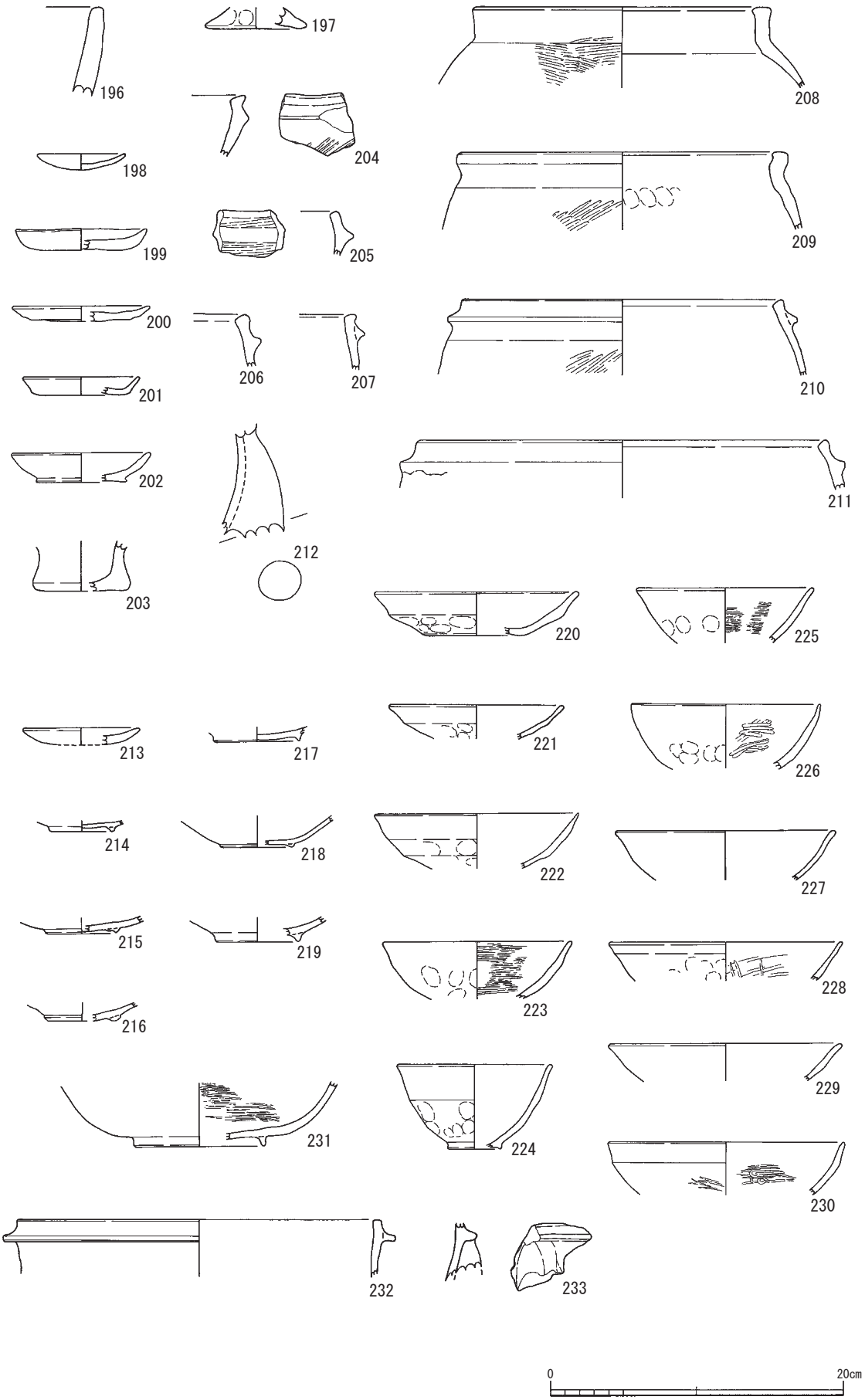
横入遺跡出土土器実測図（５）



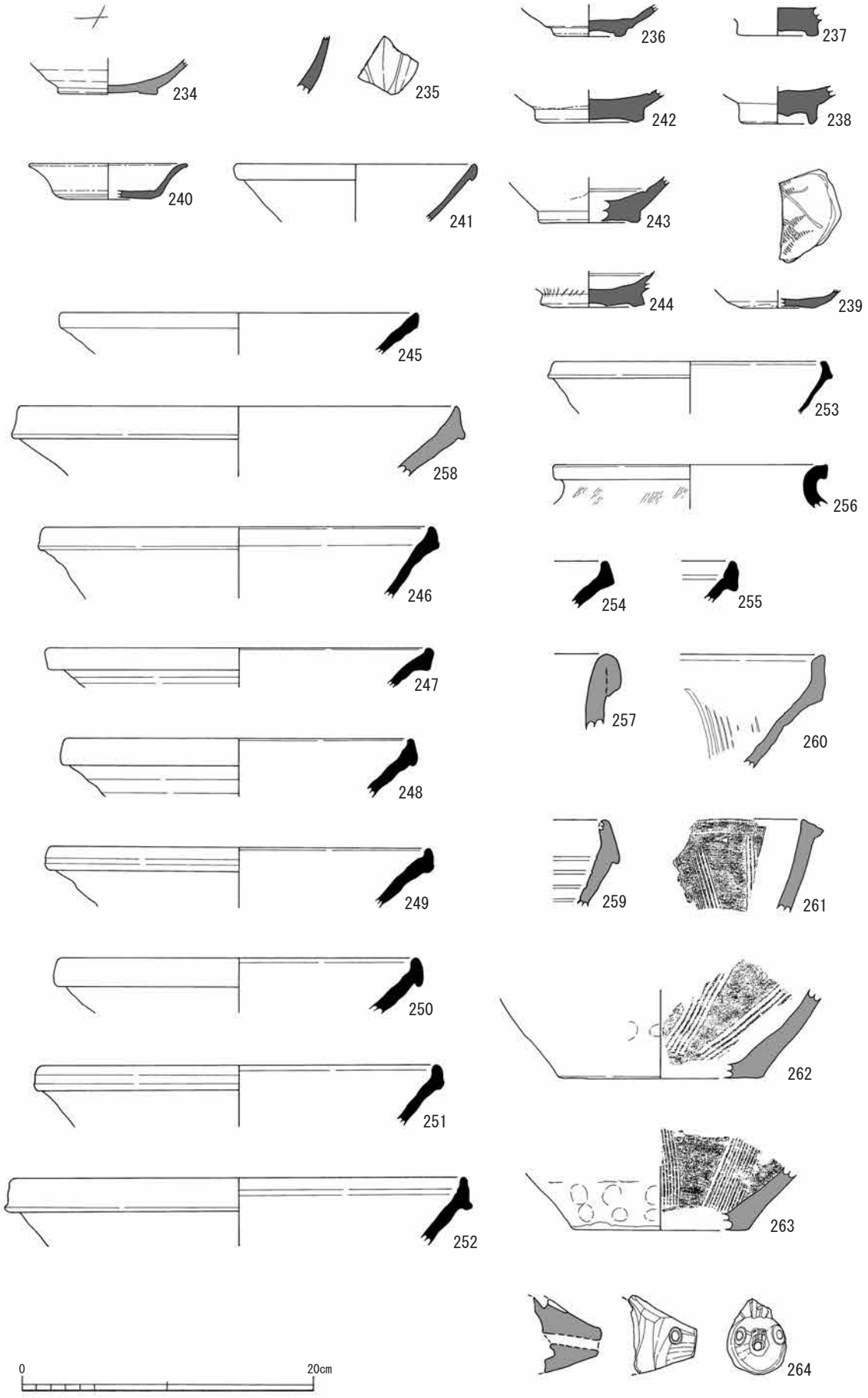
横入遺跡出土土器実測図（６）



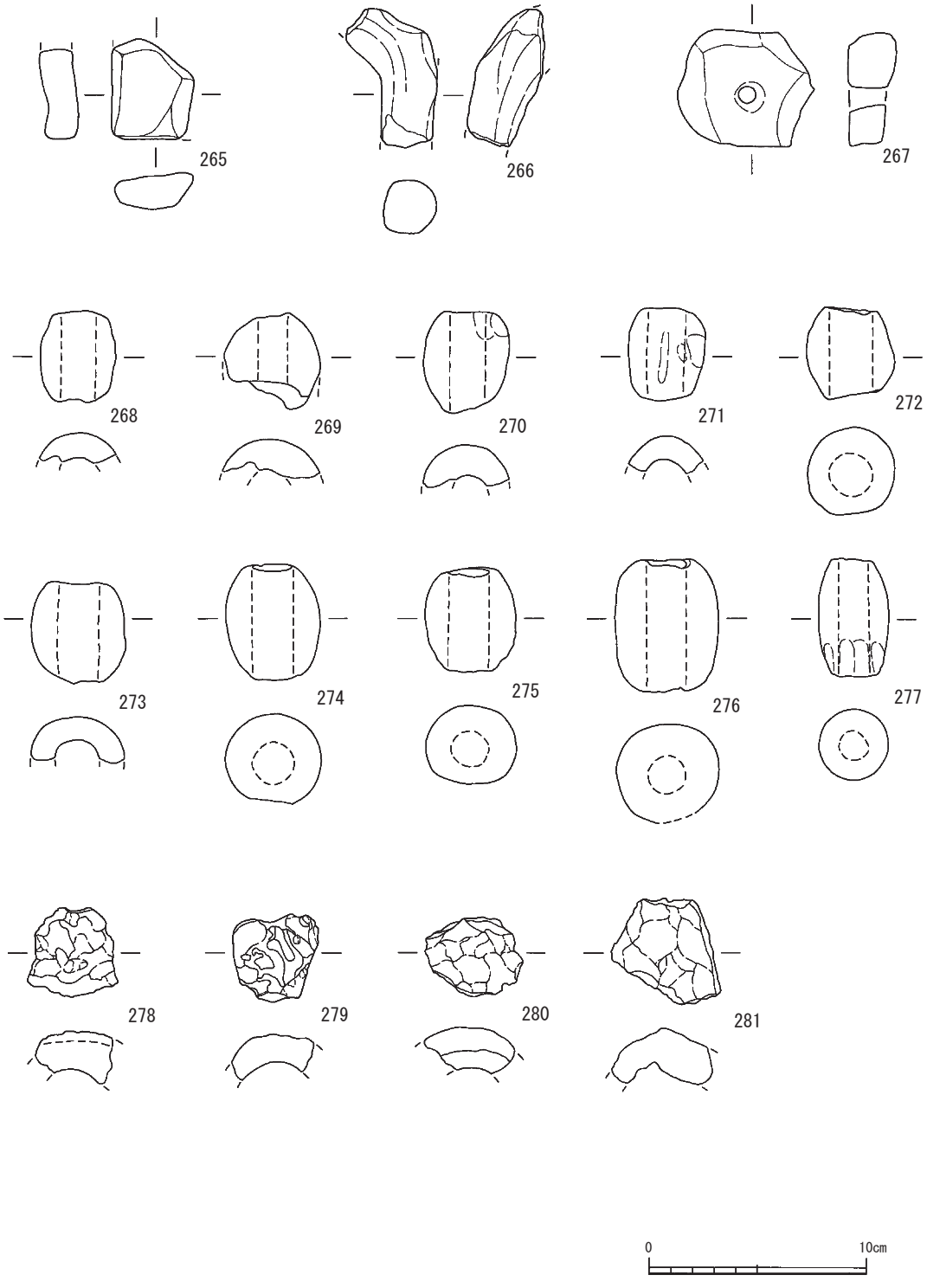
横入遺跡出土土器実測図（７）



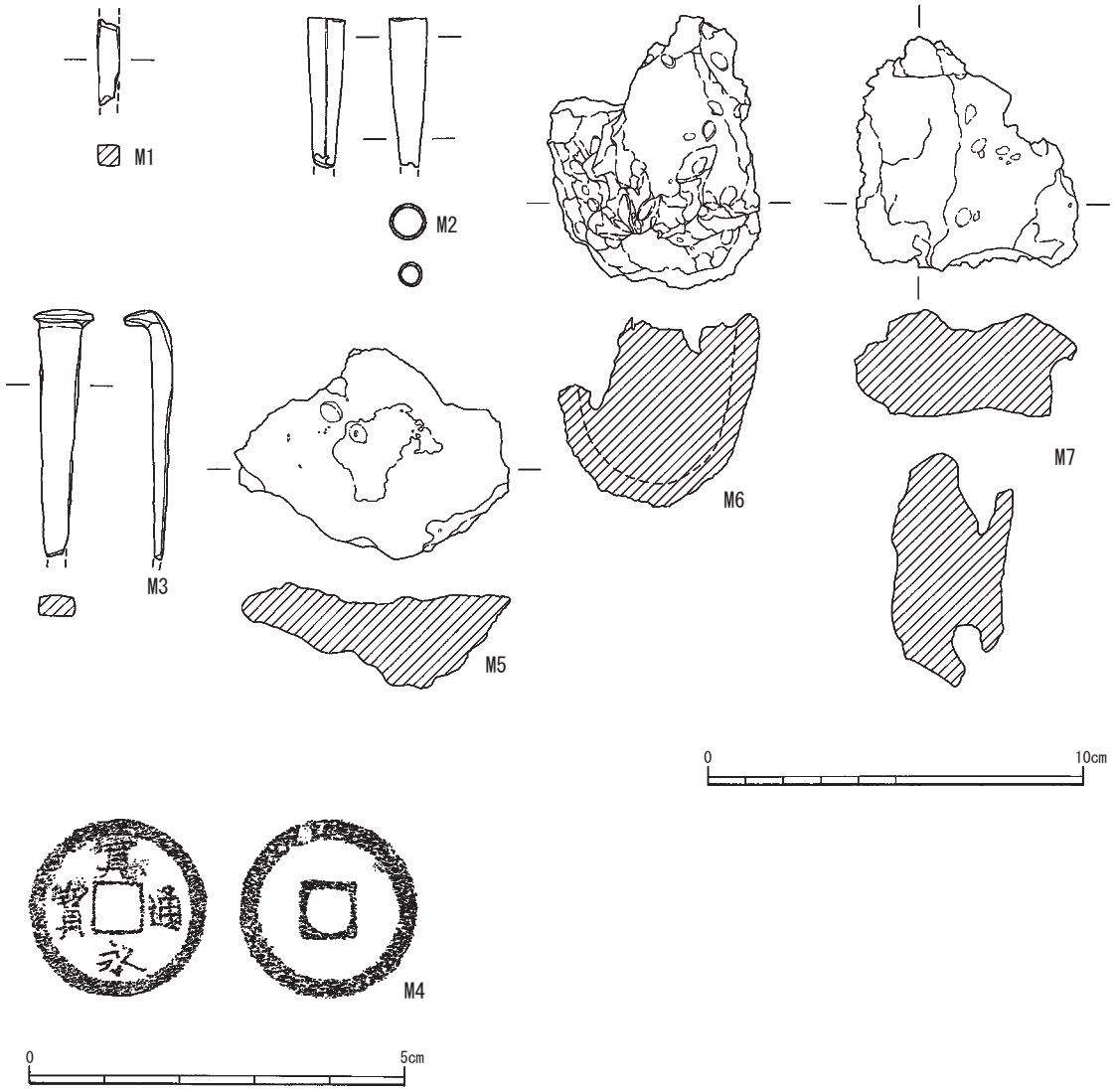
横入遺跡出土土器実測図（８）



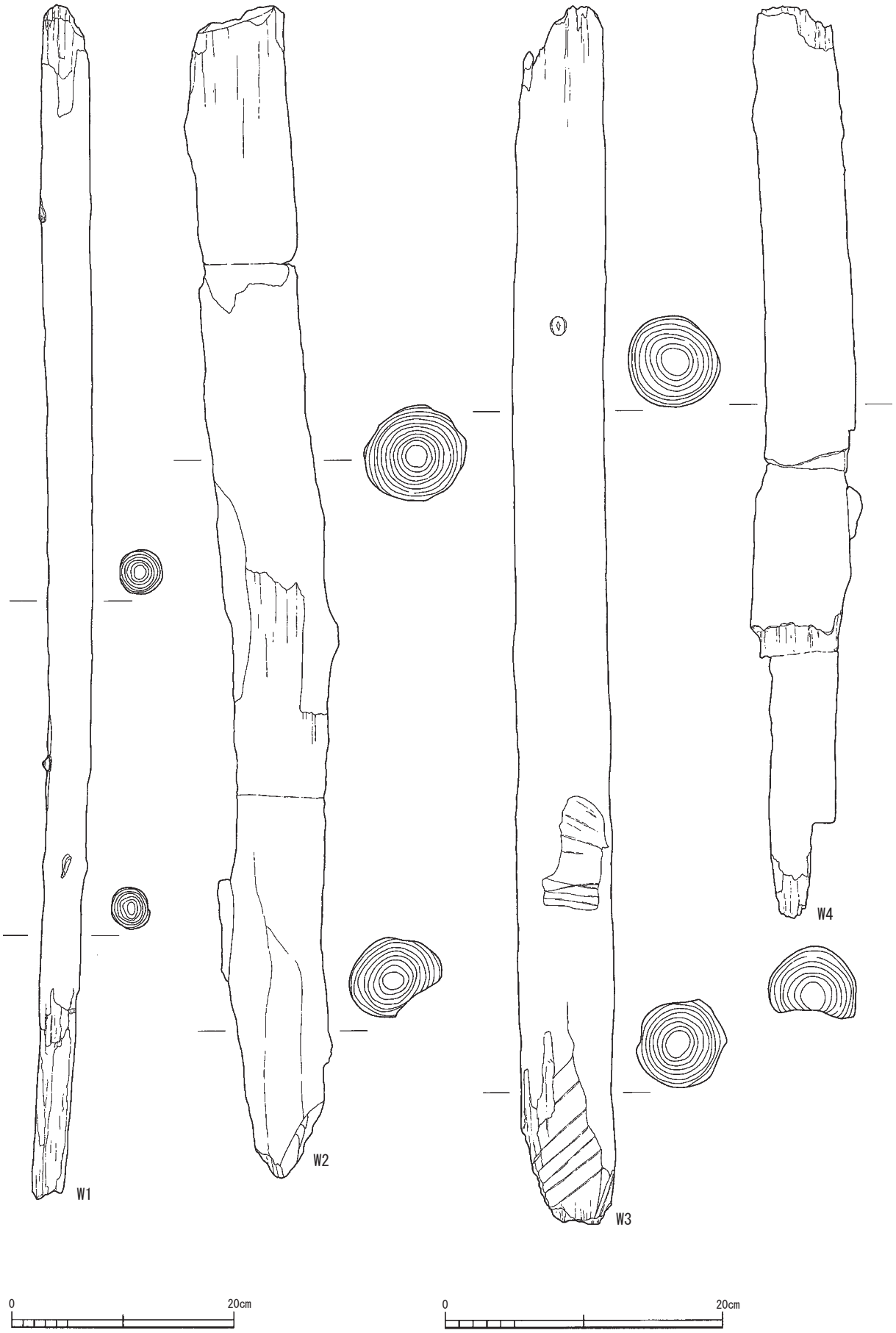
横入遺跡出土土器実測図（９）



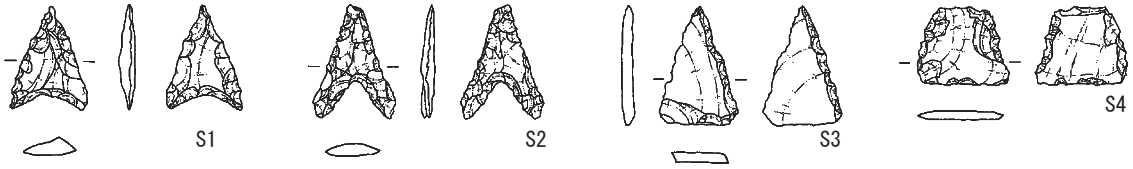
横入遺跡出土土製品実測図

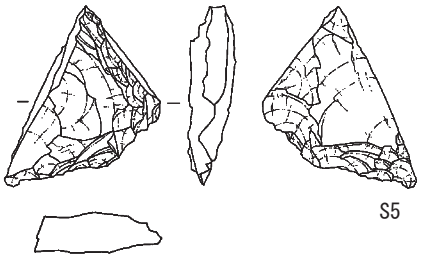


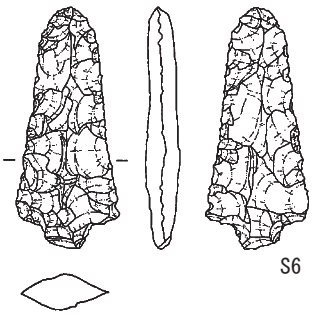
横入遺跡出土金属器実測図

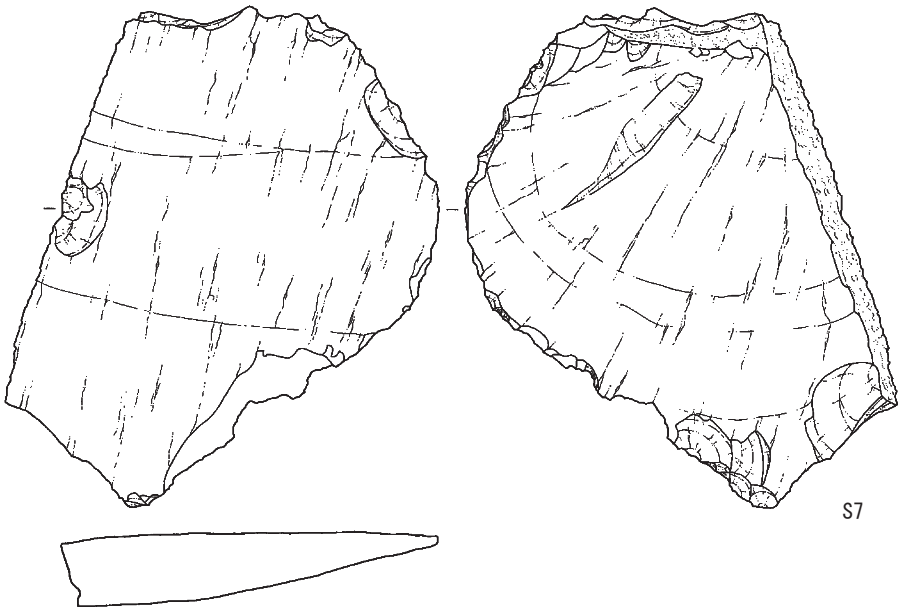


横入遺跡出土木器実測図



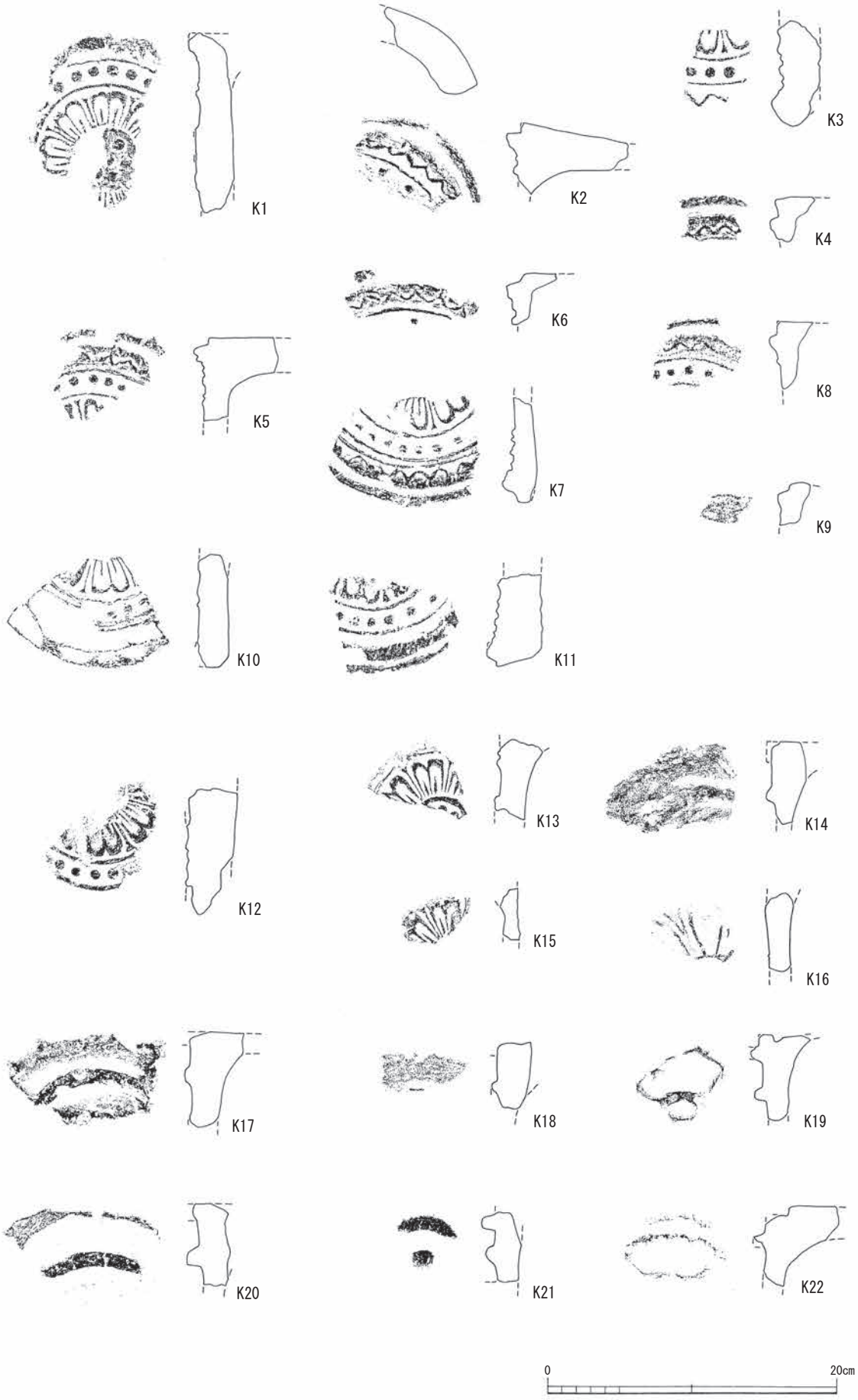




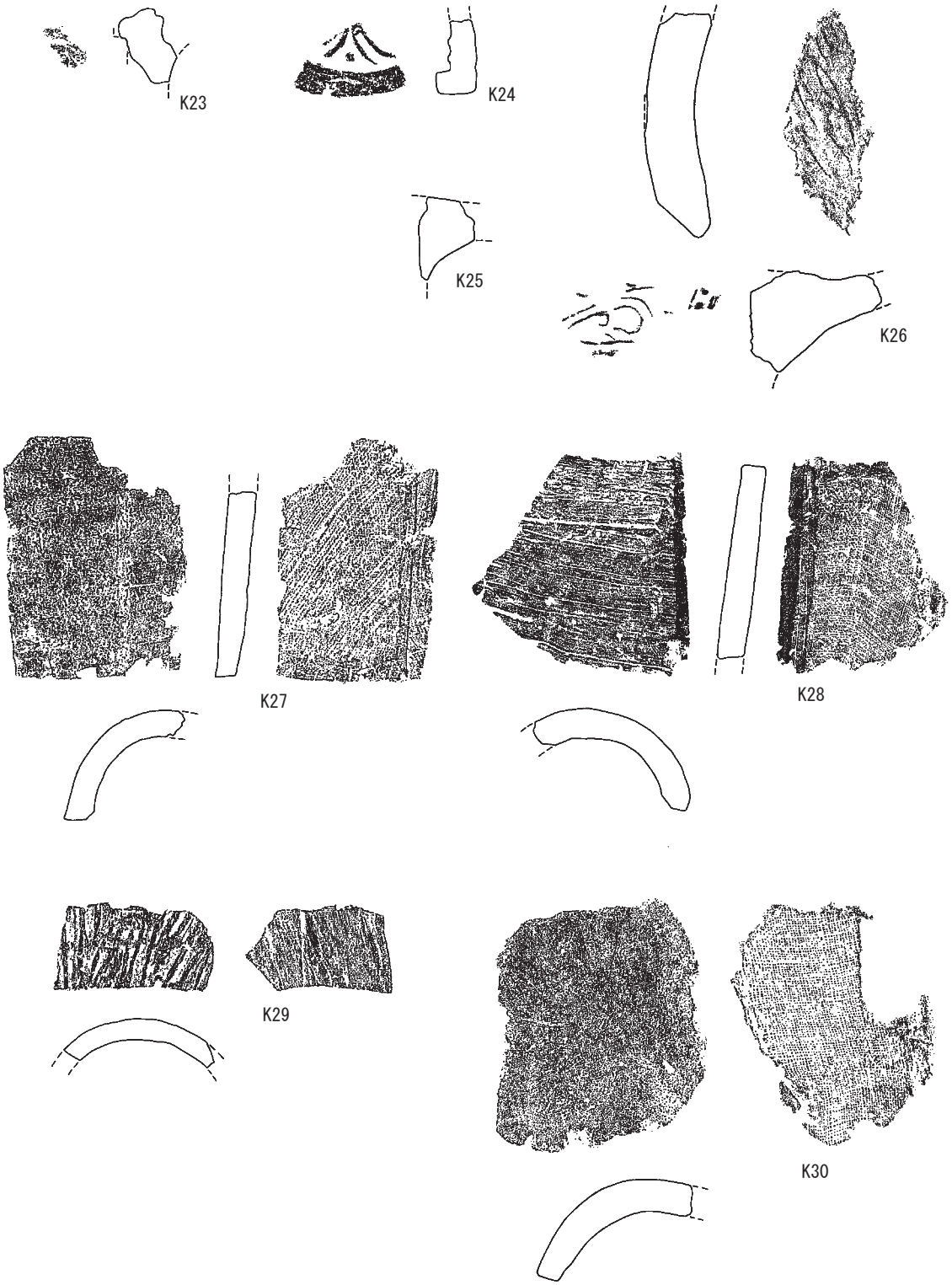


横入遺跡出土石器実測図（1）

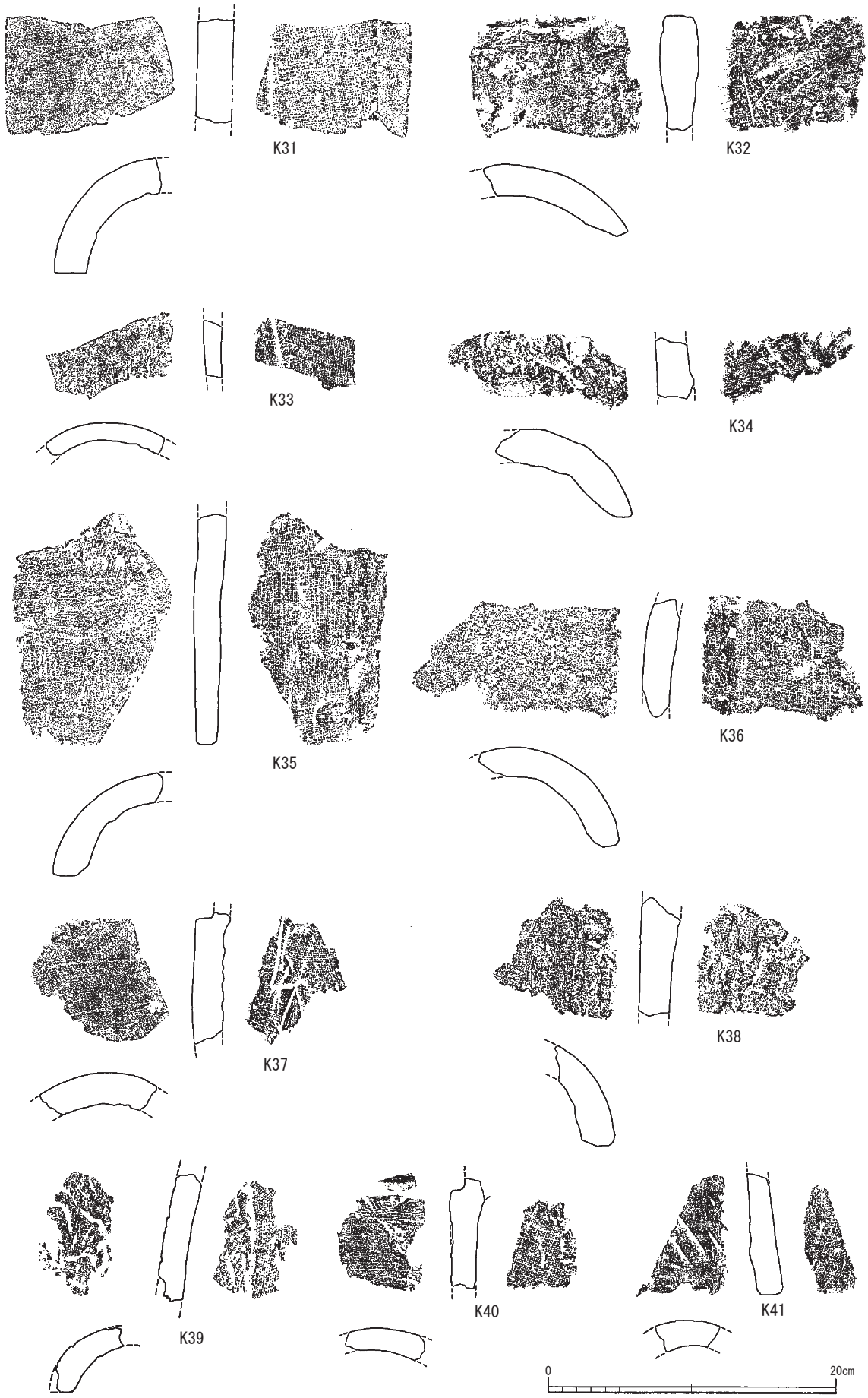
横入遺跡出土石器実測図（2）



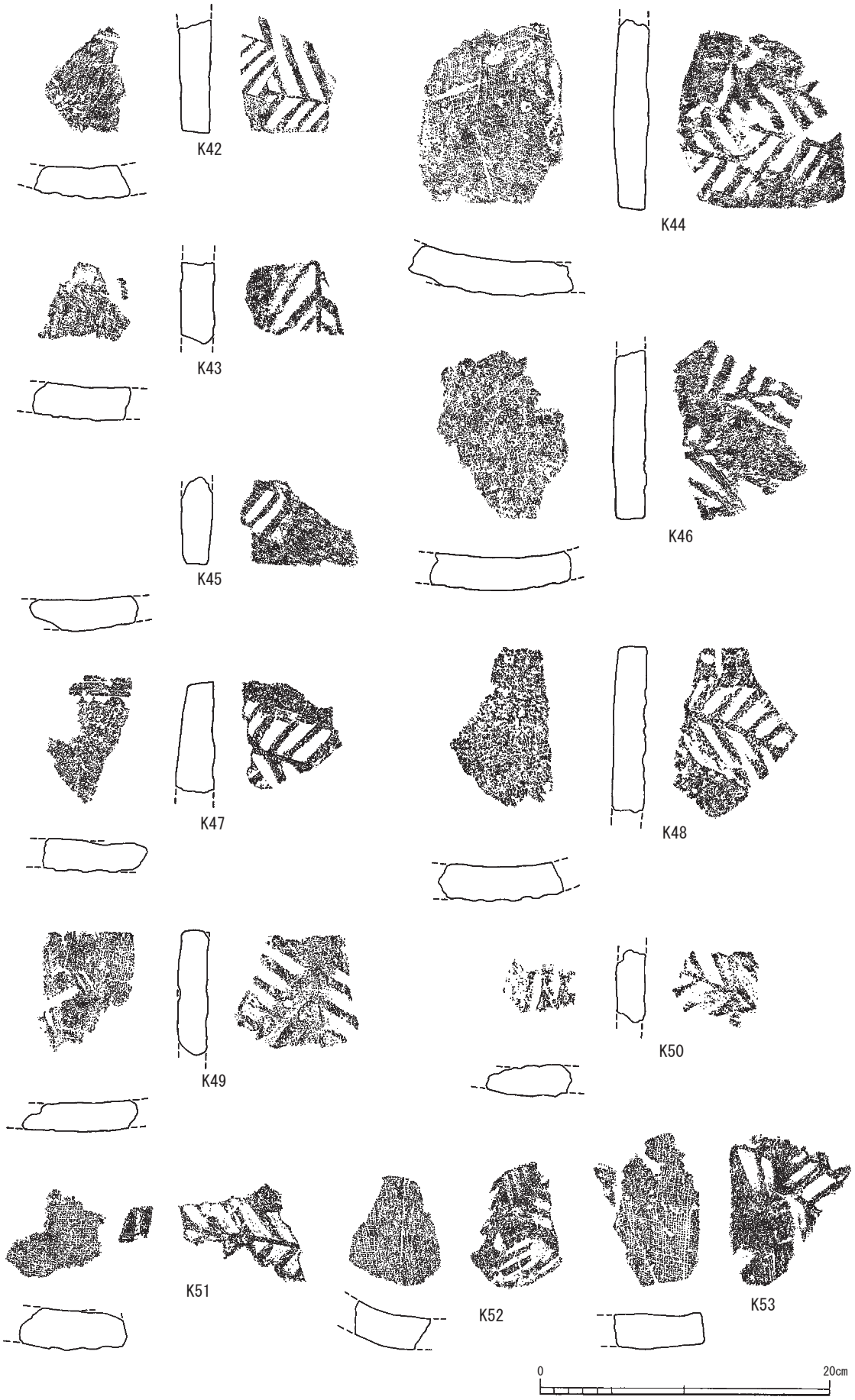
横入遺跡出土瓦実測図（１）



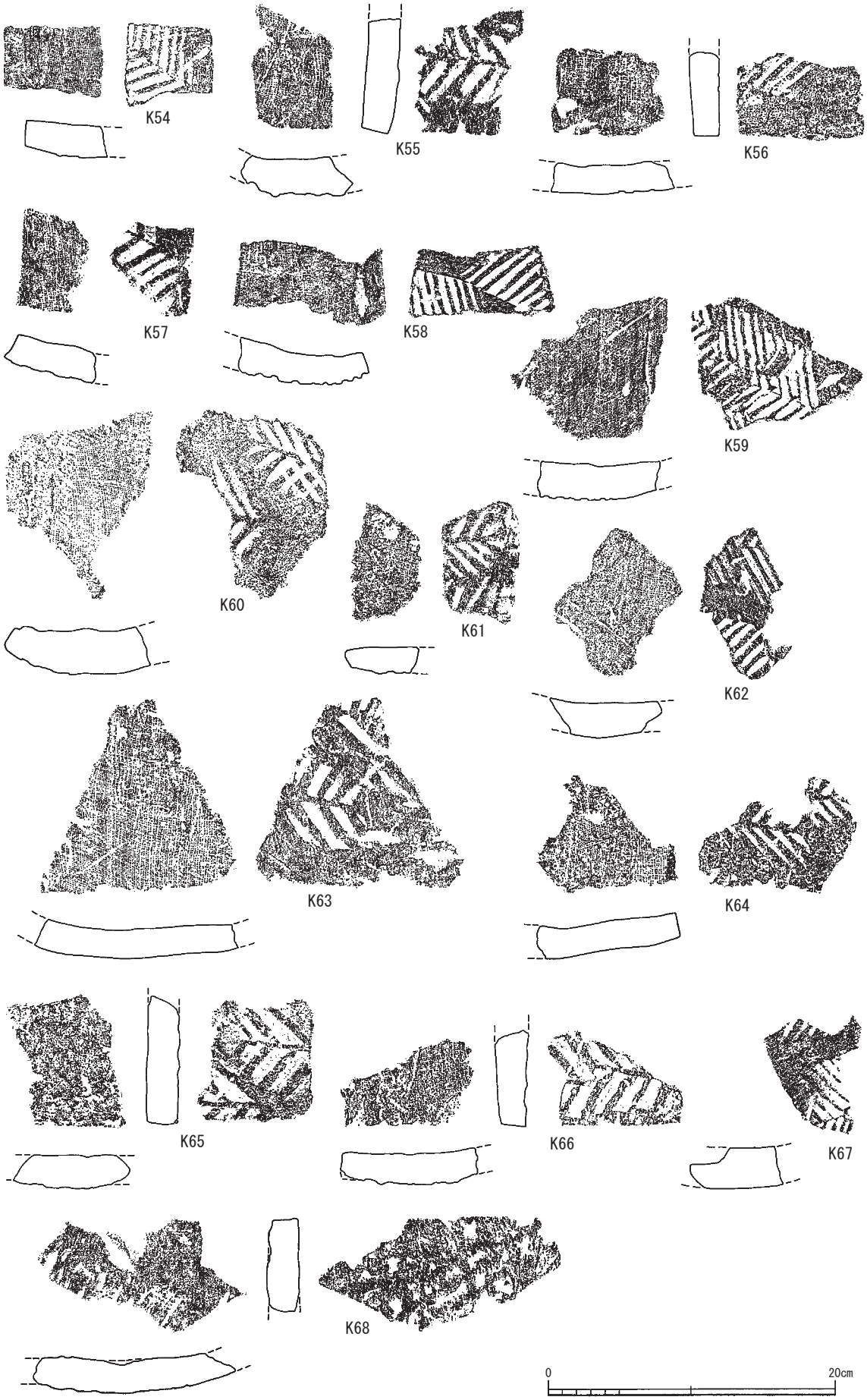
横入遺跡出土瓦実測図（２）



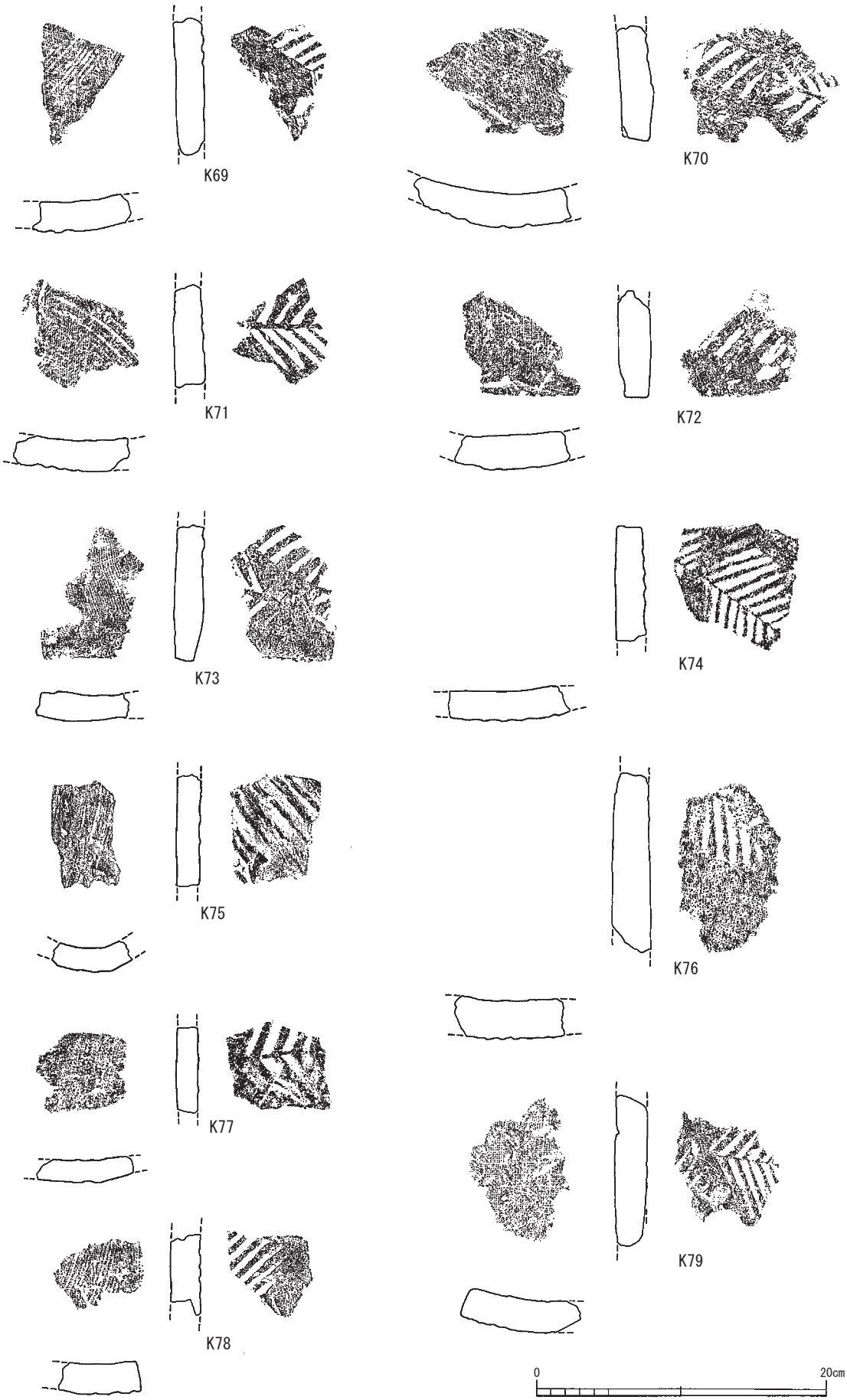
横入遺跡出土瓦実測図（３）



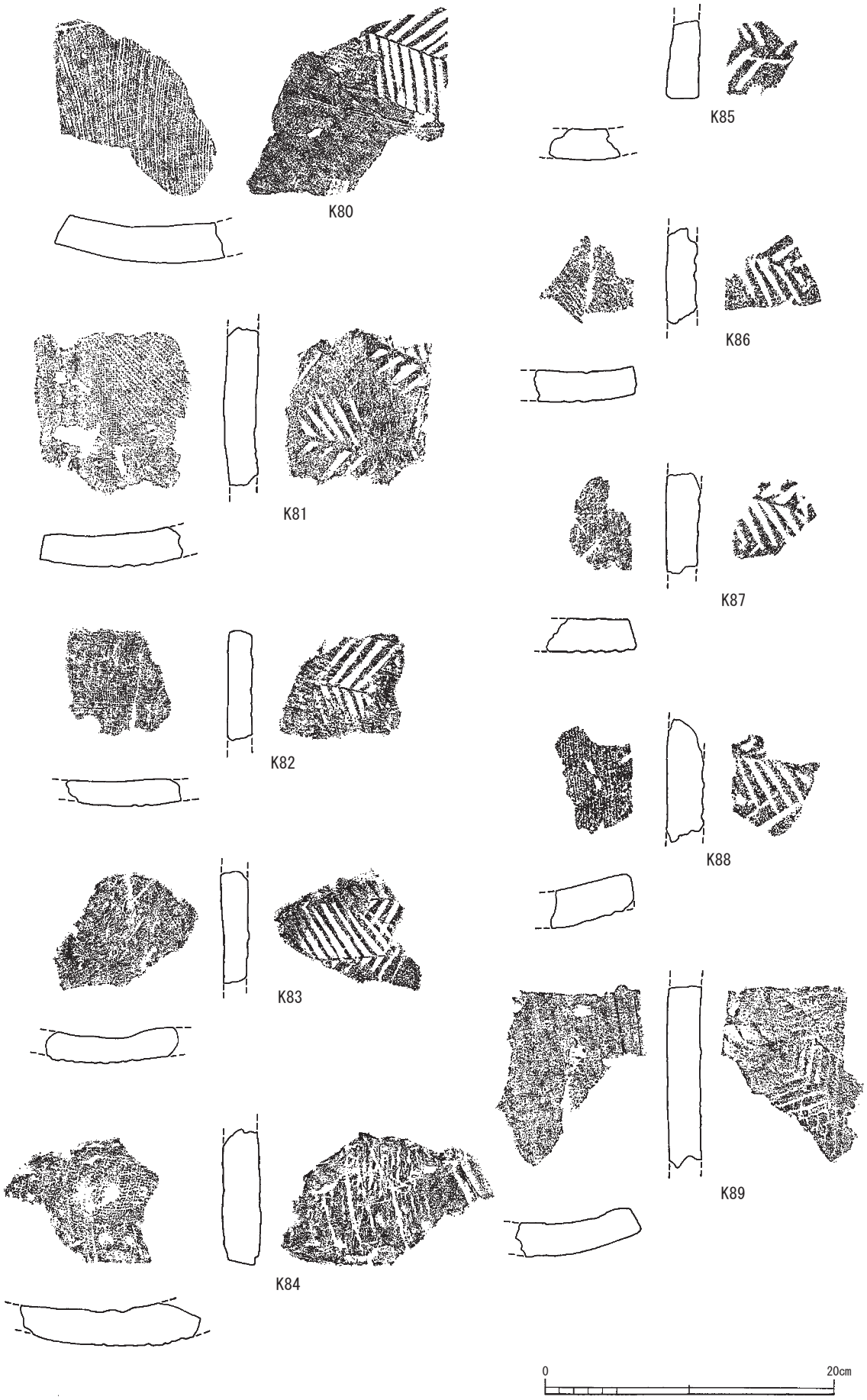
横入遺跡出土瓦実測図（４）



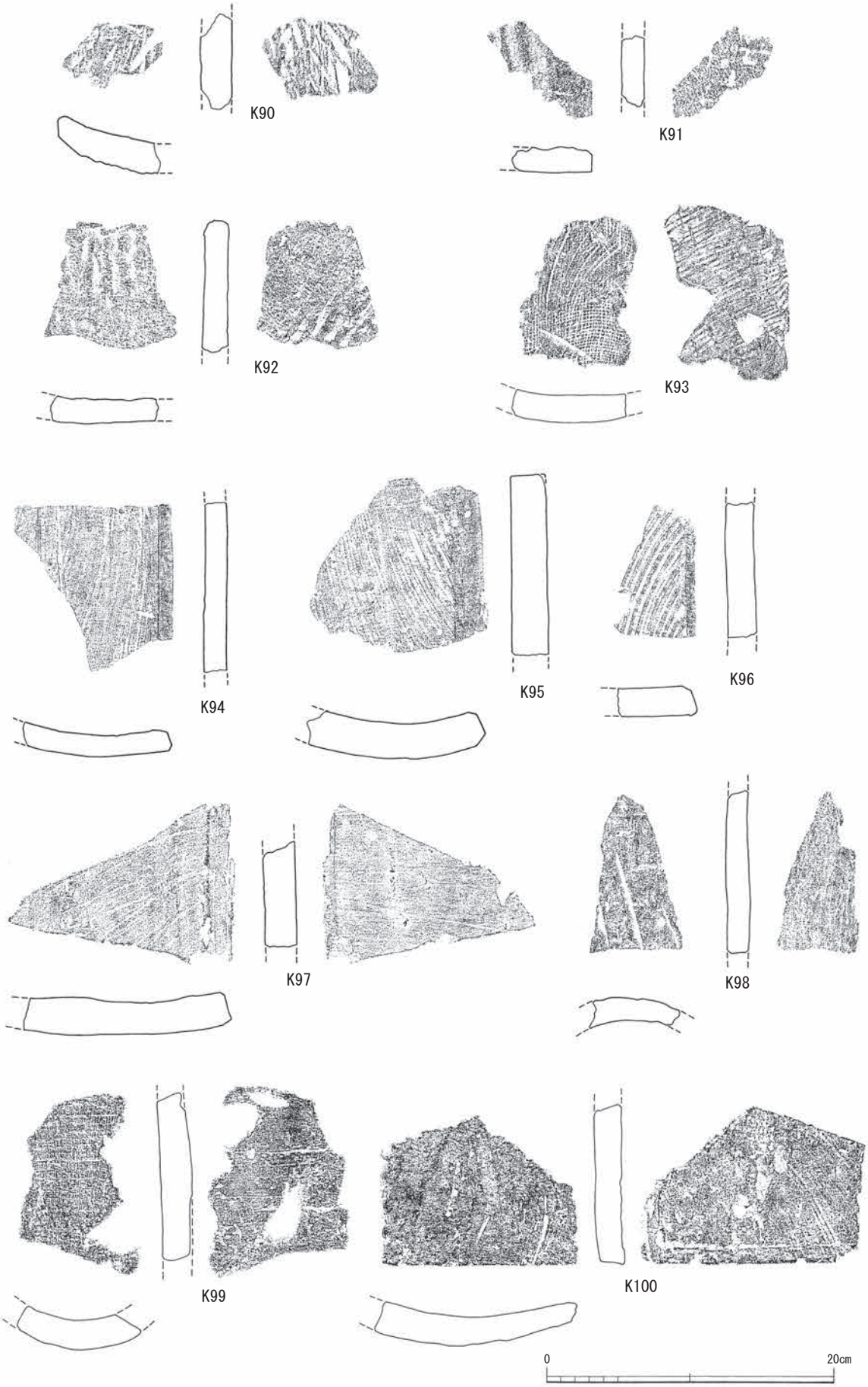
横入遺跡出土瓦実測図（５）



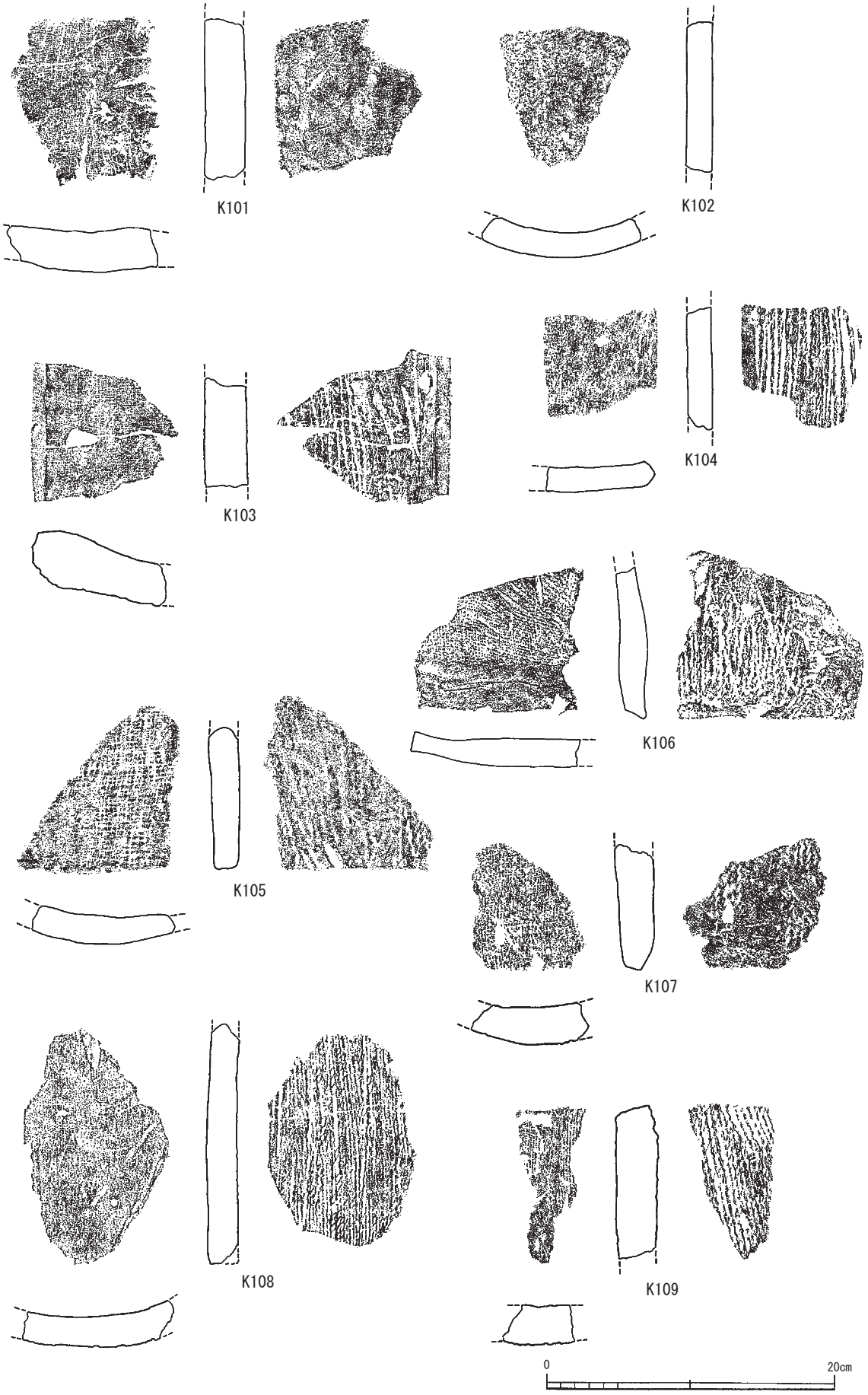
横入遺跡出土瓦実測図（６）



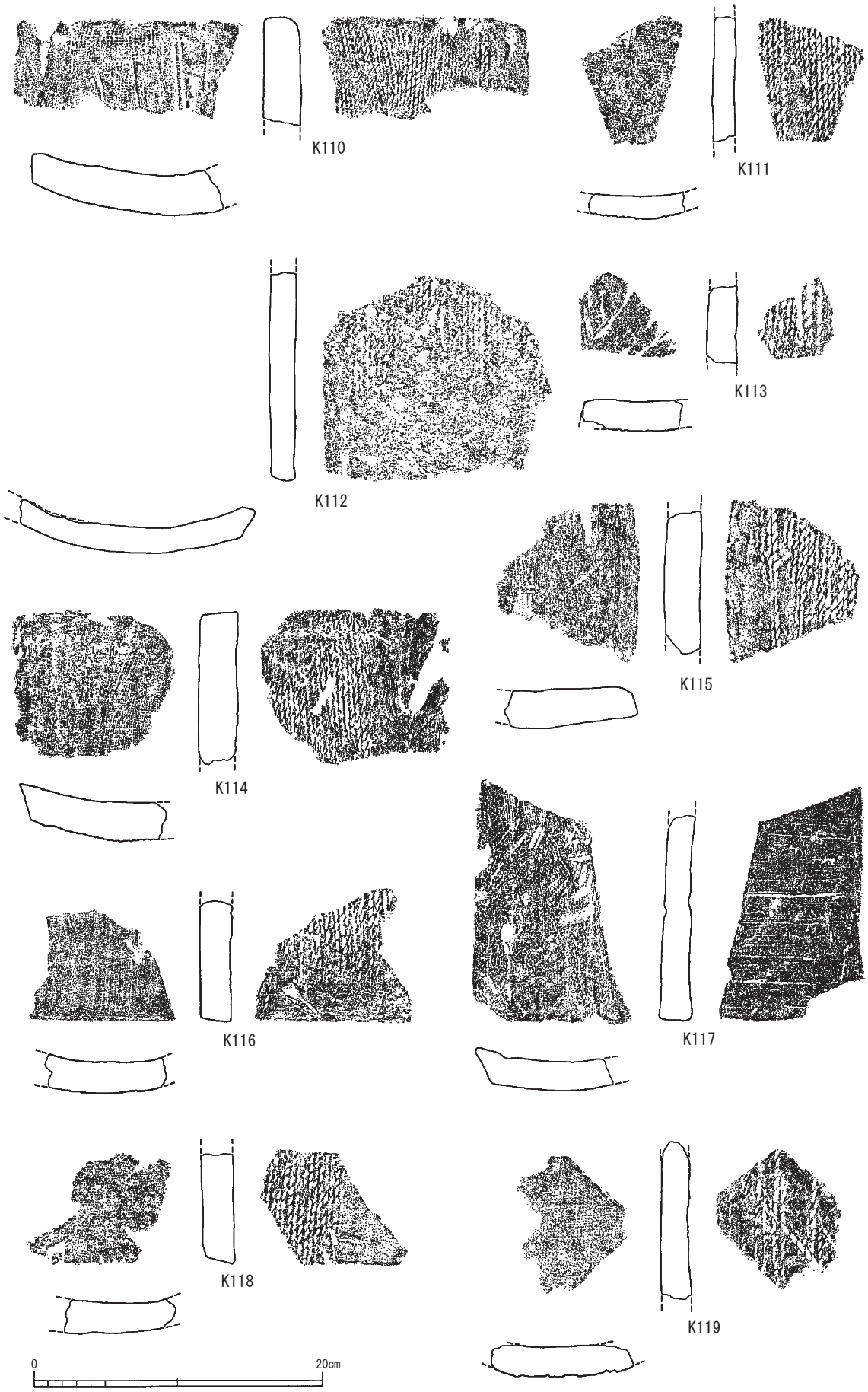
横入遺跡出土瓦実測図（７）



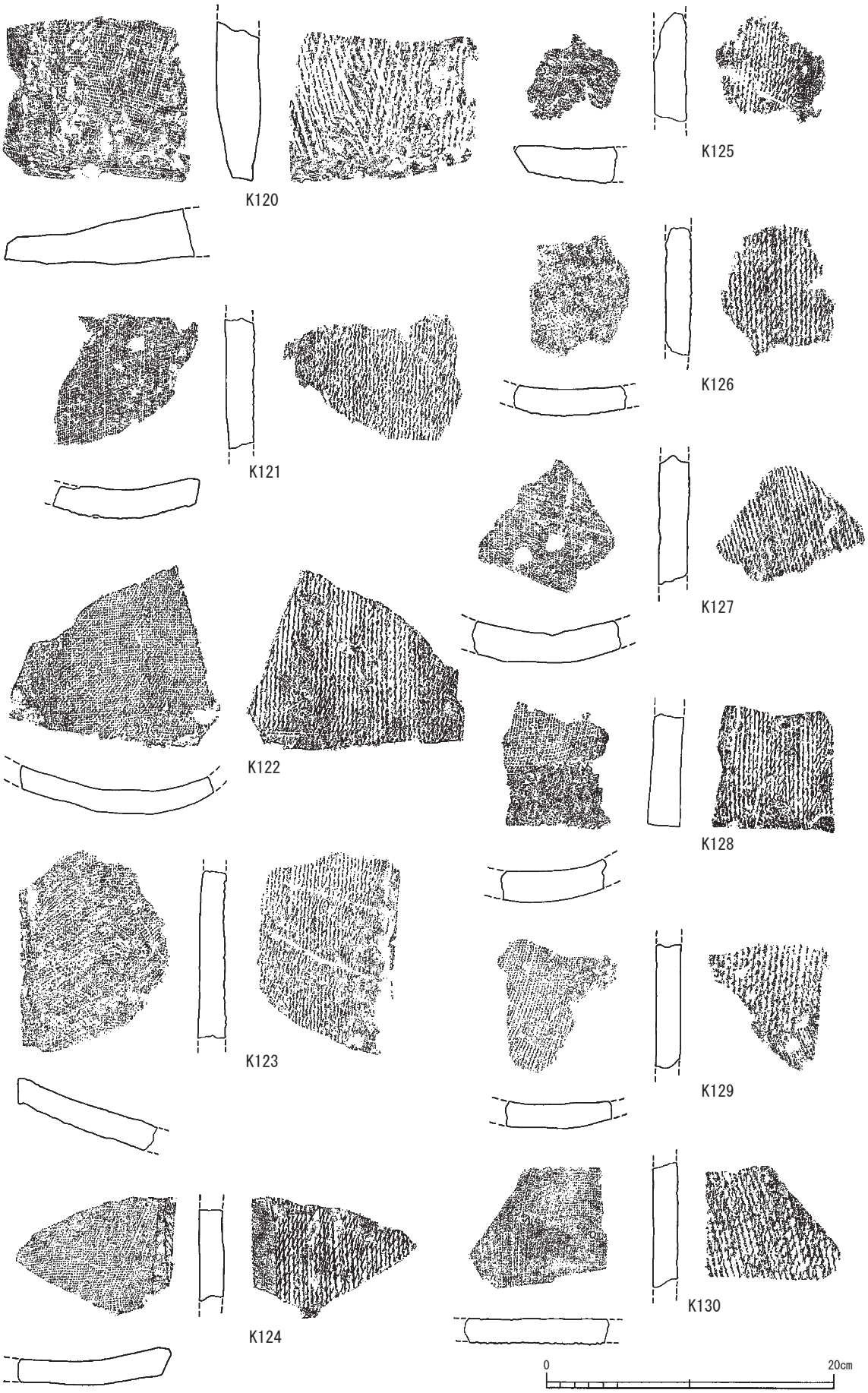
横入遺跡出土瓦実測図（８）



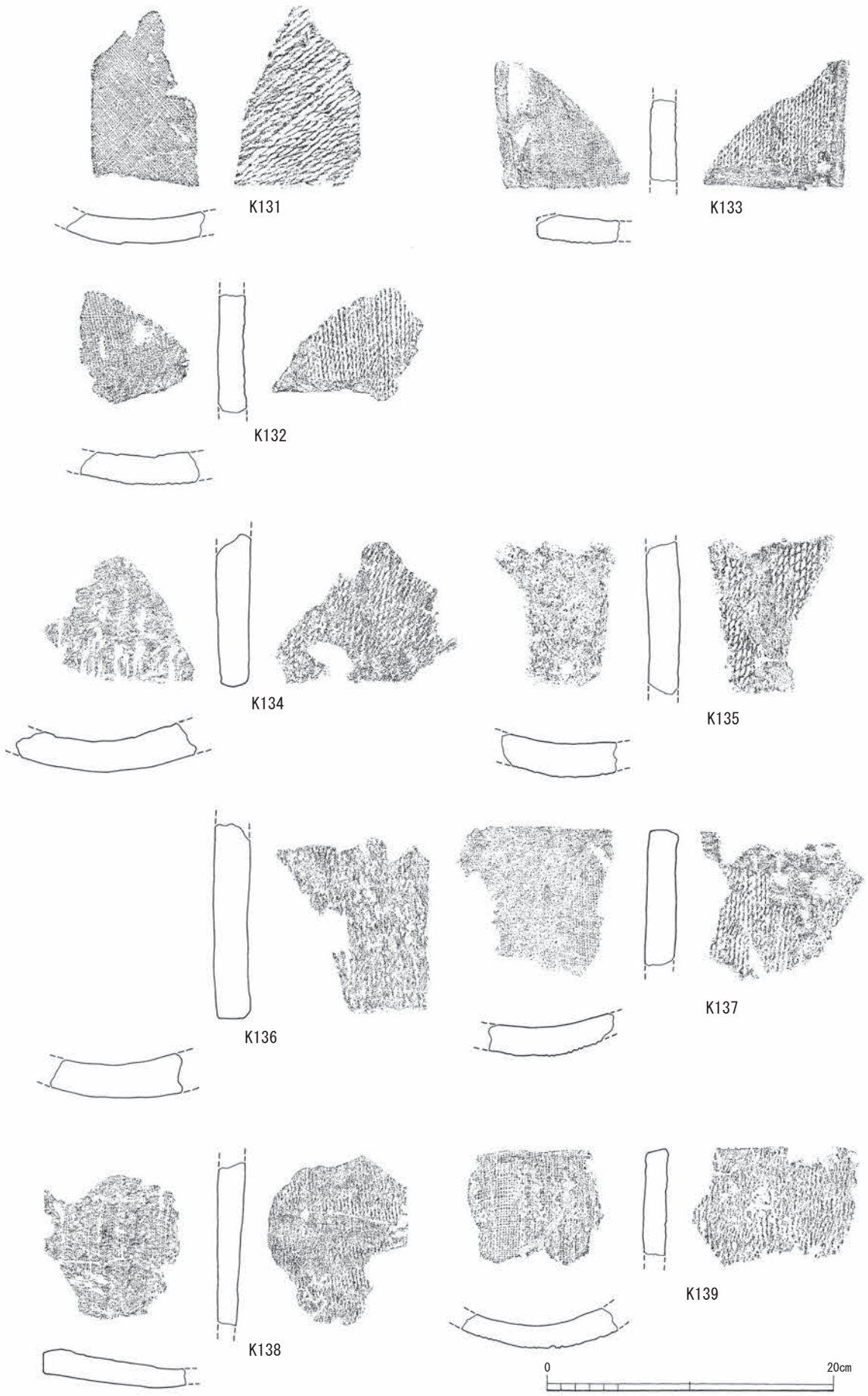
横入遺跡出土瓦実測図（9）



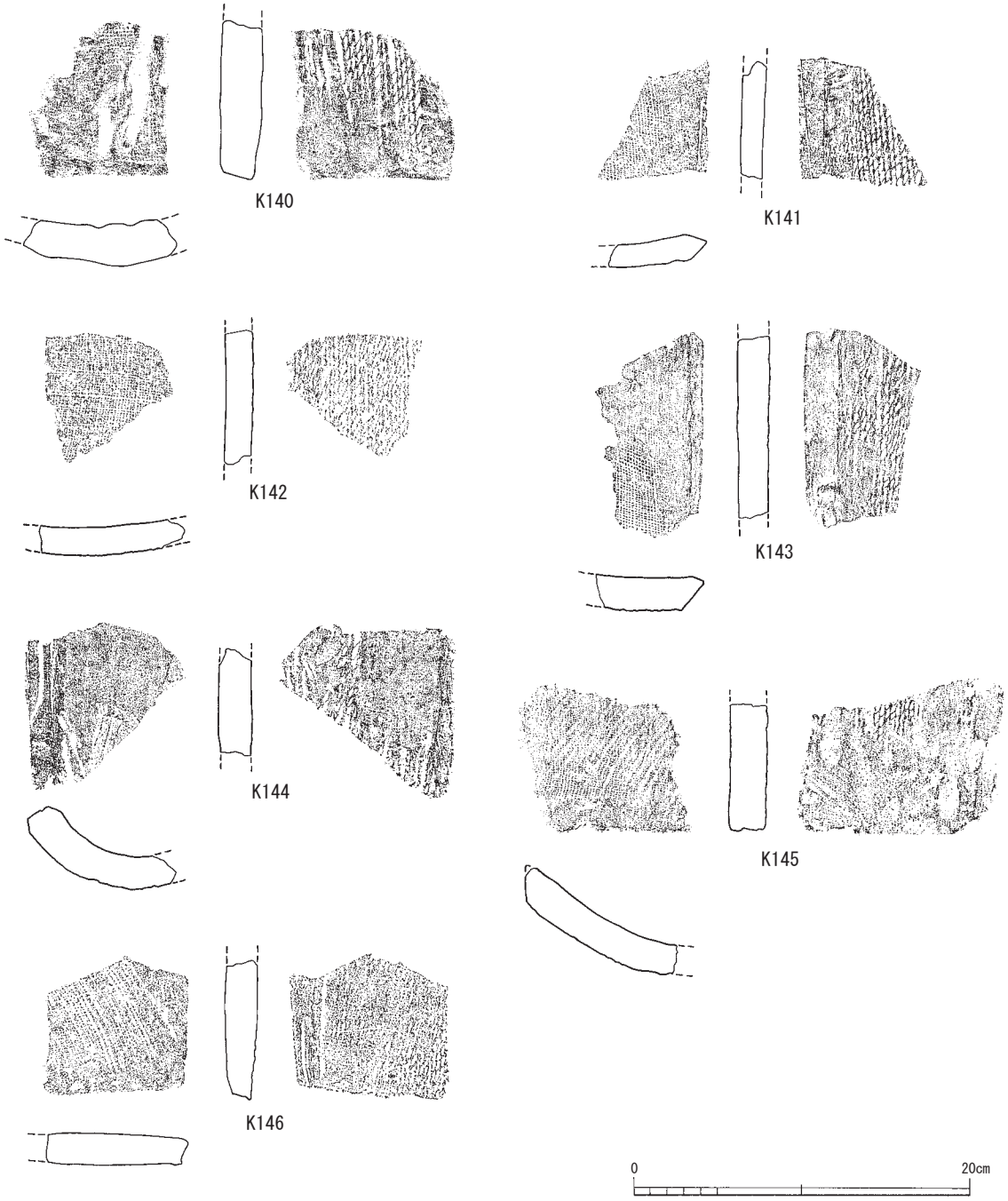
横入遺跡出土瓦実測図（10）



横入遺跡出土瓦実測図（11）



横入遺跡出土瓦実測図（12）



横入遺跡出土瓦実測図（13）

写 真 図 版

空中写真

南東上空から

西上空から

空中写真

東上空から

西上空から

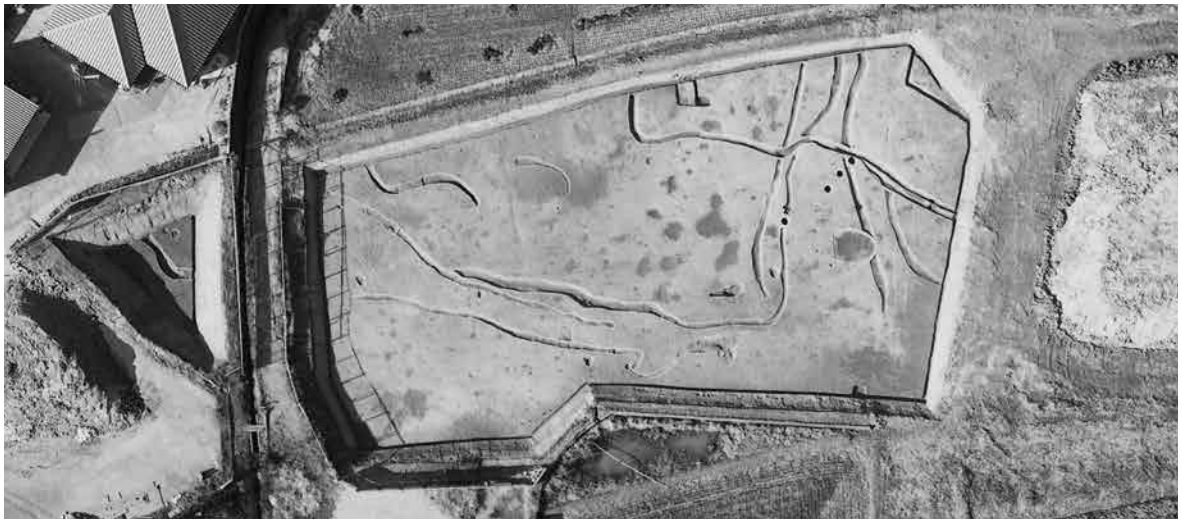
空中写真

南西上空から

遺跡遠景（志筑金比羅社から）

1 区

1 区全景（南から）



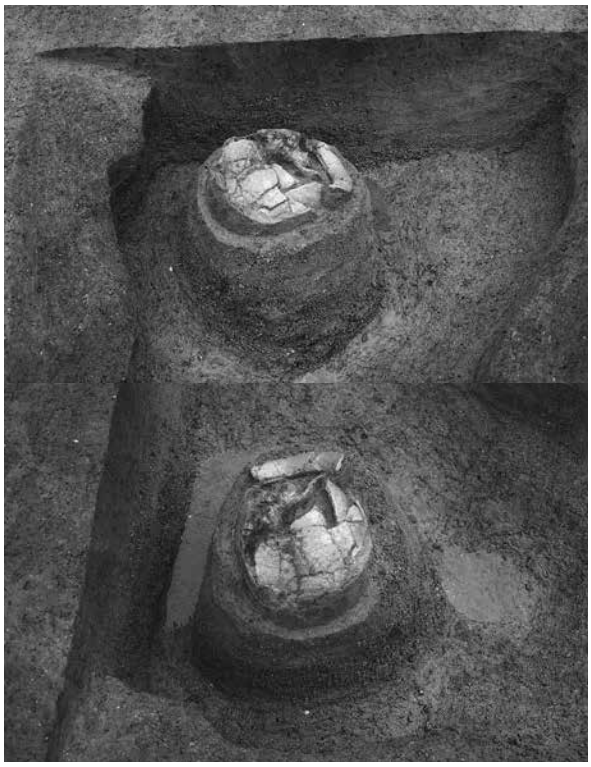
1 ・ 2 区空中写真（南上空から）

SD101 北壁断面

SD101 断面（南から）

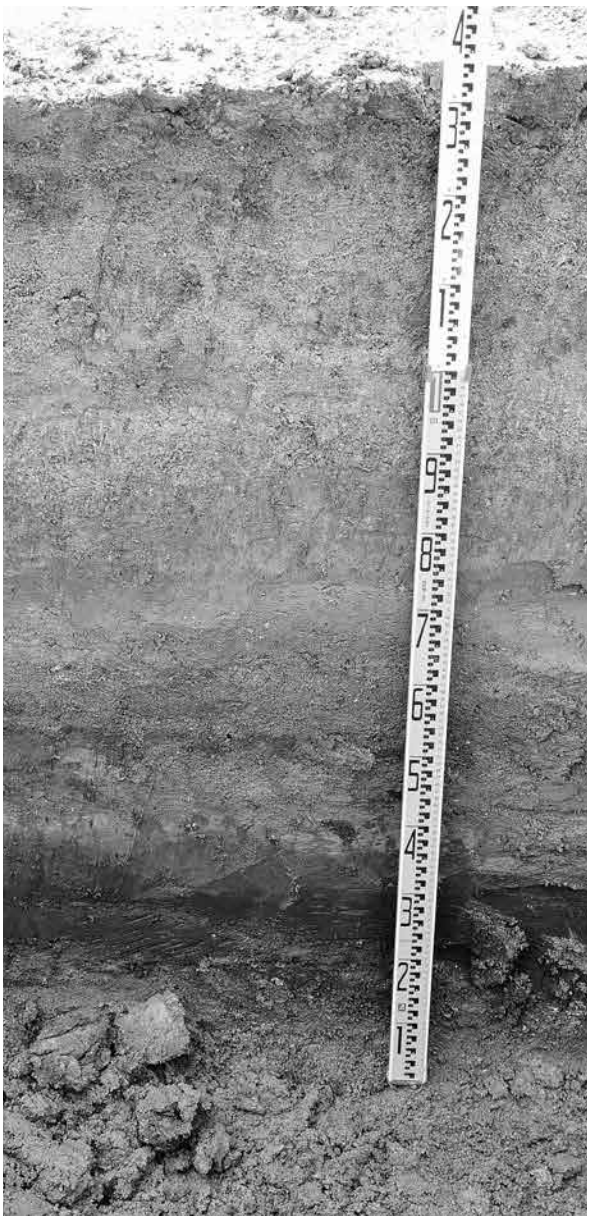
1 区

北壁



SD101 土器出土状況

調査風景



断ち割り断面（南から）

2 区

2 区全景（北上空から）

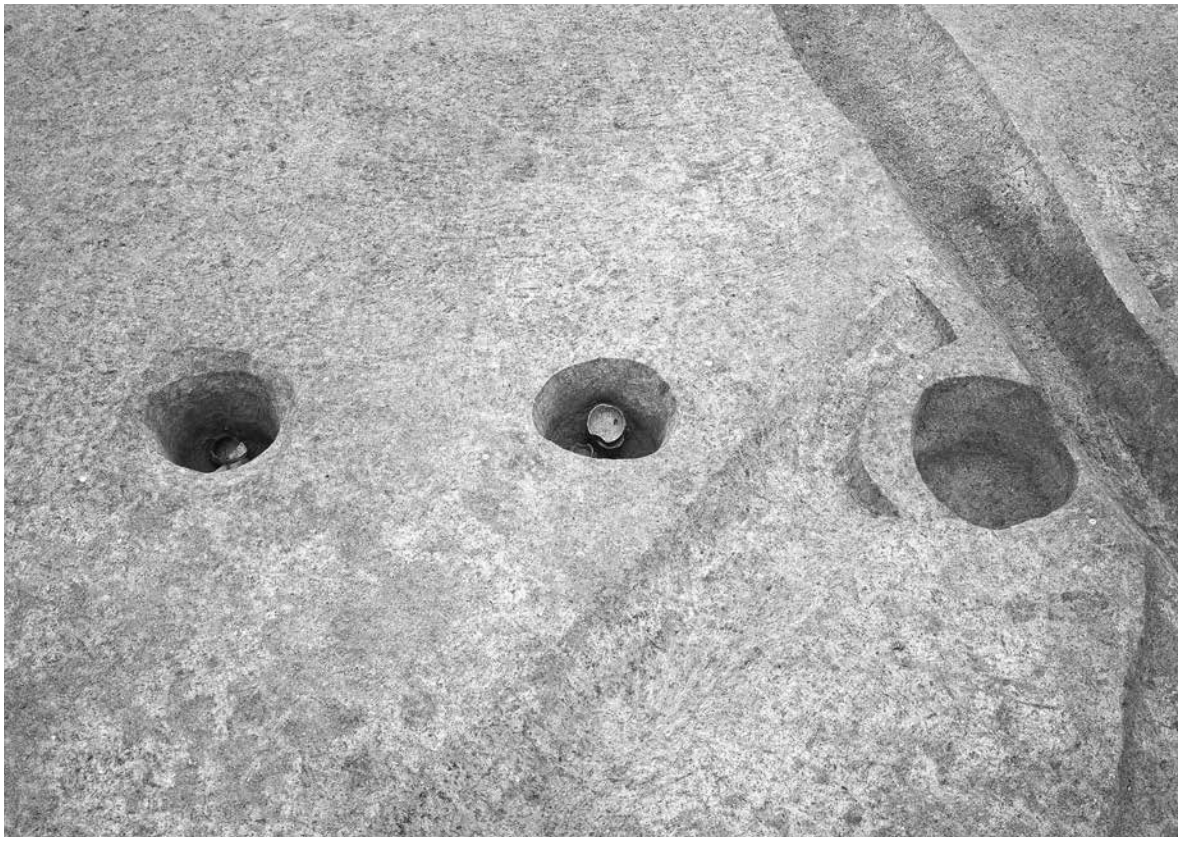
環濠全景（東から）

2 区

2 区全景（西から）

2 区全景（東から）

2 区

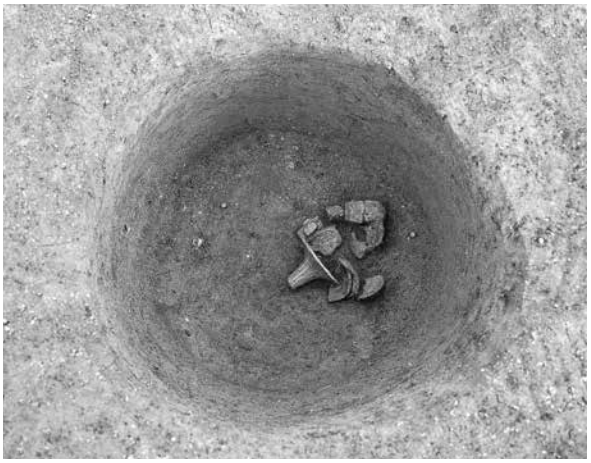


SK204・205・206全景（東から）

SK205 堆積状況

SK205 土器出土状態

SK205　土器出土状態



SK205　下面

2 区

SK204・205・206全景（北から）

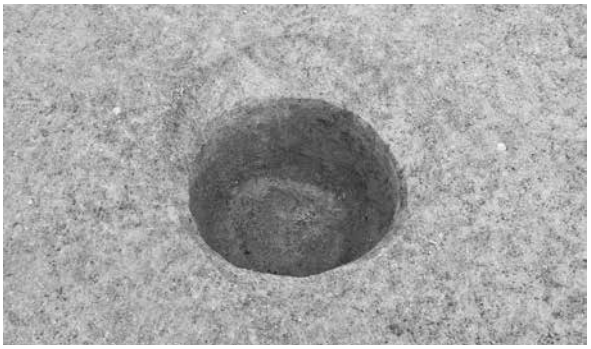
SK204 土器出土状況

SK204　堆積状況

SK206　土器出土状態

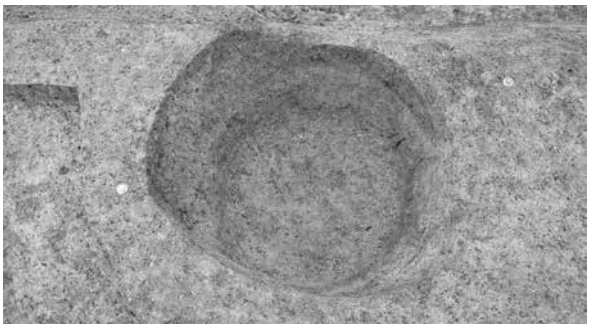
2 区

SK204 完掘

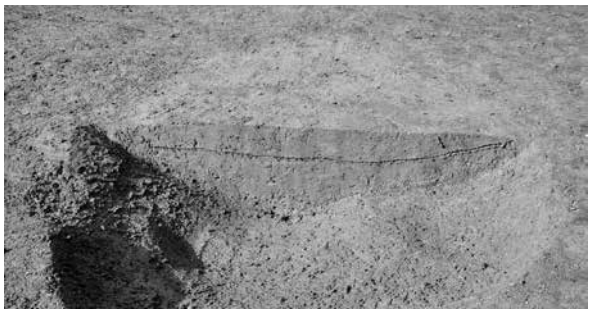


SK205 完掘

SK207 断面

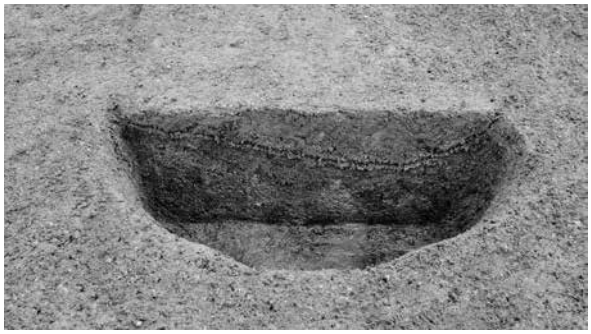


SK207 完掘



SK209 断面

SK210 断面



SK221 断面

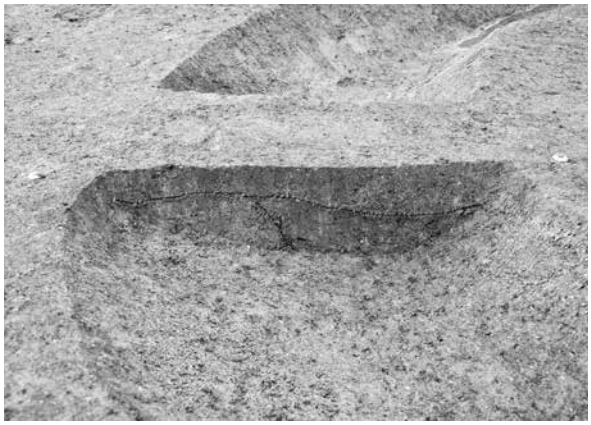
SK224 断面

SK225 断面

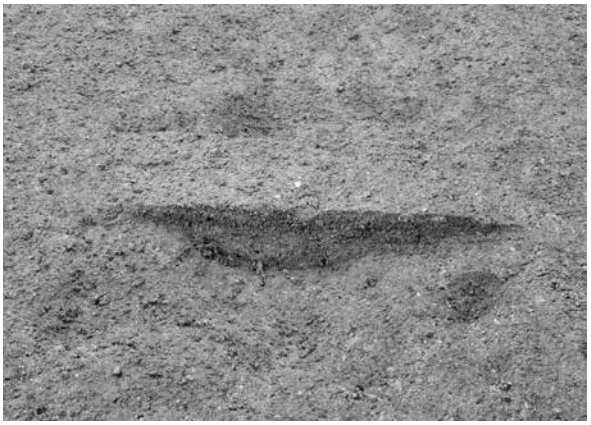
SK230 断面

2 区

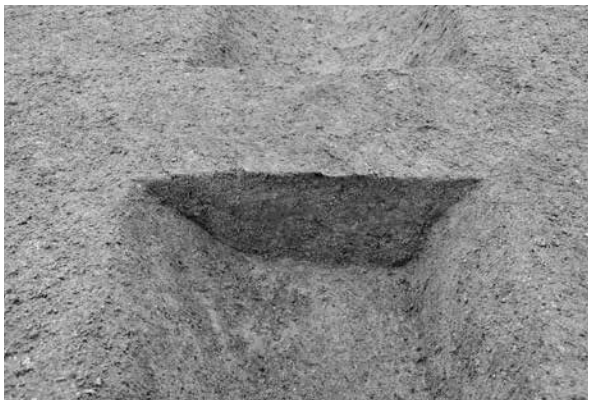
交差する溝群（SD201とSD212など）



SD201 アゼ（東から）



SD219 アゼ（東から）



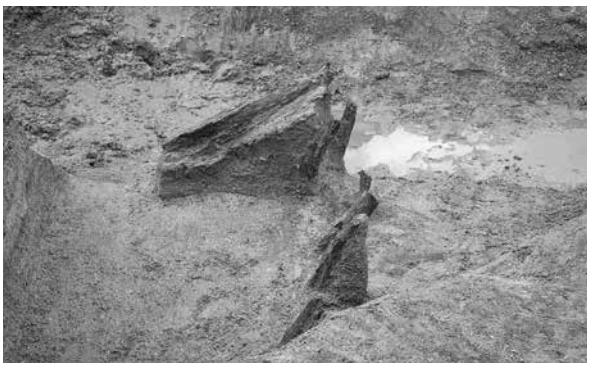
SD220 アゼ（東から）

SD226 アゼ（東から）

2区下層

2区下層全景（東から）

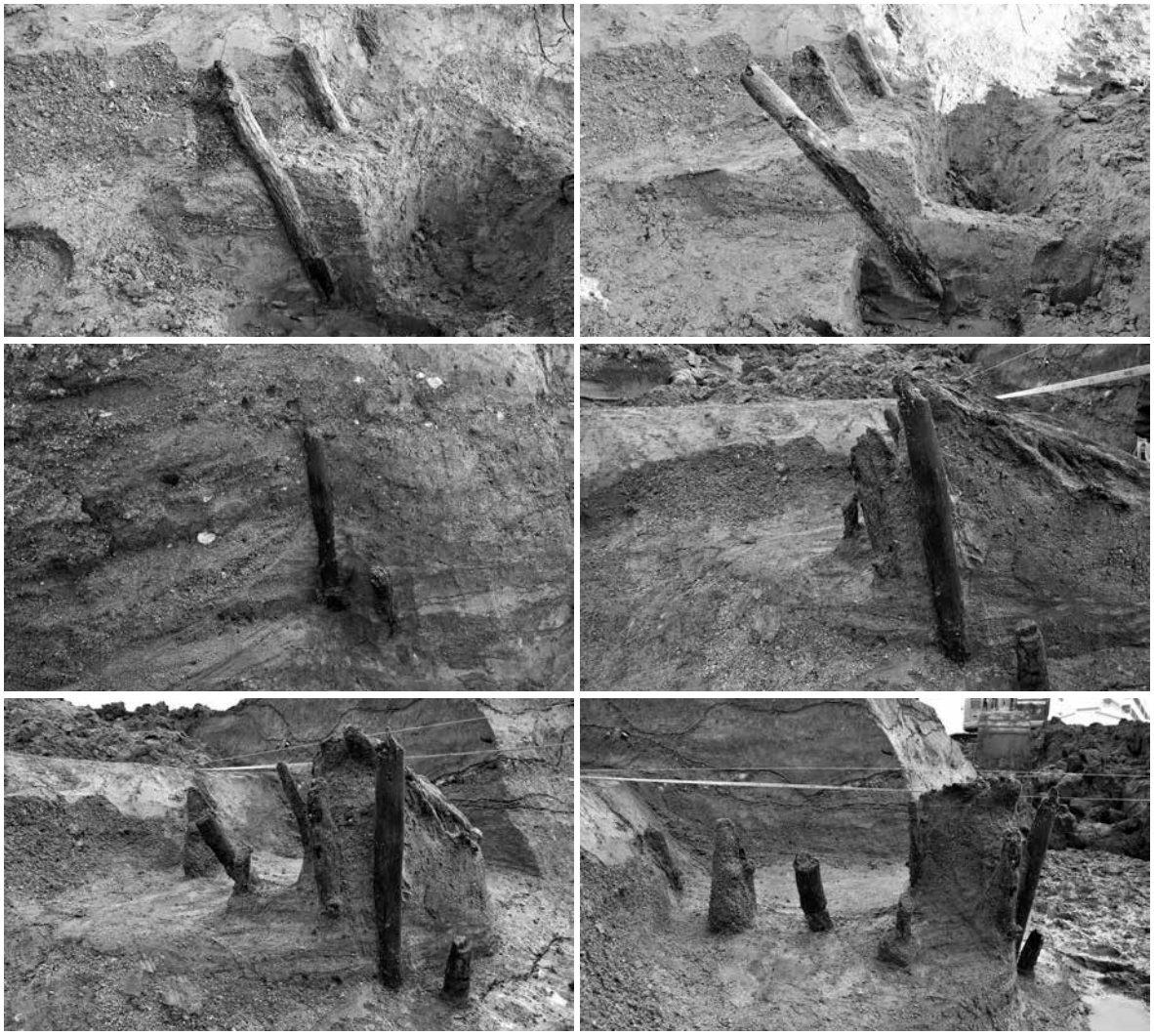
2区下層全景（西から）



堰（南から）

堰（西から）

2 区下層



杭列断面

杭（棒状）出土状況

木製品出土状況

調査風景

3区

3区全景（北上空から）

3区全景（南上空から）

3 区

3 区全景（東上空から）

3 区全景（西上空から）

3区

第1面全景（東から）

第1区全景（西から）

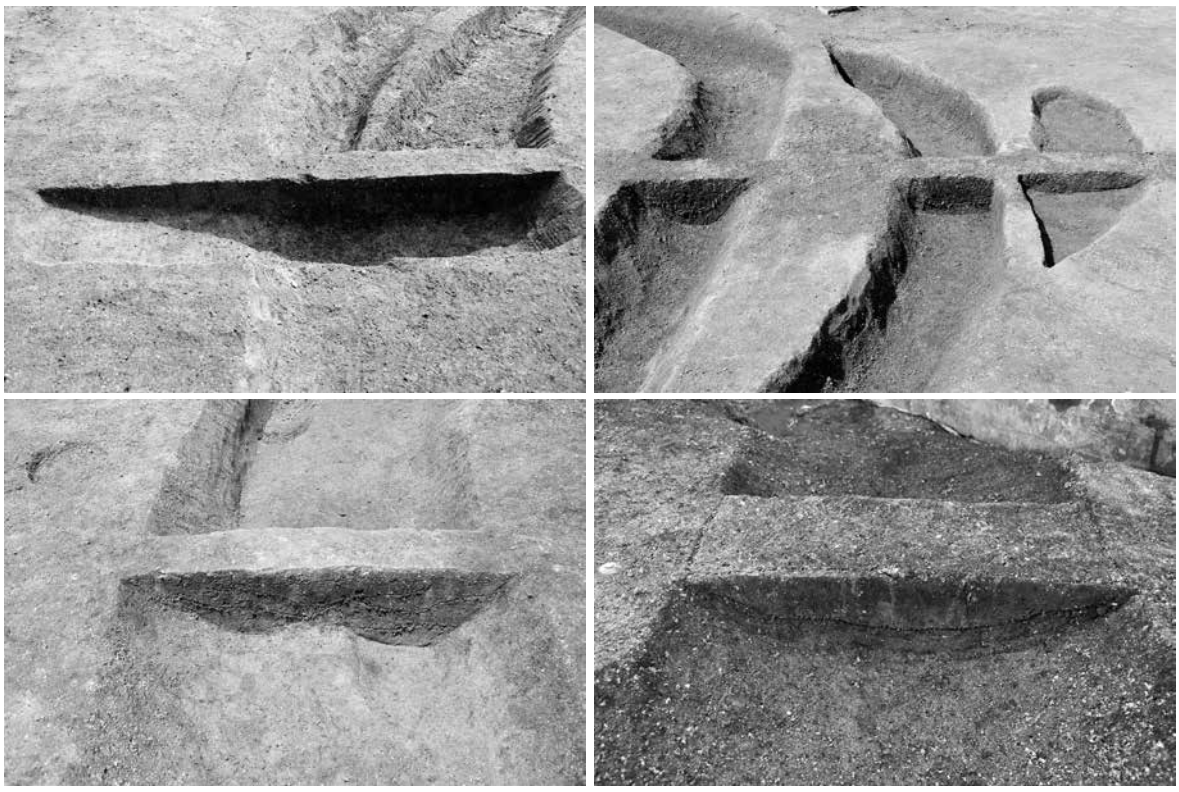
3区

第1面西半全景（西から）

第1面西半全景（南から）

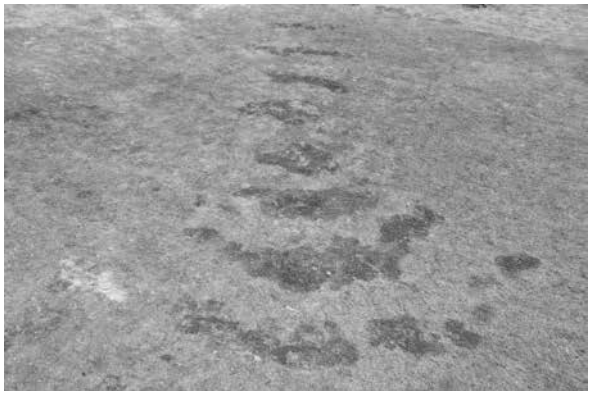
3 区

環濠全景（南東から）



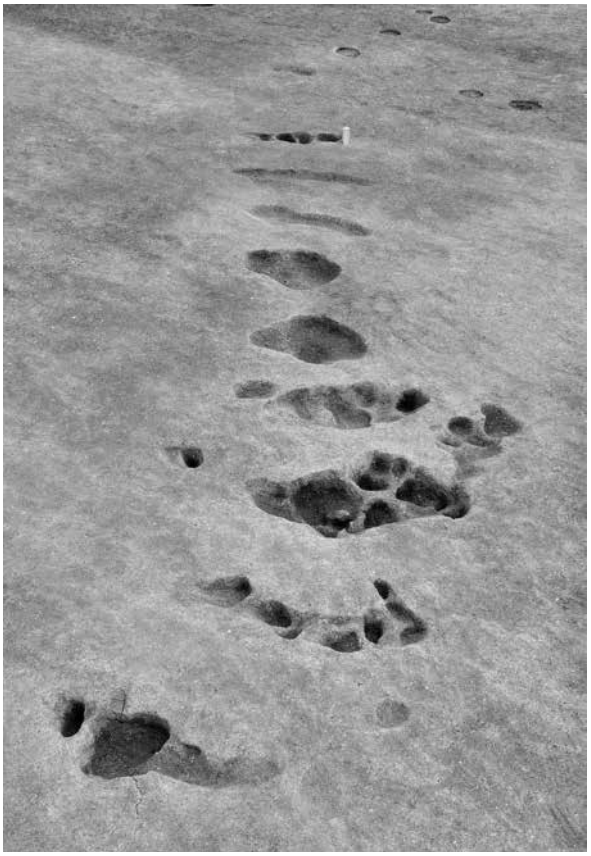
環濠断面

3 区

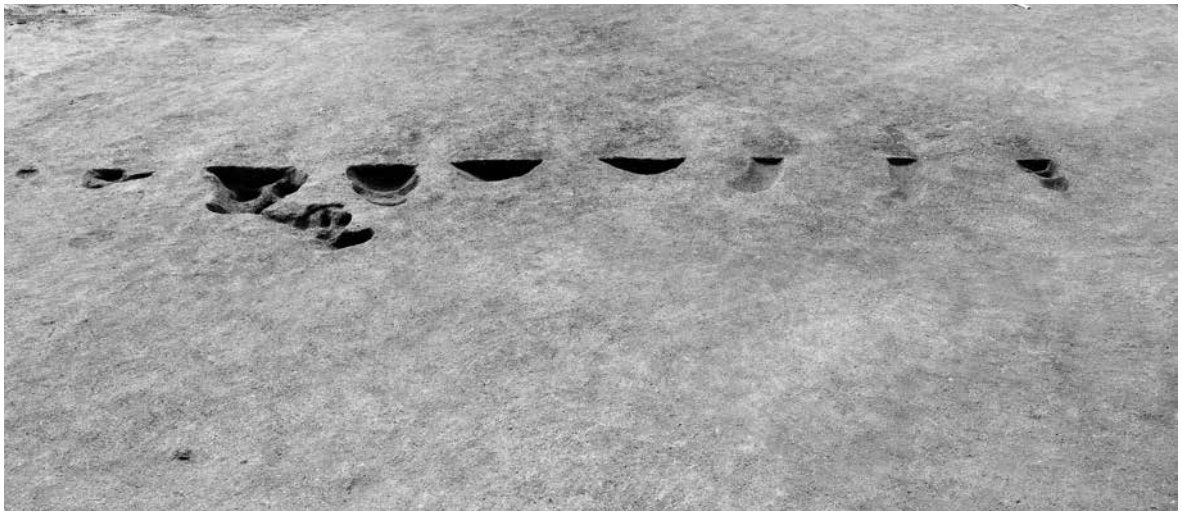


SX17 検出状況（西から）

SX17 断面（南から）



SX17 全景（西から）

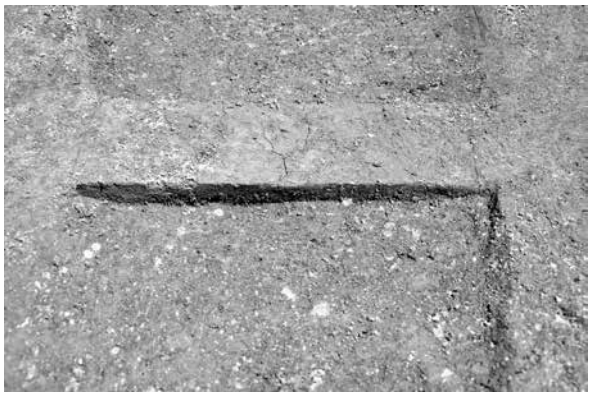


SX17 断面（南から）

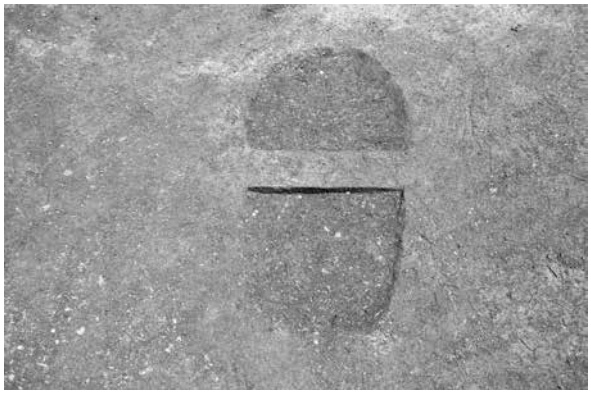
3 区

SK07 断面（南から）

SK26 断面（南から）



SK27（南から）



SK34（西から）

SK58 断面（南から）

東壁断面

3区下層

第2面全景（東から）

第2面全景（西から）

3 区下層

上層水田（南上空から）

第 2 面水田空中写真（南上空から）

3区下層

3区下層水田（南から）

畦畔

畦畔断面

畦畔断面

3区下層

北東隅大畦畔断面

畦畔断面

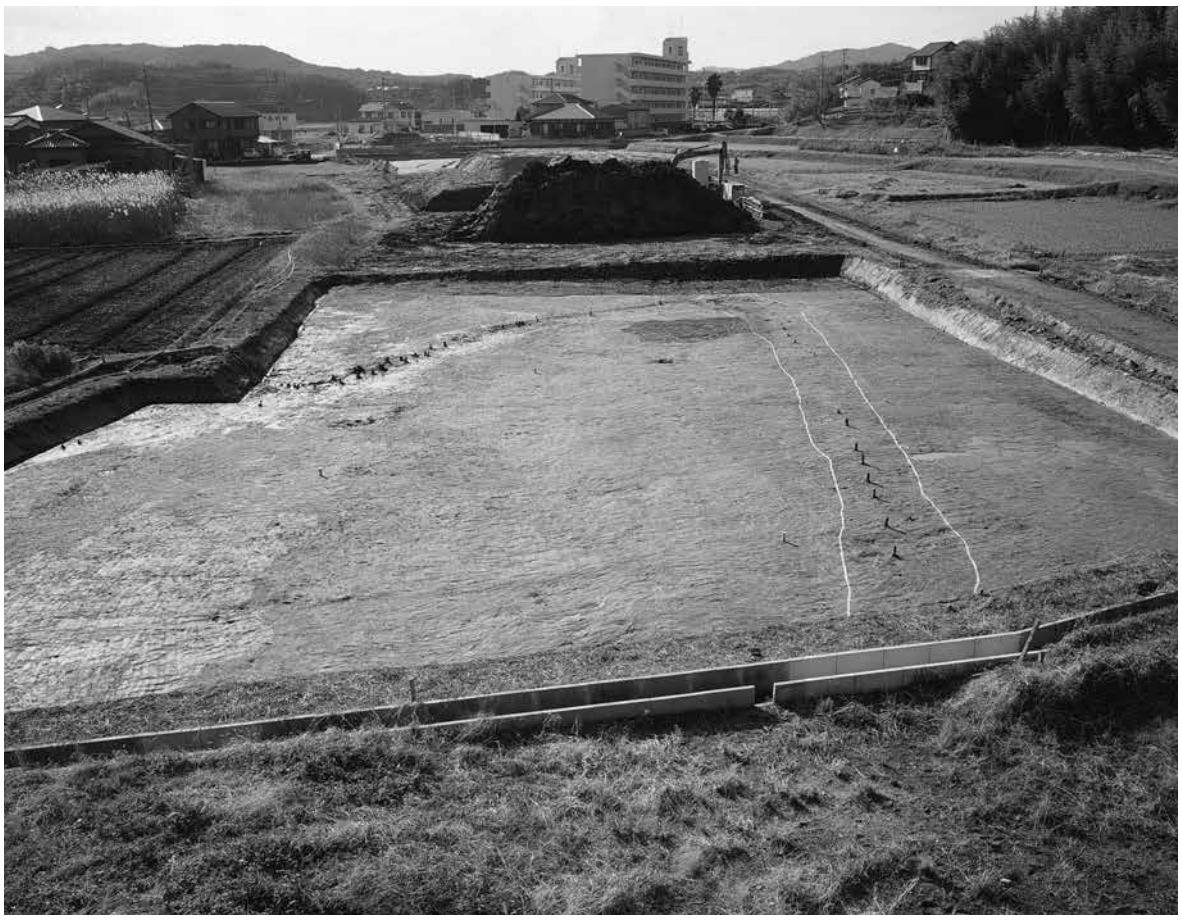
東西断ち割りトレンチ

調査風景

南北断ち割りトレンチ

4 区

第 1 面（北上空から）

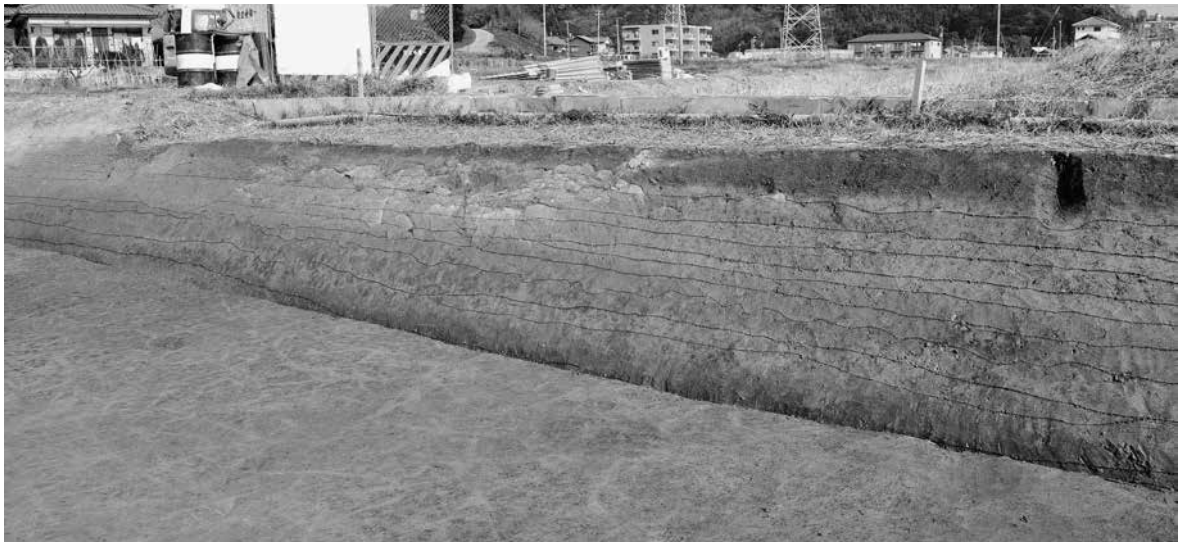


第 1 面全景（東から）

4 区

第 1 面全景（西から）

北壁断面

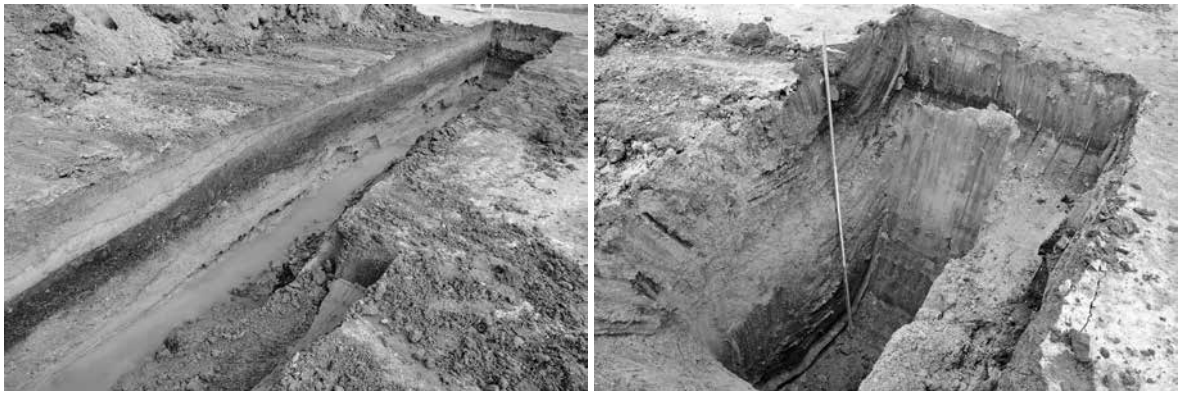


東壁断面

4区

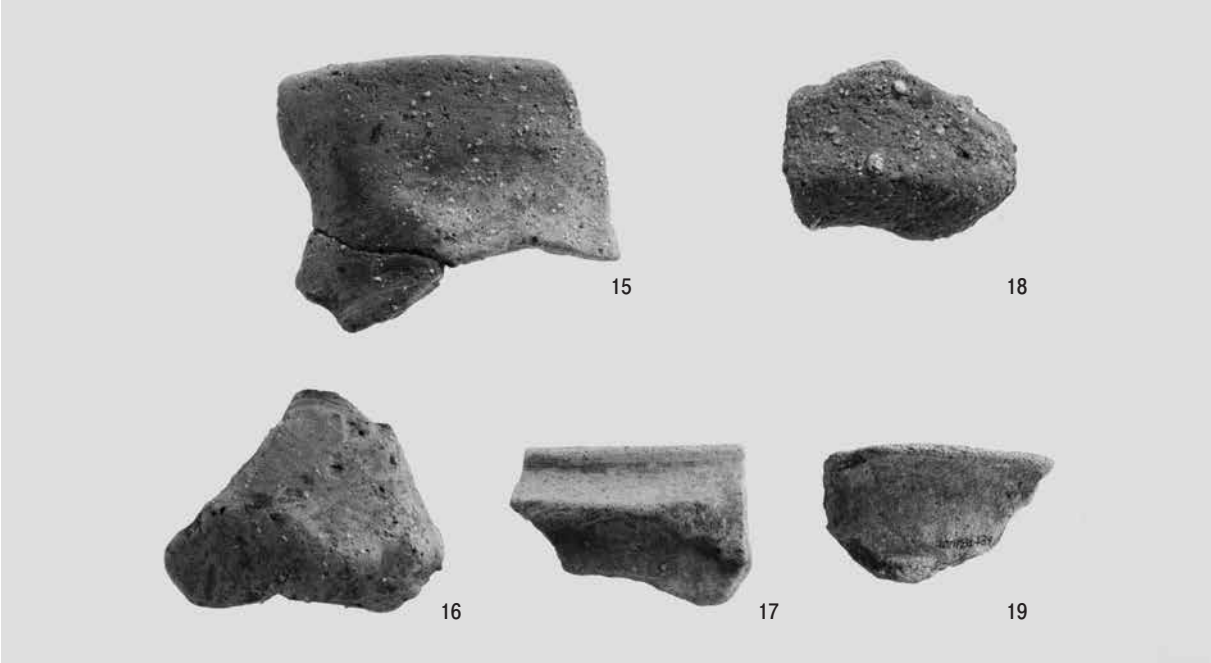
第2面（東から）

第2面（西から）

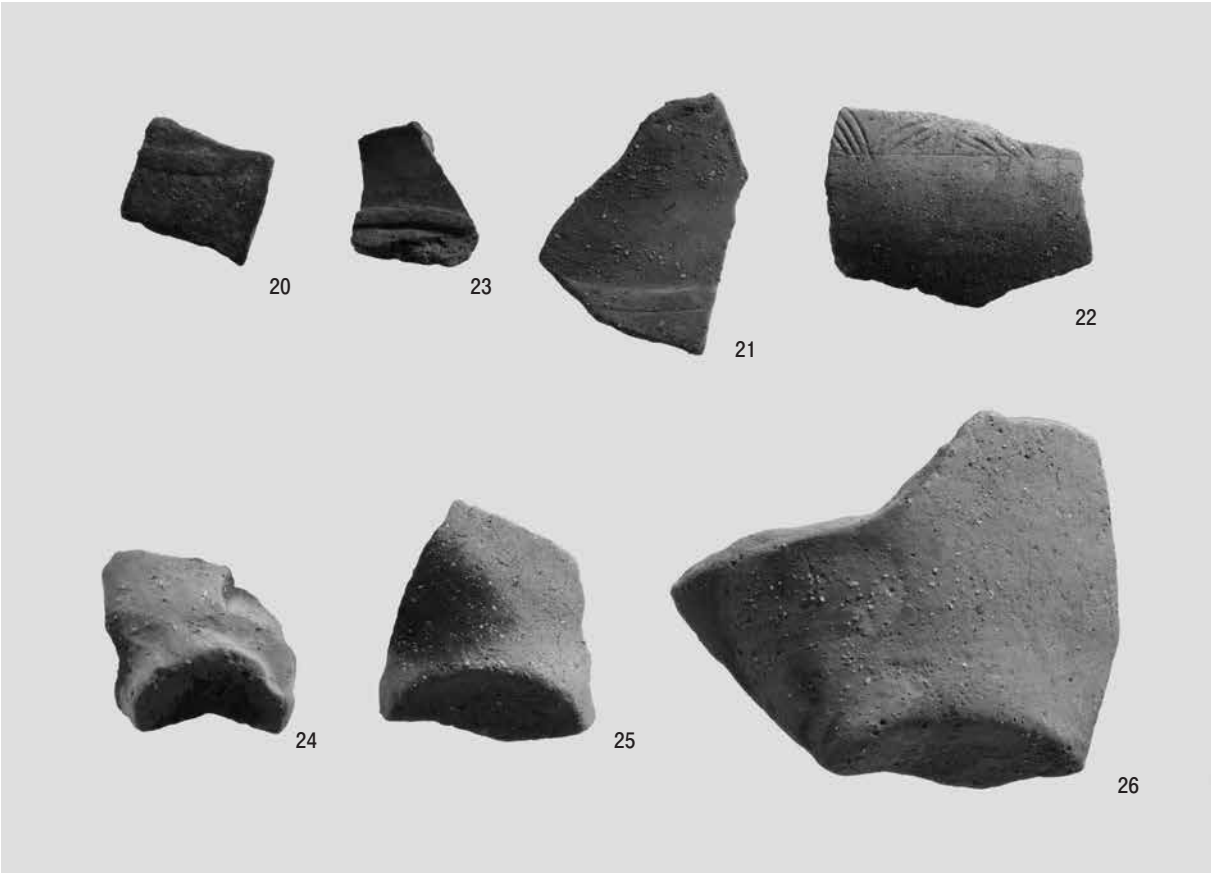


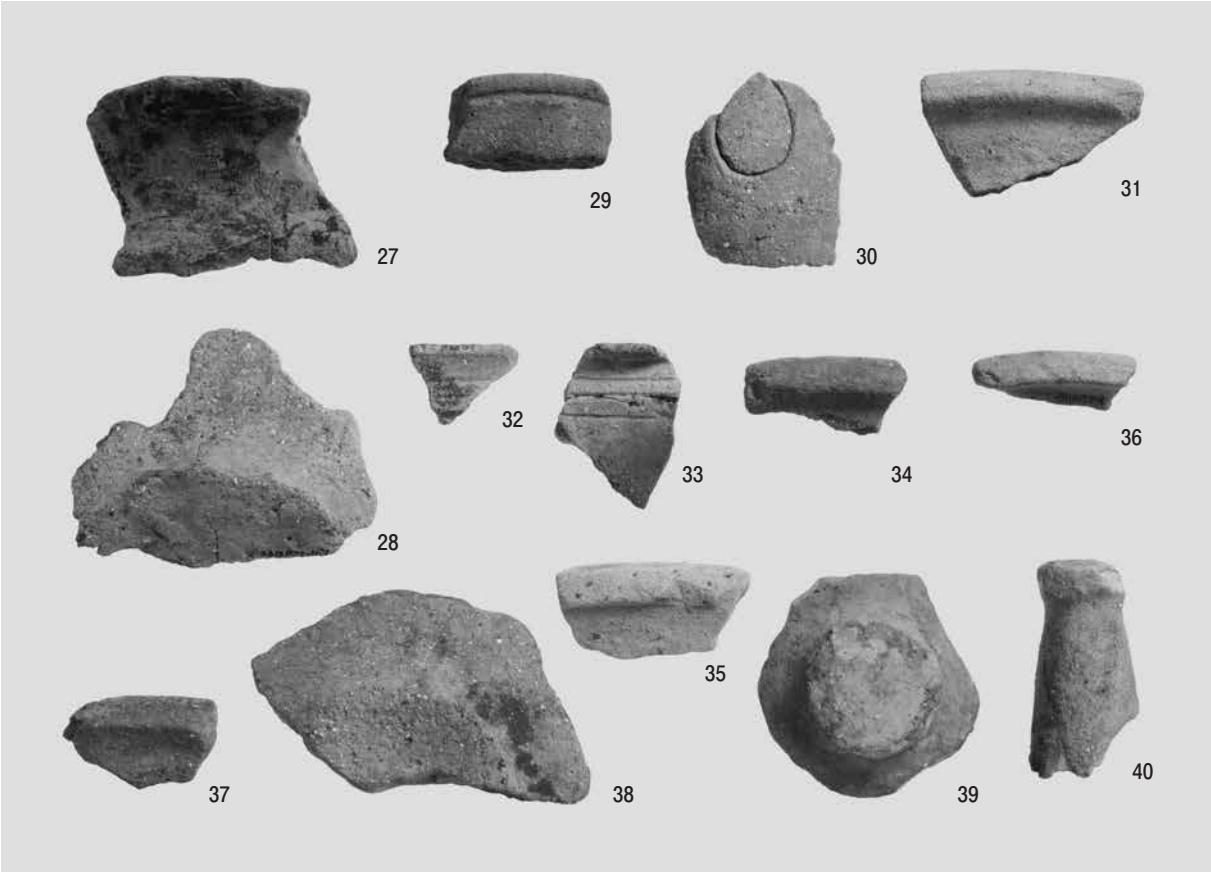
深掘トレンチ（南から）

出土遺物（1）

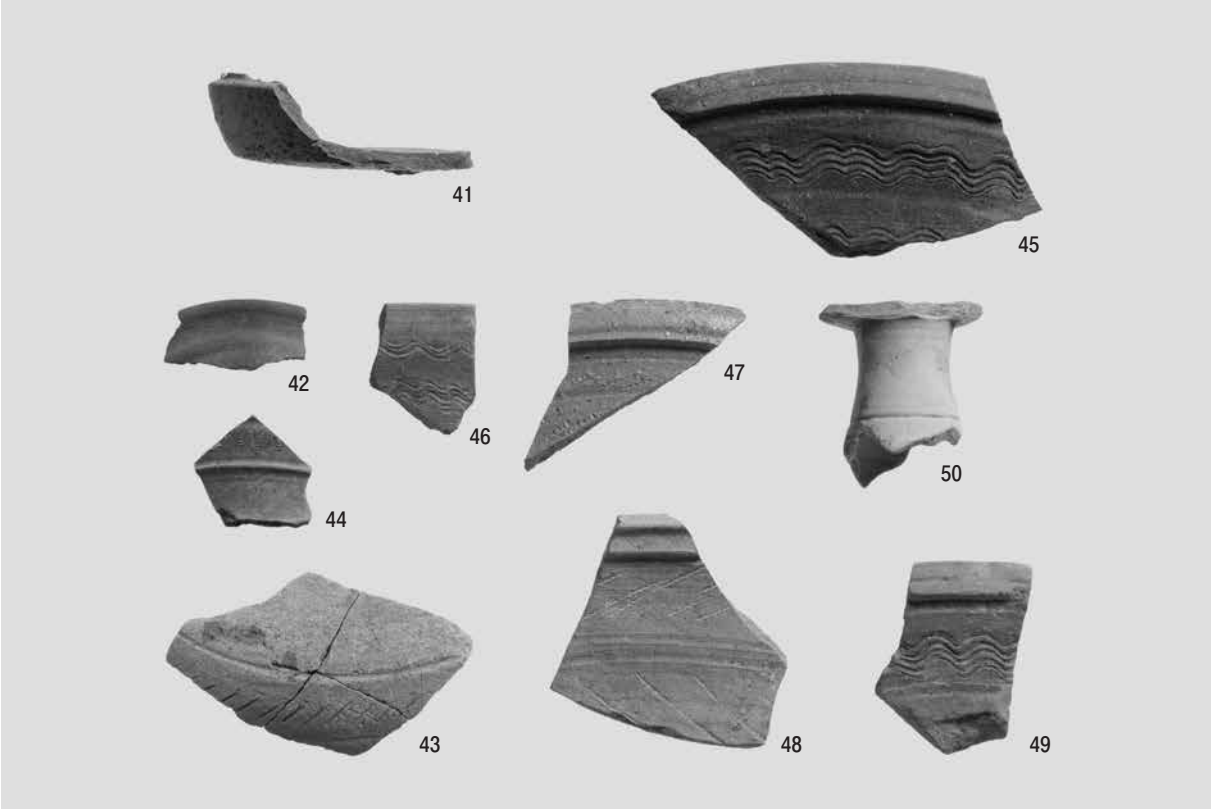


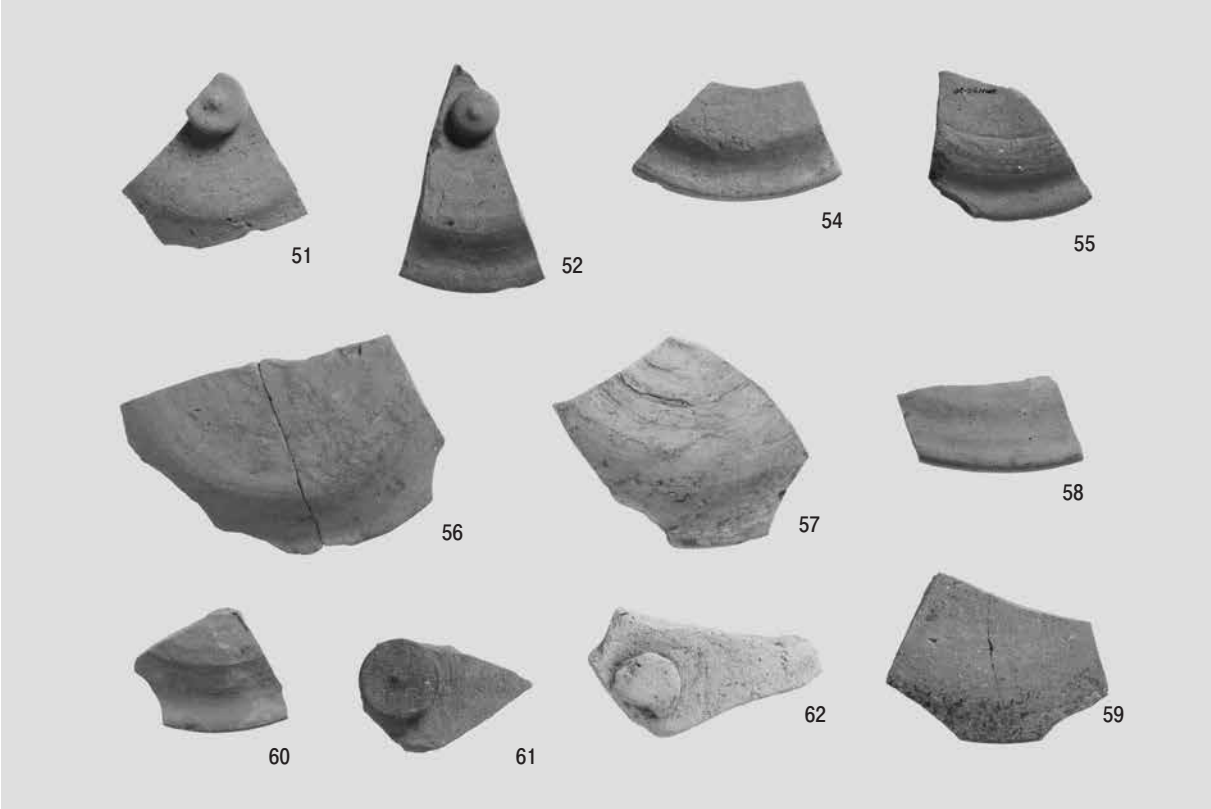
出土遺物（２）



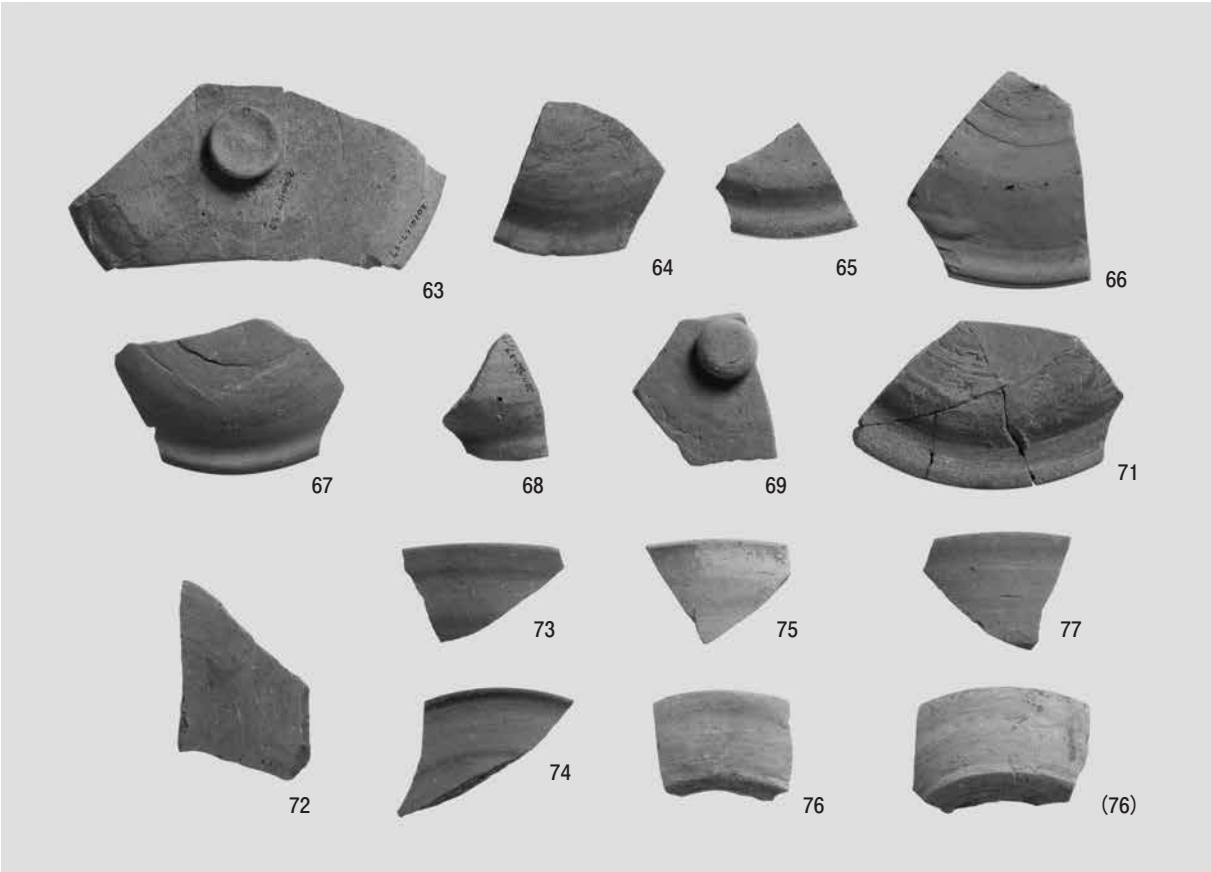


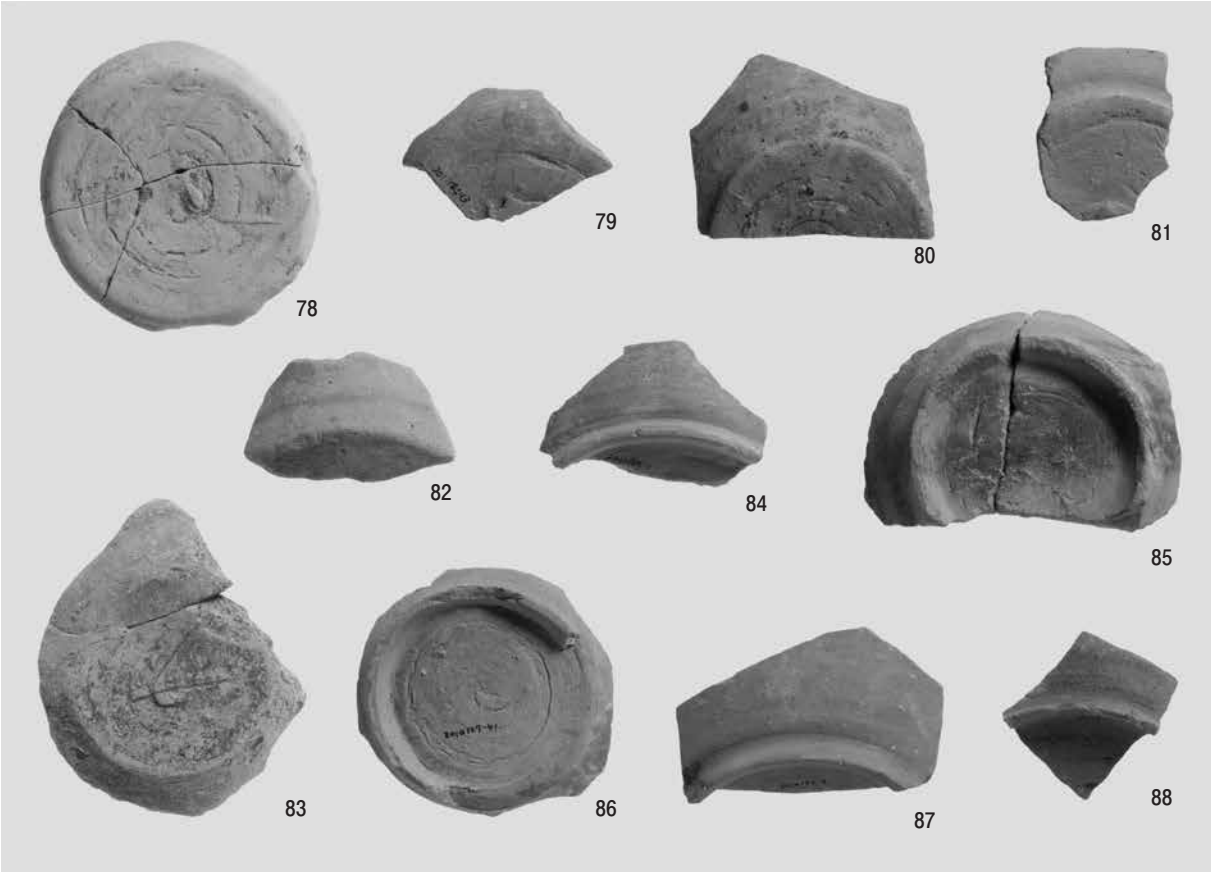
出土遺物（3）



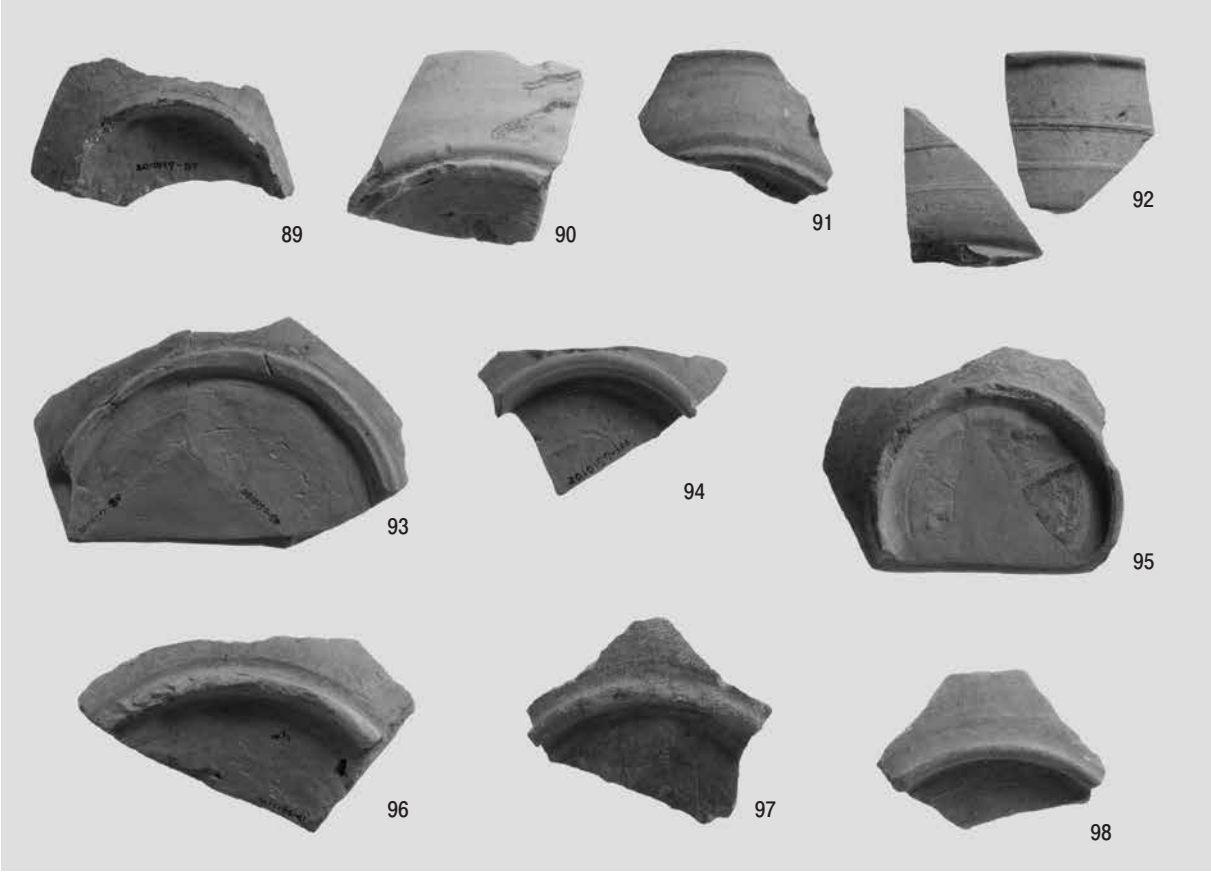


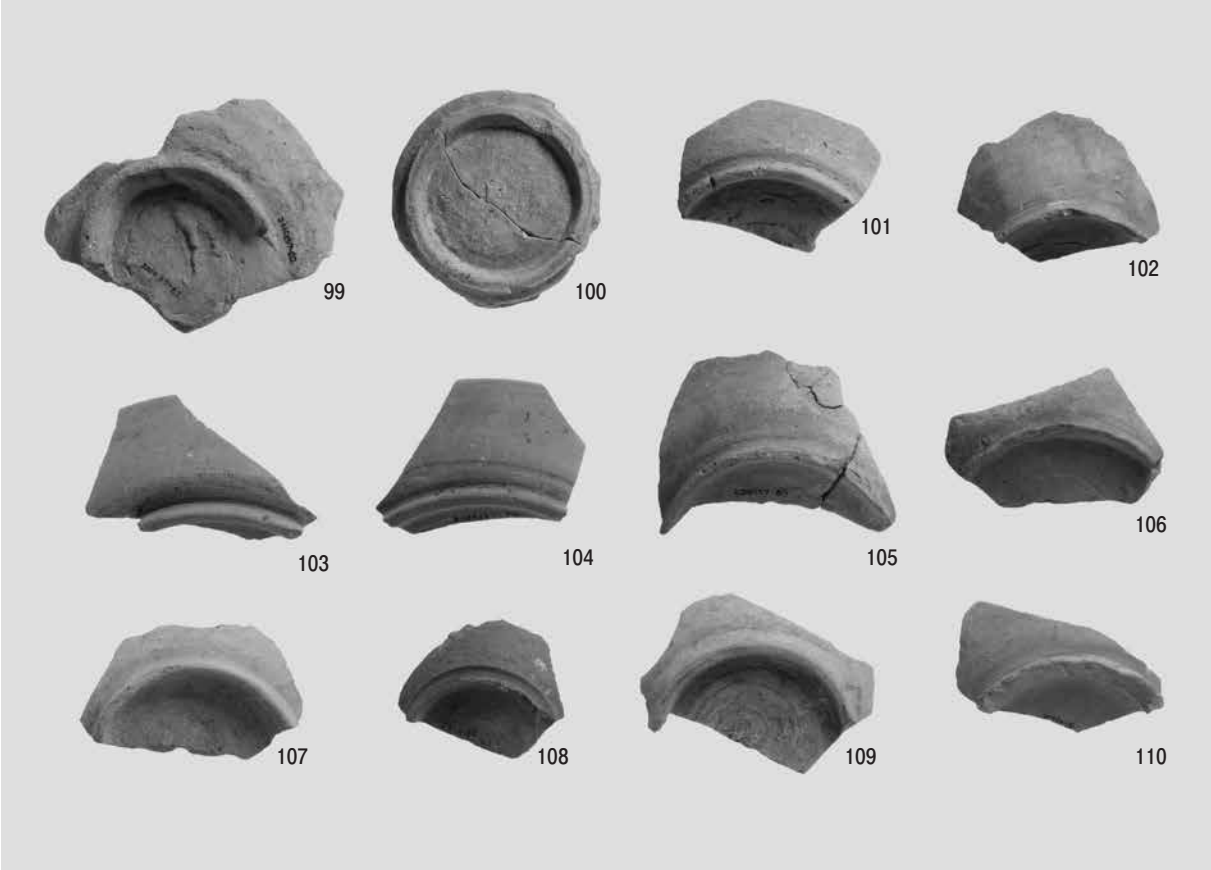
出土遺物（４）


63
64
65
66
67
68
69
71
72
73
74
75
76
77
(76)

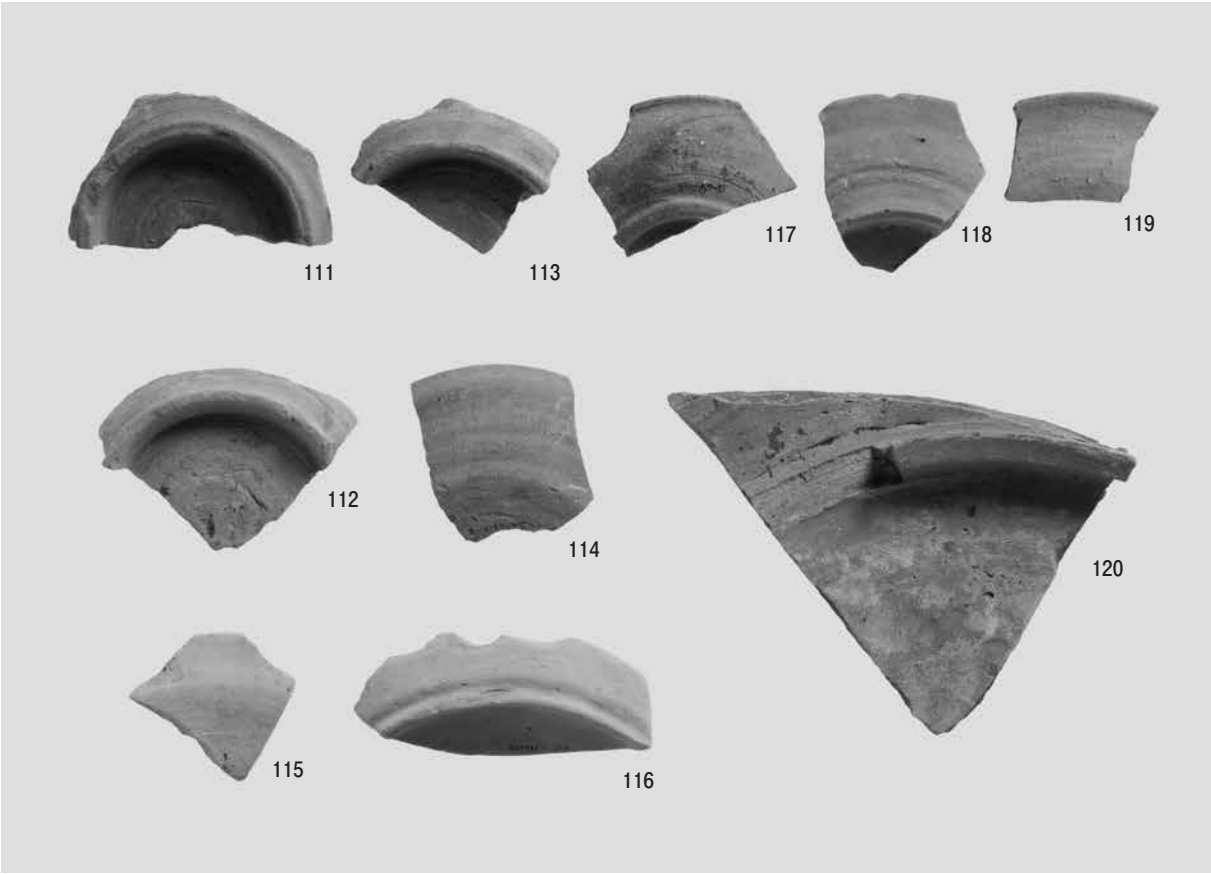

78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88

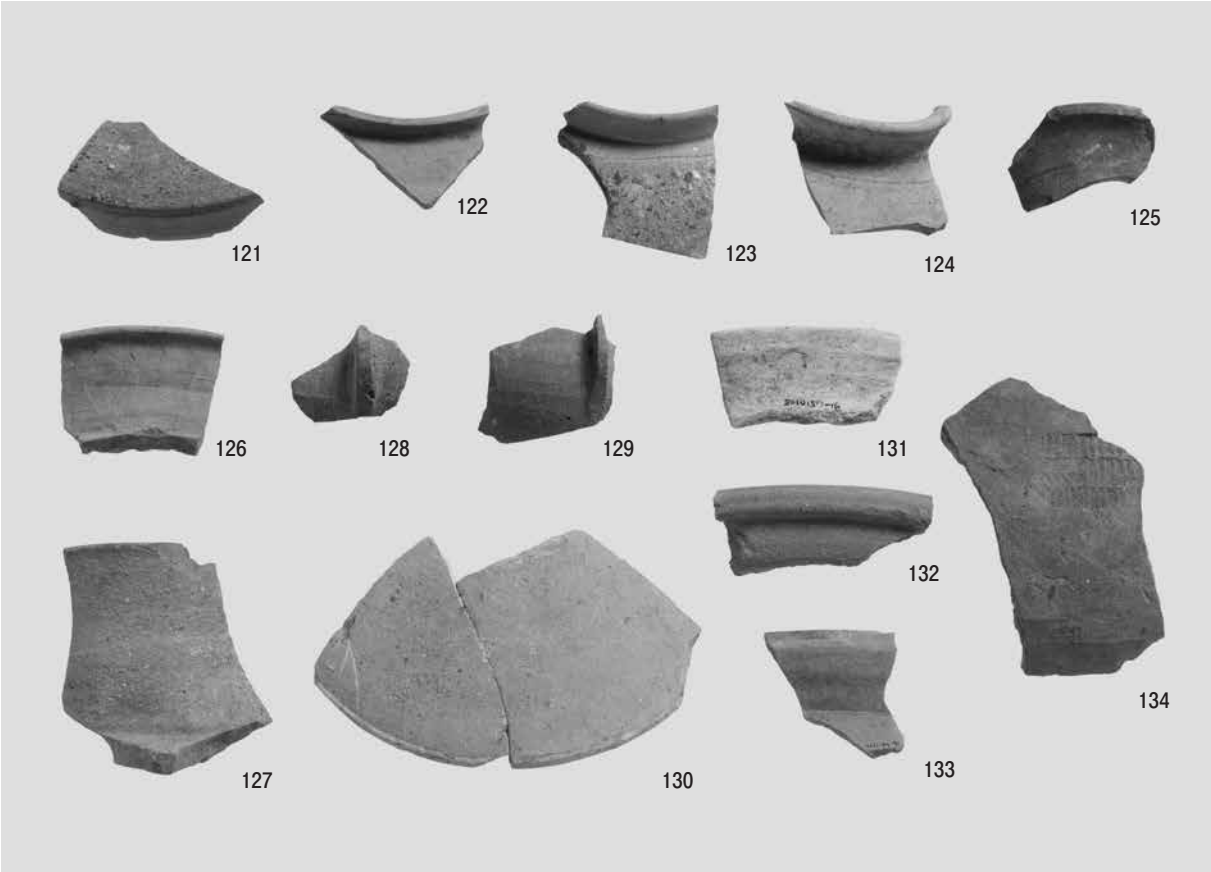
出土遺物（5）


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98

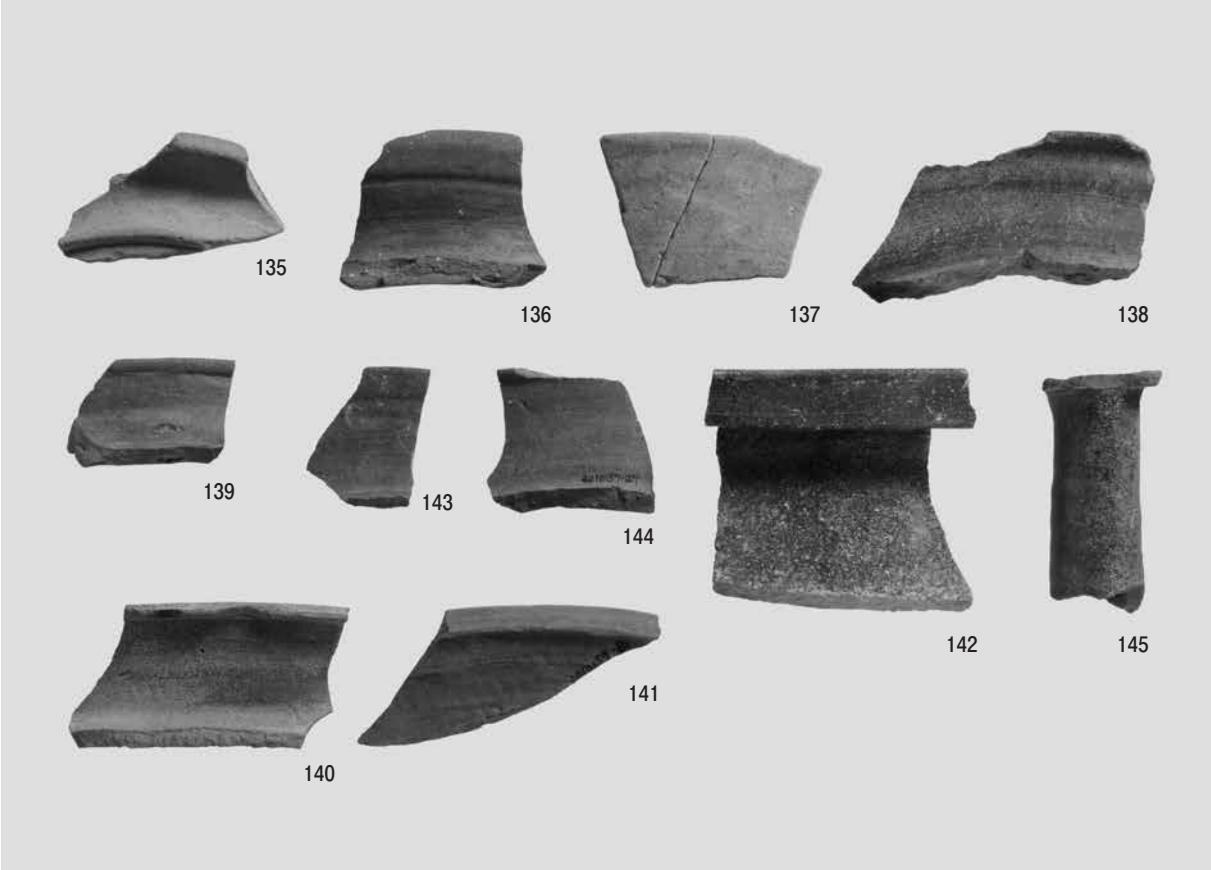

99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110

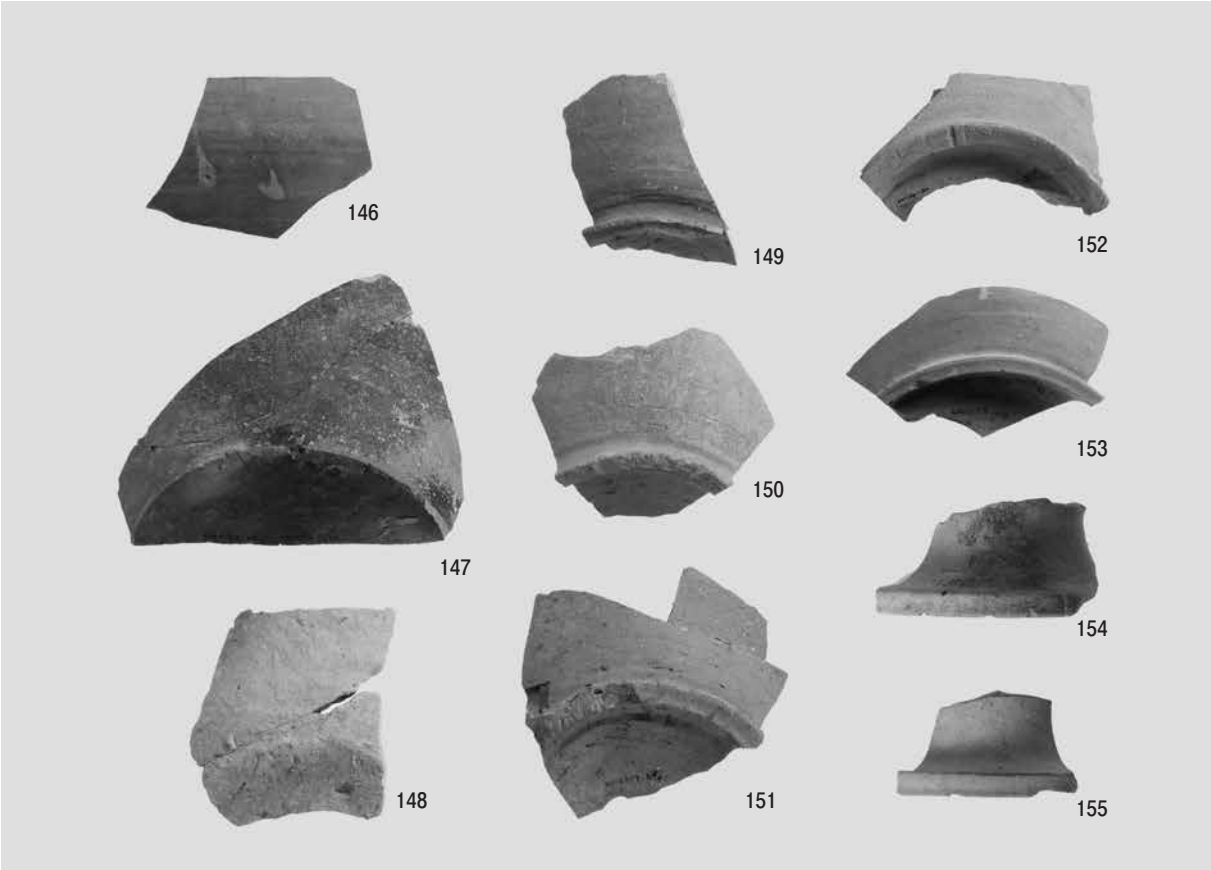
出土遺物（6）


111
113
117
118
119
112
114
120
115
116

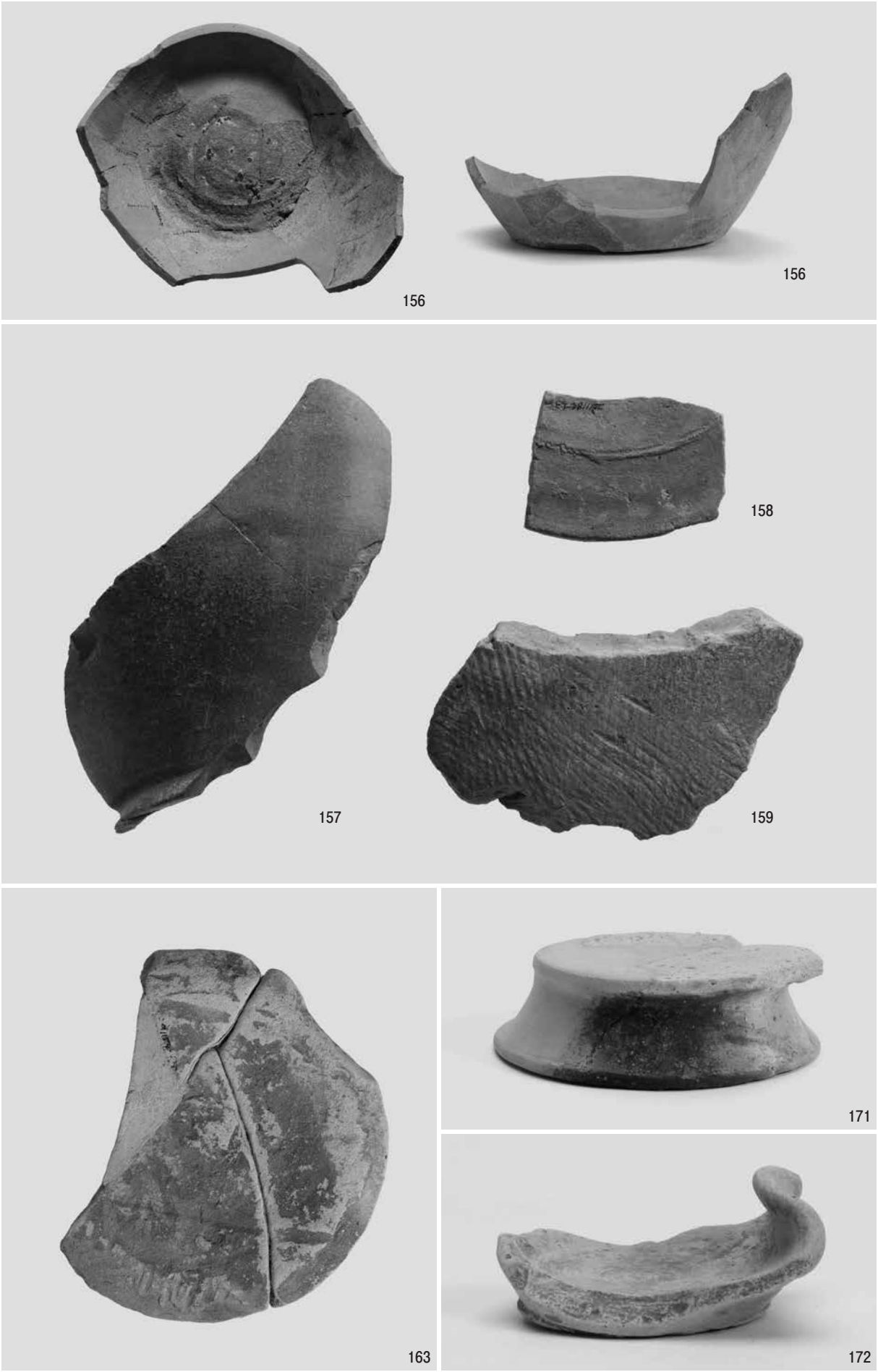

121
122
123
124
125
126
128
129
131
132
134
127
130
133

出土遺物（７）

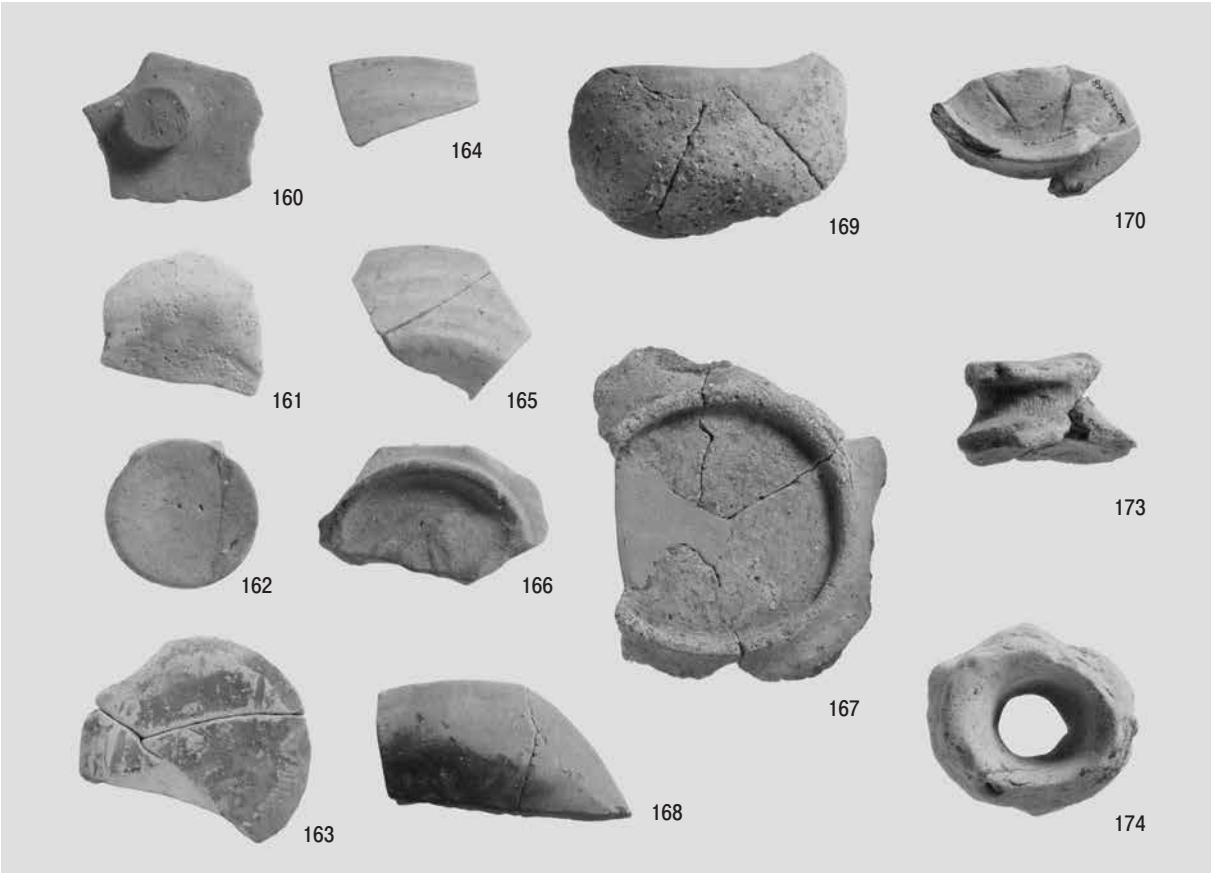

135
136
137
138
139
143
144
142
145
141
140

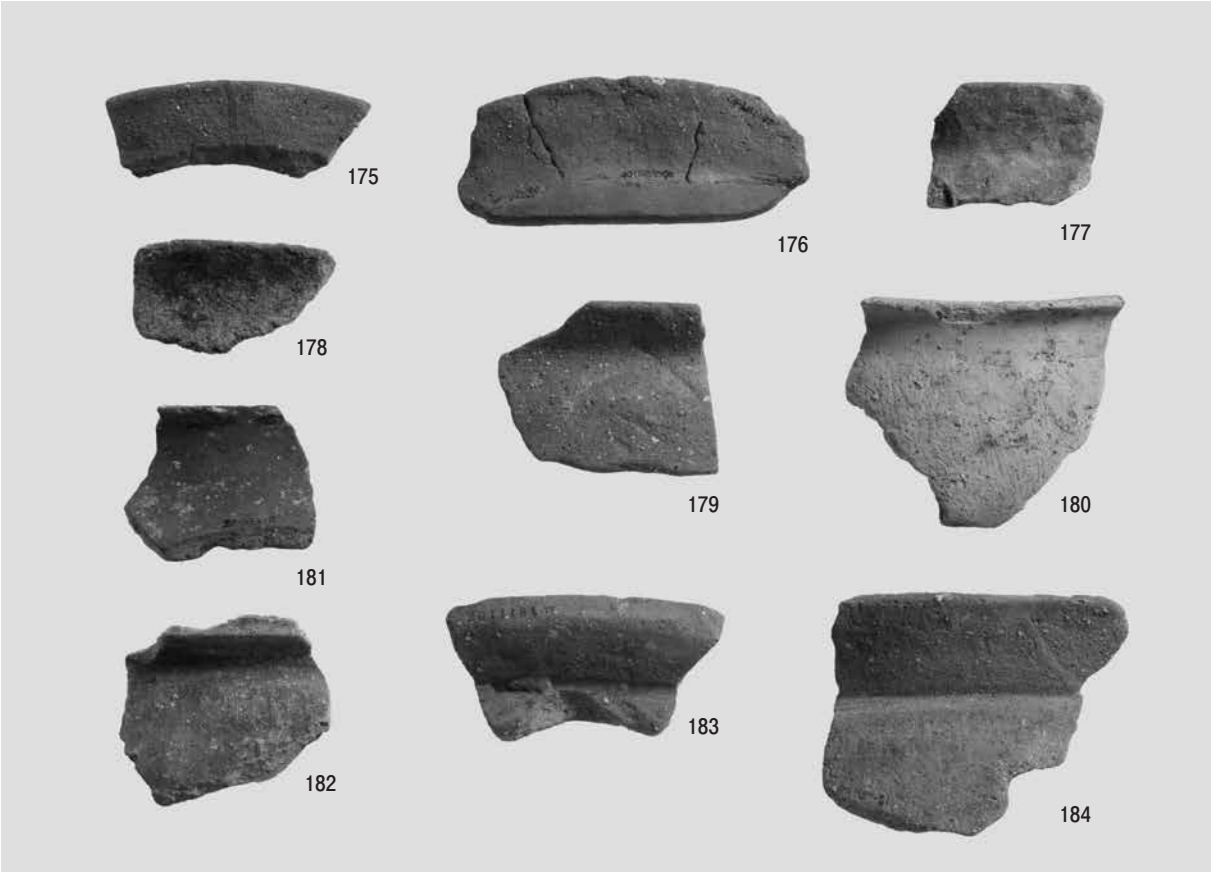

146
149
152
147
150
153
154
148
151
155

出土遺物（8）

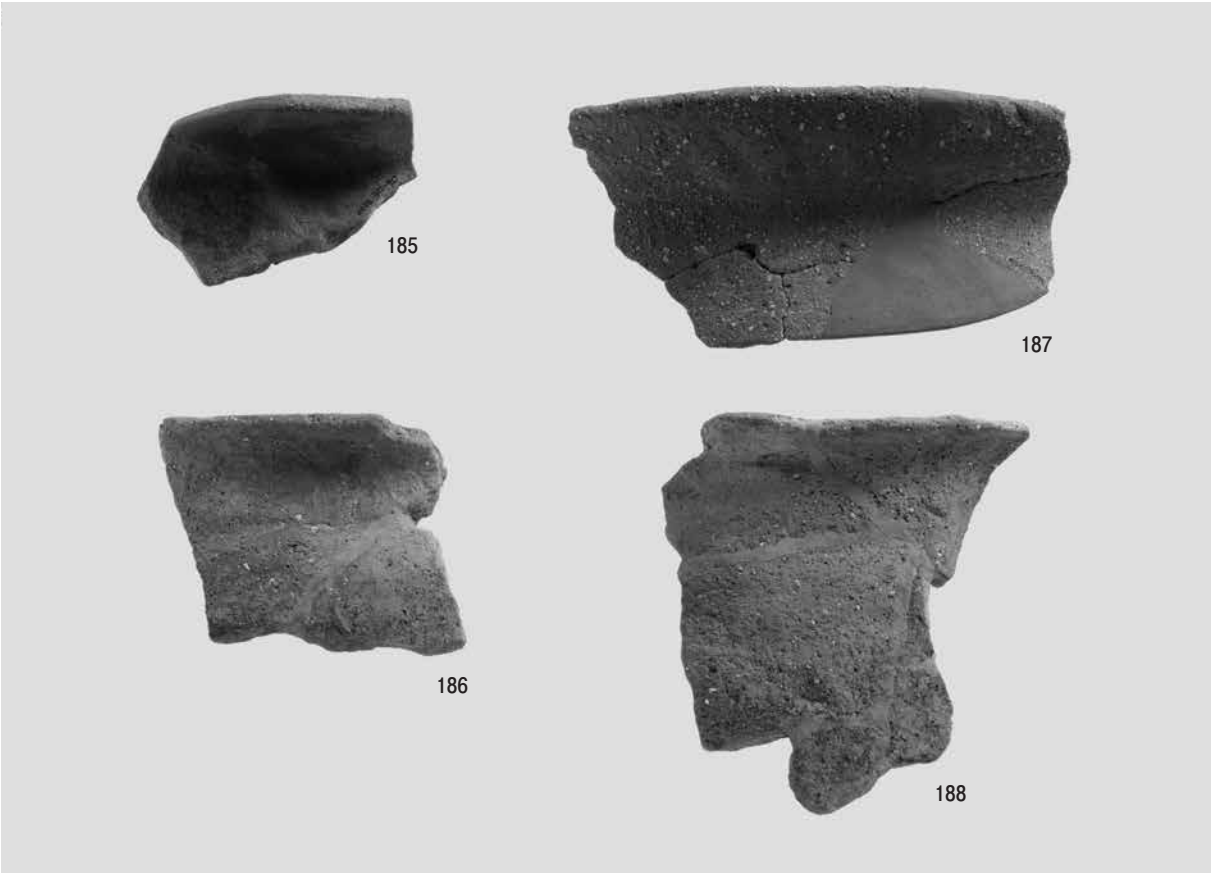


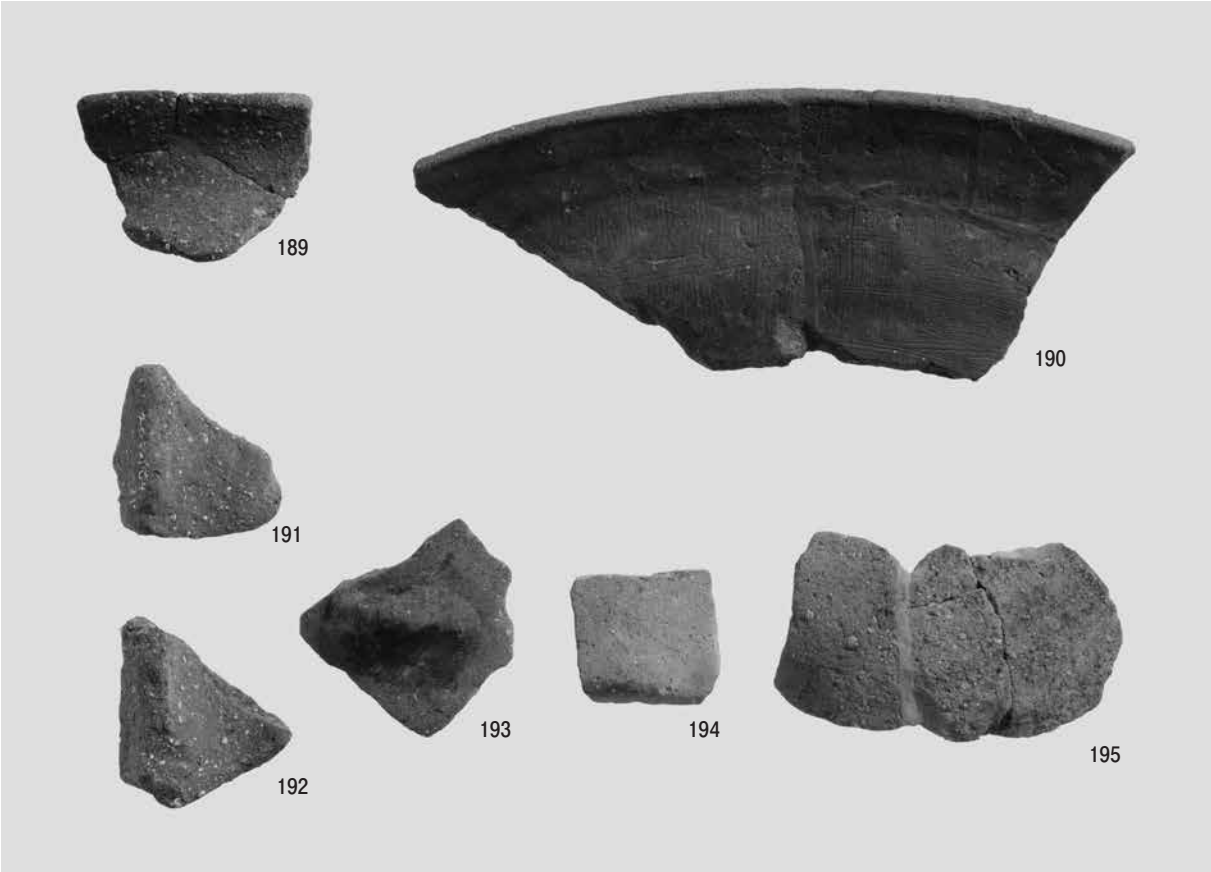
出土遺物（9）


160
164
169
170
161
165
173
162
166
167
163
168
174

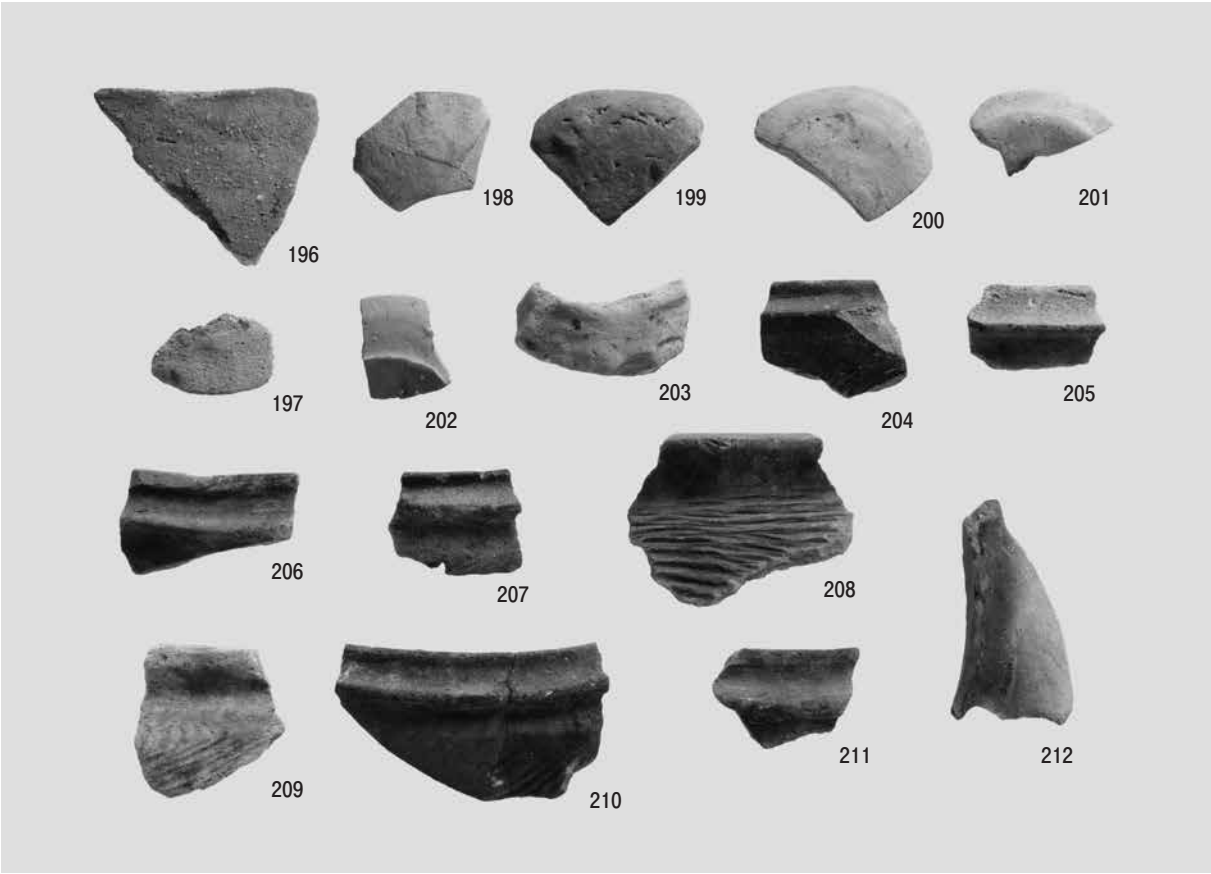

175
176
177
178
179
180
181
182
183
184

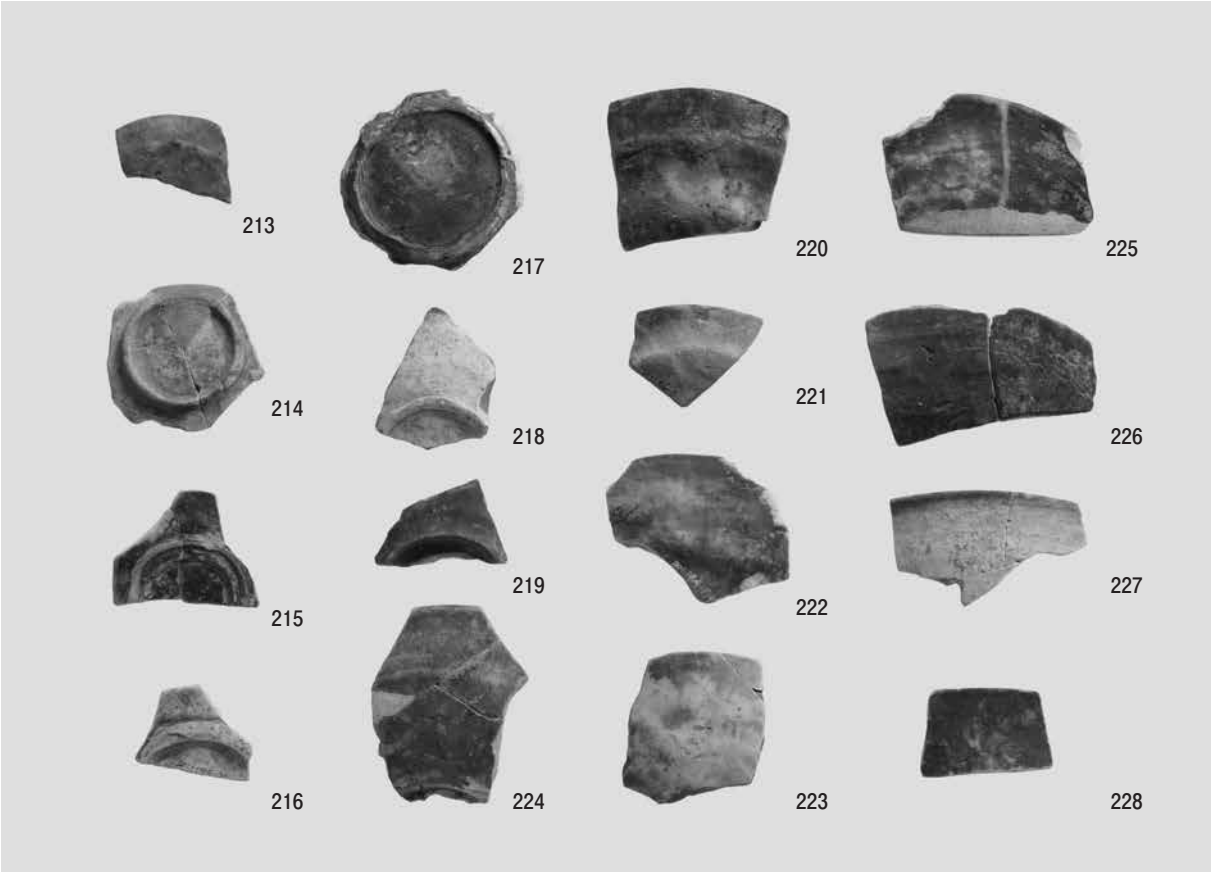
出土遺物（10）



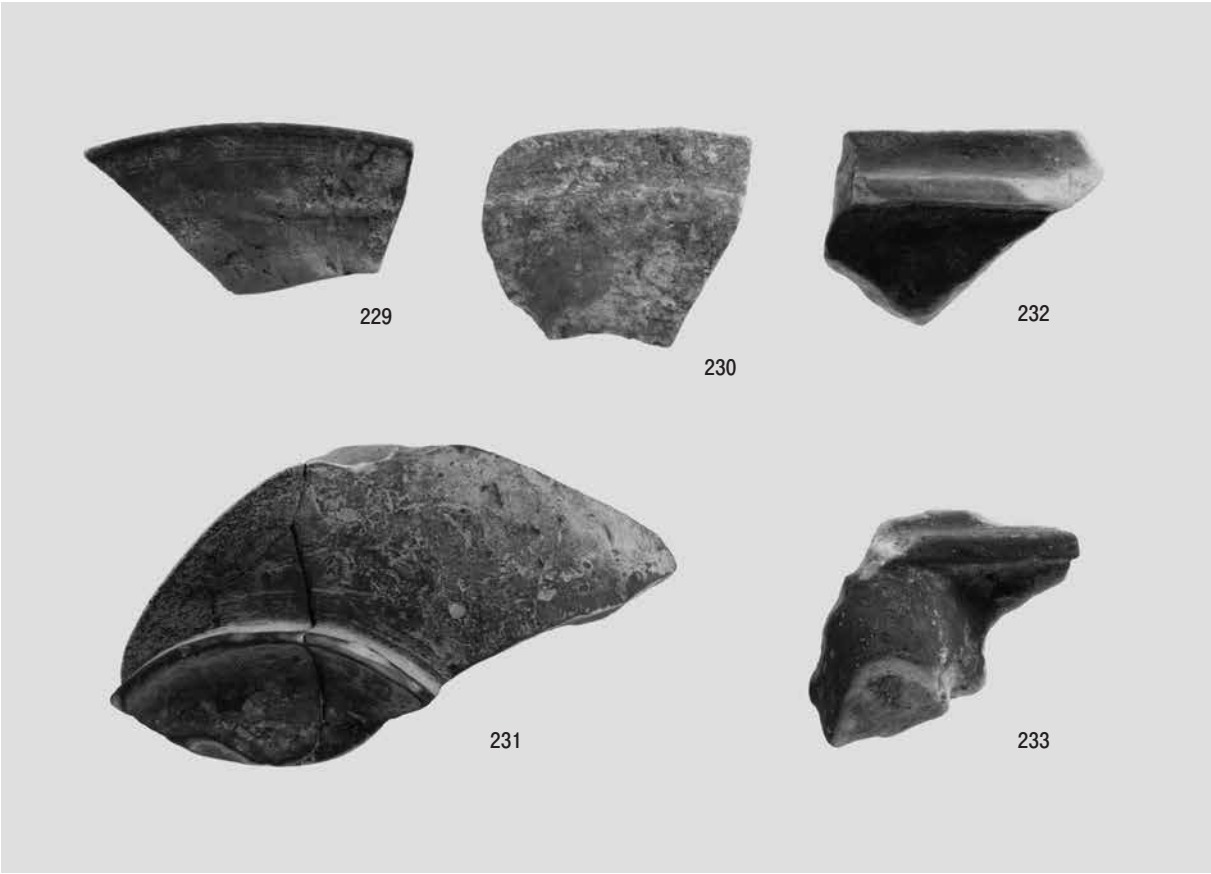


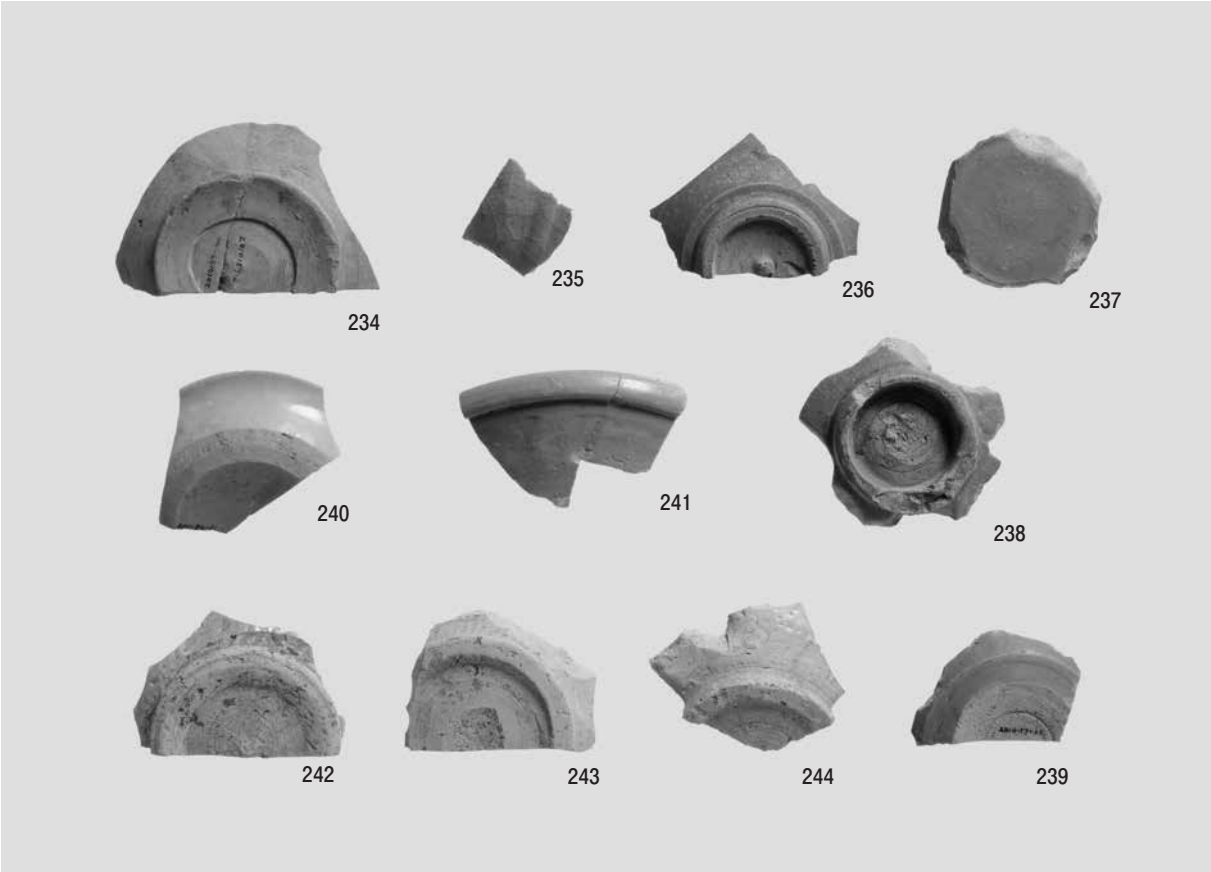
出土遺物（11）


196
198
199
200
201
197
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212

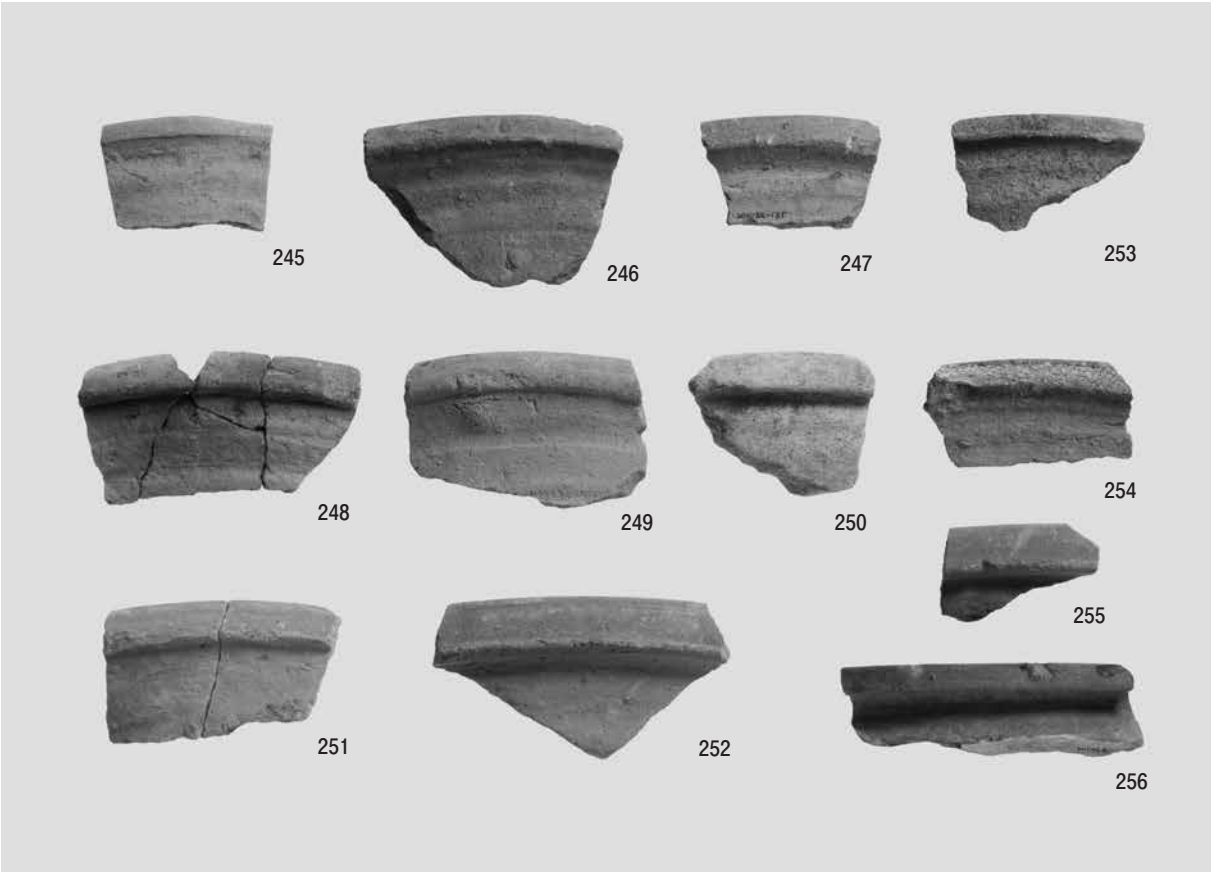

213
217
220
225
214
218
221
226
215
219
222
227
216
224
223
228

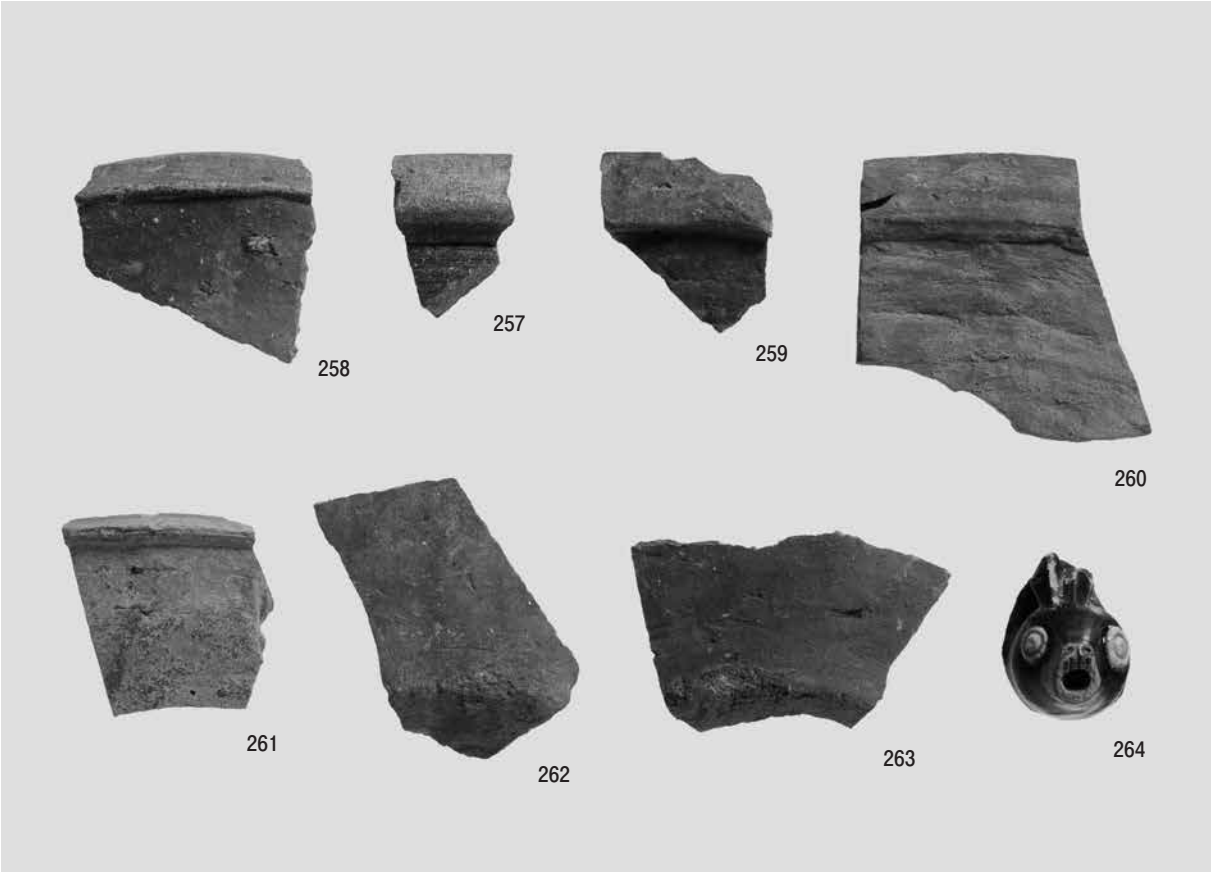
出土遺物（12）





出土遺物（13）


245
246
247
253
248
249
250
254
255
251
252
256

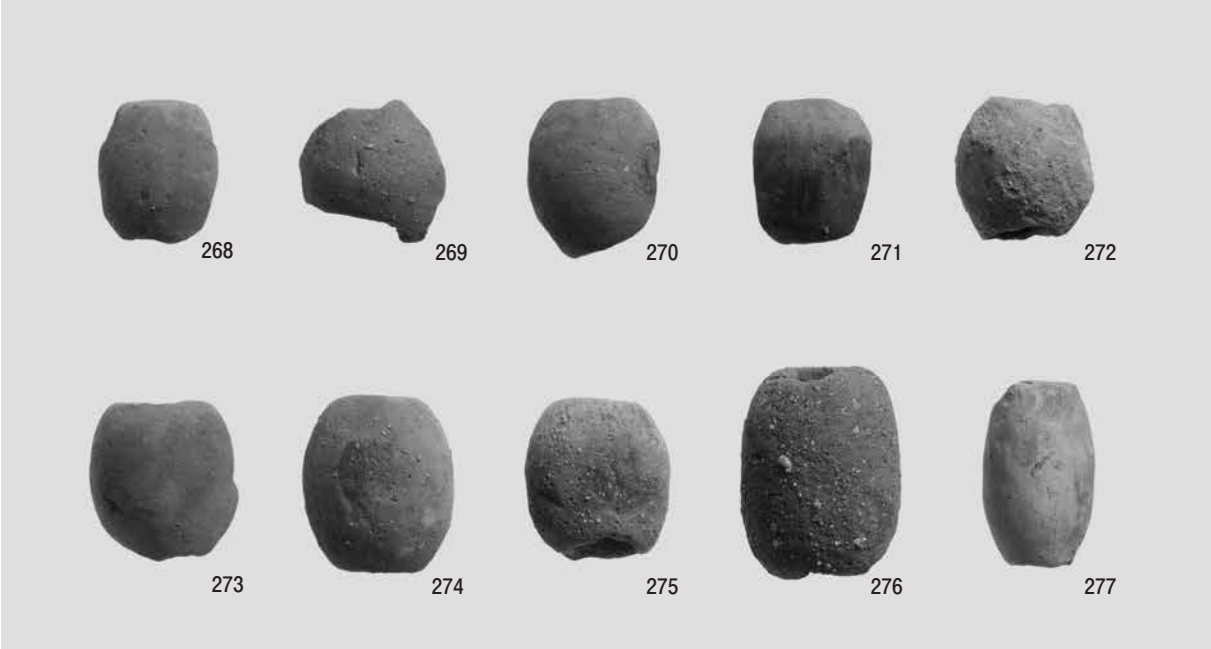

258
257
259
260
261
262
263
264

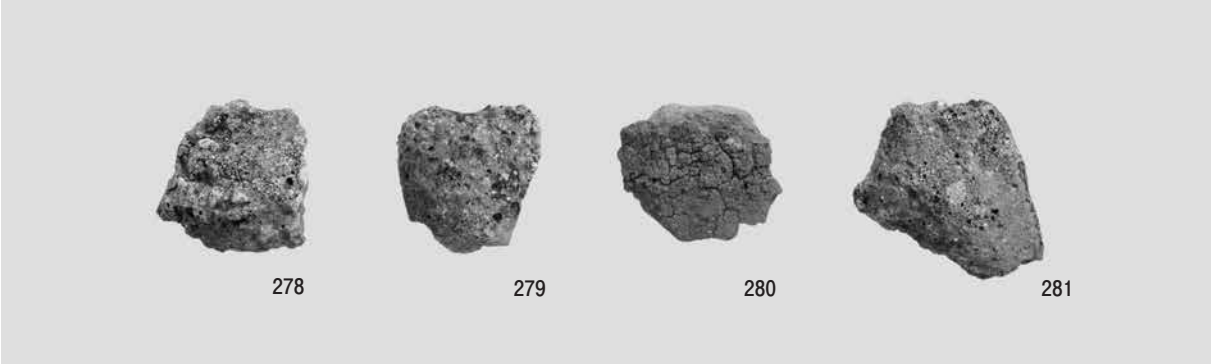
出土遺物（14）

265

266

267





出土遺物（15）

M 3

M 1

M 4

M 2

M 5

M 6

M 7

出土遺物（16）

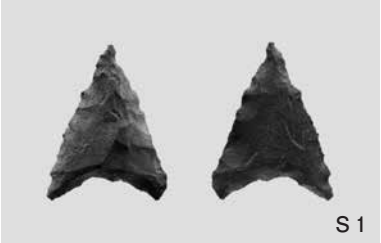
W 1

W 2

W 3

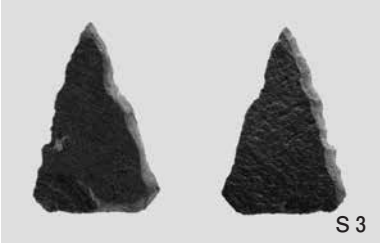
W 4

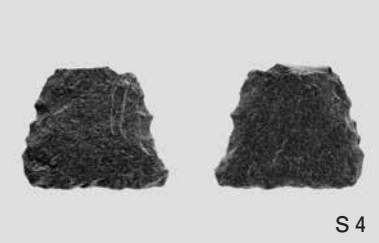
出土遺物（17）

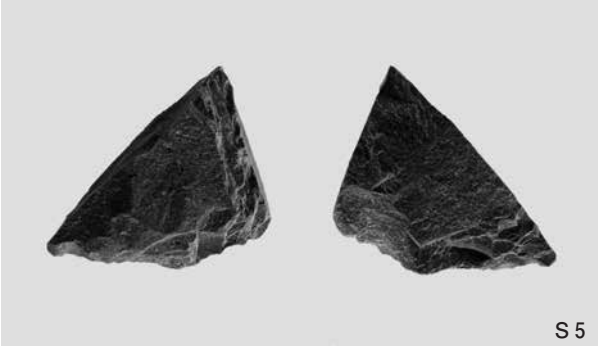

S 1

S 2

S 6


S 3


S 4


S 5

S 7

S 8

S 9

S11

S12

S13

S15

S14

S10

出土遺物（18）

K 1

K 5

K10

K12

K17

K20

K18

K 2

K 6

K 7

K11

K13

K21

K19

K22

K15

K 3

K 4

K 8

K14

K16

K24

K26

出土遺物（19）

K27

K28

K29

K30

K31

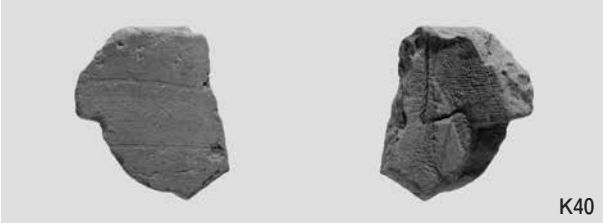
K32

K33

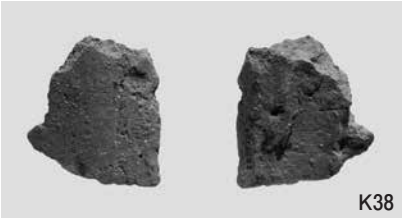
K34

K35

K36


K40

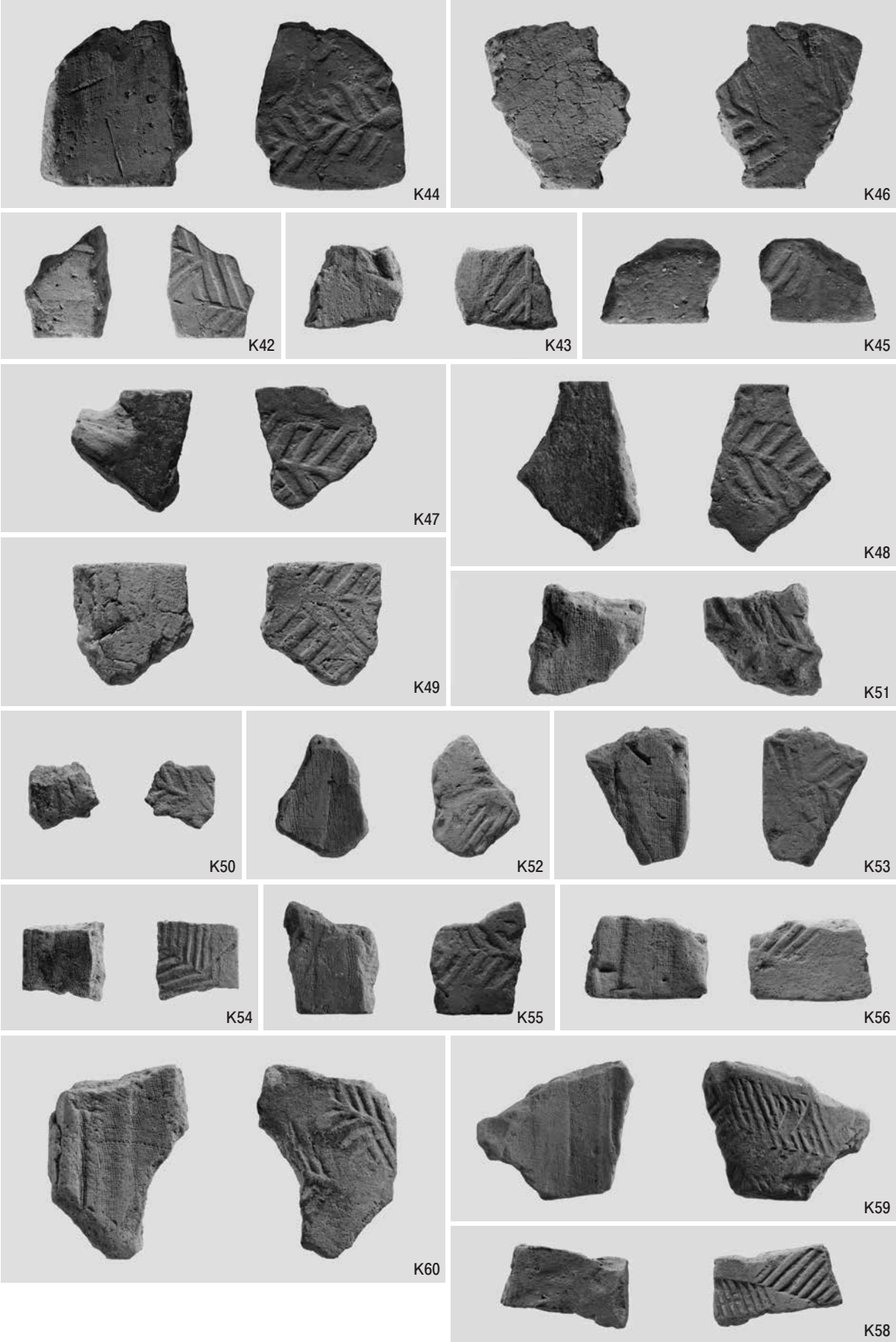
K41


K38

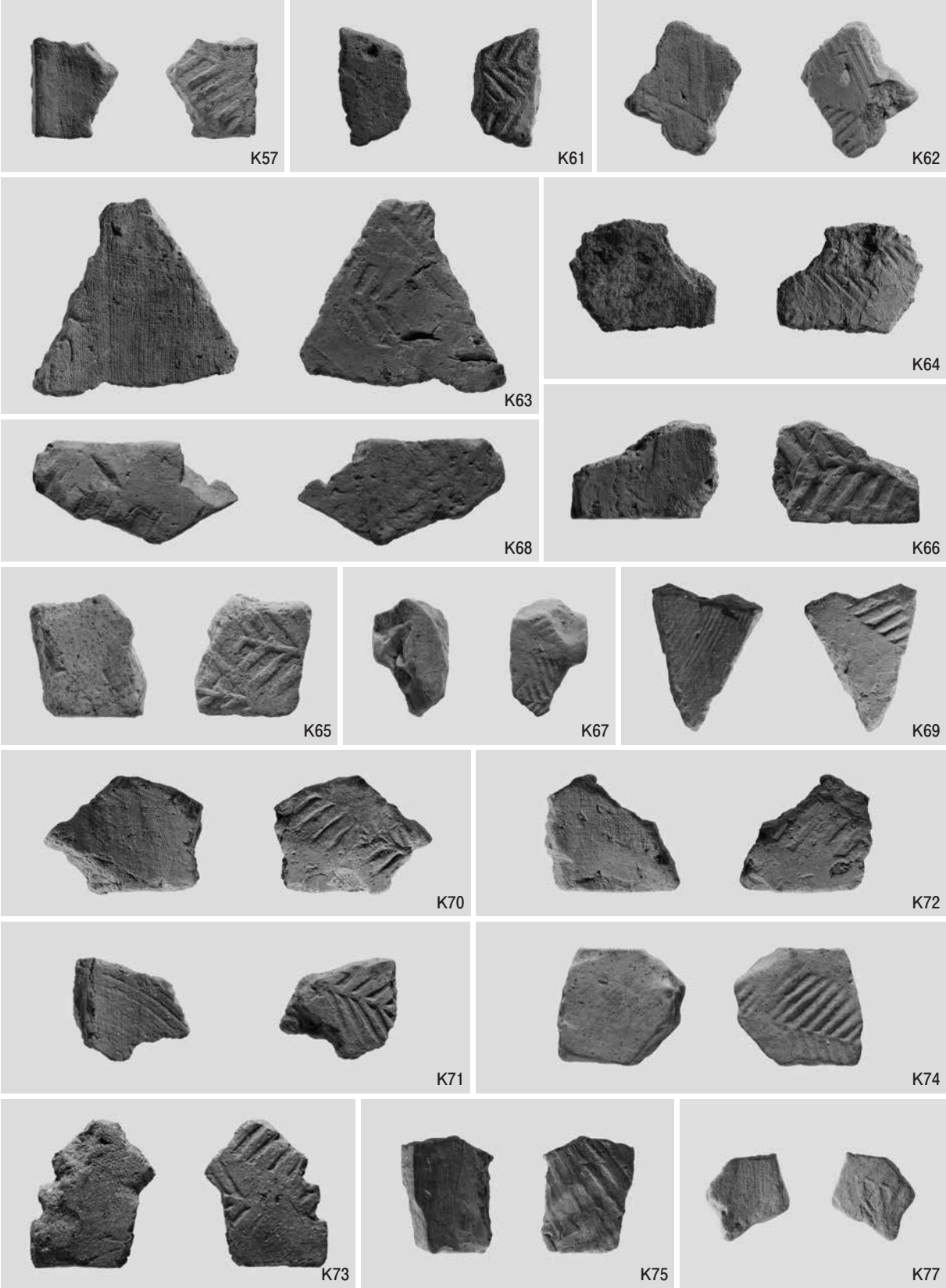
K39

K37

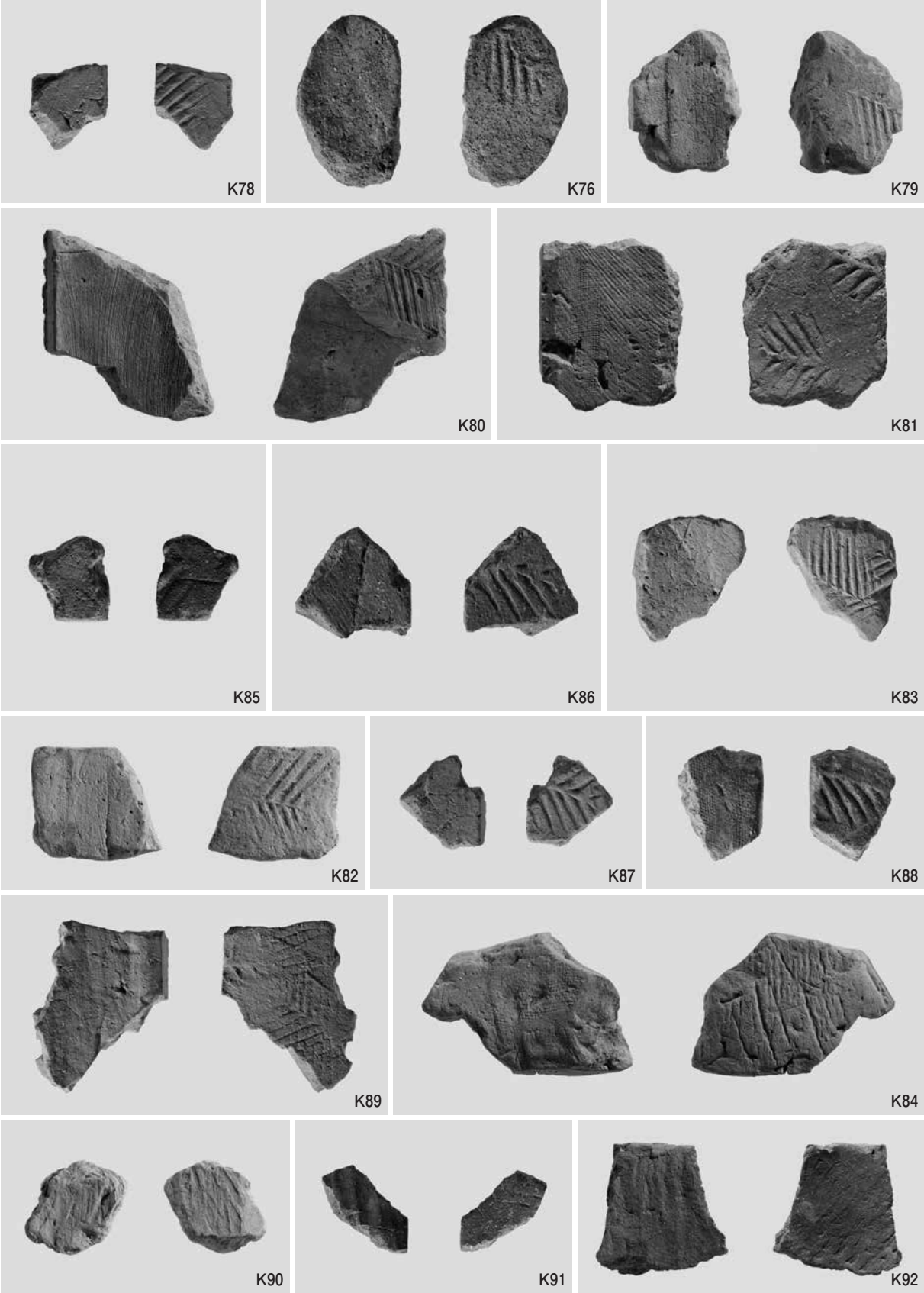
出土遺物（20）


K44
K46
K42
K43
K45
K47
K48
K49
K51
K50
K52
K53
K54
K55
K56
K60
K59
K58

出土遺物（21）


K57
K61
K62
K63
K64
K68
K66
K65
K67
K69
K70
K72
K71
K74
K73
K75
K77

出土遺物（22）



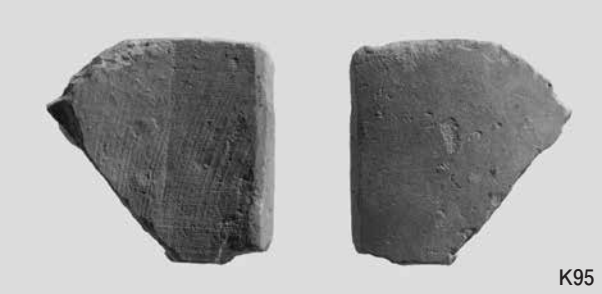
出土遺物（23）

K93

K96

K98

K94


K95

K97

K99

K100

K102

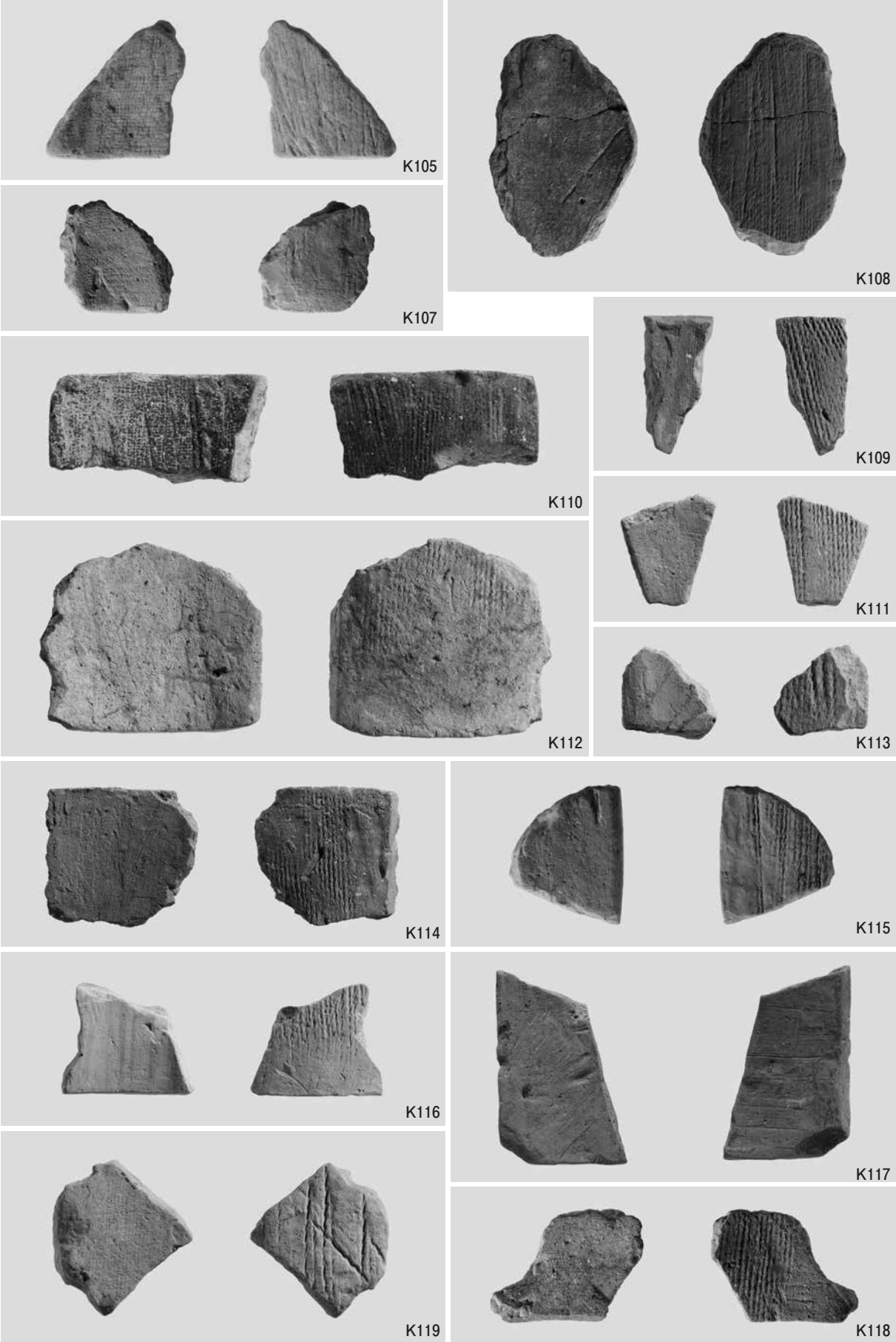
K101

K104

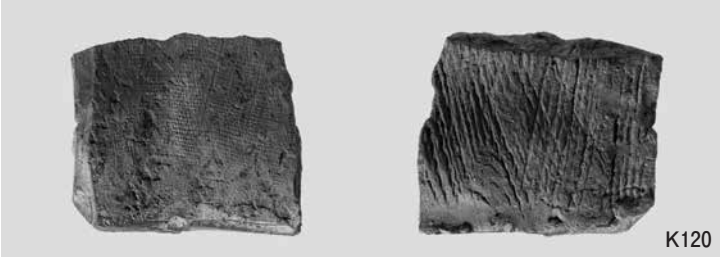
K103

K106

出土遺物（24）


K105
K108
K107
K109
K110
K111
K112
K113
K114
K115
K116
K117
K119
K118

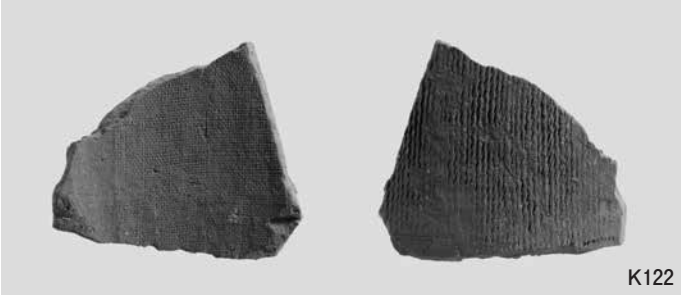
出土遺物（25）

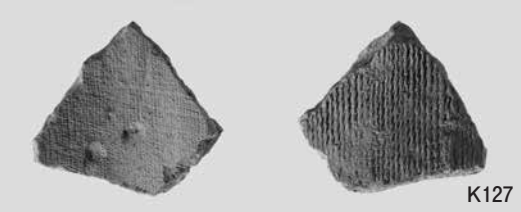

K120

K125

K121

K126

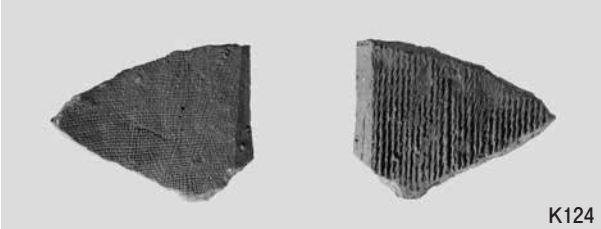

K122

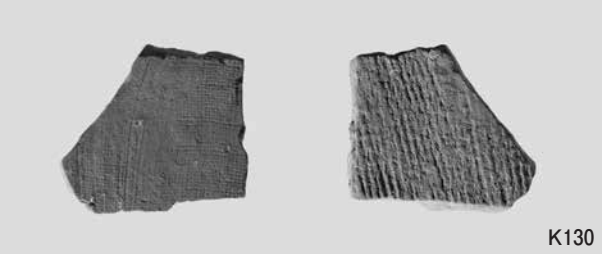

K127

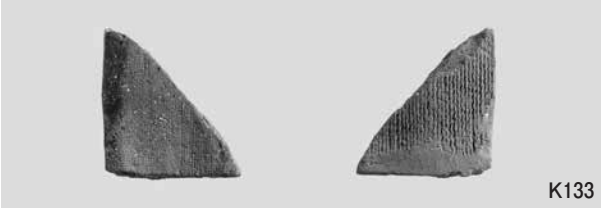
K128

K123

K129


K124


K130


K133

K131

K132

出土遺物（26）

K134

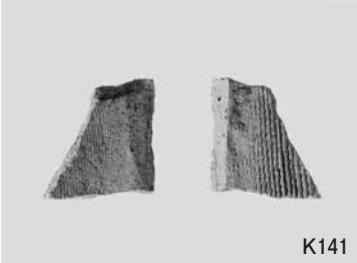
K135

K136

K137

K139

K138

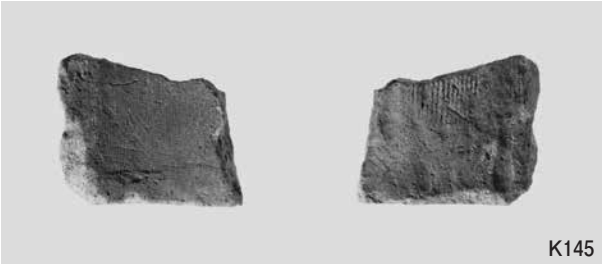

K141

K143

K142

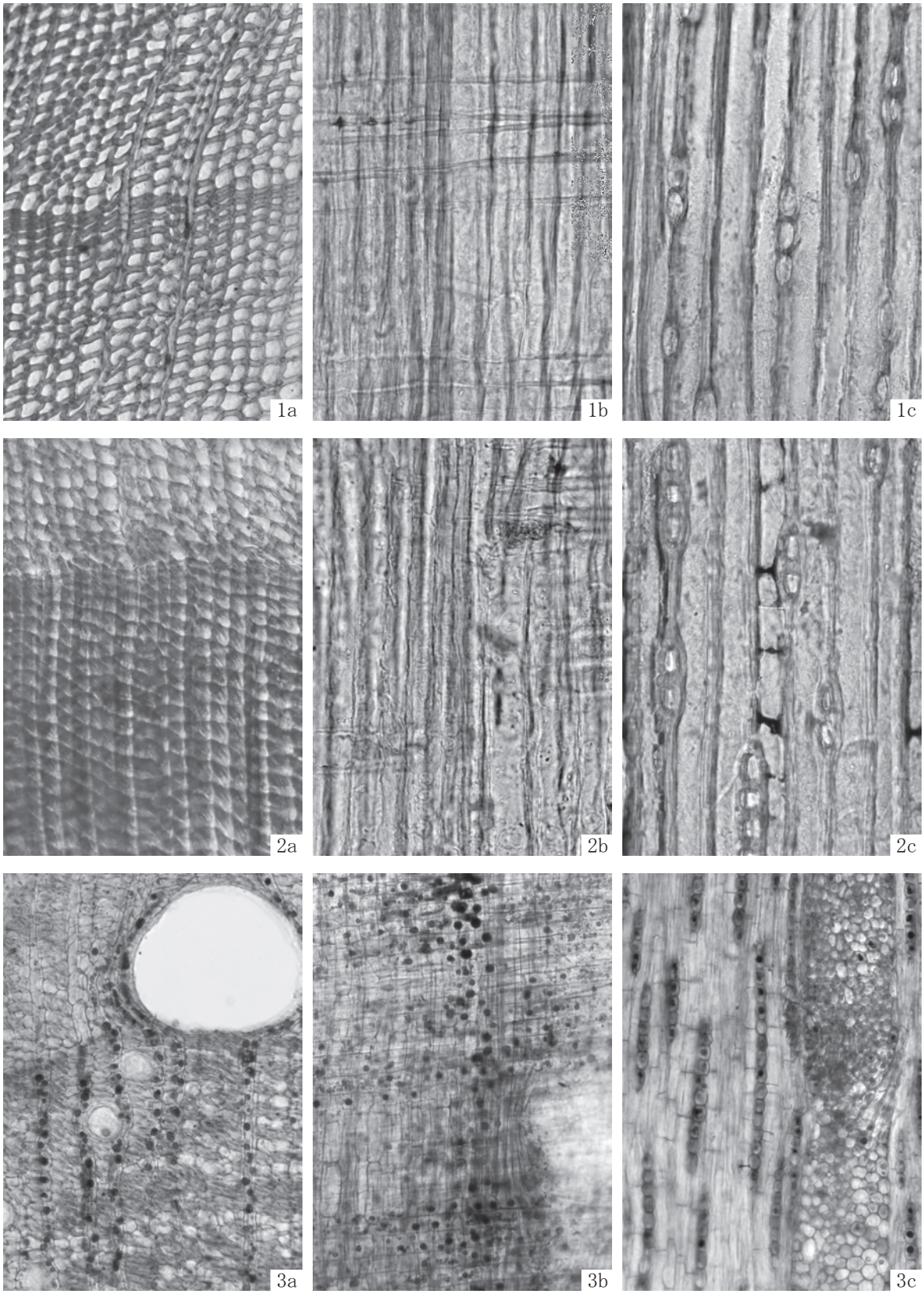
K140

K144


K145

K146

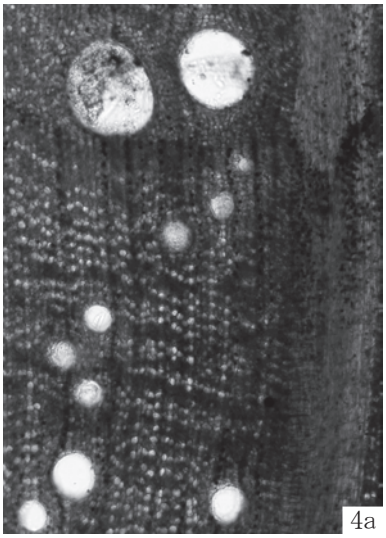
出土遺物（27）

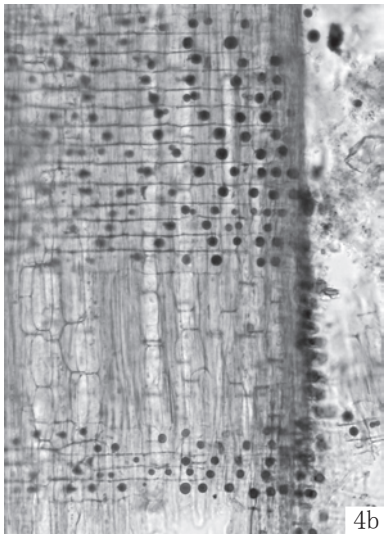


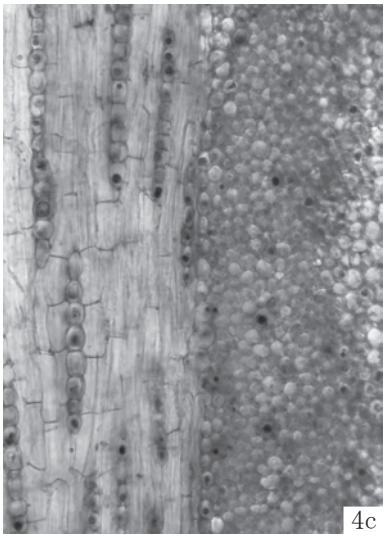
1. マキ属(W1)
2. マキ属(W2)
3. コナラ属コナ亜属クヌギ節(W3)
　a：木口，b：柾目，c：板目

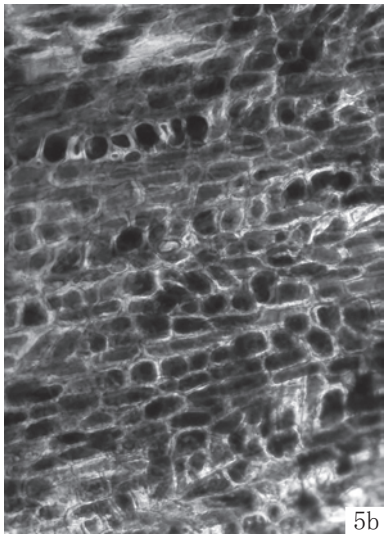
200μm:3a
100μm:1-2a, 3b, c
100μm:1-2b, c

横入遺跡の木材（1）





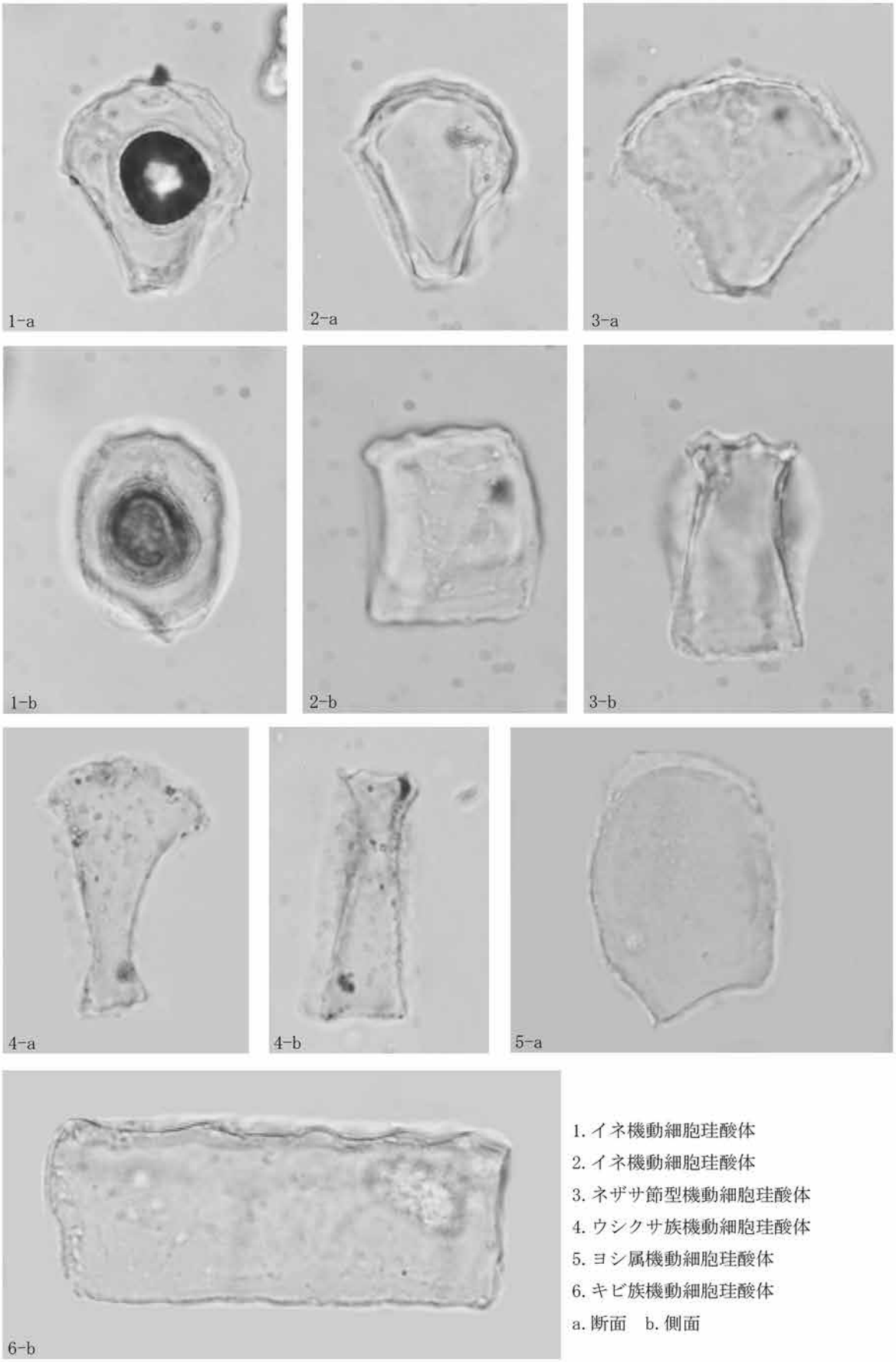




4. コナラ属コナ亜属クヌギ節(W4)
5. コナラ属コナ亜属クヌギ節(W5)
　a：木口，b：柾目，c：板目

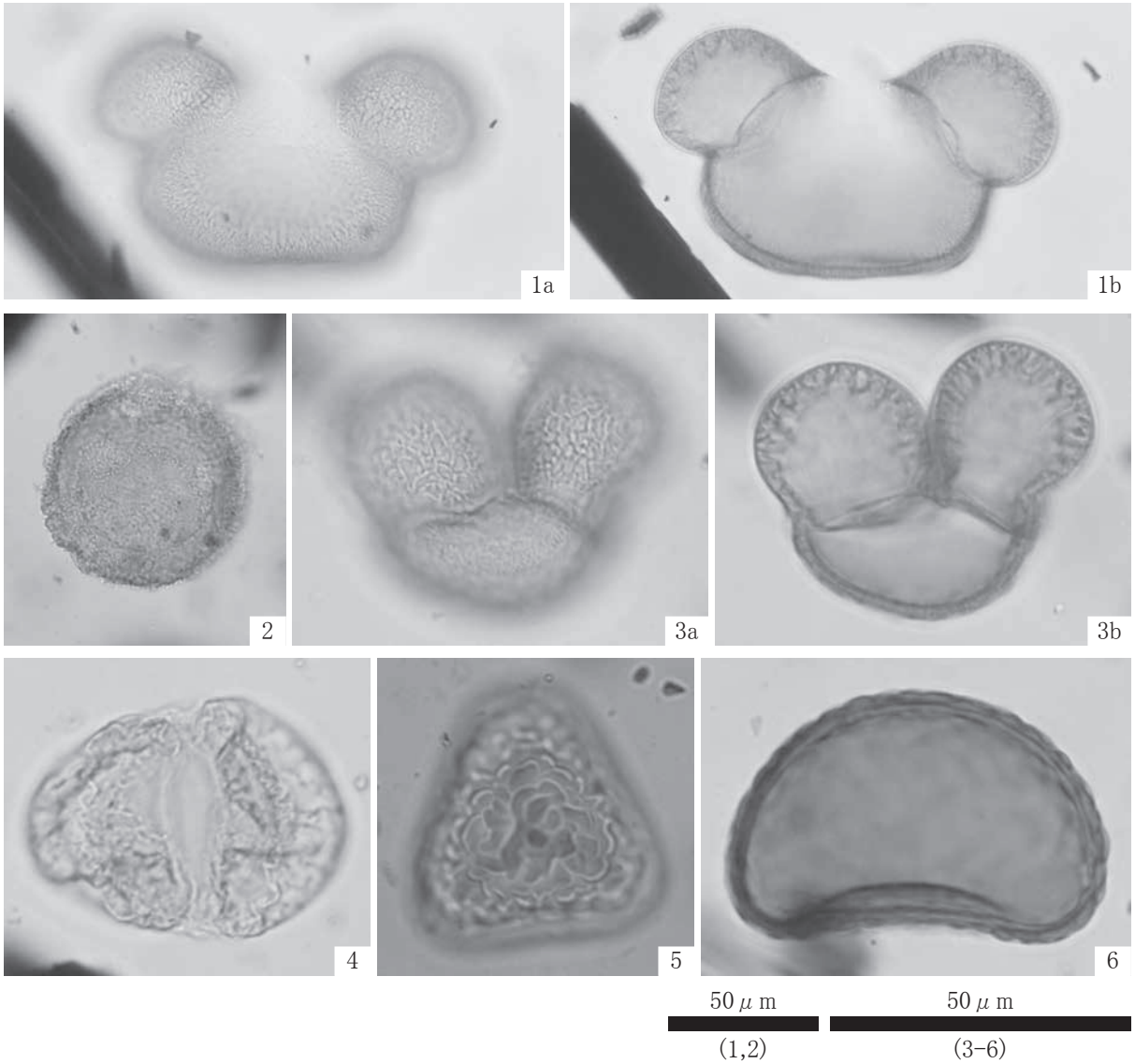
200μm:a
100μm:b,c

横入遺跡の木材（2）



1. イネ機動細胞珪酸体
2. イネ機動細胞珪酸体
3. ネザサ節型機動細胞珪酸体
4. ウシクサ族機動細胞珪酸体
5. ヨシ属機動細胞珪酸体
6. キビ族機動細胞珪酸体
a. 断面　b. 側面

横入遺跡から産出した植物珪酸体



1．モミ属(下層　水田土壌)
2．ツガ属(下層　水田土壌)
3．マツ属(下層　水田土壌)
4．マキ属(下層　水田土壌)
5．シダ類胞子(下層　水田土壌)
6．シダ類胞子(下層　水田土壌)

花粉化石

報　告　書　抄　録

ふりがな	よこいりいせき
書　　名	横入遺跡
副 書 名	(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第467冊
編著者名	渡辺　昇・青木哲哉・パリノ・サーヴェイ㈱・森　将志（パレオ・ラボ）・加速器分析研究所
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所 在 地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）　TEL 079－437－5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　TEL 078－362－3784
発行年月日	平成26（2014）年3月28日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所 在 地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　TEL 079－437－5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
横入遺跡	淡路市志筑	28681	880129	34°26′04″	134°53′35″	20080225～20080229（2007131）	64㎡	記録保存調査
						20081125～20081215（2008199）	87㎡	
						20100630～20100929（2010157）	2,645㎡	
						20111026～20120319（2011184）	2,550㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横入遺跡	集落跡	弥生時代	杭列・環濠・溝・水田跡	弥生土器・石鏃	前期の旧河道としがらみ、中期の環濠を検出
		古墳時代	土坑・溝・水田跡	土師器・須恵器	中期の土坑群は祭祀関係と思われ、全期にわたる水田跡を調査
		奈良～平安時代	水田跡	須恵器・瓦	長期間にわたる水田跡

要　　約	淡路島最古の寺院跡である志筑廃寺南側に広がる遺跡で、弥生時代前期から現在までの水田跡を確認した。志筑廃寺廃絶後に水田を広げるために削平したようで、瓦をはじめとする多量の遺物が出土した。下層では弥生時代前期に水田経営のために水路・しがらみを設けており、中期にわたって環濠を設けているが、削平によって住居跡は確認していない。古墳時代中期に土坑群が構築されており、祭祀に伴うものと思われる。

兵庫県文化財調査報告　第467冊

淡路市

横入遺跡

――（二）志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

平成26（2014）年３月28日　発行

編集　（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　加古郡播磨町大中１丁目１番１号 兵庫県立考古博物館内
発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印刷　福田印刷工業株式会社
〒658-0026　神戸市東灘区魚崎西町４丁目６番３号

25教Ⓣ1-032A4